ホーム 戻る

2004年度･個人研究活動

＜凡例＞
プロフィール〔生年〕〔学歴〕〔職歴〕〔学位〕〔所属学会〕〔専門〕〔主な研究テーマ〕
Ⅰ 研究･教育活動
　一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報
　二 教育活動
　　1) 教育（大学院指導，大学院セミナー，非常勤講師など）
　　2) 博物館教育（博物館研修･博物館プロジェクト･体験学習）
　三 博物館活動
　　1) 歴博探検･くらしの植物苑
　　2) 歴史系総合誌『歴博』関係
　　3) 各種編集委員（『研究報告』，『研究年報』）
　　4) 歴民研修委員，講師
　　5) 歴博振興会関係
　四 社会連携
　　1) 館外における各種委員
　　2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
　　3) マスコミ
Ⅱ 業績目録
　　1) 著書（単著･共著･編者･監修･翻訳など）
　　2) 論文･研究ノート･書評
　　3) 調査･発掘報告書，自治体史･史料集など
　　4) 展示図録
　　5) 学会･外部研究会発表要旨
　　6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュース
　　7) その他
Ⅲ 研究状況･研究広報

＊2004年4月～2005年3月については年の記載を省略した。

館長	宮地正人
情報資料研究系	安達文夫／今村峯雄／宇田川武久／大久保純一／小瀬戸恵美／齋藤努／坂本稔／澤田和人／鈴木卓治／永嶋正春／日高薫／宮田公佳
歴史研究系	青山宏夫／一ノ瀬俊也／井原今朝男／岩淵令治／久留島浩／小島道裕／高橋一樹／高橋敏／仁藤敦史／樋口雄彦／平川南／安田常雄／山本光正／吉岡眞之／吉村郊子
考古研究系	阿部義平／上野祥史／小野正敏／杉山晋作／千田嘉博／西谷大／西本豊弘／春成秀樹(秀爾)／廣瀬和雄／藤尾慎一郎／村木二郎
民俗研究系	青木隆浩／上野和男／内田順子／小池淳一／篠原徹／新谷尚紀／関沢まゆみ／常光徹／松尾恒一／安室知／山田慎也
客員教員	荒川章二／稲雄次／岩下哲典／佐藤真／杉井健／田中正弘／辻誠一郎／並木美砂子／橋本哲夫／保谷徹／三浦正幸／山中章
研究機関研究員	酒井茂幸／竹内有理／原山浩介

館　長

宮地　正人　MIYACHI　Masato　館長

1944年生 [学歴] 東京大学文学部国史学科1966年卒業, 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻博士課程1971年中退 [職歴] 東京大学史料編纂所入所(1973), 東京大学史料編纂所所長(1995), 国立歴史民俗博物館館長(2001) [学位] 修士 (文学) , 東京大学, 1968年 [所属学会] 歴史学研究会, 史学会, 歴史科学協議会, 日本史研究会 [専門] 日本近代史 [主な研究テーマ] 幕末維新期の社会的政治史

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 個別共同研究「平田国学の再検討」(また科研基盤(B)(2)でもある) は, 2004年度は, 特別企画展「明治維新と平田国学」として, 整理した資料 (全体で約1万点) のエッセンスを広く社会に公開することとなり, その準備と10月13日より12月5日までの展示期間中のギャラリー･トークに忙殺された。展プロ責任者としての平田篤胤と平田国学の位置づけは,『別冊太陽』に個人論文として発表しておいた。特別企画展示の内容は別項で述べている。ところで, 史料整理→展示→「共同研究報告書」での重要史料翻刻という流れで研究を動かそうとしており, 2004年度末には「報告書 (一) 」を刊行することができた。この「報告書」は, 他のメンバーとの共同作業の成果であり, 私としても出陳史料 (約500点) のうち80点の史料翻刻をここでおこない, あわせて「天保14～弘化元年気吹舎日記」の原本を校正した。

2) 個別共同研究「佐倉連隊と地域民衆」は, 2004年度は第3年目となり, 資料収集につとめた。2005年度の展示プロジェクト「佐倉連隊とその時代」の活動の基礎をつくることが出来たと思っている。しかし, この3年間, 共同研究メンバーとして資料収集と資料情報の集約に非常に尽力していただいてきた小原清喜美氏が心筋梗塞のため2月28日に急逝されたことは痛恨のきわみである。

3) 個人研究では,『夜明け前』の舞台となった中津川での1998年以降つづいている史料調査がある。2004年4月に同地で島崎正樹と中津川とのつながりについて講演し, それに手を入れて論文とすることが出来た。7月下旬の同地史料調査の際に, 憲法学者の樋口陽一氏と対談する機会があり (7月24日) , 平田国学を研究することが, どのような今日的意味をもっているかについて, 私の意見を語った。その記録が『街道の歴史と文化』第8号に掲載されている。今日的意味にかかって, 1865 (慶応元) 年に没後門人となった田中正造への関心が強まり, 2005年2月佐野市で, 私の考えを述べる機会があった。いずれ報告書に講演記録として活字化される筈である。

4) あと一つの個人研究では, 2004年3月『歴史のなかの新選組』刊行後, 数ヶ所で話す機会があり, そのなかで, 新選組の有していた勤王家としての歴史的位置づけが次第に明確なものとなった。「東国派勤王家」論として, 今年中に活字化する予定である。

二 教育活動

1) 教育

総研大日本歴史専攻からの要請を受け, 2004年7月の第3回目の公開講演会「歴史研究の最前線」において, と題して講演した。これは, 現在,「幕末維新史の史料学」研究史の回顧となっているとともに, この時期での最もおもしろいテーマとなっている偽文書論について論じたものである。

四 社会連携

1) 館外における各種委員

歴博振興会理事, 日本科学技術振興財団評議員, 味の素食の文化センター財団評議員, 佐倉国際交流基金理事

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「小説『夜明け前』と中津川」, 中津川市, 中津川市中央公民館, 2004.4.11
「日本の開国と堀田正睦」, 佐倉市国際交流基金, 歴博講堂, 2004.5.1
「幕末維新史の史料学」, 総研大日本歴史専攻, 上智大学8号館, 2004.7.3
「新選組論」, 歴史科学協議会, 早大7号館, 2004.7.10
「伊那の国学」, 飯田市歴史研究所, 飯田市追手町小学校, 2004.8.21
「新選組の組織論」, 生産性トップマネージメントクラブ第261例会, オークラ千葉ホテル, 2004. 9.17
「明治維新と平田国学」, 歴博フォーラム, ヤマハホール, 2004.9.25
「明治維新と平田国学」, 千葉政経懇話会9月例会, 千葉市ホテルサンガーデン, 2004.9.29
「新選組の論じ方」, 新選組史料集会実行委員会, 日野市生活･保健センター, 2004.10.2
「明治維新と平田国学」, 歴博講演会, 歴博ガイダンススルーム, 2004.10.9
「平田国学と千葉県」, 佐倉市市民カレッジ, 佐倉市中央公民館, 2005.1.6
「21世紀の日本と田中正造･勝海舟」, 田中正造を現代に活かす会, 佐野市中央公民館, 2005.2.20
「幕末維新と長州」, 国立山口徳地少年自然の家, 徳地町文化ホール, 2005.3.26

Ⅱ 業績目録

2a) 論文

「伊吹迺舎と四千の門弟たち」(『別冊太陽　平田篤胤』pp.100-112, 平凡社, 5月)
「小説『夜明け前』と中津川」(『街道の歴史と文化』7, pp.1-41, 中山道中津川歴史研究会, 7月)
「幕末維新史の史料学」(『新しい近現代史研究へ』pp.6-40, 総研大日本歴史研究専攻･国立歴史民俗博物館, 9月)
「摺物」(『歴史をよむ』pp.86-89, 東京大学出版会, 11月)
「歴史学が直面しているもの」(『歴史学の最前線』pp.75-77, 東京大学出版会, 11月)

2c) 書評

2004.4：「永原慶二『二〇世紀日本の歴史学』（『日本歴史』671，pp.113-115）
4) 展示図録
2004.9：編著『特別企画･明治維新と平田国学』特別企画展展示図録，80頁
7) その他（新聞署名原稿）
「歴史学と女性」『日本経済新聞』9月20日
「先端的学際研究を強力に推進し大学共同利用機関の使命を果たす」『文部科学教育通信』11月22日
「21世紀は総合化の学問の時代」『日本教育新聞』2005年1月21日
対談「中津川で歴史と現代を考える」（『街道の歴史と文化』8，pp.1-33，中山道中津川（樋口陽一氏と）歴史研究会，2005年2月）

III 研究状況･研究広報

2004年度で私が最も印象深かったのは，研究と展示の関係であった。論文を発表してもありえない反響と情報の入手が展示によって可能となったのである。展示は研究の中間発表とのいい方の真理がよく理解された。ここではいくつかの情報について紹介してみよう。
第一は，潮地ルミ氏よりよせられた平田銕胤の弟の碧川好尚とその子孫に関するものである。好尚は天保11年7月新谷に移住を命ぜられ，母を平田銕胤のもとに預けている。「気吹舎日記」中の「御祖母様」とあるのは，このことによる。しかし篤胤が処分を受け，銕胤の立場が厳しくなったので，「兄が母の面倒を見られなくなった」との理由で定府を願い，天保14年8月江戸に戻り，母親をひきとっている。好尚が安政4年11月に没すると，伯太藩士小玉官次の三男真澄を養子に迎える。真澄は元治元年新谷に在勤となり，慶応3年に出府，3月10日に好尚の長女みね（それまで平田家にいる）と結婚する。みねは夫が按察府に出仕したのちの明治3年12月より京都聖護院の平田銕胤邸に滞在，翌年10月東京移住に従い明治5年4月まで平田家に滞在している。
第二は，高田宗平氏より紹介された天保13年5月24日付の越後小千谷門人木嶋孝左衛門宛平田銕胤書状である。そこでは，越後の平田門人としては，三条町の大庄屋宮島弥五兵衛，三条在敦田村藤崎順左衛門，三条陣屋住村上藩士佐藤五百八，柏崎町神職樋口讃岐･同因幡，与板町神職箭田豊前がいるが，「乍去御国には当時極別出精の人は無御坐候」と評している。生田万の乱以後の越後の沈滞した状況が伺える。
第三は，大高栄一氏よりよせられた上総国富田の大高秀明とその次男秀寿，三男平山福秀に関する伝記史料である。大高秀寿と平山福秀は協力して間引き防止の運動をおこなっており，捨子収容所も設置している。この運動については，平田国学の影響とともに，篤胤の盟友であった佐藤信淵の社会政策論とのつながりも見る必要があるかも知れない。
第四は，弓削元宏氏よりよせられた上総国中原村玉崎神社神職弓削春彦に関する史料である。同家にある銕胤書状により，文政期の平田家書籍出版への有力援助者であったことが判明したとともに，一般的な理解とは異なり，春彦の父の代より三代にわたり，明治初年まで，同地において漢学塾を営んでいた事実も知ることが出来た。銚子の有力門人宮内嘉長のケースも同様であり，深い漢学的教育の上に平田国学が浸透していった歴史的事実も，少なくとも上総･下総地域では念頭におく必要がある。

研究部

（50音順）

青木 隆浩 AOKI Takahiro 助手

1970年生［学歴］法政大学文学部地理学科1993年卒業，明治大学大学院文学研究科地理学専攻博士前期課程1996年修了，東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻広域システム科学科博士後期課程2000年修了［職歴］国立歴史民俗博物館民俗研究部助手(2002)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手(2004)［学位］博士（学術），東京大学，2000年3月［所属学会］日本民俗学会，日本地理学会，歴史地理学会，人文地理学会，東京地学協会，社会経済史学会，経営史学会，環境科学会［専門］民俗学，近代歴史地理学［主な研究テーマ］酒造業／ Sake Brewing Industry，社会規範／ Moral Precepts

I 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 個別共同研究「宮座と社会：その歴史と構造」（代表 八木透）と文科省基盤A「現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」（代表 上野和男）で，大分県大田村白髭田原神社と岡山県建部町志呂神社の宮座関連調査をおこなった。
2) 文科省基盤B「文化政策･伝統文化産業とフォークロリズム－『民俗文化』活用と地域おこしの諸問題－」（代表 岩本通弥）で，埼玉県と栃木県の酒造業を調査した結果を[2004.7a] に報告した。
3) 文科省基盤B「文化政策･伝統文化産業とフォークロリズム－『民俗文化』活用と地域おこしの諸問題－」（代表 岩本通弥）で，長野県飯山市と白馬村のグリーン･ツーリズム事業を調査した結果を[2004.7b]に報告した。

4) 文科省若手B「近現代の商家経営に関する民俗学的研究」(代表 青木隆浩)で，栃木県真岡市や埼玉県入間市，新潟県新潟市等の酒造業関連調査をおこない，その結果を日本地理学会公開講演会「酒の文化と風土」にて報告した[2004.9]。

二 教育活動

1) 教育

神奈川工科大学非常勤講師(地理学I･II)

三 博物館活動

1) 歴博探検･くらしの植物苑

「酒と民俗」くらしの植物苑観察会報告，11月27日，場所：あずまや

II 業績目録

2a) 論文

2004.7a：「戦後における酒造経営の歴史的変化」(文科省科研費研究成果報告書『文化政策･伝統文化産業とフォークロリズムー「民俗文化」活用と地域おこしの諸問題ー』(代表 岩本通弥)，pp.17-30)
2004.7b：「文化は売れないーグリーン･ツーリズムを事例にー」(文科省科研費研究成果報告書『文化政策･伝統文化産業とフォークロリズムー「民俗文化」活用と地域おこしの諸問題ー』(代表 岩本通弥)，pp.56-60)

6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュースなど

「酒と民俗」(『くらしの植物苑だより』№86，p.1，11月)
「酒が与えてくれたもの」(歴史系総合誌『歴博』第129号，pp.26-27，3月)
「混迷する社会規範」(『友の会ニュース』第118号，p.7，3月)
学会展望「歴史地理(近代)」(『人文地理』第56巻第3号，pp.282-284，6月)

III 研究状況･研究広報

今年度おこなった調査･研究は，大きく3つに分かれる。

1つは，文科省若手B「近現代の商家経営に関する民俗学的研究」(代表 青木隆浩)による清酒製造業と醤油醸造業に関する調査である。具体的には，越後杜氏の技術普及と南部杜氏の関東進出，埼玉県における戦時中の清酒流通，昭和初期の醤油醸造経営と組合活動，埼玉県醤油工業協同組合の組合活動などについて調査をおこなった。今年度はとくに杜氏に関する資料を多く集められたので，早めにその研究成果を論文として公開していきたい。

また，文科省基盤B「文化政策･伝統文化産業とフォークロリズムー『民俗文化』活用と地域おこしの諸問題ー」(代表 岩本通弥)によって長野県飯山市と白馬村のグリーン･ツーリズムについて調査した結果を科研の報告書にまとめ，かつ雑誌『日本民俗学』に投稿した。後者は論文としてすでに採用されており，近いうちに掲載される見込みである。既知のとおり，グリーン･ツーリズムは農山村の文化と自然を活用することを目指す国家事業である。これまでの民俗学では，文化政策をイデオロギーや理念の問題から取り上げることが多かったが，これら2本の論文では，地域経済に与える効果について理論と実証の面から検討している。

もう1つは，近代の犯罪に関する研究である。以前から飲酒･喫煙問題を事例として近代の社会規範を研究対象としてきたが，今年度からその範囲をさらに拡大して犯罪，なかでも不良行為や少年非行といった犯罪の境界領域について研究している。不良行為や少年非行は必ずしも他人に被害を与えることばかりではなく，厳密に言えば犯罪に含まれないことが多いが，犯罪に発展する可能性があるとみなされており，かつ日常頻繁に行われるために取締の対象になりやすい。その一方で，何が不良行為や少年非行に当たるのか，それらの判断をめぐっては地域や時代ごとの感覚によって異論が生じやすく，したがって取締の基準自体が曖昧になりやすい。この「何を不良行為や少年非行とみなすか」という判断基準の問題と社会管理の変化，さらには取締強化の影響について，現在論文を執筆中である。

青山 宏夫 AOYAMA Hiroo 助教授

1956年生 [学歴] 京都大学文学部史学科人文地理学専攻1980年卒業，京都大学大学院文学研究科博士後期課程地理学専攻1983年退学 [職歴] 東京都立大学理学部助手(1983)，新潟大学人文学部講師(1988)，新潟大学人文学部助教授(1990)，国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授(1998)，総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系助教授(2004) [学位] [所属学会] 人文地理学会，日本地理学会，歴史地理学会 [専門] 歴史地理学 [主な研究テーマ] 中世日本における景観の歴史地理学的研究／ historical geography of landscape in medieval Japan，地理的知識の形成と変遷に関する地図史的研究／ history of cartography and geographical knowledge

I 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基盤研究「明治地籍図の集成的研究」(代表 青山宏夫)において，埼玉･滋賀･広島･香川等で地籍図調査をおこなうとともに，年度末には研究集会を開催した。

2) 基幹研究「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究（代表　久留島浩）」において研究調査をおこない，当該研究集会で報告した[青山2004.6]。
3) 科研基盤研究A「平安京－京都の都市図･都市構造に関する比較総合研究とデジタルデータベースの構築」（代表　金田章裕）において研究調査をおこない，当該研究集会において報告し[青山2004.5]，報告書を執筆した[青山2005.3]。
4) 国際日本文化研究センター共同研究「『関西』史と『関西』計画－文化の生成と自然的･社会的基盤－」（代表　千田稔）の共同研究員として研究集会に参加した。
5) 中近世の地図に関する研究をすすめるなかで，今年度は岡山県･島根県等において現地調査をおこない，その成果の一部を歴史地理学会大会シンポジウムにおいて報告した[青山2005.1]。
6) 総合展示第3室展示リニューアル委員として調査研究（山口･新潟等）をおこない，展示構成を検討した。
7) 企画展示「東アジア中世海道」展示プロジェクト委員として，地図関係の展示構成を検討し，同図録に執筆した[青山2005.3]。
8) 特別企画「新収蔵品展」展示プロジェクト委員として，南瞻部洲大日本国正統図の調査研究と展示方法の検討をした。

二　教育活動

1) 教育

総合研究大学院大学における講義慶應義塾大学非常勤講師（地理学）

四　社会連携

1) 館外における各種委員

日本地理学会国立地図学博物館設立推進委員会委員，歴史地理学会評議員･常任委員･編集委員

II　業績目録

2a) 論文

2004.11：「地図にみる日本海－想像から現実へ－」（『国文学　解釈と鑑賞』69-11，pp.116-123，至文堂）
2005.3：「桂川の河道変化と耕地開発－松尾社周辺の古代中世－」（『平安京－京都の都市図･都市構造に関する比較総合研究とデジタルデータベースの構築（文科省科学研究費研究成果報告書）』pp.75-93，京都大学大学院文学研究科）

2b) 研究ノート

2004.5：「景観を考える－絵図と地域のなかから－」（『月刊　歴史読本』49-5，pp.236-237，新人物往来社）

4) 展示図録

2005.3：「描かれた東アジア」（国立歴史民俗博物館編『東アジア中世海道』，pp.8-20，毎日新聞社，2005年3月）

5) 学会･外部研究会発表要旨

2004.5：「『洛外』の風景－松尾社とその周辺の古代中世－」，科研基盤研究A「平安京－京都の都市図･都市構造に関する比較総合研究とデジタルデータベースの構築」（代表　金田章裕）の研究集会における報告（京都大学）
2004.6：「地図にみる異文化･異地域へのまなざし」，基盤研究「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」の研究集会における報告（国立歴史民俗博物館）
2004.7：「コメント」，歴史地理学会大会シンポジウム「宗教文化の歴史地理学」における報告（島根県民会館），報告要旨は『歴史地理学』47-1，pp.60-61，歴史地理学会，2005年1月に掲載

7) その他

2004.11：「地図にみる『日本海』の呼称」（『2003年早稲田大学オープンカレッジ秋季講座　日本海学大学公開講座報告書』，pp.35-52，富山県，11月）

III　研究状況･研究広報

本館の共同研究や科研での研究に取り組むとともに，それらと連動させつつ中近世の地図に関する研究を進めた。それらの一部は，総合展示リニューアルや企画展示等においても公開し，またその準備を進めつつある。

安達　文夫　ADACHI　Fumio　教授

1951年生【学歴】東北大学工学部電子工学科1973年卒業，東北大学大学院工学研究科電子工学専攻博士課程1978年修了【職歴】日本電信電話公社（現NTT）入社(1978)，国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授(1999)，総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任(2002)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004)【学位】博士（工学），東北大学，1978年【所属学会】電子情報通信学会，情報処理学会，画像電子学会，映像情報メディア学会【専門】情報工学，画像工学【主な研究テーマ】博物館における情報システムの研究

I　研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

本館基盤研究「歴史資料の材料･製法技法と生産地に関する調査研究」共同研究員
文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(2)「画像資料自在閲覧方式による近世歴史資料の調査研究支援システムの研究」研究代表者
文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(2)「中世拠点城郭および都市遺跡の分析方法に関する学融合的研究」研究分担者
日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開促進費データベース「詳細書誌目録付き錦絵画像データベース」作成分担者
総合研究大学院大学学長プロジェクト総括班プロジェクト「総合科学サイバー･ミュージアムの構築」研究分担者
総合研究大学院大学学長プロジェクト個別課題「市民への研究成果公開におけるオーディエンスの理解の研究」研究代表者
総合研究大学院大学共同研究「文化科学研究分野における情報資源共有化のためのコラボレーション研究」共同研究員
国文学研究資料館共同研究「文化情報資源の共有化システムに関する研究」共同研究員
本館企画展示「日本の神々と祭り」展示プロジェクト委員
本館企画展示「歴史のなかの鉄炮伝来－種子島から西南戦争まで－」展示プロジェクト委員

二 教育活動

2) 博物館教育

「博物館におけるデジタルアーカイブ」デジタルアーカイブ推進リーダ養成研修，10月13日，ソフトピアジャパン

II 業績目録

2a) 論文

「博物館とディジタルアーカイブ」(『画像電子学会誌』Vol.33,No.5，pp.683-690，Sep.2004)

5) 学会･外部研究会発表要旨

「博物館画像閲覧システムの利用記録の分析による評価」(共著／上島史行，鈴木卓治，徳永幸生) 画像電子学会第32回年次大会予稿集，pp.29-30，Jun.2004
「博物館情報の分類マッピングを用いた横断検索」(共著／山田篤，小町祐史，河合正樹) 画像電子学会第32回年次大会予稿集，pp.97-100，Jun.2004
"Index Image Generation Using DSP in High-Definition Still Image Retrieval, " (co-author Kayo Suzuki, Katsuhiro Ishimaru, and Hiroaki Ikeda), MWSCAS2004 (The 2004 47th Midwest Symposium on Circuits and Systems (IEEE Circuits and Systems Society)), pp.III-503-506 (Jul.2004)
「画像電子技術年報 文化財と画像処理技術」画像電子学会誌，Vol.33,No.6，pp.910-911，Nov.2004
「超精細画像による資料の比較閲覧機能の検討」(共著／鈴木卓治) 情報処理学会研究報告，Vol.2004,No.110，2004-CH-64，pp.9-16，Nov.2004
「展示の意図と来館者の理解－定量的評価の試み－」歴博共同研究･総研大学長プロジェクト合同公開研究会予稿集，pp.33-40，Dec.2004
「インターネットによる電子展示とその評価」歴博共同研究･総研大学長プロジェクト合同公開研究会予稿集，pp.41-48，Dec.2004
「錦絵資料の測色値画像データベースの構築と色彩分析の試み」(共著／鈴木卓治，大久保純一，小林光夫) 情報処理学会シンポジウム論文集，Vol.2004,No.17，pp.75-82，Dec.2004
「大規模資料群画像の提示方法の利用記録による検討」(共著／上島史行，鈴木卓治，徳永幸生) 情報処理学会シンポジウム論文集，Vol.2004,No.17，pp.115-122，Dec.2004
「Dublin Core メタデータとZ39.50にもとづく人文科学系データベースの統合検索に関する実証実験」(共著／山本泰則，他) 情報処理学会シンポジウム論文集，Vol.2004,No.17，pp.199-205，Dec.2004
「資源共有化，接続実験，討議」，総合研究大学院大学共同研究「文化科学研究分野における情報資源共有化のためのコラボレーション研究」第2研究集会，国文学研究資料館，Jan.14，2005
「人文科学系情報資源共有化と博物館資料情報のDublin Coreへのマッピング」(共著／鈴木卓治) 画像電子学会第3回画像ミュージアム研究会予稿集，1，Mar.2005
「博物館情報の横断検索におけるオントロジ利用の試み」(共著／山田篤，小町裕史，河合正樹) 画像電子学会第3回画像ミュージアム研究会予稿集，4，Mar.2005

III 研究状況･研究広報

1) ディジタル資料構成法の研究

博物館に所蔵される資料の画像を電子化し，展示や研究に利用する研究を進めた。1,000点を超える資料を一斉に公開するための閲覧システムや，目的とする資料を探し出す研究支援システムとして，多数の資料画像をどのように表示すべきかを明らかにするため，企画展示において収集した利用記録を分析し，利用の特性を求めた。これは2,000点余りの錦絵を並べて表示したものを自由に拡大･縮小，移動しながら閲覧し，また，その中の一点を探す企画のもとで行った。その結果，利用者全体では，画面に15枚ほど表示される倍率を中心に，比較的幅広い倍率で利用される。これと比較して，特定の資料を探す目的の利用者は，平均で4倍程多くの画像を表示して探索し，条件によっては200枚の表示が最頻となる。この状態で画像を移しながら閲覧することから，1,000枚を越える画像を一斉に表示することが有効であることが明らかとなった。これを学会のシンポジウムで発表したところ，歴博らしい研究との評価を受けた。

また，研究や展示のための超精細ディジタル資料として，江戸図屏風赤外線写真，高句麗好太王碑水谷拓本，類聚雑要集巻第一，琉球交易港図屏風等，出雲大社関係資料の製作の支援を行った。

2) 歴史研究情報の共有化の研究

人文科学の研究資源に関わるデータベースの統合的な検索をめざす情報資源共有化システムについて，総合研究大学院大学の文化科学系の基盤機関と幾つかの大学と共同で研究を進めている。歴博のデータベースの中から，博物館資料の目録情報を収録した二つのデータベースを選んで，このシステムに適用するための方法を検討した。統合的な検索を行うため，いわば共通的な窓を通して一致を見出す。この共通の窓として選択したDublin Coreと呼ばれるメタデータに，二つのデータベースのデータ項目をマッピングする方法について検討し，実証システムによる評価を行った。その結果，Dublin Coreがネットワーク上の資源の記述を目的に出発していることから，実際の資料の属性を表す形状や状態に関わる項目のマッピングが曖昧になること，そして本質的には，人文科学の多様な研究資源を共通に見る窓の意味と名称を適切にすることが重要であることを確認した。

また，歴博の考古の分野のデータベースについて，そのデータ構造を調査し，遺跡，遺構，遺物，調査，報告書といったクラスとクラス間の関連について整理を図った。データベース毎に記述対象が異なり，その構造に特徴がある。この多様性に対して統合検索を行うための課題を整理した。

これらの検討を，人間文化研究機構の研究資源共有化システムの検討に反映した。

3) 研究成果公開の理解の研究

伝えようとする情報が，展示やインターネットによる公開手段を通して，その受け手にどのように理解されているかを明らかにし，情報の伝達方法の改善と新たな方法を開発することを大きな目的として，実際の展示と，ホームページ上に構成する電子展示それぞれについて，理解ならびにテーマへの関心を評価する方法について研究を進めた。

実際の展示に対する評価では，被験者に心理的負担を与えずに理解度を定量的に測る方法について，これまで幾つかを試行してきた。その結果を分析し，展示の意図や読み取って欲しい事項を示して，それが伝わったを問う形式が，理解を測る上で不確定となる要因を少なく評価できることを明らかにした。この方法では，展示資料を見てわかるものと，パネル等の解説を読んで分かるもので理解度に差が現れる。展示手法と意図の伝達の関係を評価する手段となりうることを示した。

電子展示の関心の評価では，各画面のアクセス数から，テーマに関心を持つグループの比率（関心率）と次の画面を見る率（移行率）を算出し，その関心の度合いを評価する方法を提案した。電子展示を画像だけで構成する場合と，解説を付与する場合を比較し，後者は関心率は高まるが，移行率は低くなることを見出した。解説の付与に配慮を要すること，並びに展示の後半は見る率が低くなる点は，実際の展示と類似性がある。

本研究は総合研究大学院大学の学長プロジェクトの一課題として進めた。これと歴博の共同研究「歴史展示における「異文化」表象の基礎的研究」と共同で，他の博物館，研究機関での成果も集め，公開研究会「観客から博物館を見る－研究をどう見せるか－」を開催した。この分野の関心の高まりを反映し，活発な討論が行われた。

阿部　義平　ABE　Gihei　教授

1942年生［学歴］東北大学文学部史学科1965年卒業［職歴］奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部(1965)･文部技官，文化庁文化財保護部記念物課(1972)･文部技官･文部調査官，国立歴史民俗博物館考古研究部助教授(1981)，同教授(1990)，同部長(2001～2004)，総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004)［学位］［所属学会］日本考古学協会，日本考古学会，考古学研究会，条里制･古代都市研究会，千葉歴史学会，宮城県考古学会，茨城県考古学協会，古代山城研究会［専門］日本考古学［主な研究テーマ］古代の都市･城柵･官衙･集落等の考古学的研究及び展示／ Study of political site in ancient period and display，日本列島内諸文化の相互交流の研究／ Interchanges between local cultures in Japan

Ⅰ　研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 個人研究として[阿部2005.3a]を発表した。

2) 個人研究の成果として「平城京の都市設計」をとりまとめ，歴博研究報告に投稿した（2005年度刊行予定）。

3) 個人研究の成果として「古代城柵の研究（二）－城郭の成立と機能」をとりまとめ，歴博研究報告に投稿した（2005年度刊行予定）。

4) 個人調査研究として，佐渡ヶ島北部欽明朝肅慎人の遺跡を探訪した（8月）。

5) 特定研究「日本歴史における地域性の研究」（1985～1990年）の成果の一部として茨城県石下町国生本屋敷遺跡の発掘調査報告書を執筆編集した（歴博研究報告，2005年度刊行予定）。

二　教育活動

1) 教育

総合研究院大学日本歴史研究専攻社会史「日本の城柵」後期開講

三　博物館活動

展示プロジェクト委員　特別企画「佐倉連隊とその時代」参加

特別企画「明治維新と平田国学」へ伝「平田篤胤」土像の出品

総合展示「律令国家」展示維持改善
館蔵品･展示品の貸出，返却処理（分担分）

四　社会連携

1）館外における各種委員

千葉県文化財センター理事，山王廃寺跡等調査委員会委員　前橋市教育委員会，「史跡久米官衙遺跡群　久米官衙跡･来住廃寺跡」調査検討委員会委員･整備検討委員会委員　松山市教育委員会，青森県史編纂協力員　青森県

2）館外講演･カルチャーセンター･出前授業

講演：阿部義平「古代国家の成立と地方の役所」よみがえる古代の役所跡－嶋戸東遺跡成果発表会，成東町文化会館，成東町教育委員会他，12月15日

II　業績目録

2a）論文

2005.3：「古代城柵の研究」（一）－城柵官衙説の批判と展望－」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第121集，pp.257-284）

2b）書評

「東アジアの古代都城」（奈良文化財研究所編『日本歴史』672，pp.113-115，吉川弘文館，5月）

3b）自治体史･史料集など

「森ヶ沢遺跡」第Ⅰ部弥生時代，pp.146-147，「森ヶ沢遺跡」第Ⅱ部古墳時代，pp.292-299，「森ヶ沢遺跡」第Ⅲ部飛鳥～平安時代，pp.718-721，『青森県史資料篇考古3』青森県，2005年3月31日

5）学会･外部研究会発表要旨

「古代国家の成立と地方の役所」嶋戸東遺跡成果発表会講演資料，pp.1-6，12月15日
「基調講演　1970年代の埋蔵文化財行政」埋蔵文化財行政研究会研究発表論集8，pp.4-16，5月23日

7）その他

編集『国立歴史民俗博物館20周年記念行事記録集』pp.1-26，12月
「国立歴史民俗博物館開館20周年事業の企画と実施経過」（『国立歴史民俗博物館20周年記念行事記録集，pp.2-3，12月）

III　研究状況･研究広報

･1988年実施の本館特別研究の国生本屋敷遺跡の発掘調査報告の編集を終えて，古墳時代前期の豪族居館跡･前方後円墳と居館の組合せ，律令時代初期に国が全国に設けた兵庫の遺跡かとみられる初期の官衙遺跡，関東地方と北部日本との歴史的関係や長期の歴史課題の展開について，公表に価する共同研究成果をとりまとめることができた。これは2005年度刊行の予定である。

･「古代城柵の研究（一）－城柵官衙説の批判と展望」で，東北地方城柵の評価と，その基となる多賀城発掘調査自体への批判及び次段階研究への展望を歴博研究報告に原稿提出後の2004年8月に，多賀城跡政庁の発掘調査が政庁跡の再調査として実施され，河北新報の記事等によると，多賀城跡調査研究所が設立以来大成果として報告していた発掘事実なるものに，35年を経てようやく再調査と再検討が始まり，これまで公表してきた成果が大幅に見直しとなる成果が出たと報ぜられた。この問題は歴博総合展示の第一室「律令国家」当初展示，とくに多賀城の復元模型と評価の内容とからむ大問題であったが，タブーとなっていた再検討を行った同研究所若手研究者に敬意を表したい。当方としては研究所による当初からの発掘における基本的誤りとして批判した検討結果をおりこみ済みで，「古代城柵の研究（二）」で城柵の歴史的評価に進むことを予定している。更に古代陸奥国を，これまで律令国家辺要の大国として，ショーウインドー的な城柵等の展開，律令制度の厳正適用や地域的拡大とみてきた従来の見解に対して，陸奥国はその成立から移住倭人と原住の毛人との利益結合－連合的な律令外の国家の二面的性格と二面的な地域編成の性格を多く含むのでないかと考えるに至った。藤原宮を4分の1サイズにした仙台郡山遺跡の実態が判明し，一つの令制国の範囲をこえたあり方が判明してきている。また制度的にも，都に行くべき采女や兵衛が陸奥に留めおかれ，陸奥府などに集中勤務し，北方に広がる毛人地の有力者も城柵－陸奥府に勤めて城養の蝦夷等と呼ばれ，多賀城などが一種の官廷を形成していたらしい。陸奥の動員兵力の実質戦闘部隊に蝦夷－俘因の軍が当たるなど，ここに倭夷権力を構成していたふしがある。国内の税も陸奥で内部消費され，戦争対処の判断においても現地慣行に従わざるをえなかった実態もある。在地の官人層の任命権も夷村の長の任命権も実質は現地にあった。中国での歴史上の辺要の諸国の独立指向性などと同様の問題が，日本歴史の展開にも古墳時代から始まって，律令時代まで，あるいは古代末まで，様々な形でありえたと考えている。城柵から発して，北方文化領域と日本国との関係史はこれから掘り下げる課題が多くある。多賀城碑なども更なる検討課題としてそのよい素材を今後に提供しているものである。

一ノ瀬　俊也　ICHINOSE　Toshiya　助手

1971年生［学歴］九州大学文学部史学科1994年卒業，九州大学大学院比較社会文化研究科日本社会文化専攻博士課程1998年中退［職歴］大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手(2004)［学位］博士（比較社会文化），九州大学，2003年6月［所属学会］九州史学研究会，軍事史学会，史学

会，日本史研究会，日本歴史学会，歴史学研究会 [専門] 日本近現代史 [主な研究テーマ] 戦前･戦後社会における戦争観の諸相／ Why was "War" considered just in Modern Japanese Society

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基幹研究「20世紀に関する総合的研究」(1)20世紀における戦争Ⅰ（代表 安田常雄）において，館内事務担当として調査研究を行い，1月8日の研究会にて「戦中戦後の戦死者遺族－遺骨の問題から」と題し報告した。

2) 個別共同研究「佐倉連隊と地域民衆」（代表 樋口雄彦）において，佐倉連隊関係資料の収集･分析を行った。

3) 平成15～16年度科学研究費･基盤研究(C)(2)「日本陸海軍に関する軍事啓蒙雑誌の調査･研究」（代表 有馬学）において，研究分担者として資料所蔵先（宮崎県･都城市立図書館）での調査を行い，現在印刷中の成果報告書に資料解題を執筆した。

4) 平成15～16年度科学研究費･基盤研究(B)(1)「20世紀における戦争と表象／芸術－印刷･映像･プロダクツ－」（代表 長田謙一）にて研究分担者として調査研究を行い，その成果を9月5日の研究会にて「日露戦争戦蹟論」と題し報告した。

三 博物館活動

1) 歴博探検･くらしの植物苑

歴博探検 解説「子どものあそびとくらし」（第三期統一テーマ･くらしの中の歴史）10月

5) 歴博振興会関係

国立歴史民俗博物館友の会「軍隊と地域」学習会にて「もう一つの軍隊マニュアル」と題する講演を行った（1月23日）

四 社会連携

1) 館外における各種委員

千葉県史調査執筆員

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「千葉県の軍隊と人々」千葉県史公開講座，2月26日，主催･千葉県史料研究財団

Ⅱ 業績目録

1) 著書：単著

2004.6：『近代日本の徴兵制と社会』吉川弘文館

2004.7：『明治･大正･昭和軍隊マニュアル－人はなぜ戦場へ行ったのか－』光文社

2a) 論文

2004.5：「日露戦後～太平洋戦争期における戦死者顕彰と地域－“郷土の軍神”陸軍歩兵中佐大越兼吉の事例から－」（『日本史研究』501，pp149-175，日本史研究会，5月）

III 研究状況･研究広報

今年度は共同研究「20世紀における戦争」および「佐倉連隊と地域民衆」に参加し，いくつかの佐倉連隊に直接関係する資料を収集することができた。来るべき常設展示第6室実現に向けて，関係資料をより一層綿密に調査･収集していく必要性を痛感している。

個人研究に関しては，かねてからの課題であった博士論文および関連する研究を2冊刊行することができた。とくに新書はいくつかの新聞･週刊誌でも紹介され，「研究成果の社会への還元」という責務をいくらかなりとも果たし得たのではないかと考えている。

井原 今朝男 IHARA Kesao 教授

1949年生 [学歴] 静岡大学人文学部人文学科1971年卒業 [職歴] 総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004) [学位] 博士（史学），中央大学，1996年 [所属学会] 歴史学研究会，日本史研究会，日本歴史学会，史学会，日本古文書学会，信濃史学会 [専門] 日本中世史 [主な研究テーマ] 生活史，債務関係史，東国荘園史，中世公家史，中世寺院史

Ⅰ 研究･教育活動

二 教育活動

1) 教育

國學院大學大学院非常勤講師（日本中世史研究III）

日本女子大学文学部非常勤講師（史料購読）
国文学研究資料館共同研究委員会委員
国立民族学博物館ミュージアムネットワーク運営会議委員

II 業績目録

2a) 論文
「中近世移行期の『鉄炮之大事』・『南蛮流秘伝一流』にみる技術と呪術」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第121集，pp.1-43，3月）
「中世の国衙寺社体制と民衆統合儀礼」（『中世一宮制の歴史的展開』pp.209-257，岩田書院，12月）
2b) 研究ノート
「中世諸国一宮と神社史研究をめぐる論点」（『国史学』182号，pp.56-60，國學院大學国史学会，2月）
「中世寺院僧侶その実像(1)～(7)連載中」（『寺門興隆』70号pp.82-88，71号pp.88-94，72号pp.102-108，73号pp.109-115，74号pp.106-112，75号pp.94-100，76号pp.98-103，興山社，9月～2005年3月）
2c) 書評
「書評　阿諏訪青美『中世庶民信仰経済の研究』」（『読書人』4月23日号）
「書評　千葉県『千葉県の歴史資料編中世4　県外文書1』」（『千葉県史研究』12号，pp.56-60）
「書評　岡野友彦『中世久我家と久我家領荘園』」（『古文書研究』59号，pp.114-115）
「書評　細田貴助『県宝守矢文書を読む』」（『日本歴史』678号，pp.118-121）
3b) 自治体史･史料集など
『長野市誌　総集編』長野市，10月
『上越市史　通史編　中世』上越市，3月
「越後府中と交通」（『広報じょうえつ　市史編さんたより　189号』19，3月）
5) 学会･外部研究会発表要旨
「室町期再版荘園制論」歴史学研究会中世部会報告，東京大学史料編纂所会議室，12月25日
「国衙･守護権力と一宮制について」一宮研究会報告，國學院大學，3月13日
「中世の押書と圧状について」鎌倉遺文研究会，早稲田大学，3月31日
6) 歴史系総合誌「歴博」，友の会ニュースなど
歴博けんきゅう便「歴博国際研究集会「中世城郭の社会的機能－その日欧比較」」（歴史系総合誌『歴博』126号，pp.24-25，9月）
7) その他
「人文･社会科学の未来を開くために」（『まほろばニュース』185号，pp.2-3，5月）

III 研究状況･研究広報

債務史についての専門論文を蓄積して体系化の目途をつけたい。室町期再版荘園制論についても学界での論議が進展しており，歴研部会報告を専門論文にしたい。高松宮本の共同研究で，中世の知的体系の集積にむけての史料調査が進展して興味深い事象が出てきた。また展示プロジェクト「古今新古今の世界」でも歴史学からみた和歌史について研究を深化したい。

今村　峯雄　IMAMURA　Mineo　教授

1942年生【学歴】横浜国立大学工学部応用化学科1965年卒業，東京大学大学院理学系研究科修士課程化学専攻1967年修了，東京大学大学院理学系研究科博士課程化学専攻1970年修了【職歴】日本学術振興会奨励研究員(1970)，カリフォルニア大学（サン･ディエゴ）研究員(1970)，東京大学助手(1972)，同助教授(1985)，国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授(1996)，総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004)【学位】博士（理学），東京大学，1970年3月【所属学会】日本文化財科学会，日本第四紀学会，日本化学会，日本地球化学会，日本質量分析学会，日本放射化学会【専門】歴史資料科学，分析化学／核･放射化学【主な研究テーマ】高精度放射性炭素年代測定法の歴史･考古研究への応用，新しい自然科学的歴史資料研究法の開発とその応用

I 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 本館基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」（代表　今村峯雄），研究の全体企画および総括および以下の個別活動を行った。
【歴史資料の年代研究】横浜市都筑区･関家住宅（重文）の研究（中尾七重氏らと）：現地資料調査(2004.9)，記録･採取(歴博，2004.9)，年代測定（依頼測定），年代解析（ウィグルマッチ法）。東広島市安芸国分寺跡遺跡の研究（関広尚世氏らと）：年代測定資料の収集(2004.12)。岡山県･鬼ノ城遺跡の研究（谷山雅彦氏らと）：加工木片等の年代測定，年代解析（ウィグルマッチ法），討論･現地調査(2005.3)。
【縄文･旧石器時代資料の年代研究】被熱した岩石（焼石）の熱ルミネッセンス年代測定研究（橋本哲夫氏らと）：資料調査への協力（2005.3，北海道埋蔵文化財センター）。最終氷期の炭素14研究（van der Plicht氏らと）：富士火山の埋没材（光谷拓実氏提供），樹齢400年の14C年代データの取得。

2) 本館基盤研究「歴史資料の材質･生活技法と生産地に関する調査研究」(代表　宇田川武久)，および本館基盤研究「館蔵資料『江戸図屏風』の資料学的研究」(代表　永嶋正春)の，それぞれ研究分担者。
3) 文科省学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジアー炭素年代測定による高精度編年体系の構築ー」(代表　西本豊弘)，14C年代データの評価ならびに以下の活動を行った。
【基礎研究調査】土器付着炭化物の同位体および元素分析による内容物解析とその14C年代データ評価への応用。2005.2発表の新暦年較正データベース「INTCAL04」に対応する自動グラフ作成機能付較正プログラムRHC3-1を作成。試用版として公開。
【海外調査および研究討論】2004.6：東アジア考古学会における弥生年代に関する討論へ参加，韓国･忠南大学校博物館における資料調査に参加，2004.11：中国社会科学院(考古研究所)および北京大学(考古博物研究院等)において，研究討論，資料調査，研究施設見学。
【国内資料調査および研究討論】2004.7：北海道埋蔵文化財センターで資料調査および研究討論，2004.8：奈良文化財研究所にて年輪資料調査，歴博にて分割･記録作業，2004.9：東広島市･黄幡1遺跡資料調査，年輪資料の収集作業(2004.12)，奈良文化財研究所にて年輪年代検討(2004.12)，2004.11：北海道南茅部･臼尻小学校遺跡にて資料調査，2005.2：沖縄県名護市･大堂原貝塚資料等の調査および研究討論
【研究報告会】福岡研究集会[今村2004.11]，奈良研究集会[今村2004.12]，岡山研究集会[今村2005.2]にて報告を行った。
【国際研究集会】歴博において開催した歴博国際研究集会『弥生農耕と東アジア』において研究発表[今村2004.12]
4) 文科省科研費･萌芽研究「照射年代法による氷河期における陸橋形成に関する基礎研究」(代表　今村峯雄)青森県下北半島の津軽海峡において，資料収集調査(2004.8)。石英分離作業(2004.10および11)。
5) 日本学術振興機構･基盤研究(B)(2)「同定情報に基づく土器付着炭化物の高精度年代測定」(代表　坂本稔)，基盤研究(B)(2)「東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する比較研究」(代表　齋藤努)においてそれぞれ研究分担者。平成13～15年度文部科学省科学研究費補助金･基盤研究(A)(1)『縄文時代･弥生時代の高精度年代体系の構築』(代表　今村峯雄)の研究成果の一部を[春成･今村編2004.5]などとして刊行した。

二　教育活動

1) 教育
総合研究大学院大学
2) 博物館教育
鹿児島県立埋蔵文化財センター研修講師(1月27日)
奈良文化財研究所研修『自然科学的年代決定法課程』講師(3月3日)

四　社会連携

1) 館外における各種委員
日本AMS研究協会運営委員，「自然科学と考古学」(日本文化財科学会機関誌)編集委員
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
島根県浜田高校「スーパー･サイエンス･ハイスクール(SSH)事業」講義･見学実習，12月9日
2004.4「化学と考古学ー年代研究についての最近の話題から」『化学への招待ー講演会』(日本化学会関東支部)，4月3日，武蔵大学，東京都練馬区
2005.3「瓜生堂の炭素14年代と近畿弥生実年代」『瓜生堂遺跡の最新研究』講演会，2005年3月20日，大阪府立弥生文化博物館，大阪府和泉市

II　業績目録

1) 著書
2004.5：『弥生時代の実年代ー炭素14年代をめぐってー』(春成秀樹と共編著)(250頁)学生社
2a) 論文
2004.4：「炭素14年代測定法により弥生時代は500年さかのぼる」(『現代化学』397号，pp.55-60，東京化学同人)
2004.4：「自然科学と考古学」(白石太一郎編『考古学と歴史』pp.33-46，(財)放送大学教育振興会)
2004.5：「弥生時代の年代測定」(『総研大ジャーナル』5，pp.37-39，総合研究大学院大学)
2004.5：「3世界の炭素14年代測定」(『弥生時代の実年代ー炭素14年代をめぐって』pp.85-92，学生社)
2004.5：「1世界レベルの年代研究へ」(『弥生時代の実年代ー炭素14年代をめぐって』pp.228-233，学生社)
2004.6：「AMS炭素年代測定法と暦年較正」(『季刊考古学』第88号，pp.29-33，雄山閣出版)
2004.9：An automated AAA preparation system for AMS radiocarbon dating. Nuclear Instruments and Methods for Physics Research, B223-224, pp.298-301 (with K. Sakamoto, A.Kodaira)
2004.9：Meteoric 10Be in volcanic materials and its behavior during acid-leaching. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B223-224, pp.591-595, (with A.Shimaoka, M.Sakamoto, H.Hiyagon, H.Matsuzaki)
2004.9：Exposure dating of underwater rocks：potential application to studies of land bridges during the Ice Ages. Nuclear Instruments and Methods for Physics Research B, B223-224, pp.608-612 (with K.J.Kim)
2004.9：「科学的年代測定法はどこまで進んだか」(沢田正昭編『化学が解き明かす古代の歴史ー新世紀の考古科学ー』クバプロ)
2005.2：「実年代をはかるーAMS14C年代法と年輪年代法ー」(『文化遺産の世界』Vol.16，pp.14-16，国際興業)
3a) 調査･発掘調査報告書

「報文　千葉県富里市古込Ｖ遺跡千葉県富里市古込遺跡出土炭化物の14C年代測定」(『考古学』2，pp.121-122，5月)（小林謙一，永嶋正春と共著）
「神奈川県小田原市中里遺跡出土試料の14C年代測定」(『中里遺跡第Ⅰ地点発掘調査報告書』（印刷中）)（設楽博己，小林謙一と共著）
「岡山市南方（済生会）遺跡出土土器付着物の14C年代測定」(『岡山市埋蔵文化財センター年報』平成14年度，pp.54-65，3月)（小林謙一，春成秀爾，坂本稔，松崎浩之，扇崎由と共著）
「自然科学分析　八戸市是川遺跡･風張遺跡出土試料の14C年代測定」(『八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第5集－是川中居遺跡中居地区G･L･M－』八戸市埋蔵文化財調査報告書第102集，pp.136-147，3月)（小林謙一，永嶋正春，西本豊弘，坂本稔，陳建立と共著）
「第Ⅶ　自然科学分析　多摩ニュータウンNo.520遺跡出土試料の炭素年代測定」(『多摩ニュータウンNo.520遺跡(2)』第137集，pp.96-110，東京都埋蔵文化財センター，3月)（小林謙一，坂本稔と共著）
「群馬県安中市向原遺跡出土試料の14C年代測定」(『天神林遺跡･砂押遺跡･大道南遺跡･向原遺跡』，（印刷中）安中市教育委員会，3月)（小林謙一，坂本稔と共著）
「多摩ニュータウン内No.243遺跡出土土器付着物の14C年代測定」(『東京都埋蔵文化財センター調査報告』第155集，（印刷中）3月)（小林謙一，坂本稔，陳建立と共著）
「大和市上野遺跡出土縄文草創期土器付着物の14C年代」(『大和市史研究』第31号，大和市役所，pp.1-11，3月)（小林謙一，春成秀爾と共著）
「西ヶ原貝塚出土土器付着物の14C年代測定」(『西ヶ原貝塚』pp.65-67，発行機関名，3月)（小林謙一，坂本稔，陳建立と共著）
「森吉町向様田A遺跡出土土器付着物の14C年代測定」(『向様田A遺跡　遺物編－森吉山ダム建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第370集，pp.368-371，3月)（小林謙一，坂本稔，陳建立と共著）
「山梨県御坂町桂野遺跡出土土器付着物の14C年代測定」(『桂野遺跡－農道取付道路地区発掘調査報告書－』pp.21-47，3月)（小林謙一，坂本稔，陳建立と共著）
「山梨県明野村梅之木遺跡出土土器付着物の14C年代測定」(『梅之木遺跡･永井原遺跡』pp.57-59，3月)（小林謙一，坂本稔，陳建立と共著）
「井野長割遺跡出土炭化材の14C年代測定」(『井野長割遺跡（第5次）』pp.17-19，3月)（小林謙一，坂本稔，陳建立と共著）
「第Ⅸ章　自然科学分析調査山形県高瀬山遺跡Ⅰ期出土土器付着物の14C年代測定」(『高瀬山遺跡（1期）発掘調査報告書』第121集，（印刷中）山形県埋蔵文化財センター，3月)（小林謙一，坂本稔，陳建立，斉藤主税と共著）
「花巻市上台遺跡出土縄文草創期土器付着物の14C年代測定」(『上台Ⅰ遺跡発掘調査概報』第2集，（印刷中）花巻市博物館調査研究報告書，3月)（小林謙一，坂本稔，陳建立，酒井宗孝と共著）
「山形県小松崎遺跡出土土器付着物の14C年代測定」(『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号，pp.171-173，3月)（小林謙一，坂本稔，陳建立，渋谷孝雄と共著）
「第8章　吉田遺跡出土炭化材の14C年代測定」(宮本一夫編『対馬吉田遺跡－縄文時代遺跡の発掘調査－』pp.49-51，3月)（小林謙一，坂本稔，陳建立，藤尾慎一郎と共著）
「長野県箕輪町荒城遺跡2次調査出土炭化材の炭素14年代測定」(『荒城遺跡－平成13年度箕輪町町営住宅建替事業に伴う埋蔵文化財第2次緊急発掘調査出土炭化材の炭素14年代測定』pp.1-5，発行機関名，3月)（小林謙一，坂本稔，松崎浩之と共著）
「出雲市中野清水遺跡出土漆･土器付着物試料の14C年代測定」(『大津町北遺跡･中野清水遺跡』5，pp.193-196，3月)（小林謙一，坂本稔，永嶋正春と共著）
「北上市内遺跡出土土器付着物の14C年代測定」(『北上市埋蔵文化財年報（2002年度）』pp.23-28，3月)（小林謙一，坂本稔，陳建立と共著）
「高松市東中筋遺跡出土縄文晩期土器付着物の14C年代測定」(『都市計画道路東浜港花ノ宮線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第二冊－東中筋遺跡－第2次調査－』70集，pp.49-55，高松市埋蔵文化財調査報告書，3月)（小林謙一，坂本稔，陳建立，松崎浩之と共著）
「5.池上曽根遺跡の柱根の炭素14年代」(『史跡池上曽根99《第1分冊－本文編･付編》』pp.261-263，和泉市教育委員会，3月)（辻誠一郎，春成秀爾と共著）
「埼玉県寄居町中小前田2遺跡出土土器付着物の14C年代測定」(『中小前田2遺跡』25集，（第10次）pp.65-67，寄居町遺跡調査会，3月)（小林謙一と共著）
「韓国也音洞遺跡出土試料の炭素年代測定」(『蔚山也音洞遺蹟－Ⅱ地区発掘調査報告書－』第6冊，pp.82-88，密陽大學校博物館，東義大學校博物館，蔚山廣域市，3月)（小林謙一･坂本稔と共著）

3b)　自治体史･史料集など

「(1)年代測定」(『千葉県の歴史』4集，pp.1052-1055，3月)（小林謙一と共著）

5)　学会･外部研究会発表要旨

2004.9：「年代測定とその考古学への応用」日本情報考古学会第18回大会，9月20日，共立女子大学，東京神田
2004.11：「AMS炭素14年代と弥生の年代」（特別学術講演）(『日本質量分析学会学会同位体比部会』山形県上山市)
2004.5：「弥生時代の実年代」『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』pp.50-52（春成秀樹･藤尾慎一郎･小林謙一･坂本稔と共著）千葉大学
2004.5：「AMS14C年代測定による関東地方縄紋時代後期の暦年較正年代」日本考古学協会総会2004年度研究発表要旨，pp.46-49，（小林謙一･坂本稔･西本豊弘･松崎浩之と共著）千葉大学
2004.7：「炭素14年代法に用いる土器付着炭化物の同定の試み」『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨』pp.2-3，（坂本稔･小林謙一･舛田奈緒子と共著）

III 研究状況･研究広報

「自然科学の歴史資料研究への自然科学的方法の活用」を研究の軸にして，年代測定と新しい研究法の開拓を主要なテーマとして研究を行ってきた。昨年度の弥生の年代「事件」以来，研究の主力を，「弥生時代の年代観の確立」において仕事を行っている。幸い，平成13～15年度に行ってきた科研費による研究「縄文･弥生時代の高精度年代体系の構築」の大きな部分が，新たに採用された文科省学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジアー炭素年代測定による高精度編年体系の構築ー」（代表　西本豊弘）に発展的に引き継がれることになった。この研究の主要な流れは，これまでの研究の規模を量的かつ面的に拡大することであるので，個々人が機能的に活動することで自律的に進展するものと期待する。研究上の個別的な貢献は別として，データの質的な評価の担保とグループの機能性確保への応援が個人的に課せられた全体的課題であると考えている。

なお，上記の研究で本年度得られた年代測定の結果は，弥生の実年代に関して歴博グループがこれまで主張してきた結論をさらに補強するものであることは，12月に開催された歴博国際研究集会の報告の通りである。また，土器付着炭化物の炭素，窒素の同位体分析，および炭素／窒素の元素濃度比から，新たに炭化物の内容に関する情報が得られるようになったことは，研究が新たに発展する可能性を有するものとして期待している点である。

一方で，これまでの縄文時代の年代研究は，散発的に進めている観があり，やや停滞している。この部分は歴博基盤研究等の研究活動としてあらためて組織的に推進したいと考えている。

岩淵　令治　IWABUCHI　Reiji　助教授

1966年生［学歴］学習院大学文学部史学科1989年卒業，東京大学大学院人文社会研究科修士課程1991年修了，東京大学大学院人文社会系研究科博士課程1996年単位取得退学［職歴］東京都江戸東京博物館専門研究員(1995)，日本学術振興会特別研究員(PD　1997)，国立歴史民俗博物館歴史研究部助手(1997)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004)［学位］博士（文学），東京大学，1999年10月［所属学会］歴史学研究会，史学会，日本史研究会，江戸遺跡研究会［専門］日本近世史［主な研究テーマ］都市史／ History of Pre modern City.

I　研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 個人研究テーマ「近世都市における武家地･寺社地の研究」･「近世都市における町人地･商人の研究」のうち，2001～2002年度に行った奨励研究A「日本近世城下町における武家地の研究」（代表　岩淵令治），研究協力者として参加した基盤研究(A)2「伝統都市の社会＝空間構造と諸類型に関する基盤的研究」（代表　吉田伸之，2001～2003年），国立歴史民俗博物館奨励研究「日本近世城下町における武家の消費行動および家相続と都市社会」（2003年度代表　岩淵令治）の成果を発展させ，その一部を著書で公表した。このほか，調査，データベース作成を行った。
［著書］[岩淵2004.11]
［調査］徳川美術館･金刀比羅宮（11月6～7日）
［データベース作成］江戸商人･職人データベース（継続中）

2) 文部科学省科学研究費補助金･若手研究(B)「日本近世城下町における武家の消費行動および家相続と都市社会」（代表　岩淵令治）で，藩政史料および藩士･幕臣の史料調査，研究をすすめ，その一部を論文･学会報告として公表した。
［調査］金沢市立玉川図書館･八戸市立図書館（7月23～25日），東京大学史料編纂所（8月11日），仙台市博物館･仙台市民図書館ほか（9月6～8日），国文学研究資料館（9月14日），鳥取市歴史博物館やまびこ館･鳥取県立博物館（11月6～7日），秋田県立図書館･角館町角館重要伝統的建造物群保存地区ほか（1月8～10日），高桑家（2月24日）
［論文］[岩淵2004.10a]
［学会報告］関東近世史研究会大会において「江戸消防体制の構造」[岩淵2004.10b]として報告した。

3) 国立歴史民俗博物館企画展示「海をわたった華花」（7～9月，[岩淵2004.7]）およびくらしの植物苑特別企画「季節の伝統植物」に展示プロジェクト委員として参加し，都市江戸における園芸文化について公表した。

4) 総合展示第三室のリニューアルに向けて，北海道立開拓記念館ほか（9月16～17日，11月18～25日）で蝦夷地における交易･生業の場を描いた城下町･湊町の画像資料の調査･撮影，城下町松前の現地踏査を行った。また大阪市歴史博物館（9月18～19日）に近世都市に関する展示手法を学んだ。

5) 基盤研究(B)2「生涯学習における博物館教育･教員養成及び歴史展示に関する研究」（代表　小島道裕）で，研究分担者として，琉球の港湾都市･王府である那覇を描いた近世の屏風に関するシンポジウムに参加し，屏風に描かれた範囲について踏査を行った（12月10～12日）。

6) 本館個別共同研究「水木コレクションの形成過程とその史的意義」（代表　久留島浩），基盤研究(B)2「近代大和地方のコレクション収集活動から見た「日本文化」形成過程の研究ー水木コレクションの復元をふまえた総合的研究ー」研究分担者（代表　久留島浩）の共同研究員･研究分担者として，近江長浜･伊吹のコレクターの調査･研究会に参加し（2005年3月5～6日），都市江戸関係の史料も実見することができた。

7) 基盤研究(A)1「歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基礎構築にむけての研究」（代表　高野利彦）の研究分担者として，高野山大学において高野山塔中史料の調査を行った（8月21～23日）。

8) 共同研究「地域蘭学の総合的研究」(1999～2001年度代表　青木歳幸) の成果報告として，蘭学者データベースを作成した。
9) 館蔵の近世史料の整理を行った (伊能家等近世地方文書の整理･目録作成　継続中)。また，近世･近代文書の検索がより簡便に行える館蔵近世･近代古文書データベースを作成し，水木家資料について公開した。
10) 企画展示「民衆文化のヒーローたち」(3～6月)，特別企画「新収資料の公開」(2005年1～2月) に展示プロジェクト委員として参加した。
11) 個別共同研究「館蔵資料『江戸図屏風』の資料学的研究」に共同研究員として参加し，江戸図屏風の調査を行った。

二　教育活動

1) 教育

学習院大学非常勤講師 (博物館実習)，学習院女子大学非常勤講師 (歴史資料論 II (考古)･III (古文書))

三　博物館活動

1) 歴博探検･くらしの植物苑

歴博講演会「海をわたった華花2004－人と植物の日本史－」，8月7日，国立歴史民俗博物館講堂，総合司会

四　社会連携

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「城下町佐倉」，佐倉市教育センター (佐倉学カリキュラム開発現地研修会)，8月4日，国立歴史民俗博物館
「都市の人々の生活－武家屋敷を中心に－」佐倉市民カレッジ，2005年1月11日，佐倉市立中央公民館

II　業績目録

1) 著書:単著

岩淵2004.11:『江戸武家地の研究』(716頁)，塙書房

2a) 論文

岩淵2004.10a:「八戸藩江戸勤番武士の購買行動と国元」(『歴史と風土－南部の地域形成』pp.175-207，雄山閣)

4) 展示図録

企画展示『海をわたった華花』(7月) 執筆 (pp.29-30)，(pp.78-86，仁田坂英二と共同執筆)

5) 学会･外部研究会発表要旨

岩淵2004.10b:「江戸消防体制の構造」(関東近世史研究会大会報告，於東洋大学)

6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュースなど

岩淵2004.5:「江戸の消費－江戸勤番武士の買物－」歴史系総合誌『歴博』124号，p.13

III　研究状況･研究広報

個人研究「近世都市における武家地･寺社地の研究」，「近世都市における町人地･商人の研究」のうち，ここ数年は，とくに日本近世の都市の代表であった城下町において，不可欠の構成要素である武家地を重点的にとりあげ，武家地を都市社会の中に位置づけることをめざしている。本年度の主な成果は以下の通りである。

(1) 基礎的研究として，都市江戸の主に大名屋敷について，都市の拡大，都市居住者としての役 (辻番)，屋敷に出入する商人･職人･幕府役人との関係，寺社との関係，武家地研究の大きな契機となった近世考古学の研究史について，従来の成果を総括し，単著にまとめた。

(2) さらに，上記の基礎的研究を発展させるべく昨年より準備を進めてきた研究課題が文部科学省科学研究費補助金･若手研究(B)に採択された (「日本近世城下町における武家の消費行動および家相続と都市社会」)。藩主の分析も継続しつつ，a藩主家の女性および女中･b江戸詰藩士･c旗本･御家人をとりあげ，日記･小遣帳にみる生活･消費行動 (購買行動，文化的消費＜信仰･遊山＞，ゴミの廃棄や町人貸家等)，江戸における身分･藩を越えた「家」の相続 (主にb) 等を検討し，より微細なレベルで武家地を都市社会に位置づけることをめざしている。本年は，史料調査を行うともに，bについて八戸藩の江戸勤番武士の日記を分析し，江戸での購買行動が国元での消費生活に位置付いていたことを明らかにし，江戸勤番武士＝田舎者という通説を批判する論文を公表した。

また，1の基礎的研究で検討した都市居住者の役について，火消をとりあげ，本館所蔵の本多家資料などを素材として検討をすすめた。そして，学会報告において，従来の町火消重視の江戸の火消研究に対して，武家火消･定火消，および現場で諸々の火消を指揮する幕府の火事場役人を含めた「消防体制」を提起した。

(3) 自身の個人研究の研究成果もふまえて，総合展示第3室リニューアル「都市の時代」のコーナー (2007年3月開室予定) の展示案を検討し，委員との議論を経て，武家地，寺社地，あるいは近世遺跡の発掘調査などのテーマを提案した。

来年度は，2で残された課題にとりくむとともに，「消防体制」について活字論文の形で公表したい。また，総合展示第3室リニューアル「都市の時代」の展示案をまとめたい。

上野　和男　UENO　Kazuo　教授

1944年生【学歴】明治大学商学部商学科1967年卒業，東京教育大学大学院文学研究科（社会学専攻）修士課程1970年修了【職歴】明治大学政治経済学部助手(1972)，同助教授(1976)，国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授(1984)，同教授(1992)，総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004)【学位】【所属学会】日本民族学会，比較家族史学会，日本家族社会学会【専門】社会人類学【主な研究テーマ】日本の家族と祖先祭祀の研究／ Ancestor Worship and Family Structure in Japan

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 国立民族学博物館の機関研究･国際コローク「発酵食品･製品と感覚受容－環境と現行する記憶－」（2005年3月3～5日，国立民族学博物館，代表 泉幽香）に参加し，「滋賀県御上神社の祭祀儀礼における鮒ずし」[上野和男2005]と題して報告。関連する制作映像「近江御上神社の秋祭」「芋くらべ祭の村」を上映。この報告のため御上神社の秋祭の儀礼，神饌などを継続調査。

2) 国立歴史民俗博物館共同研究「宮座と社会：その歴史と構造」（代表 八木透）の第6回共同研究会（10月16日，大分県立歴史博物館）において，国東半島の代表的な宮座である白鬚田原神社の宮座について，「白鬚田原神社の宮座組織とその儀礼」と題して報告するとともに，白鬚田原神社の祭礼「どぶろく祭」を調査。また，この共同研究の調査として，2005年2月に滋賀県坂田郡山東町滋賀谷のオコナイを調査。

3) 科学研究費補助金･基盤研究A(1)「現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」（代表 上野和男）の調査として，広島県久井町の久井稲生神社の宮座調査，滋賀県御上神社の調査などを実施した。また，宮座関係資料調査として，久井稲生神社所蔵文書の調査，聖心女子大学史学研究室所蔵の宮座関係文書の調査，兵庫県三田市の山田感神社文書，貴志御霊神社御頭講文書の調査，兵庫県揖保郡新宮町の宮座関係文書の調査を実施した。滋賀県三上の御上神社関係資料の整理も実施した。さらに，これらの文書のデジタル撮影を実施し，宮座関係資料の集成化をすすめ，「聖心女子大学史学研究室所蔵宮座関係文書」（宮座関係資料集成2），「久井稲生神社所蔵文書」（宮座関係資料集成3）を取りまとめた。なお，昨年度にとりまとめた『宮座文献目録（2003年版）』を国立歴史民俗博物館の公開データベースとして公開する準備をすすめた。

4) 2004年度の民俗文化財映像資料「若狭の六斎念仏」の制作のため，福井県遠敷郡上中町三宅，瓜生の六斎念仏を調査するとともに，映画社の撮影に立ち会った。『若狭の六斎念仏－福井県上中町－』を完成させた。また，2005年度の民俗文化財映像資料「久井稲生神社の御當行事」の制作準備のため，久井稲生神社の宮座および宮座関係資料の調査を実施した。

5) 国立歴史民俗博物館共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」（代表 内田順子）の第1回研究会（6月19日，国立歴史民俗博物館）に参加し，「民俗研究映像『芋くらべ祭の村』と芋くらべ祭研究」と題して報告。あわせて民俗研究映像『芋くらべ祭の村－近江中山民俗誌－』を上映した。

6) 国立歴史民俗博物館共同研究「日本民俗学史の研究」（代表 小池淳一）の第1回研究会（8月28日，国立歴史民俗博物館）に参加し，「『民族学』と『民俗学』の形成史」と題して，総括的な報告を行なった。

二 教育活動

1) 教育

総合研究大学院大学文化科学研究会科日本歴史研究専攻「日本の家族」「日本の地域文化」担当および博士論文指導など。

国際基督教大学教養学部社会科学科「日本民俗文化論」（パーソナルネームの比較研究）

三 博物館活動

1) 歴博探検･くらしの植物苑

「沖縄の村とくらし」（歴博探検，9月11日，国立歴史民俗博物館）

4) 歴民研修委員，講師

＜民俗の研究動向と映像資料＞『民俗研究映像』と『民俗文化財映像資料』」（歴史民俗博物館研修，2004年12月1日，国立歴史民俗博物館）

四 社会連携

1) 館外における各種委員

三鷹市文化財専門委員

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「さまざまな日本の家族」「婚姻の変化」「日本人の名前」「祖先祭祀と家族の変化」（千葉市ことぶき大学，4月19日ほか）

「日本人の名前とその変化」（佐倉市中央公民館，9月24日）

Ⅱ 業績目録

1) 著書

上野和男編『都市の地域特性の形成と展開過程Ⅱ』国立歴史民俗博物館研究報告第124集，国立歴史民俗博物館，2005年3月

2a) 論文

「都市の地域特性の形成と展開過程序論－基幹研究『日本における都市生活史の研究（第2期）』の研究概要－」，（上野和男編『都市の地域特性の形成と展開過程Ⅱ』国立歴史民俗博物館研究報告第124集，2005年3

月)
「都市の地域特性と映像民俗誌の作成－佐原の映像民俗誌作成をめぐる諸問題－」, (上野和男編『都市の地域特性の形成と展開過程 II』, 国立歴史民俗博物館研究報告第124集, 2005年3月)
3c) 辞典項目
「蒲生正男『日本人の生活構造序説』」, 「有賀喜左衛門『大家族制度と名子制度』」, 「有賀喜左衛門『同族と村落』」(『文化人類学文献辞典』, 弘文堂, 2004年10月)
5) 学会･外部研究会発表要旨
「滋賀県御上神社の祭祀儀礼における鮒ずし」(『国立民族学博物館の機関研究･国際コローク「発酵食品･製品と感覚受容－環境と現行する記憶－」プログラム･抄録集』, 2005年3月)

上野 祥史 UENO Yoshifumi 助手

1974年生 [学歴] 京都大学文学部史学科考古学専攻1996年卒業, 京都大学大学院文学研究科考古学専修修士課程1999年修了, 京都大学大学院文学研究科考古学専修博士後期課程2000年中退 [職歴] 国立歴史民俗博物館研究部助手(2000), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手(2004) [学位] 修士 (文学), 京都大学文学部, 1999年 [所属学会] 考古学研究会, 日本考古学会, 日本中国考古学会 ほか [専門] 東アジア考古学 [主な研究テーマ] 漢三国六朝期の古代東アジア世界の展開／ Archaeological Study of Ancient East Asia

I 研究･教育活動

一 研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報
1) 文部科学省科学研究補助金･基盤(A)(2)「前近代の東アジアにおける唐物と南蛮物の交易とその意義」及び展示プロジェクト「東アジア中世海道」関連項目
[調査]
新安沈没船資料･莞島海底遺物等の調査 (展示資料調査), 大韓民国 国立光州博物館･国立海洋遺物展示館, 4月25～29日
朝鮮半島における中世交流史関連遺跡の調査, 大韓民国全羅南道･慶尚南道, 6月17～21日
石見銀山及び周辺遺跡の調査, 8月9～11日
中国山東省･福建省における港湾関連遺跡･遺物の調査, 中華人民共和国山東省蓬莱閣･福建省海交史博物館他, 9月23～30日
上海博物館研究チームとの国内調査, 地底の森ミュージアム･大阪府立狭山池博物館･島根県立三瓶自然館等, 10月25～29日
新安沈没船資料･飛雁島海底遺物等の調査 (展示資料調査), 大韓民国 国立光州博物館･国立海洋遺物展示館, 12月14～19日
[国際研究集会]「中国新発見の水運関連遺跡とその周辺」の企画運営及び調査地 (上記) での現地研究会の開催
[研究広報] (歴史系総合誌『歴博』の項目参照, 129号)
[展示図録] [上野2005.3a]
2) 個別共同研究「マロ塚古墳出土品を中心とした古墳時代中期武器武具の研究」において以下の調査に参加した。
[調査] 九州 (福岡･熊本地域) におけるマロ塚古墳出土品関連遺物･遺跡調査, 12月8～12日
3) 機構共同研究「ユーラシアと日本：交流とイメージ」の企画立案に参画
[プレシンポジウム]「ユーラシアと日本：交流とイメージ」, 国立民族学博物館, 2005年2月6日
4) 日本中国考古学会2004年大会の企画運営
5) プロジェクト研究「四川省における南方シルクロードの研究」(なら･シルクロード博記念国際交流財団)
[調査] 四川省･陝西省における現地調査, 7月17日～8月4日
[論文] [上野2005.3b]
6) 文部科学省科学研究補助金･基盤(B)(1)「日本原始絵画の図像学的研究」の研究報告
[論文] [上野2005]

二 教育活動
2) 博物館教育
平成16年度「先生のための歴博講座－教室から歴博へ－」総合展示解説 (第1室), 8月9日

三 博物館活動
1) 歴博探検･くらしの植物苑
くらしの植物苑体験教室講師 (ボランティア研修含)「タネと実のふしぎ」, 10月23日･11月27日
くらしの植物苑観察会講師「梅と桃」, 2月26日
2) 歴史系総合誌『歴博』編集委員
[編集]
125号特集「死者の記憶」編集担当
129号特集「日韓の相互認識」編集担当
[執筆]

「鏡にうつしたいこと」(124号掲載)
「東アジアの煌き」(129号掲載)
3) 各種編集委員
『研究年報』編集委員
5) 歴博振興会関係：講師，友の会ニュース執筆など
「おもしろ開拓のすすめ」『友の会ニュース』116号
「歴史と民俗　疑問と回答」『友の会ニュース』117号

四　社会連携
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「古墳時代の始まりをめぐる諸問題」朝日カルチャーセンター新宿，5月22日，6月12･26日

II　業績目録

2a) 論文
2005.3b：「鏡の生産と流通からみた四川をめぐる地域間関係」(『シルクロード学研究』21)(印刷中)
2005：「画象鏡の模倣について－図像分析の立場から－」(設楽博己編『原始絵画の研究』，六一書房)(印刷中)
2b) 研究ノート
2004.8：「報告3／討論」(『王の墓と奉仕する人々』国立歴史民俗博物館編，山川出版社，8月)
【翻訳】
2004.6：「夏商周時代の炭素14年代 (張雪蓮著)」(春成秀爾･今村峯雄編『弥生時代の実年代－炭素14年代をめぐって－』pp.93-102，学生社，6月)
4) 展示図録
2005.3a：「中国の港町　泉州」「中世の貿易船と海商」「碇石」(『東アジア中世海道』)
6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュースなど
「鏡にうつしたいこと」(『歴博』124，pp.26-27，2004.5)
「東アジアの煌き」(『歴博』129，pp.2-5，2005.3)

III　研究状況･研究広報

1)「東アジア中世海道」関連プロジェクト　　本年の研究活動において，最も大きな比重を占めたのは，3月に開幕した企画展示「東アジア中世海道」に関連するプロジェクトであった。中世東アジア世界における地域間交流をテーマとしたこのプロジェクトは，科研･個別共同研究とリンクして進められ，中国と他地域との関係性を描出することを担当した。昨年のフォーラム報告に続き，中国山東省と福建省での港湾関連遺跡の調査をおこない，その調査成果を展示あるいは展示図録を通じて発信した。また，プロジェクトの一環として，上海博物館考古部の研究者を招聘して，最新の発掘調査成果をふまえて，中国の水運関連遺跡に対する国際研究集会を企画した。研究交流の深化，ネットワークの構築が充実した年度であったと考える。
2)　日本中国考古学会2004年大会　　本館と共催した大会を運営した。大会においては，シンポジウム「考古資料にみる地域の認識とその解釈－黄河流域から長江流域へのひろがりのなかで－」を企画立案して，準備運営をおこなった。黄河･長江という地域的なひろがりの中で，同じ資料見出される二つの様相を対比し，「資料から如何に解釈を導き出すのか」という方法論的な問題に取り組んだ。新石器，商周，秦漢といった時代，あるいは地域性などの空間の壁を超えて，アプリオリな前提の懐疑と各研究に対する他視点からの客観評価をふまえた新視点の模索を目指した。限られた時間において充分に議論を深化させることは難しかったが，一つの問題提起をおこなえたものと考えている。
3)　ユーラシアと日本　　考古学･歴史学･民俗学･民俗学･人類学などが提携した，新たな研究の方向性を検討する国立民族学博物館と本館のワーキンググループに参加した。一年に及ぶ議論を通じて，転換点を迎える現代社会を考える上で，その基層をなす19世紀的世界の形成プロセスやシステムの解明が重要であり，そのためには対象とする時代や空間を異にするさまざまな視点からの客観的評価が必要であることが認識された。その議論を具体化するべく，2月にプレシンポジウム「ユーラシアと日本：交流とイメージ」が開催された。その成果報告書が刊行準備中である。上記の日本中国考古学会大会での取り組みとも理念的に共通しており，両者をクロスしながら当プロジェクトでの研究を進める予定である。
4)　南方シルクロードの研究･日本原始絵画の図像的研究　　いずれも，本年は調査研究の最終年度や報告論文の刊行年度である。ともに，「南伝仏教」「古代東アジアにおける図像研究」という大きなテーマに対して，これまで進めできた鏡研究の立場から検討を深めた。具体的には，前者では盤龍鏡や方銘獣文鏡とよばれる鏡を取上げ，その系列と流通状況を分析することにより，後漢時代の鏡の製作系譜の解明を一歩進め，仏教の南伝と対比させる一つのモノ･情報の流れを提示した。後者では，日本の古墳から出土する画象鏡を取り上げ，後漢末から魏晋代にかけての鏡の製作動向の検討をこころみた。個別のテーマに即して検討を深められただけでなく，古代中国における鏡の製作系譜の解明という目的に対して，一歩進めることができたと考えている。
5)　博物館事業及び広報諸活動　　昨年に引き続いて，くらしの植物苑関連事業や博物館教育関連事業に積極的に参加した。その準備において，見識を広げ，自らの研究を深化することができただけでなく，論文等とは異なる情報･研究成果の発信を模索したということもできる。また，学会の動向をひろく広報普及することを目的とした総合誌『歴博』の編集においては，自らも参画した第5回歴博国際シンポジウム『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』や「東アジア中世海道」関連プロジェクトにおいて蓄積された研究成果を発信した。東アジア世界における，古代･中世の日韓関係を取上げたわけであるが，いずれも，数年来大きな議論を呼んでいるテー

マであり，ここに近現代の視点も加えて，日韓相互の歴史認識の再考を促す機会となることを望み，特集号を編集した。

宇田川 武久 UDAGAWA Takehisa 教授

1943年生〔学歴〕國學院大學文学部史学科1968年卒業，國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程1974年単位取得退学〔職歴〕大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004)〔学位〕博士（歴史学），國學院大學，1994年〔所属学会〕国史学会〔専門〕日本鉄炮史〔主な研究テーマ〕初期炮術秘伝書の基礎的研究，製作技術からみた銃砲発達史，江戸時代における炮術の展開過程の研究，幕末維新期における和流炮術の限界と変容に関する研究

Ⅰ 研究·教育活動

一 研究·調査，成果公開方法としての報告·展示·国際シンポ·広報

1) 共同研究
基盤研究「資料の科学的調査および総合年代研究」研究課題「歴史資料の材質·製作技法と生産地に関する調査研究」（研究代表者）（平成16～18年度·3年間）
2) 外部資金による研究
文部科学省特定領域研究(2)「分析化学的手法による鉄炮技術史の相関研究」（研究代表者）（平成16～17年度）
3) 調査
愛媛県新居浜市教育委員会の依頼により，同市の「野田家文書」の砲術秘伝書の調査，3月11～13日，新居浜市
火縄銃の実射実験（茨城県真壁郡県営射撃場），3月17日，茨城真壁郡
砲術師安見隠岐守関係史料と史跡の調査，6月2～4日，石川県金沢市立図書館近世史料館
津和野藩の銃砲および砲術史料の調査，8月9～11日，島根県津和野市郷土資料館
4) 展示
「歴史のなかの鉄炮伝来－種子島から西南戦争まで－（仮称）」2006年10月開催予定の展示原案の作成中

二 教育活動

1) 教育
國學院大學文学部非常勤講師（歴史·日本特殊史講義），城西国際大学人文学部非常勤講師（集中講義）（古文書学·日本の歴史と文化），総合研究大学院大学人間文化研究科（併任）

三 博物館活動

1) 歴博探検·くらしの植物苑歴博講演会
「続鉄炮伝来」8月15日，歴博

四 社会連携

2) 館外講演·カルチャーセンター·出前授業
「炮術史からみた鉄炮伝来」2月21日，シンポジュウム「日本の砲術」，板橋郷土資料館主催
「炮術史研究の問題点と課題」5月8日，銃砲史学会例会，岸体育館
「銃砲刀剣類登録鑑定実技会講師」8月20日，文化庁主催，虎ノ門パストラル
「銃砲刀剣類登録鑑定実技会講師」9月3日，文化庁主催，奈良文化会館
「鉄炮伝来と南蛮流砲術の流行」12月29日，國學院大學栃木短期大学
「大坂城出土の木簡」菅達長についてのコメント，大阪府文化財センタープレス発表（7月29日）

Ⅱ 業績目録

2a) 論文
2005.2：「鉄炮にみる南蛮文化の到来」小特集16世紀における軍事技術の発達·交流と価値観」（『歴史学研究』第785号，pp.2-10）
3a) 調査·発掘調査報告書
2005.3：「板倉神社所蔵の鉄炮について」（『福島市文化財調査報告書』第45集，pp.3-5）
4) 展示図録
2005.2：「砲術史からみた鉄炮伝来」（特別展図録『日本の砲術』pp.68-72，板橋郷土資料館）
6) 歴史系総合誌『歴博』
2004.9：「歴史の証人·鉄炮の百科辞典」126号，pp.2-5

Ⅲ 研究状況·研究広報

現在，館蔵の砲術関係資料を調査しているが，それらを体系的に「初期炮術秘伝書の基礎的研究」「製作技術からみた銃砲発達史」「江戸時代における炮術の展開過程の研究」「幕末維新期における和流炮術の限界と

変容に関する研究」の研究課題を掲げて，当面は基礎的な研究に没頭したい。

内田 順子 UCHIDA-TSUDA Junko 助手

1967年生〔学歴〕東京芸術大学音楽学部楽理科1990年卒業，総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程国際日本研究専攻1997年修了〔職歴〕国立歴史民俗博物館民俗研究部助手(1999)，共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手(2004)〔学位〕博士（学術），総合研究大学院大学，1997年〔所属学会〕東洋音楽学会，日本音楽学会，沖縄文化協会〔専門〕音楽学〔主な研究テーマ〕人のふるまいにおける音の効果についての研究／ Research in the Effects of Sound on Human Behavior

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基盤共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」（代表 内田順子）をたちあげ，これまで本館が制作してきた民俗研究映像や，関連するドキュメンタリー映像について，現代の映像論および民俗学の成果をふまえて批評を加える場として，また，海外の民俗（族）学的な映像アーカイヴの事例を収集し，問題点等を検討する場として，共同研究会を企画･運営した。また，民俗研究映像のデジタルアーカイブ化として，2003年度制作の「出雲の神々」のMPEG-2フォーマット化をすすめた。

本共同研究で，来年度制作予定である映像「AINU：CREED AND CULT（仮題）」に関連して，以下の事前調査･準備をおこなった。

〔調査〕12月20～23日，札幌市，平取町二風谷
1月13～17日，札幌市，平取町二風谷
2月8～13日，札幌市，平取町二風谷
2月19～23日，平取町二風谷

2) 文部科学省科学研究費補助金･若手(B)「シャーマニズムと精神分析における後継者育成のシステムと理論についての比較研究－口頭伝承論の観点から精神分析を研究する試みを中心に－」（代表 内田順子）により，現代の精神分析理論，20世紀前半の精神分析，シュールレアリスム，民族学の理論的関係についての調査をおこなった。

〔調査〕9月2～19日，スリズィー･ラ･サール，パリ
3月12～20日，パリ
3月21～29日，フィレンツェ，ローマ

3) 本館個別共同研究「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」（代表 久留島浩）で，近世の那覇港の様子を描いた絵図をもとに現代の那覇を実際に歩き，類似の絵図の比較研究会に参加した。12月11～12日

4) NHK民謡テープ（複製）の整理と目録化をすすめた。
〔研究集会〕[内田2004.11]
〔研究ノート〕[内田2005.3]

5) 伝承のプロセスについての身体論的考察の成果を物語研究会主催のシンポジウムにおいて報告した。[内田2004.11，2005.3]

二 教育活動

1) 教育
共立女子短期大学非常勤講師（伝統文化論）
市原看護専門学校非常勤講師（民俗学）

三 博物館活動

1) 歴博探検･くらしの植物苑
歴博探検，8月14日「沖縄のくらしと歌」

3) 各種編集委員
『国立歴史民俗博物館研究年報』編集委員

Ⅱ 業績目録

5) 学会･外部研究会発表要旨
2004.11：「祭祀歌謡の伝承における身体を通した自己－他者関係－」（『物語研究会会報』，青山学院大学）

7) その他
2005.3：「物語がはじまるために」（『物語研究』，pp.134-138，物語研究会）

Ⅲ 研究状況･研究広報

(1)映像研究

本館では，1988年より，「民俗研究映像」という枠組みで，民俗の研究論文的な映像作品や民俗研究の資料に供するための映像作品を制作してきた。本年度より，制作主体である各教員がさらに各自の映像論を深めてゆくために，基盤共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」をたちあげ，必要に応じて館外からゲストスピーカ

ーを招き，これまでに制作された研究映像の内容や構成等についての検討や，関連する作品の上映と批評，映像アーカイブの事例収集等をテーマとする研究会を企画･運営した。
筆者自身は，音楽研究を専門とするものであり，映像に関しても，おもに音との関係から研究する立場をとる。「音」や「声」は，1970年代の映画理論において，映画を多様なシステムとしてとらえようとする論点として重要視され始めたが，ほぼ同じ時期に問題提起され，その後豊かな議論が展開した「視点」や「視覚」に比べ，「音」「声」はまだまだ研究の余地が残されているというのが現在の映画理論の状況である。ひとつの映画において，映像と物語の関係を分析することでさえ相当に複雑な作業となる上，さらに「音」や「声」という別の次元の分析作業が必要になるという困難が伴うためである。
来年度，筆者が責任者となって制作する民俗研究映像「AINU：CREED AND CULT（仮題）」は，映像と音の問題を考える，よい機会となると考えている。本研究映像は，スコットランド出身のN.G.マンローが，1930年12月に二風谷でおこなわれたイヨマンテを撮影したフィルムがたどった歴史について考えることを目的に制作されるものである。このフィルムは，撮影された当初はサイレントであったが，人の手を渡るにつれ，さまざまな編集が施され，効果音，説明的なナレーションなどが付され，マンローの意図を超えて，派生していった。フィルムが存在するという「現実」が引き起こす人間関係（発見，複製，編集，保管，視聴）が生み出す意味の世界の広がりと深さについて考えることが，本研究映像制作の趣旨である。本年度は，本作品の事前調査を数回おこない（Ⅰ－－－(1) 参照），関係者へのインタビュー，景観等の撮影をおこなった。
(2)シャーマニズムと精神分析の比較研究
筆者は，2002年度から3年計画で，科研若手(B)「シャーマニズムと精神分析における後継者育成のシステムと理論についての比較研究－口頭伝承論の観点から精神分析を研究する試みを中心に－」をすすめてきたが，本年度はその最終年度となる。本研究は，エリアーデのシャーマニズム論と，ラカンの精神分析理論における「エクスタシー」という概念について，後継者を生み出す技術の伝達という観点から比較研究をおこなうものとして構想された。エリアーデの論では，シャーマンは，成巫の過程において，一種の「死」の経験としてのエクスタシーを経るとされる。一方，フランスで独自の精神分析を実践し，理論化をおこなったラカンは，精神分析の終わりの地点を，絶対的混乱としての不可能なものとの出会い（出会い損ね）とした。そして将来，精神分析家になる人は，この地点を通り抜け，そこにおける経験を，他者である第3者に伝達することが求められた。
本研究をすすめる過程で，20世紀の両大戦間におけるフランスの精神分析，シュールレアリスム，民族学の相互の影響関係について理解を深め，そこにおいてエリアーデの論とラカンの論とを考察することが重要であることに気づき，2002年度から2003年度にかけては，3領域の思想史的相互関係を考察するために，それぞれの領域における経験を有する（シュールレアリスムの作家であった時期があり，精神分析的な治療を受けた経験があり，かつ，民族誌家であった）ミシェル･レリスを軸に調査･研究をおこなった。本年度は，レリスをたどりつつ3領域の思想史的状況を整理し，論点を明確にするために以下の調査･研究をおこなった。
1　パリのシュールレアリストたち（離脱者を含む）が，両大戦間にフロイト理論を参照してゆく過程
2　エリアーデの『シャーマニズム』（1949年）およびレヴィ＝ストロースの『構造人類学』（1958年）において，シャーマンによる治療との比較という脈略で検討された「精神分析」の，同時代における治療技法の整理
3　エリアーデ的「エクスタシー」「憑依」と，カイヨワやバタイユ，レリスなどの「エクスタシー」「憑依」のとらえ方との相違，および，同時代のパリにおけるエリアーデ的エクスタシー概念の位置。
4　3で考察した両者とラカンにおけるそれとの相違，および，個々の文脈におけるそれぞれの概念の射程範囲と意義
以上の考察を経て，ラカンが精神分析について，精神分析は精神分析であり，宗教とも教育とも異なる特異なものであるとしたことについて，いくつかの論点が明らかになった。

大久保　純一　OKUBO　Jun'ichi　助教授

1959年生［学歴］東京大学文学部二類（史学）美術史学専修過程1982年卒業，東京大学大学院人文科学研究科博士課程美術史学専攻1985年退学［職歴］名古屋大学文学部助手(1985)，東京国立博物館研究員(1987)，跡見学園女子大学助教授(1995)，国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授(2000)，総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(2000)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004)［学位］修士（文学），東京大学，1984年［所属学会］美術史学会，国際浮世絵学会［専門］日本近世絵画史［主な研究テーマ］浮世絵／ Study of Ukiyo-e，江戸後期の風景表現／ Study of Landscapes in Edo Period

Ⅰ　研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基幹研究「資料の高度歴史情報化と資料学的総合研究A　館蔵資料「江戸図屏風」の資料学的研究」（代表　永嶋正春）共同研究員
2) 基盤研究「博物館学的総合研究　歴史展示における「異文化」表象の基礎的研究」（代表　久留島浩）共同研究員
3) 日本学術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費･データベース）「詳細書誌目録付き錦絵画像データベース」（代表　大久保純一）において，館蔵錦絵の詳細書誌目録を収録した「館蔵錦絵データベース」を作成。本年度は700件のデータと画像を採取し終えた。代表として計画全体の統括，助成金出納の会計業務を司るとともに，データ採録の指導･監督およびデータの校正と年代考証，英文題名付与，画像のための撮影立ち会いなどをおこなった。公開は17年度前半を予定している。
4) 文部科学省研究費補助金･基盤研究B「江戸時代における書画情報の総合的研究－『古画備考』を中心

に」(代表　武蔵野美術大学教授　玉蟲敏子) にもとづき，国内調査および研究会に参加した。
5) 「第3室リニューアル展示」展示プロジェクト委員。「都市の文化」の一部を担当し，展示プロジェクト委員会に参加して，展示設計に向けて準備を進めた。
6) 「日本の神々と祭り」展示プロジェクト委員

二　教育活動

1) 教育
名古屋大学文学部非常勤講師 (日本美術史特講)
金沢美術工芸大学非常勤講師 (日本絵画史特講)

三　博物館活動

4) 歴民研修委員，講師
歴史民俗系博物館等初任者研修講師

四　社会連携

1) 館外における各種委員
国際浮世絵学会常任理事
馬頭町広重美術館美術作品当収集評価委員会委員
武蔵野市美術資料収集選定委員会委員
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「広重にみる江戸の名所絵について」「館蔵錦絵展 錦絵から歴史を読む」関連講演，松戸市立博物館，同友の会，4月11日
「広重の江戸名所絵」「特別展　浮世絵　江戸名所七変化」記念講演会，神奈川県立歴史博物館，5月1日
「浮世絵のたのしみ」「特別展　浮世絵版画－大坂のにぎわい　旅の風景－」記念講演，和泉市久保惣記念美術館，10月30日
3) マスコミ
NHKBSハイビジョン「迷宮美術館　物見遊山はアートの母」出演，10月2日放送

II　業績目録

2a) 論文
「浮世絵風景画略史－久保恒彦父子コレクションの紹介をかねて－」(『久保恒彦父子コレクション浮世絵版画』pp.366-377，和泉市久保惣記念美術館，10月)
「『日本名山図会』と浮世絵の風景表現」(『国立歴史民俗博物館研究報告』121集，pp.105-129，3月)
4) 展示図録
「『絵本手引草』解題」(『華－浮世絵名品集　風景･花鳥画』平木浮世絵財団，pp.55-58，6月)
「浮世絵の基礎知識　浮世絵の美人画－移ろう理想の女性美－」(『川崎･砂子の里資料館所蔵浮世絵名品展』馬頭町広重美術館，pp.168-170，9月)
5) 学会･外部研究会発表要旨
「錦絵･絵本･摺物－浮世絵版画の諸様相」韓国国学院国際学術集会「東アジアの印刷文化と木版」，11月18日
6) 歴史系総合誌「歴博」，友の会ニュースなど
「歴史の証人　写真による収蔵品紹介　近世末期の都市鳥瞰図」(歴史系総合誌『歴博』124号，pp.2-5，5月)

III　研究状況･研究広報

江戸後期の風景画の研究に関しては，谷文晁の『日本名山図会』の挿絵が浮世絵風景画の山岳表現，とくに山の図様に取り入れられていることに気づき，類例を探す中でかなりの使用例を見いだすことができた。たんに名所絵に描かれている山の描写に『日本名山図会』が借用されていることはむしろ希で，歌川国芳や月岡芳年らの武者絵や歴史画の背景に，地理的な関連性は無く，山の形態の造形的な面白さで用いられている例が多数を占めることが判明したとともに，『日本名山図会』の山肌や稜線の表現が，浮世絵風景画の山岳描写の洗練とリアリティーの実現に大きな影響を及ぼしていることも見い出し得た。従来，亜欧堂田善らの洋風画家の作品に対して『日本名山図会』が与えた影響に関しては指摘されてきたが，浮世絵の風景表現に予想以上の感化を及ぼしていたことが確認できたことは，我が国の風景画史研究にも有効な材料を提供するものだと考えている。

小野　正敏　ONO　Masatoshi　助教授

1947年生 [学歴] 明治大学文学部史学地理学科1970年卒業 [職歴] 総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004) [学位] [所属学会] 日本貿易陶磁研究会，東洋陶磁学会 [専門] 日本考古学 [主な研究テーマ] 中世社会の考古学的研究

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 文科省科学研究費補助金基盤研究A2「前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義」（研究代表者）にもとづき，国内，海外調査を行い，その成果を，研究分担者とともに，企画展示「東アジア中世海道－海商･港･沈没船」として公開し，また展示図録を刊行した。研究成果の一部は，「中世武士の館，その建物系譜と景観」（『中世の系譜』2004.7）として報告した。

二 教育活動

1) 教育

大阪大学文学部非常勤講師（考古学）
昭和女子大学文学部非常勤講師（日本考古学特論）

三 博物館活動

1) 歴博探検･くらしの植物苑

歴博探検，6月12日，「大名の食事とみそ汁」

四 社会連携

1) 館外における各種委員

文化審議会専門委員（文化財分科会），青森県埋蔵文化財調査委員，福井県朝倉氏遺跡研究協議会委員，小田城跡保存整備委員会委員，勝尾城下町遺跡調査整備委員会委員，金山城調査整備委員会委員，史跡武田氏館跡整備活用委員会委員，史跡勝瑞城館調査整備委員会委員，平泉世界文化遺産登録指導委員会委員，鎌倉市歴史遺産検討委員会委員

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「城館の発掘が語る中世の印旛と東国」『第八回遺跡発表会』印旛郡市文化財センター，7月14日
「小田城の調査成果から将来像へ」『小田城をめぐるシンポジウム』つくば市教育委員会，8月8日
「中世陶磁器の流通と消費」『企画展中世房総やきもの市場』記念講演，千葉県立房総のむら，10月23日
「新宮城跡出土の陶磁器をめぐって」喜多方市教育委員会，11月27日
「本佐倉城から佐倉城へ」佐倉市民カレッジ，佐倉市中央公民館，11月30日
「中世の焼き物から東国をみる」北上市教育委員会，2005年1月8日
「東アジア中世海道展文化講演会」葛飾区郷土と天文の博物館，2005年2月12日

Ⅱ 業績目録

2a) 論文

「中世武士の館，その建物系譜と景観」（『中世の系譜』pp.179-206，高志書院，2004）

4) 展示図録

企画展図録「東アジア中世海道－海商･港･沈没船」編著，p.200，毎日新聞社

5) 学会･外部研究会発表要旨

2004.9：「発掘陶磁器からみた脇本城」（『第10回東北中世考古学会･海と城の中世』資料集，pp.13-19）
講演記録「中世陶磁器の流通と消費」（『千葉県立房総のむら紀要』，pp.1-20，2005）

6) 歴史系総合誌『歴博』

「歴史への招待状「企画展示　東アジア中世海道」」（歴史系総合誌『歴博』128，pp.24-25，2005年1月）

久留島 浩 KURUSHIMA Hiroshi 教授

1954年生［学歴］東京大学文学部国史学科1977年卒業，東京大学大学院人文科学研究科博士課程1984年単位取得退学［職歴］東京大学文学部助手(1984)，千葉大学教育学部講師(1986)，同助教授(1987)，国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授併任(1997)，同助教授(1998)，同教授(2002)，総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(1997)，同教授(2002)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004)［学位］博士（文学），東京大学，2003年［所属学会］歴史学研究会，日本史研究会，史学会，地方史研究会，「歴史科学と教育」研究会［専門］日本近世史･博物館研究［主な研究テーマ］近世後期地域社会の歴史的性格についての研究／ The Historical Character of Regional Communities in the Late Edo Period，近世社会における儀式･儀礼･祭礼の研究／ Ceremonies, Observances and Festivals in Early Modern Japanese Society，歴史系博物館の展示論（表象論）／ Theories of Representation and Exhibition at Museum of History，教育プログラムおよび評価についての研究／ Museum Educational Programs and their Assessment

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基盤研究（博物的総合研究）「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」の研究代表者として，近世の琉球について画像史料を用いた研究および那覇の現地調査を行い，その成果を研究会[浦添市立博物館，2004.12]で発表した。一方，総合研究大学院大学長プロジェクト「最先端学術研究の社会とのインターフェース

に関する総合的研究」と合同で公開研究会「観客から博物館を見る－研究をどう見せるか」(2004.12.4)で研究発表した[久留島2004.12]。
2) 個別共同研究「水木コレクション形成過程の歴史的意義」（代表　高木博志）の館内代表者として，奈良で調査･研究活動を行い，[研究成果中間報告要旨集2004]を作成した[久留島2004.3]。
3) 文科省科学研究研究費補助金･基盤研究B(2)「近代大和地方のコレクション収集活動から見た『日本文化』形成過程の研究」の研究代表者として，奈良のコレクターおよび古物商についての調査･研究を行った。
4) 文科省科学研究費･基盤研究B(2)広領域「生涯学習時代における博物館教育･教育員養成および歴史展示に関する総合的研究」（代表　小島道裕，2000～2003年度）の成果を，[久留島2004.12]で発表した。
5) 文科省特別研究員奨励費研究「化政期の俳壇を理解する為の江戸時代後期の社会史･経済史･文化史」（2003～2004年度）の研究代表者として，研究員のスコット･ヒスロップ氏と協力して，千葉県内の俳諧関係史料調査および史料解読･研究を行った。
6) 福武学術文化振興財団「巨大絵図･地図の現地調査法とディジタル化に関する研究」の研究代表者として，紫雲寺潟に関する史料調査･研究を行い，その成果を東京大学史料編纂所との共編で，調査史料目録として公開した[2004.3]。
7) 館蔵資料調査プロジェクト「『懐溜諸屑』データベース化の基礎的研究」（2004～2005年度）の研究代表者として，データベース化と目録の整理を行い，分析的な研究を行った。
8) 国立民族学博物館との間での機関間共同研究「ユーラシアと日本」（のち，人間文化研究機構の機構連携研究）に共同研究員として参加し，2005年2月の準備研究会[050206]で研究報告（「19世紀における日本の『発見』－民衆運動と文化の表象－」）をした。
9) 国立民族学博物館の共同研究「展示という語りの多様性と政治性に関する研究」（代表　川口幸也）に共同研究員として参加し，研究を行った。

二　教育活動

1) 教育
総合研究大学院大学文化学研究科日本歴史専攻教授併任
くずし字ワークショップ（シカゴ大学）講師
2) 博物館教育
「先生のための歴博講座」(2004.8.9～10)を実施責任者として行ったほか，佐倉市新任教員研修(2004.8.26)など，歴博で行われた多くの教員研修で講師を勤めた。

三　博物館活動

4) 歴民研修委員，講師
歴民研修講師(2004.12.3)
5) 歴博振興会関係：講師，友の会ニュース執筆など
歴博振興会「超初心者のための古文書講座」講師

四　社会連携

1) 館外における各種委員
千葉県史料研究財団千葉県史編さん近世史部会長，山梨県史近世部会専門委員，千葉市史編纂委員，千葉市文化財保護審議会委員，東京都港区郷土資料館基本構想検討委員会委員
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
2004.9.4：「近世の村から出る人･村へ来る人」『千葉市史研究講座』（千葉市文化課千葉市郷土資料館）
2004.9.23：「近世社会と城下町祭礼－『まつり･祭･津まつり』を観て考えたこと－」『まつり･祭･津まつり展シンポジウム』（津市教育委員会事務局文化課）

II　業績目録

2a) 論文
2004.7：「Hyakusho and Military Duty in Early Modern Japan」(『ACTA ASIATICA』87号(Studies in Early Modern Japanese History)，pp.1-34，東方学会(The Institute of Eastern Culture)，7月)
2b) 研究ノート
2004.12：「国立歴史民俗博物館における博物館教育の試み」（『歴史展示のメッセージ』pp.233-262，UM BOOKS，アム･プロモーション）
3a) 調査･発掘調査報告書
『新潟県北蒲原郡紫雲寺町神田英男家文書目録』東京大学史料編纂所画像史料解析センター･国立歴史民俗博物館共編，2004年3月
3b) 自治体史･史料集など
『千葉市史 史料編9』（2004年3月）の責任編集
5) 学会･外部研究会発表要旨
2004.7：「集古会と水木要太郎」（『共同研究「水木コレクションの形成過程とその史的意義」研究成果中間報告要旨集』pp.18-22，国立歴史民俗博物館）
2004.12：「歴史展示と観客との間」（『歴博共同研究･総研大学長プロジェクト合同公開研究会予稿集観客から博物館を見る－研究をどう見せるか－』pp.1-4，国立歴史民俗博物館･総合研究大学院大学）
2005.3：「近世社会と城下町祭礼－『まつり･祭･津まつり』を観て考えたこと－」（『津市民文化』32号，pp.28-29，津市教育委員会事務局文化課）
6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュースなど

2005.3：コラム「善隣友好外交と壬辰･丁酉倭乱との間」(『歴博』129号，pp.13，国立歴史民俗博物館)

III 研究状況･研究広報

この数年間，(1)近世後期地域社会の歴史的性格についての研究，(2)近世社会における儀式･儀礼･祭礼の研究，(3)歴史表象論，(4)博物館教育の実践的研究という枠組みで研究を行ってきたが，今年度も基本的には変わらない。

まず，(1)については，本年度中には直接の成果は出なかったが，近世･近代移行期の民衆運動について，地域社会との関係で研究を進めた。近世から近代へ継承された民衆運動の到達点とは何か，逆に近代から読み直される近世の民衆運動像とは何かについて，絵画で記録された天保11年庄内藩三方領地替反対一揆と明治2年以降10年間にわたって安房･上総の全村を組織し続けた東海道宿駅助郷勤埋金反対闘争とをとりあげて検討した。また，山梨県史，千葉県史の本文編（通史編）での責任分担も，このテーマに関わっており，二つの地域で史料分析を進めた。また，近世後期ではないが，この3年間，享保年間の紫雲寺潟干拓による新田村形成について，現地の史料調査を行ってきている。ようやく目録を刊行することができたが，中世史･歴史地理の研究者との協業だけでなく，デジタル撮影した史料を目録とセットで見ることができるようにするために，画像史料の研究者との協業をすることができたことの成果である。なお，福武文化学術財団の資金を得て，巨大絵図のデジタル分割撮影方法についての研究も同時に行うことができた。本年度から始まった国立民族学博物館との機関間共同研究「ユーラシアと日本」でも，19世紀の民衆運動を中心に研究発表を行った。

(2)については，津市で開催された特別展示『まつり･祭･津まつり』に展示された「津八幡宮祭礼絵巻」を熟覧することができ，これまでに行ってきた都市（城下町）祭礼研究を前進させることができた。本年度は，当館第三展示室リニューアル研究の一環として，長崎くんちを中心に祭礼と異国趣味との関係についての研究を始めたが，この点では，津の祭礼との比較をすることができた。

(3)については，近世琉球の那覇･首里を描いた絵画資料について比較分析を始めることができた。当館第三展示室リニューアル研究の一環でもあるが，その成果の一部を浦添市美術館での研究会で発表することができた。また，今年度から参加した国立民族学博物館共同研究（代表　川口幸也）でも「展示による表象」の問題がテーマとなっており，リンクするかたちで研究を進めることができた。

(4)については，昨年度まで科研費で行ってきた共同研究および国際シンポジウムの成果を『歴史展示のメッセージ』（分担執筆）として公刊することができたことが最大の成果である。一方，4月からは，広報委員長として博物館教育の実践を行ってきているが，今年度は当館で制作した見学プログラムを利用する学校団体が倍増し，その対応に追われて成果を分析するまでにはいたらなかった。わたしだけでなく，きちんとした研究組織（たとえば博物館研究センター）を館内に設置し，共同で実践的研究をする体制をとらなければ，せっかくの実践も研究にはむすびつかないことがよくわかった。

今年度後半から，第3展示室のリニューアル研究が急速に進み始めた。館内基盤研究「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」や民博共同研究ともリンクさせながら，これからの歴史展示のあり方を具体的に考えることが，来年度のもっとも大きな研究課題となろう。

小池　淳一　KOIKE　Jun'ichi　助教授

1963年生【学歴】東京学芸大学教育学部初等教育教員養成課程国語選修1987年卒業，筑波大学大学院博士課程歴史人類学研究科1992年単位取得退学【職歴】弘前大学人文学部講師(1992)，弘前大学人文学部助教授(1994)，愛知県立大学文学部助教授(2001)，国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授(2003)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004)【学位】【所属学会】日本民俗学会，日本宗教学会，日本口承文芸学会，日本昔話学会，儀礼文化学会，日本文化人類学会，日本民具学会，地方史研究協議会，日本史研究会，民俗芸能学会【専門】民俗学，信仰史【主な研究テーマ】民俗信仰／ Folk belief

I　研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 文科省科研費基盤研究B(2)「呪術･呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」の研究代表者として，以下のように調査及び共同研究会を実施し，研究を進めた。

【調査】

高知県土佐郡本川村における神楽伝承に関わる調査，6月15～18日，7月21～22日，9月29～30日，11月16～17日，1月16～19日ほか

長野県上田市信濃国分寺における呪符に関わる調査，9月2～23日

神奈川県鎌倉市杉本寺の景観調査，1月24日ほか

【研究集会】

国際研究集会「日韓口承文芸交流」で報告「牛頭天王の信仰と説話」を担当（7月11日）

なお，研究分担者に参加を要請し，共同研究会を開催した。7月19日，11月21日

2) 個別共同研究「日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎的研究」の研究代表者として，以下のように調査及び共同研究会を実施し，研究を進めた。

【調査･共同研究会】

第1回　歴博　8月28～29日。報告「本共同研究の構想と目的」

第2回　遠野市蔵の道ギャラリー，遠野市立博物館見学　10月16～17日。報告「石橋臥波の『民俗』と佐々木喜

善の『民間伝承』－雑誌研究の方法を考える－」
第3回　KKR白浜荘，南方熊楠記念館見学　12月25～27日
3) 個別共同研究「宗教者の身体と社会」（代表 松尾恒一）に研究分担者として参加し，沖縄県久高島のノロ行事を調査し，併せて共同研究会に参加した。12月23～24日
共同研究会報告　歴博（1月22日）「高知県本川神楽の呪法と系譜」
4) 国立民族学博物館共同研究「口頭伝承と文字文化－日本の民俗社会における情報と伝承－」（代表　笹原亮二）に研究分担者として参加し，共同研究会に参加した。なお，「易占と和歌の伝承と記録」として報告を担当した（5月9日）。
5) 大阪歴史博物館共同研究「暦と大坂天文学に関する調査研究」の共同研究員･調査研究委員として研究に参加し，成果報告としてのシンポジウム「暦の歴史と民俗」（大阪歴史博物館，2月27日）に報告「“お化け暦”の歴史」として話題提供をした。
6) 神奈川大学職人巻物調査団（代表　佐々木長生）に団員として参加し，調査研究に従事した（福島県只見町，8月29～31日）。研究会報告として「巻物のフォークロア序説」（5月17日）を担当した。
7) 文科省科学研究費基盤研究C「半島空間における民俗宗教の動態に関する調査研究」（代表　諸岡道比古）に研究分担者として参加し，調査に従事し（5月24～27日，7月14～15日，10月19～22日，12月8～10日），成果の一部を日本民俗学会年会で研究発表した[小池2004.10b]。
8) 文科省科学研究費萌芽研究「青森県における仏教唱導空間に関する基礎的研究」（代表　山田厳子）に研究分担者として参加し，調査に従事した（8月13～16日）。
9) 個人研究のテーマである民俗文化における文字の位置についての研究成果を東北地方民俗学合同研究会で報告した[2004.7]。また歴博講演会「文字と書物のフォークロア」（1月8日）でもその一部にふれた。活字化した研究報告としては，[2004.5a，b，2004.8，2004.9，2004.11b]など。

二　教育活動

1) 教育

東邦大学非常勤講師（民俗学）
富山大学非常勤講師（民俗学）

三　博物館活動

2) 歴史系総合誌『歴博』関係

編集委員（副委員長），『歴博』127号「特集･絵と語り」編集担当

4) 歴民研修委員，講師

歴民研修講師「民俗学の現状と課題－ひとつの素描－」（12月1日）

5) 歴博振興会関係

友の会ニュース（113号）に執筆[2004.5b]

四　社会連携

1) 館外における各種委員

青森県史編さん企画編集委員，青森県史編さん民俗部会長，青森県文化財保護審議会委員，青森県祭り･行事調査委員会委員長，みちのく北方漁船博物館運営評議員，八千代市史編さん専門委員

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「日本人の宇宙観－陰陽五行･陰陽道を中心に－」『茶の湯文化講座』青山グリーンアカデミー，5月15日
「菅江真澄の歴史認識」『真澄に学ぶ教室』講演会，秋田県立博物館，9月18日

3) マスコミ

NHKテレビ『生活ほっとモーニング』「特集･厄年」に厄年についてのコメントのため出演，4月21日

II　業績目録

2a) 論文

2004.5a：「偽文書と民俗－民俗書誌論再説－」（久野俊彦･時枝務編『偽文書学入門』，pp.114-136，柏書房）
2004.8：「民俗信仰と民間説話－海の秀吉･山の家康－」（福田晃ほか編『講座日本の伝承文学（第10巻）口頭伝承〈ヨミ･カタリ･ハナシ〉の世界』，pp.348-364，三弥井書店）
2004.11c：「蘇民将来－牛頭天王信仰の展開と伝承－」（『国文学－解釈と鑑賞－』69巻11号，pp.182-185，至文堂）

2b) 研究ノート

2004.7a：「伝承歳時記1／祭りのかたちと声」（『海程』404号，pp.22-27，海程発行所）
2004.8：「伝承歳時記2／盆の時空（『海程』405号，pp.16-21，海程発行所）
2004.9：「リーディング･ガイド〈民俗書誌論へのいざない〉」（『民博通信』106号，pp.16-17，国立民族学博物館）
2004.10a：「伝承歳時記3／馬と牛をめぐる言葉」（『海程』406号，pp.22-27，海程発行所）
2004.11a：「伝承歳時記4／川の精霊と神々」（『海程』407号，pp.22-27，海程発行所）
2004.11b：「陰陽道書と在地社会」（鵜飼政志ほか編『歴史をよむ』，pp.196-199，東京大学出版会）
2004.12：「伝承歳時記5／神楽における神と人」（『海程』408号，pp.22-27，海程発行所）
2005.1：「伝承歳時記6／いくつもの正月」（『海程』409号，pp.24-29，海程発行所）
2005.2：「伝承歳時記7／鳥を追う･虫を送る」（『海程』410号，pp.26-31，海程発行所）
2005.3：「菅江真澄の歴史認識」（『真澄研究』9号，秋田県立博物館菅江真澄研究センター，pp.25-48）

2c) 書評

2004.5b：『漁撈伝承』（『青森県の民俗』4号，pp.132-137，青森県民俗の会）

2004.6：『三ツ峠山の信仰と民俗』･『富嶽旅百景－観光地域史の試みー』（『宗教研究』340号，pp.180-189，日本宗教学会）
2004.12：『巡礼論集1／巡礼研究の可能性』･『巡礼論集2／六十六部廻国巡礼の諸相』（『宗教研究』342号，pp.170-178，日本宗教学会）

3c) 辞典項目

『文化人類学解題事典』（事典項目）「柳田国男著『先祖の話』」「堀一郎著『我が国民間信仰史の研究』」，弘文堂

5) 学会･外部研究会発表要旨

2004.7：「昔語りの現在－中里さな媼の民俗文化史的位置ー」（『第22回東北地方民俗学合同研究会：「伝承」の変貌と再生』pp.59-61，弘前大学）
2004.10b：「椿をめぐる祭祀と儀礼ー青森県夏泊半島の小祠の動態ー」（『日本民俗学会第56回年会研究発表要旨』p.54，園田女子学園大学）

6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュースなど

『歴博』127号･特集「絵と語り」編集主担当及び2004.11d：「絵解き研究の地平」林雅彦氏（明治大学教授）との対談（2004年11月20日発行）
『国立歴史民俗博物館友の会ニュース』113号，2004.5b：「研究余録･古暦の紐」（2004年5月30日発行）

7) その他（新聞署名原稿）

2004.5c：「夏堀先生から受け継ぐもの」『青森県の民俗』4号，pp.146-148，青森県民俗の会，2004
2004.7b：「伝承の変貌と再生－東北民俗学研究会に向けて（中）失われる習俗ー」『東奥日報』2004年7月21日（夕刊）

III 研究状況･研究広報

民俗信仰というテーマを深化させていくために，歴史的な観点からの検討と民俗学固有の思考体系の錬磨及び現代社会における対象の把握という3つの面を欠かすことができない。以下，今年度の研究成果として，そうした3つの面に対応する，まじない研究の開始，民俗学史の検討，地域における民俗文化の位置に分けて，今年度の研究の進捗状況と相互の関係を提示したい。

［まじない研究の開始］民俗信仰の歴史的な観点を歴史学にも通用するかたちで深めていくために，陰陽道の史的な展開をふまえた民俗事象との関わりについて考究してきた。従来は近世陰陽道書の受容と変貌について，集中的に調査研究を行ってきたが，より現象面に着目していくために，「まじない」を切り口にした研究を進める必要性を感じていた。科研費を申請したところ幸いなことに，今年度から基盤研究B(2)「呪術･呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」として認められた。この研究は従来，断片的なものとしてとらえられてきた「まじない」を古代中世史を中心とする出土資料，文献資料に基づく研究成果と民俗学における具体的なコンテクストが判明している資料及びとその位置づけとの双方に目配りし，相互の知見を援用することによって呪術史の構築を目指すものである。当館は出土文字資料の分析と検討については多年にわたる蓄積があり，それに携わってきた研究者と意見交換をしながら研究を進める機会を得ることができたのは重要であり，新しい呪術研究を組み立てていく手応えを感じている。代表者として個人的には，高知県山間部の中世以来の伝統があるとされる神楽と呪術との関わりに関するフィールド調査，近世の呪術書の検討，各地の民俗行事や儀礼に用いられるまじないの諸相に関しての調査を進めることができた。特に四国におけるフィールドワークは高知県物部村のいざなぎ流にばかり光があてられてきた研究上の偏りを補正し，また，これまでに進めてきた東北日本における研究成果と比較対照する準備ができた。これらが特筆すべき成果である。

従来の陰陽道書の研究については，民俗における文字文化の位置づけとして対象を広げつつ，引き続き研究を進めている。国立民族学博物館における共同研究「口頭伝承と文字文化」にはこの点を主として近世史と民俗学の成果に基づいて検討する意図を持って参加しているが，今年度はゲストスピーカーを交え，活発な討論を展開することができた。また大阪歴史博物館における共同研究「暦と大坂天文学に関する調査研究」は今年度が最終年度であり，近世陰陽道書から発展して近世から近代にかけての暦と民俗との関わりを調査検討し，年度末にその成果報告としてシンポジウムを企画し，報告を行った。さらに神奈川大学の職人巻物調査は同大学のCOE研究の一翼を担うものでもあるが，福島県会津地方における巻物文化とそれに影響を与えた宗教者及び宗教知識の調査検討を行っている。ここでは今年度に中世に遡る暦書や密教書，説話集などを新たに発見し，その分析を開始した。具体的な成果を来年度以降，整理，報告していきたいと考えている。このように陰陽道書だけに限らず，庶民生活における文字文化について具体的なメディアを取り上げながら多くの新しい知見を得ることができたことも今年度の重要な達成であった。

なお，館蔵資料の調査研究として奈良暦師吉川家文書を館内の同僚諸氏の助言を仰ぎながら整理するための基礎作業を開始した。今年度と来年度は関連する史資料の整理を行い，将来的には館外の委員を交えた分析作業を経て図録刊行を目指したい。

［民俗学史の検討］民俗学固有の思考体系というのは，民俗学の現状を唯一無二のものとしてとらえていては充分な批判や検討を行うことができない。民俗学そのものの歴史を広義の思想史的な文脈において捉え直す必要がある。そのために今年度から当館における個別共同研究「日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎的研究」をスタートさせ，柳田民俗学の近代社会史における再評価とその可能性，さらには相対化を術語や概念の形成や地方研究者及び団体の役割や特徴に注目して調査検討を行っている。直接，民俗信仰の研究に結びつくばかりではなく，民俗学の対象と方法の不断の革新のための基礎的な営為と考えて微力を尽くしている。

今年度は，代表者として全体構想の叩き台を提出した他に，『民俗』，『民間伝承』といった雑誌に注目して，民俗研究の可能性，学史構築の方法について調査研究を行ってみた。近代社会史における学問を支える思想の調査は，具体的な事物に即して実証的に行うことで多くの問題点や課題を見出すことができ，さらに新たなテーマにたどり着くこともできる。共同研究における活発な討論によって，この方面でも確かな手応えを感じてい

る。
当館の共同研究をより開かれたものとし，活性化させていくために，地域における民俗研究団体との交流や若手院生などの積極的な参加を模索していきたいと考えている。こうしたテーマに興味関心をもたれている方々からの御連絡をお待ちしている。
［地域における民俗文化の位置］民俗学は原理的にはフィールドを離れて議論を進めることはできない。それは歴史学が史料に即して研究を進めることと同様である。ここで述べてきた，まじないや民俗学史に関する調査研究もそうした基礎的な態度と認識のもとに展開してきたものである。それ以外にも民俗学徒として，地域における民俗文化の実態に向き合い，そこから問題を発見することを継続してきている。具体的には青森県域におけるいくつかの調査研究を開始，もしくは進展させた。科研費による「半島空間における民俗宗教の動態に関する研究」では夏泊半島の小祠と宗教者との関わりについて歴史民俗学的な分析を行い，日本民俗学会等で報告した。他にも科研費による「青森県における仏教唱導空間に関する基礎的研究」では，佐井村，野辺地町，今別町等における寺院行事の調査を行い，代表者，分担者と議論を行った。さらに今年度からは文化庁による国庫補助事業として青森県が祭り･行事調査を行うこととなったので，その企画立案に参画し，初年度の全体調査を指導助言した。こうした現実の地域における民俗事象の現様に絶えずふれ，報告等を試みることで，安直な理論化を排し，現代社会における民俗学の存在意義を説得力のあるかたちで主張していくことに留意していきたい。

写真1 近世の陰陽道･呪術書

写真2 個別共同研究（遠野市にて）

小島 道裕 KOJIMA Michihiro 助教授

1956年生［学歴］京都大学文学部史学科1980年卒業，京都大学大学院文学研究科博士課程国史学専攻1985年満期退学［職歴］京都大学研修員(1985)，京都大学文学部助手(1986)，国立歴史民俗博物館助手(1989)，国立歴史民俗博物館助教授(1994)，総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004)［学位］修士［所属学会］日本史研究会，古文書学会，比較都市史研究会［専門］日本中近世史／博物館教育［主な研究テーマ］日本中近世の都市･城館･村落／ Towns, villages, and castles in medieval Japan，博物館教育／ Museum education

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基幹研究「古代･中世における流通･消費とその場」（代表 桜井英治，2002年度終了）の成果として，「古代･中世都市生活史（物価）データベース」を公開した。
2) 同研究の成果を，『歴博』No.124（特集「中世の消費」2004.5）で紹介した。
3) 基盤研究「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」（代表 久留島浩）で公開研究会「観客の目から見た博物館」を開催し（総研大と共催），司会をつとめた。
4) 文科省基盤B「生涯学習時代における博物館教育･教育員養成および歴史展示に関する総合的研究」（代表 佐原真･小島道裕，2003年度終了）の成果として，国際シンポジウム記録『歴史展示のメッセージ－民族･戦争･教育－』（アム･プロモーション，2004.12）を刊行した。
5) 同研究をはじめとする歴博での博物館教育･歴史展示研究の成果を，ICOM（世界博物館会議）ソウル大会で報告･発表した[小島2004.10]。
6) 同研究をはじめとする歴史展示研究の成果を，歴博講演会で報告[小島2004.11]した。
7) 文科省特定領域「中世考古学の総合的研究－学融合を目指した新領域創生－」（代表 前川要）で行った新出楽市令制札の調査成果を報告書に掲載し[小島2005.3]，またマスコミにコメントした。
8) 総研大学長プロジェクト「市民への研究成果公開におけるオーディエンスの理解の研究」（代表 安達文夫）における活動の一環として，歴博ホームページに電子企画展「中世の武家文書」[高橋一樹と共編，2004.6～]を製作した。
9) 資料の収集･調査の成果として，「寛永十六年がれうた船渡海禁止高札」等の高札を「新集資料の公開」で展示した。

二 教育活動

1) 教育

大学院指導：文書資料研究，歴史展示研究Ⅰ

2) 博物館教育
2004.7：佐倉市社会科教師研修会講師
2004.11：第251回歴博講演会「世界の歴史展示」

三 博物館活動

2) 歴史系総合誌『歴博』関係
編集委員，『歴博』No.124＜特集「中世の消費」2004年5月＞編集担当
4) 歴民研修委員，講師
委員長，講師：「コース別演習　教育と観客調査」・「全体討論」

四 社会連携

1) 館外における各種委員
岐阜県中世城館跡総合調査指導調査委員
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「資料収集の理念･方法（人文系）」『博物館職員講習』（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター，同センター，5月）
「中世の城館と都市」『千葉市民文化大学講座（日本文化学科）』（千葉市市民センター，同センター，7月）
「平地城館跡と村落－目賀田城をどう位置づけるか－」（滋賀県秦荘町目賀田公民館，同館，11月）
3) マスコミ
神戸市淡河の秀吉楽市令制札発見（2004年9月2日記者発表）に際し，各紙にコメントを掲載

II 業績目録

1) 著書
2004.12：『歴史展示のメッセージ（歴博国際シンポジウム）』（354頁）（国立歴史民俗博物館編，長田謙一他10名と共著）アム･プロモーション
2a) 論文
2004.10：「Developing Exhibitions as Resources of Learning：The Example of Worksheet and History Exhibition」（『2004 ICOM ／ CECA Seoul Conference』(pp.159-166)，ICOM（世界博物館会議）教育と文化活動委員会(CECA)）
2b) 研究ノート
2004.8：「守護所から戦国城下町へ」（『守護所･戦国城下町を考える』第12回東海考古学フォーラム岐阜大会シンポジウム資料（pp.129-131），守護所シンポジウム@岐阜研究会）
2004.11：「『学融合』へのコメント－文献史学から－」（前川要編『中世総合資料学の可能性－新しい学問体系の構築に向けて－』pp.87-90，新人物往来社）
3a) 調査･発掘調査報告書
2005.3a：「楽市令制札とその背景－新出の秀吉制札をめぐって－」（科研特定領域『中世考古学の総合的研究第2回総合会議研究論文集』，pp.18-22，同研究事務局）
2005.3b：「文献史料から見た十三湊と安藤氏」（『青森県十三湊遺跡発掘調査報告書』pp.60-68，青森県教育委員会）
6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュース
2004.5：「旅の消費－『永禄六年北国下り遣足帳』の世界－」（『歴博』No.124特集＜特集「中世の消費」＞，pp.19-23）
2004.7a：「れきはく井戸端会議（瓦屋根の歴史）」（『歴博』No.125，p.31）
2004.7b：「自著紹介：国立歴史民俗博物館編『歴史展示とは何か－歴博フォーラム「歴史系博物館の現在･未来」』」（『歴博』No.125，p.29）
2005.3c：「自著紹介：国立歴史民俗博物館編『歴史展示のメッセージ　歴博国際シンポジウム「歴史展示を考える－民族･戦争･教育－」（『歴博』No.129，p.29）
7) その他
2005.1：「座談会：博物館の現状と将来」（『日本歴史』第680号，pp.2-48）

III 研究状況･研究広報

ここ数年と同じく，博物館教育および歴史展示関係の仕事と，中近世の都市史関係の仕事の双方を行いました。共に，成果が目に見える形でまとまってきたと言えます。前者では，昨年度科研のまとめとして行った国際シンポジウム「歴史展示を考える」の記録を『歴史展示のメッセージ－民族･戦争･教育－』として刊行することができました。このシンポは，各国の事例報告から，歴史の主体，博物館展示の主体となるのは誰かを浮かび上がらせ，参加者にも好評でしたが，図書として刊行したことによって，国際的な歴史展示研究と相互理解にさらに貢献できたと考えています。

また，10月には，ソウルで行われたICOM（国際博物館会議）大会で報告してきました。歴博の事例をもとに，国定教科書的な押しつけとしての歴史展示ではなく，観客自らが歴史像を作っていくためのリソースとして展示を位置づけるにはどのようにしたらよいか，というテーマで，歴博で実施したワークシート「親子クイズ」などの分析結果を基に発表しました。同時に刊行された発表集に収録され，その後ホームページに日本語版も掲載しました。

都市史関係では，神戸市内で新たに発見された秀吉の楽市令制札について，神戸大学のスタッフと共に調査を行う機会を得ました。予期しない資料発掘でしたが，これまで集積してきた中世制札や楽市令の事例の中で

考えることで，うまく説明ができたように思います。由緒書きや地域の状況から，制札によって特権が与えられることで商人の集住が進んで町ができていく様子がよくわかり，地元の有力者を商人頭として取り立てて町を作るという方法は，まさに最近注目していた当時の町立ての典型例と言えるものでした。また類例がない「旅籠銭」の規定についても，近年研究･紹介に努めている当館所蔵の旅の記録『永禄六年北国下り遣足帳』との比較から，食事などのサービスの選択を宿泊者に任せる，すなわち「押し売り押し買い禁止条項」の一種だと推測することができました。

これまでのデータ収集の蓄積が，個々の資料の位置づけや具体的な社会状況の検討に役立つ段階になってきたと言えます。今回の秀吉制札の調査を機会に，中世制札についてのデーター覧も更新して，ホームページに最新版を掲載いたしました。御利用･御教示いただければ幸いです。

小瀬戸　恵美　KOSETO-HORYU　Emi　助手

1973年生〔学歴〕東京大学理学部化学科1995年卒業，東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻博士前期課程1998年終了，東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻博士後期課程2000年中途退学〔職歴〕米国ゲティ保存研究所グラデュエイトインターン(1999-2000)，本館情報資料研究部助手(2000)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手(2004)〔学位〕〔所属学会〕文化財保存修復学会，日本文化財科学会，国際博物館会議(International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works.IIC)，日本ミュージアム･マネージメント学会〔主な研究テーマ〕歴史資料の自然科学的手法による分析／Chemical analysis of cultural properties, 博物館施設における空気環境／ Studies in the relationship between environments and deterioration of cultural objects

Ⅰ　研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 文部科学省科学研究費補助金･基盤研究A(2)「前近代の東アジア海域におけるからモノと南蛮の交易とその意義」（代表　小野正敏）で，大韓民国における調査（6月17～21日）を行った。

2) 基盤研究「歴史資料の材質･製作技法と生産地に関する調査研究」（代表　宇田川武久），第二回研究会において「韓国全羅道青磁の産地同定の試み」について報告した（3月11日）。

三　博物館活動

3)　各種編集委員

『国立歴史民俗博物館研究年報』編集委員

4)　歴民研修委員，講師

歴史民俗資料館等職員研修会講師

Ⅱ　業績目録

2a)　論文

2005.3a：「大川遺跡における続縄文時代ガラス玉の自然科学的分析」（『余市水産博物館研究報告8号』pp.21-26）

2b)　研究ノート

2005.3b：「神明遺跡出土勾玉の自然科学的分析」（投稿中）

Ⅲ　研究状況･研究広報

前年度から引き続き，博物館における保存環境の検討をおこなうとともに，東アジアにおけるガラス，陶磁器の自然科学的手法による研究を行った。ガラスに関しては，特に北海道出土の続縄文ガラスの組成，鉛同位体比値が同時期の本州のガラスのそれと近い値を示すのに比べ，擦文文化期のガラスの組成と鉛同位体比が続縄文期や同時期の本州のそれと異なることがあきらかになった。そのなかには，日本，中国，朝鮮半島の鉛同位対比とまったく異なる値をしめすものもあり，北海道ではガラスの再利用を示す遺構が発掘されていないことも考慮すると，非常に興味深く，今後の研究がまたれるものである。

また，陶磁器に関しては，特に高麗青磁に重点をおいて研究をおこない，高麗青磁初期の異なる生産地（康津，扶安，海南）では胎土中の特定鉱物を測定対象とすることによって分類が可能であることを明らかにした。また，高麗青磁最盛期から晩期にかけては初期にみられるような差違がみられず，生産地や原料産出地，各地の交流などの可能性もあり，さらなる研究へと続く成果が得られた。これらをもとに，来年度以降も，陶磁器の産地同定の手法確立を目指し，また，高麗青磁に限らず，国内外の陶磁器の時代･産地同定の試みをおこなう予定である。

齋藤　努　SAITO　Tsutomu　助教授

1961年生〔学歴〕東京大学理学部化学科1983年卒業，東京大学大学院理学系研究科博士課程化学専攻1988年修了〔職歴〕東京大学教養学部非常勤講師(1988)，国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手(1988.7)，同助教授(1999)，総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(2002)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部情報資料研究系助教授(2004)〔学位〕博士（理学），東京大学，1988年3月〔所属学会〕日本文化財科学会，文化財保存修復学会，日本分析化学会〔専門〕分析化学，文化財科学〔主な研究テーマ〕自然科学的な手法を用いた歴史資料の材質，物性，技法，産地などに関する研究／ Chemical Studies of materials, manufacturing-technique and provenance on cultural properties

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基盤研究「歴史資料の材質･製作技法と生産地に関する調査研究」（代表 宇田川武久）で，宮城で資料調査および再現実験を行い，その成果を研究会報告（10月）し，歴史系総合誌『歴博』（9月）に公開した。
2) 科研費･基盤研究(B)(2)「東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究」（代表 齋藤努）により，韓国で海外調査，岡山理科大学，東京大学で資料調査を行い，研究会報告(2005.1)した。
3) 科研費･基盤研究(A)(1)「前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義」（代表 小野正敏）で調査を行い，企画展示(2005.3)で公開した。
4) 科研費･特定領域研究(2)「分析化学的手法による銃砲技術史の相関研究」（代表 宇田川武久）により，前近代卸工程につ いて実験し，その成果を日本文化財科学会大会(2004.5)で研究発表した。
5) 科研費･基盤研究(B)(1)「須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究－近畿地方を主な検討材料として－」（代表 高橋照彦）研究分担者，須恵器化学分析条件の検討

二 教育活動

1) 教育
専修大学非常勤講師（自然科学論･科学史）

Ⅱ 業績目録

3a) 調査･発掘調査報告書
2005.3：「村松白根遺跡出土枝銭･銅銭の化学分析」（『茨城県教育財団文化財調査報告第250集 村松白根遺跡1（下巻）』，pp.576-578，（財）茨城県教育財団）
3c) 辞典項目
『文化財科学の事典』「IV.文化財の画像観察法」「電子顕微鏡」「Ⅴ.文化財の計測法」「原子吸光分析」「蛍光X線分析」「EPMA」「ICP発光分光分析」「ICP質量分析」「固体質量分析」「鉄器の産地」朝倉書店，2003
5) 学会･外部研究会発表要旨
2004.5：「鉄の卸工程などに伴う炭素の挙動について」（『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨集』pp.16-17，立命館大学（坂本稔，野田稔，尾崎保博，高塚秀治と連名））
6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュースなど
歴史系総合誌『歴博』126号「コラム 鉄に模様」p.23(2004.9)
『Science & Technology ジャーナル』154号「職人の技術を科学の言葉で語りたい」pp.50-51(2005.1)

Ⅲ 研究状況･研究広報

特に新規性･独創性の高い研究計画として，下記の二つが進行中である。一つは江戸時代の火縄銃の実射を行い，弾速測定を行った（写真1）。口径の異なる銃を用い，使用する黒色火薬の量を変えて実験し，弾速とそこから算出されるエネルギーを求めた。その結果，ある程度の銃身長があれば口径に関わらず，弾に伝わるエネルギー値はほぼ同じで，火薬量と弾速･エネルギー値には比例関係のあることがわかった。このような実験を系統的に行うのは初めての試みであり，これらのデータをもとに今後，流派の文書にある，銃身長と玉目･火薬量の記述について妥当性を検討する。またもう一つの研究として，前近代における鉄の炭素濃度調整法として伝えられる卸工程と折り返し鍛練を実施し，脱炭･浸炭の状況について調査した（写真2）。これにより，刀鍛冶は経験的に適切な条件を定めてこれらの工程を行っていることが確認されたので，次の段階として温度，酸素分圧などの計測を試みる計画である。

写真1 火縄銃の実射による弾速測定

写真2 刀鍛冶による卸工程の実施

坂本 稔 SAKAMOTO Minoru 助教授

〔学歴〕東京大学理学部化学科1989年卒業，東京大学大学院理学系研究科博士課程化学専攻1994年修了 〔職歴〕国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手(1994)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004) 〔学位〕博士（理学），東京大学，1994年 〔所属学会〕文化財保存修復学会，日本文化財科学会 〔専門〕文化財科学，地球化学 〔主な研究テーマ〕同位体分析に基づく歴史･考古資料の年代測定･産地推定／ Dating and provenance research on historical and archaeological materials by isotope study

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 科学研究費補助金（基盤研究B(2)）「同定情報に基づく土器付着炭化物の高精度年代測定」（代表 坂本 稔）により，土器に付着した炭化物の同定を試み，その年代測定を行った。成果を日本文化財科学会第21回大会[坂本ほか2004.5]，第7回AMSシンポジウム[坂本ほか2005.1]にて発表した。

2) 科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジアー炭素年代測定による高精度編年体系の構築ー」により，炭素14年代測定の実施と年代学的な考察を行った。成果を日本考古学協会第70回総会[春成ほか2004.5b]，東アジア考古学協会[藤尾ほか2004.6]にて発表。『弥生時代の実年代』[春成ほか2004.5a]，『季刊考古学88 弥生時代の始まり』[西本2004.7]に報文を掲載した。歴博国際研究集会「弥生農耕の起源と東アジア」[西本2004.12]にて報告を行った。

三 博物館活動

2) 歴史系総合誌『歴博』関係

歴史系総合誌『歴博』編集委員，第126号担当

四 社会連携

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「放射性炭素年代測定の分析棟の見学と講義」，『サイエンスプログラム東京体験学習』，島根県立益田高校SSH（スーパー･サイエンス･ハイスクール），12月9日

3) マスコミ

「最新科学で考古学の謎に迫る」『サイエンスZERO』，NHK教育テレビ，2004年5月15日

「探検！身近な放射線」ビデオ撮影，財団法人日本原子力文化振興財団，2004年12月6日

Ⅱ 業績目録

2a) 論文

2004.5a：「AMSによる炭素14年代法」（『弥生時代の実年代』春成秀爾･今村峯雄編，pp.66-78，学生社）

2004.7：「同位体科学としての炭素14年代法」（西本豊弘編『弥生時代の始まり』季刊考古学88，pp.56-59，雄山閣，2004）

Sakamoto M. Kodaira A., Imamura M. 2004：「An automated AAA preparation system for AMS radiocarbon dating.」Nuclear Inst. and Methods in Physics Research，B，223～224C，pp.298-301

3a) 調査･発掘調査報告書

坂本･小林･尾嵜･新免･春成2005.3：「守山市下之郷遺跡出土木材の炭素14年代測定」（『下之郷遺跡都市計画道路古高･川田線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』，印刷中，守山市教育委員会）

坂本･小林･新免･春成･豆谷･中村2005.3：「奈良県唐古･鍵遺跡出土大型建物柱根の炭素14年代測定」（『田原本町文化財年報14』，投稿中，田原本町教育委員会）

坂本･新免･今村･松崎2005.3：「北檜山町生渕2遺跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定」（『北檜山町生渕2遺跡』，（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書214，pp.92-95，（財）北海道埋蔵文化財センター）

藤尾･小林･尾嵜･新免･春成秀爾･今村2005.3：「東広島市黄幡1号遺跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定」（投稿済み，東広島市埋蔵文化財センター）

藤尾･小林2005.3：「壱岐市原の辻遺跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定」（『壱岐原の辻遺跡総集編Ⅰ』長崎県文化財発掘調査報告書第30集，pp.297-308，長崎県教育委員会）

藤尾･小林2005.3a：「玉名市玉名条里跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定」（投稿済み，熊本県教育委員会）

5) 学会･外部研究会発表要旨

2004.5：「炭素14年代法に用いる土器付着炭化物の同定の試み」『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨』，pp.2-3，立命館大学（小林，桝田，今村と連名）

2004.5：「AMS-14C年代測定による関東地方縄紋時代後期の暦年較正年代」，『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』，pp.46-49，2004（小林謙一：今村，西本，松崎と連名）

2004.5b：「弥生時代の実年代」，『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』，pp.50-52，2004（春成秀爾：今村，藤尾，小林と連名）

2004.6：「The beginning of the Yayoi period according to AMS carbon14 dating.」，『SEAA 2004 congress』，Chungnam National University Korea (FUJIO Shin'ichiro と連名)

2005.1:「土器付着炭化物に見られる海洋リザーバー効果」,『第7回AMSシンポジウム』, 京都大学 (小林, 今村, 松崎, 西田と連名)
2005.1:「ウィグルマッチングによる奈良県唐古･鍵遺跡出土柱の年代測定」,『2004年度名古屋大学タンデトロン加速器質量分析計シンポジウム』, 名古屋大学 (小林, 尾嵜と連名)
2005.3:「土器付着炭化物に見られる海洋リザーバー効果」,『東京大学原子力専攻設立記念シンポジウム』, 東京大学 (小林, 今村, 松崎, 西田と連名)

6) 歴史系総合誌『歴博』, 友の会ニュースなど

「鉄の年代をはかる」『歴博』126号, pp.14-17, 9月

III 研究状況･研究広報

国立歴史民俗博物館 (歴博) は, 炭素14年代法を用いた歴史資料, 考古資料の年代研究への取り組みを80年代から継続してきた。幸い良好な試料に恵まれたこともあり, 館内外の研究者, ならびに国内外の機関との共同研究などを通して研究を進めることができた。

今年度初頭に新しい年代測定資料実験室が整備され, 系統的な年代測定試料の整理, 処理, 調製を行う体制が整った (写真1, 写真2, 写真3) 関係諸機関, 教育委員会などのご厚意により, これまでに延べ5,000点を超える年代測定試料を収集することができた。うち700点あまりは学術創成研究に先行した科研費基盤研究「縄文時代･弥生時代の高精度年代体系の構築」(研究代表者　今村峯雄) にて報告された。学術創成研究の初年度は, 700点に達する測定が行われた。試料を提供してくださった諸関係者様に深謝する次第である。

写真1　年代測定資料実験室2
従前の実験室は「実験室1」として、「科学研究費(学術創成研究)」による研究に活用されている

写真2　実験室内部　試料の洗浄処理を行う

写真3　実験室内部
試料から炭素を取り出す真空装置

澤田　和人　SAWADA　Kazuto　助手

1973年生 [学歴] 大阪大学文学部美学科1996年卒業, 大阪大学大学院文学研究科芸術史学専攻博士前期課程1998年修了 [職歴] 財団法人大和文華館学芸部(1998), 国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手(2002), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手(2004) [学位] 修士 (文学), 大阪大学, 1998年 [所属学会] 美術史学会 [専門] 染織史, 絵画史 [主な研究テーマ] 服飾史, (絵巻) 衣材･染織技術･服飾観の相関性に関する研究／ Relationship between material, technique and idea of clothes, 室町時代を中心とする法衣の研究／ Vestment of Buddhist priest mainly in Muromachi period

I 研究･教育活動

一 研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 文部科学省科学研究費補助金･若手研究(B)「室町･桃山期小袖型服飾各類に見る衣材･染織技術･服飾観の相関性に関する研究」で資料調査を行い, その結果の一端を, 美術史学会全国大会[2004.5]で発表した。

2) 文部科学省科学研究費補助金･基盤研究(1)(B)「南蛮屏風に関する総合的研究」(代表　日高薫) で資料調査を行い, 報告書[2005.3]で描かれた衣服に関する研究の経過報告をした。

3) 羽衣国際大学日本文化研究所研究プロジェクト「王朝文学と絵画に関する研究－伊勢物語絵の研究」(代表 泉紀子) で資料調査を行い，特に大英図書館蔵「伊勢物語図会」について研究会[2005.1および2005.2]で報告した。

三 博物館活動

1) 歴博探検･くらしの植物苑

歴博探検「衣服から歴史を探る」，2005年3月12日

2) 歴史系総合誌『歴博』関係

編集委員

3) 各種編集委員

『研究報告』編集委員･『研究年報』編集委員

四 社会連携

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「文学デザインの衣裳」，中山道広重美術館連続講座『日本美術史講座 文字と日本美術』3，(中山道広重美術館)，2004年11月13日

II 業績目録

2b) 研究ノート

2004.6：「着物鑑賞の手引き－江戸時代以前の着物の種類」(『装道』134，pp.28-31)
2004.7：「野村正治郎とそのきものコレクション 第1回」(『装道』135，pp.20-23)
2004.8：「野村正治郎とそのきものコレクション 第2回」(『装道』136，pp.24-27)
2005.3：「小袖の色彩と帷子の色彩」(『紫明』16，pp.25-29)

3a) 調査･発掘調査報告書

2005.3：「南蛮屏風に描かれた服飾ノート：日本人編」(平成14～16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書『南蛮屏風に関する総合的研究』，pp.50-79)

4) 展示図録

2005.1：『新収資料の公開』，本館，展示解説シート執筆
2005.3：『自然をめぐる千年の旅－山水から風景へ』，愛知県美術館，作品解説執筆

5) 学会･外部研究会発表要旨

2004.5：「『辻が花』再考」(『第57回美術史学会全国大会研究発表要旨』p.30，慶應義塾大学)
2004.11：「真宗の法衣･法具が語るもの」(北陸真宗史研究会第3回例会『本願寺の有職と服飾文化』pp.15-18，東本願寺枳殻邸)

6) 歴史系総合誌『歴博』

2004.5：「れきはく井戸端会議」(『歴博』124，p.31)
2004.11：「歴史の証人 写真による収蔵品紹介 被衣」(『歴博』127，pp.2-5)
2005.1：「歴史の証人 写真による収蔵品紹介 和宮ゆかりの雛と人形」(『歴博』128，pp.2-5)

III 研究状況･研究広報

(1) 「辻が花」の研究

科学研究費の補助を受けて進めてきた研究「室町･桃山期小袖型服飾各類に見る衣材･染織技術･服飾観の相関性に関する研究」の一端として，「辻が花」に関する問題を美術史学会全国大会で発表したことが，本年度に行った最も大きな研究成果の公開である。

今日，室町時代から桃山時代頃の絞りを主体にした模様染の遺品を，「辻が花」と呼んでいる。この「辻が花」と当時の文献に見える「辻が花」とは，同一視できるという確証を欠いている。遺品と文献の乖離はしばしば注意されてきたことだが，今までそれほど深く当時の「辻が花」の実像は追求されてこなかった。むしろ，「辻が花」と呼ぶ遺品を文献の「辻が花」に擦り合わせようとする努力が重ねられてきた，と言うべきであろう。

学会発表では，こうした「辻が花」研究の現状を問題あるものとし，「辻が花」の実像の追求を試みた。材質の検証，および，従来使われてきた資料の批判によって，遺品の「辻が花」は本来の「辻が花」ではないと結論づけたが，この私説は大方支持されたかと思う。長らく続けられてきた「辻が花」論争に，集結を導くことになろうかと自負している。

引き続き，本来の「辻が花」の実像の構築，および，何故ある一群の遺品を「辻が花」と呼ぶようになったかという歴史的経緯について，更なる研究を進めていきたいと考えている。

(2) 「紅板締関係資料」の整理

本館で未だ充分に整理がなされていない資料群，新たに寄贈を受けた資料群など，膨大な数にのぼる資料の整理に追われた一年でもあった。

本年度は，2003年度に寄贈を受けたおよそ3万点から成る「紅板締関係資料」の整理に着手し始めた。紅板締は江戸時代後期から明治時代にかけて隆盛を見せた染織技法である。「紅板締関係資料」には道具類が多く含まれるが，概して染織に使う道具類は，消耗品であり，当時の職人にとっては珍しくないため価値が付与されにくいことや，戦争の都合などが災いして，後世に伝えられにくい。そうした中にあって，この莫大な点数をかぞえる一括資料は，関係者の尽力により，大切に守り伝えられてきた貴重なものである。

特に板締技法の模様彫刻板を中心に整理を進めてきたが，その中の彫刻板と模様が完全に一致し，当該彫刻板を使って染めたと考えられる実製品が3点見つかった。この3点は本年度購入し，本館が所蔵する運びとなった。違う伝来過程を辿ってきた道具と実製品とが一致することは奇跡的に近い。紅板締の製品は，特に高い

評価が与えられているわけではないため，顧みられにくく，喪失の危機にさらされている状況にあると言えよう。今後，本館に収蔵された道具類と絡めて実製品を収集し，保存に努めていきたいと考えている。

篠原　徹　SHINOHARA　Toru　教授

1945年生〔学歴〕京都大学理学部植物学科1969年卒業，京都大学文学部史学科1971年卒業〔職歴〕岡山理科大学蒜山研究所助手(1971)，同助教授(1983)，国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授(1986)，同教授(1995)，総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任(1999)，共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004)〔学位〕博士（文学），筑波大学，1995年〔所属学会〕日本民俗学会，日本民族学会，日本ナイル･エチオピア学会，生態人類学会〔専門〕民俗学〔主な研究テーマ〕人と自然の関係をめぐる民俗学的研究

Ⅰ　研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 科学研究費･基盤研究(B)「実践としてのエスノサイエンスと環境利用の持続性－中国における焼畑農耕の現在－」の研究代表者として，中国雲南省紅河自治州金平県者米郷においてヤオ族の村，アール族の村およびタイ族の村で生業と環境の関係に関する調査をおこなう。ヤオ族の村では，まわりの二次林や自然林における環境利用もあわせて調査する。3つの村はともに棚田を発達させた地域であるが，そのあり方は，村の環境条件との関わりのなかできわだった相違をみせ，研究分担者の調査する者米郷のハニ族の村および元陽県のハニ族の村との比較を今後おこなう予定である。
2) 日産学術研究助成による「焼畑と環境保全の両立の可能性－中国･海南島を事例に－」の研究代表者として，調査研究をおこなう。この海南島のリー族の調査は，日本学術振興会の未来開拓学術研究推進事業『アジアの環境保全』「地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究」の調査終了を受けて継続的に行ってきた調査である。その成果はすでに6冊のニューズレター『アジア･太平洋の環境･開発･文化』（東京大学医学研究科人類生態学教室，代表　大塚柳太郎）として刊行している。さらに海南島の関係としては，東京大学出版会発行の「島の生活世界と開発」シリーズの4巻本のうち篠原徹編･2巻『中国･海南島－焼畑農耕の終焉－』（2004年），大塚柳太郎･篠原徹･松井健編『生活世界からみる新たな人間－環境系』（2004年）として刊行されている。
3) 2004年度からはじまった歴博個別共同研究「東アジアにおける多様な自然利用－水田農耕民と焼畑農耕民－」（代表　西谷大）の研究会および現地調査に参加する。房総半島の大山棚田，長野県の姨捨棚田などの現地調査をおこなう。同時に，中国の農耕社会におけるマーケットと日本のマーケットの歴史的，民俗的な比較をするため，飛騨高山や房総勝浦の朝市の調査をおこなう。
4) 企画展示「東アジア中世海道」の展示プロジェクト委員として企画展示開催に協力する。

二　教育活動

1) 教育
総合研究大学院大学文化科学研究会科日本歴史研究専攻「自然認識論」「生態環境と生業」担当および博士論文指導など
高等学校農業科用教科書，佐藤誠･篠原徹･山崎光博監修『グリーンライフ』（農山漁村文化協会，2004年）の監修および執筆

四　社会連携

1) 館外における各種委員
県立琵琶湖博物館協議員として琵琶湖博物館の活動に協力する

Ⅱ　業績目録

1) 著書
大塚柳太郎･篠原徹･松井健編著『生活世界からみた新たな人間－環境系』，p.208，東京大学出版会，2004年
篠原徹編著『中国･海南島－焼畑農耕の終焉－』，p.226，東京大学出版会，2004年
佐藤誠･篠原徹･山崎光博監修･編著　高等学校農業科用教科書『グリーンライフ』，p.216，農山漁村文化協会，2004年
2a) 論文
「環境史は可能か」（歴史科学協議会編集『歴史評論』No.650，pp.55-61，校倉書房，6月）
3c) 辞典項目
小松和彦･田中雅一他編著『文化人類学文献事典』「異文化を知るための基本文献」に次の2書の概説を執筆。「篠原徹著『アフリカでケチを考えた』（筑摩書房，1998年）」，「篠原徹著『海と山の民俗自然誌』（吉川弘文館，1995年）」，弘文堂，12月

新谷　尚紀　SHINTANI　Takanori　教授

1948年生〔学歴〕早稲田大学第一文学部日本史学科1971年卒業，早稲田大学大学院文学研究科博士課程史学専攻1981年満期退学〔職歴〕国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授(1992)，同教授(1998)，総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004)〔学位〕博士（社会学），慶應義塾大学，1998年〔所属学会〕日本民俗学会，日本文化人類学会，日本宗教学会〔専門〕民俗学〔主な研究テーマ〕民俗学の総合的研究

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基幹研究「神仏信仰の通史的研究Ⅰ」（平成16～18年度）（代表 三浦正幸）の研究分担者･事務担当者として年4回の研究会を開催し資料収集と調査研究を推進した。
2) 基幹研究「生老死と儀礼に関する通史的研究Ⅰ」（平成16～18年度）（代表 新谷尚紀）の研究代表者として年4回の研究会を開催し資料収集と調査研究を推進した。
3) 基幹研究「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」（平成16～18年度）（代表 関沢まゆみ）の研究分担者として年4回の研究会に参加し資料収集と調査研究を推進した。
4) 文部科学省科学研究費補助金･基盤研究(B(2))「神社資料の多面性に関する総合的研究－古社の伝存資料と神社機能の分析を中心として－」（平成16～18年度）（代表 新谷尚紀）の研究代表者として島根県（出雲大社関係），広島県（厳島神社関係），京都市（祇園八坂神社関係）における調査研究を推進した（4～7月，10～11月に断続的に）。
5) 文部科学省科学研究費補助金･基盤研究(B(2))（海外）「民俗信仰と創唱宗教の習合に関する比較民俗学的研究－フランス，ブルターニュ地方の聖人信仰の調査分析を中心として－」（平成16～18年度）（代表 新谷尚紀）の研究代表者として，フランス，ブルターニュ地方及びプロヴァンス地方の伝統的祭礼などの調査研究を実施した（8月）。
6) 企画展示プロジェクト「日本の神々と祭り（仮称）」（平成18年3～5月開催予定）の展示代表者として，島根，広島，京都の各分科会2回ずつと本館における2回の全体会を開催し展示プロジェクトを推進した。
7) 第49回歴博フォーラム「現代社会と伝統文化－排除と受容のダイナミズムをめぐって－」（2004年11月27日）を開催し，併せて「赤と黒－民俗の中の浄穢観－」の研究発表を行なった。
8) 特別企画「明治維新と平田国学」（2004年10月13日～12月5日）（代表 宮地正人）に展示プロジェクト委員として参加し「六 平田篤胤と「顕世･幽世」－日本民俗学の先駆者－」の部分を担当した。
9) 韓国国立民俗博物館との交流協定にもとづく研究交流（担当者：関沢まゆみ）に参加し「韓国の民俗学･日本の民俗学Ⅰ」日本国立歴史民俗博物館で開催12月17～21日，「韓国の民俗学･日本の民俗学Ⅱ」韓国国立民俗博物館で開催3月9～13日において「戦後日本の民俗学」の研究発表を行ない研究交流を推進した。

二 教育活動

1) 教育
東京女子大学文理学部非常勤講師（民俗調査）
総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻教授併任

三 博物館活動

1) 歴博探検･くらしの植物苑
くらしの植物苑，講演「日本の花文化」，4月29日

四 社会連携

1) 館外における各種委員
文科省博物館学芸員資格認定審査委員，伝統文化活動支援団体等選考委員会委員，伝統文化こども教室関連事業企画委員，ふるさと文化再興事業企画委員会委員，久留米市文化財保護審議会委員，昭島市文化財保護審議会委員
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「民俗宗教の諸相」早稲田大学エクステンションセンター
「縁起かつぎと厄除け･厄ばらい」浅草寺，第587回「仏教文化講座」，10月23日
「虎女と曽我兄弟」平塚市ふるさと歴史シンポジウム，11月13日
「日本人の暮らしと信仰－生老死を考える－」千葉市民大学，11月4･11日
「暮らしと家庭の民俗」国立大洲青年の家開所30周年記念特別事業『大人を考えるシリーズ 時と文化を探るプロジェクト』，2005年2月11日
「魅惑の春の花－桜の文化史－」千葉市女性センター，2005年3月17日
3) マスコミ
読売新聞社読書委員（任期2004年1月～2005年12月）（2005年4月現在まで以下の著書紹介）
大門正克･安田常雄･天野正子編『戦後経験を生きる』吉川弘文館
五味文彦『書物の中世史』みすず書房
菅原和孝『ブッシュマンとして生きる』中公新書
島薗進他編『＜宗教＞再考』ぺりかん社
中沢新一『精霊の王』講談社
瀬戸内晴美，ドナルド･キーン，鶴見俊輔『同時代を生きて』岩波書店
森明子編『ヨーロッパ人類学』新曜社
宮地正人『歴史の中の新選組』岩波書店
金田章裕，藤井正編『散村･小都市群地域の動態と構造』京都大学学術出版会

イヴリン･M･オライリー『「老い」とアメリカ文化』リーベル出版
関沢まゆみ『隠居と定年　老いの民俗学的考察』臨川書店
安斎正人『理論考古学入門』柏書房
藤井信幸『地域開発の来歴』日本経済評論社
網野善彦『日本論の視座』小学館
梅棹忠夫，山本紀夫編『山の世界』岩波書店
川田順造『人類学的認識論のために』岩波書店
平川南，沖森卓也，栄原永遠男，山中章編『文字と古代日本1』吉川弘文館
春成秀爾，今村峯雄編『弥生時代の実年代』学生社
大館勝治，宮本八重子『農家のモノ･人の生活館』柏書房
秋道智彌『コモンズの人類学』人文書院
氏家幹人『江戸の女の底力』世界文化社
長谷川まゆ帆『お産椅子への旅』岩波書店
植村和秀『丸山眞男と平泉澄』柏書房
牧原成征『近世の土地制度と在地社会』東京大学出版会
西村汎子，早川紀代編『戦争･暴力と女性』吉川弘文館
中橋孝博『日本人の起源』講談社

他に不定期で以下のような出演，取材協力，執筆など
テレビ朝日「食彩の王国」鯖（サバ）特集，9月18日出演
文化放送2005年1月4日19：30～20：00「斉藤一美のスナック：日本の行事と食の関係」出演
雑誌『アエラ･イングリッシュ』まるごと日本大事典「花見」2005年4月号解説
『本の話』文芸春秋2004年12月号「占いは好きですか」執筆
『ちびまる子ちゃんのはじめてのぎょうじ絵じてん』学習研究社，79頁，監修

II　業績目録

1）著書

2004.11：『日本の「行事」と「食」のしきたり』183頁，青春出版社（監修）
2004.12：『神社資料の多面性に関する総合的研究』文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B(2)）研究成果報告書，334頁（関沢まゆみ他と共著）
2005.3：『柳田民俗学の継承と発展－その視点と方法－』526頁，吉川弘文館（単著）

2a）論文

2004.4：「葬送習俗の変化」（国際宗教研究所編『現代宗教』2004，pp.153-177）
2004.12：「神社祭祀研究と民俗学」（『神社資料の多面性に関する総合的研究』文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B(2)）研究成果報告書，pp.133-146）

5）学会･外部研究会発表要旨

「慰霊と軍神　再考」International Workshop "Encounters with the Military war Dead" Van Bremen（ライデン大学教授）･原田敬一（仏教大学教授）共同主催，12月13～16日，京都国際会館
「追悼と慰霊　その意味するところ」，国際宗教学宗教史会議第19回世界大会　session5-J，『日本における死者と追悼の歴史と現在』（代表　鈴木岩弓），3月26日，東京高輪プリンスホテル

III　研究状況･研究広報

国立歴史民俗博物館は，歴史学，考古学，民俗学，それに情報資料分析科学など関連諸科学の学際的協業による新しい歴史学を創造していくことを目的として設置された大学共同利用機関である。その先端的研究を推進する重要な基盤的位置の一角を固めるべき民俗学に対して，その責任ある学問としての強化の必要性を痛感しているが，そうした観点から実践している作業のうち，今年度は次の3点をあげておく。

(1)　基幹研究「神仏と生死に関する通史的研究－「社会･記憶･表象」をキーワードとして－」（平成16～18年度）の立ち上げ

この研究課題は歴博創設当初よりの基幹研究課題の一つである「基層信仰」に位置づけられるものである。これまで本館で「基層信仰」の名のもとに実施された共同研究のそれぞれの成果の小括がまだ必要であるが，それと同時にそれらをさらに発展させる新たな研究開拓のためにこの分野の研究の継続性が必要であるとの認識から，あらためて標記の研究課題のもとに基幹研究として「神仏信仰の通史的研究I」と「生老死と儀礼に関する通史的研究I」の二つを並立的に立ち上げた。この日本の神仏信仰と生死観念に関する研究は，「社会･記憶･表象」をキーワードとして出発するものであるが，この「社会･記憶･表象」には次のような含意がある。「社会」とは自己と他者との弁別を伴いつつの集団的行動を命題化する語であり，神仏信仰や生死観念の表象の場における集団志向とアイデンティティ形成とが問題化される。「記憶」とは時間への抵抗であり，記憶したがると同時に記憶されたがる人間存在にとって文字や物資などの歴史資料は一種の記憶装置として位置づけられ，分析対象と位置づけられる。「表象」とは自己実現と自己表現とを起点として他者への情報伝達と情報共有を希求する営為であり，自己表現の素材が記憶であり「記憶→表象→社会→記憶→ ...」という無限の連鎖連環の関係が存在する。したがって，誰が何のために神仏の存在を強調し信仰と儀礼と芸能とをその場に仕組んできているのか，また，誰が何のために生老死と加齢の過程に儀礼を仕組んできているのか，などという抽象的な根本問題が設定されざるをえない。しかし，そうした認識は保持しながらも，本研究はあくまでも具体的な物資，文字，画像などの歴史資料情報の具体的な再確認の作業を重視し，その論理的解釈のために宗教史，国文学，建築史，美術工芸史，植生史など歴史学･考古学･民俗学以外の学際的な研究者との協業のもとにこれ

を進めることによって，日本列島に展開した神仏信仰と生死観念の諸表象を通史的歴史的観点から日本文化論の文脈で明らかにしていこうとするものである。なお，神仏信仰に関しては，神仏習合を視野に入れつつもまずは神社と神祇信仰に関する歴史研究を試みることとし，神社を単に宗教的な施設としてだけでなく，政治的宗教的権威や建築工芸技能の表象的機能，観光資源的機能や環境保全機能，文献史料や美術工芸品等の収蔵保存機能，儀礼や芸能の保存伝承機能等々，多様な機能を併せもつ有機的文化構造体とみる視点に立つ。また，生老死の問題は歴史的な問題であると同時に超歴史的な問題でもあるが，ここではあくまでも歴史的な視点に立ち，生死と儀礼，加齢と儀礼という体験と儀礼と観念の関係論に注目して，日本の古代から近現代へいたる人生儀礼に関する通史的な資料情報集積の基礎作業を試みる。儀礼研究は古くかつ新しい側面をもつが，儀礼のもつ社会的統合の機能については周知のとおりであり，小さな儀礼文化の変遷と大きな政治経済社会の変動との連動性についての新しい分析視点の開拓をも試みたいと考えている。

(2) 日本民俗学の海外調査や国際交流推進への試み

柳田國男の「一国民俗学」の主張は，一部の論者が指摘したような一面的に偏狭なナショナリズム（民族主義）によるものでもなく不当なコロニアリズム（植民地主義）によるものでもなく，柳田の民俗学の民俗語彙を重視する歴史主義によるものであり，1930年代～40年代の戦時体制下にあってはむしろその対外不干渉主義的な姿勢こそが注目されるべきである。その柳田の民俗学を継承する現代の日本民俗学にとって日本列島内諸地域の生活文化の多様性に注目する姿勢は一貫して重要であり，それら列島内の多様な生活文化の伝承の意味についての分析こそが日本の民俗学にとっての本務であるといってよい。それをないがしろにして対外比較へと向かうのは軽率で無責任な行動とも批判されよう。ただし，同時に現代の民俗学にとって国際交流の必要性があることは当然であり，重要な点はその交流の方法である。そこで，私の実践してきている方法とは，1)日本の民俗学の調査研究の方法で外国の，たとえばフランスのブルターニュ地方の伝統的な民俗行事の調査と分析を試みる，2)外国の，たとえばフランスや韓国の民俗学者との研究交流を試みる，という2つの方法である。1)としては平成12年度より科学研究費（基盤研究B(2)海外）による調査と分析を継続しており，今年度もそれを実施した。なお，その成果の一部は「ブルターニュのトロメニ」（『国立歴史民俗博物館研究報告』創立20周年記念号第108集，2003）として発表している。2)としてはかつてフランスをはじめイギリス，アメリカなどの研究者との研究交流として平成10年度COE国際シンポジウムを開催しその成果は，宮田登･新谷尚紀編『往生考－日本人の生老死－』（小学館，2000），及び『国立歴史民俗博物館研究報告』（第91集，2001）として刊行している。また，今年度は韓国国立民俗博物館の研究者との交流をはかり，日本と韓国との両方で開催された2 回の国際研究集会に参加してそれぞれコメンテイターとパネラーをつとめ両国の民俗学の研究史及び最近の研究動向の確認を行なった。その成果は『韓国の民俗学･日本の民俗学』（仮題）として日本語版･韓国語版が刊行される予定である。

(3) 著書『柳田民俗学の継承と発展－その視点と方法－』（吉川弘文館，2005.3）の刊行

民俗学とは何か。民俗学をめぐるさまざまな言説が交錯している現況に対して民俗学とは何かを明確にしておきたいという思いから著わした論著である。編集収録した論文はすべて民俗学を職業とする現在の職場に来てから著わしたものである。柳田國男に対する評価は思想史学の上では実に豊かな研究蓄積があるものの，肝心の民俗学では柳田の民俗学の方法論の基礎をなす比較論的研究法とその研究姿勢の基本である歴史的研究視角に対する理解は不十分であり，したがって柳田の方法論に対する評価は不当に低いものばかりとなっているというのが現状である。柳田の民俗学の根幹をなす比較論的研究法と歴史的研究視角を継承しない民俗学など考えられないはずであるが，その不思議が存在してきている学史的背景を考察するとともにあらためて現在の民俗学が継承発展させるべき柳田の方法論と分析視点の再確認を試みた。そして，かつて文化人類学で提唱されたイーミック emic ／エティック etic，通時的 diachronic 研究視角／共時的 synchronic 研究視角，などの概念の活用性をも含めて，現在の民俗学が継承すべき柳田の比較論的研究法の重要性について論じた。とくにフィールドワークにおけるいわゆる「蟻の眼」的で現場論的な精密研究の重要性とその一方での「鳥の眼」的で総括論的な抽象化研究の重要性，そしてその両者の併行実践と相互連鎖･相互研磨の必要性とそこから得られる研究視界の精緻化と拡大化の可能性について具体的な作業例を示しながら論じた。しかしもちろん，まだまだ自分自身の力量不足を自覚しているし更なる自己研鑽の必要性を痛感している。

杉山 晋作 SUGIYAMA Shinsaku 助教授

1945年生 [学歴] 早稲田大学第一文学部史学科1969年卒業 [職歴] 千葉県教育委員会(1969)，文化庁文化財保護部管理課国立歴史民俗博物館設立準備室(1980)，国立歴史民俗博物館考古研究部(1981)，総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004) [学位] [所属学会] 日本考古学協会，埴輪研究会，関東東北前方後円墳研究会 [専門] [主な研究テーマ] 古墳時代社会／ KOFUN period，埴輪／ Haniwa，古代の鍍金技術／ Ancient Gilding techniques

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基盤研究「歴史資料の材質･製作技法と生産地に関する調査研究」（代表 宇田川武久）にて，「古代甲冑製作過程復元の視点－マロ塚古墳出土品を例にして－」発表，10月29日，歴博

2) 共同研究「マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究」（代表 杉山晋作）

第1回研究会 5月21～22日 場所：歴博，マロ塚古墳出土品の収蔵にいたるまでの経緯（杉山）

第2回研究会 12月8～11日 場所：福岡県･熊本県

第3回研究会 2月11日 場所：歴博

3) 個人研究
a「埴輪」
千葉県西部出土埴輪の調査，4月24～25日，千葉県
今城塚古墳出土埴輪の調査，6月16～17日，大阪府
甲塚古墳調査現地踏査，6月23日，栃木県
富士見塚古墳出土埴輪の調査，8月3～25日，3月7日，茨城県
宮崎県の古墳出土品調査，9月3～6日，宮崎県
韓国出土埴輪状土製品の調査，2月13～16日，韓国光州市
b「古墳時代社会」
古墳出土品の調査，4月22日，6月24日，3月3日，埼玉県，5月26日，6月2日，東京都，11月6～7日，1月29～30日，奈良県，11月19～21日，1月15～16日，3月12～13日，大阪府，2月26～27日，3月19～21日，奈良県･大阪府，11月27～28日，京都府，2月5～6日，兵庫県
7世紀古墳の調査現地踏査，5月28日，東京都
前方後円墳研究会大会参加，2月19～20日，福島県
古墳時代遺跡出土品の調査，3月5～6日，徳島県
2003年に実施した企画展示「はにわ－形と心－」の関連行事として開催した歴博講演会とフォーラムの記録を『王の墓と奉仕する人びと』（国立歴史民俗博物館編2004）として刊行した。

二 教育活動

1) 教育
大学院
非常勤講師：早稲田大学教育学部非常勤講師（考古学概論･歴史学演習），国士舘大学大学院非常勤講師（考古学特論），國學院大學大学院非常勤講師（考古学特論）
併任：総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史専攻（日本技術史Ⅰ）
2) 博物館教育
千葉県立盲学校中等部･高等部生徒のための「触れて学ぶ古代の食器」，5月13･20日，11月24日，歴博

三 博物館活動

4) 歴民研修委員，講師
歴民研修委員会委員

四 社会連携

1) 館外における各種委員
印旛郡市文化財センター理事，佐倉市文化財審議会委員，足利市藤本観音山古墳発掘調査指導委員会委員，東北関東前方後円墳研究会代表幹事，埴輪研究会会長，早稲田大学考古学会監事，考古学ジャーナル編集委員
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「埴輪が語る古代人の姿とその意味」『ちはら台学歴史講座』特別講演（ちはら台コミュニティセンター），7月10日，千葉県市原市
「ウマの埴輪作り」，千葉市動物公園，10月17日
「古墳時代初期の前方後円墳と前方後方墳」「5世紀に渡来した新技術とワカタケル王権」「関東の6世紀古墳に見る前方後円墳体制の崩壊」『早稲田大学オープンカレッジ』，11月4･11･18日，早稲田大学
「埴輪を語る」日本の文化を考える会，歴博･芝山はにわ博物館，11月10日
「甲冑からみた5世紀の倭王権と東国」『武器･武具に探る倭王権と東国』（朝日カルチャーセンター横浜），11月30日
「関東における下毛野の古墳と埴輪の特異性」栃木県埋蔵文化財担当者研修会･講演会，栃木県立埋蔵文化財センター，12月17日
「動物の埴輪」，千葉市動物公園，1月22日
「房総における最近の埴輪研究をめぐって」『考古学研究に見る房総の姿』，朝日カルチャーセンター千葉，2月18日

II 業績目録

2a) 論文
「稲荷山鉄剣が提起する課題」（『埼玉県立さきたま資料館調査報告書』第18集，pp.13-24，埼玉県立さきたま資料館，3月）
「関東における古墳時代中期群集墓の墓制変容」（共著）（『考古学ジャーナル』528号，pp.3-4，ニューサイエンス社，2005年3月）
3a) 調査･発掘調査報告書
「下段住宅の発掘成果」（『佐倉城跡発掘調査報告』，pp.145-154，国立歴史民俗博物館，5月）
4) 展示図録
フォーラム記録「はにわが語ること」（『王の墓と奉仕する人びと』pp.162-179，（編著）（223頁），山川出版社，8月）
6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュースなど
「自著紹介 王の墓と奉仕する人びと」（『歴博』129号，p.29，3月）
7) その他

「埴輪－鶏のはなし」，『赤旗』「文化」欄，1月
「埴輪が語ること」（『風媒花』第17号，pp.6-9，佐倉市教育委員会，4月）

鈴木 卓治 SUZUKI Takuzi 助手

1965年生 [学歴] 電気通信大学電気通信学部情報数理工学科1988年卒業，電気通信大学大学院電気通信学研究科情報工学専攻博士後期課程1994年単位取得退学 [職歴] 国立歴史民俗博物館情報資料研究部情報システム研究部門助手(1994)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手(2004) [学位] 修士（工学），電気通信大学，1990年 [所属学会] 日本色彩学会，情報処理学会，日本ソフトウェア科学会，情報知識学会 [専門] 色彩ソフトウェア学，博物館情報システム学 [主な研究テーマ] 博物館における研究･展示･広報を支援するシステムの研究，とくに色彩と画像の情報処理に関心をもつ／ Study of museum information systems to support research activities, exhibition, and public relations. Especially interested in information processing of color and image.

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 2002年度から始めた研究「錦絵資料の測色値画像データベース作成および色彩分析」（当初，総合研究大学院大学共同研究の一部としてスタートし，現在個人研究として継続中）について，2件の研究発表[2004.5][2004.12a]を行なった。
2) 電気通信大学情報通信工学科小林光夫教授（元客員教授）との共同研究「歴史資料の色彩画像の記録･保存･活用に関する研究」について，3件の研究発表[2004.9a][2004.11c][2004.12b]を行なった。特に今年度は，東京国立近代美術館の室屋泰三氏との共同研究を実施し，われわれの手法が美術館の美術作品にも広く適用可能であることを示した。
3) 1)および2)の研究の基礎をなす研究「デジタルカメラによる測色値画像の撮影方法の確立」について下記の2件の研究発表を行なった（資料は作らず口頭発表のみ）。
「デジタルカメラのRAWモード画像から測色値画像を求める実例の紹介」，博物館ホームページ推進研究フォーラム第8回研究集会，於清水テルサ（静岡県静岡市），2005年3月8日
「ディジタルカメラによる測色の方法と問題点」，日本色彩学会第5回白色度研究委員会，於村上色彩技術研究所会議室（東京都中央区），2005年3月23日
4) 2003年度まで実施した研究「史料の構造表現と高度検索のためのデジタル史料集作成技術の検討」について，下記の口頭発表を行なった。
「史料集の高精細全文テキストデータのための検索プログラムについて－仕様，実現，考察」（小口雅史，家辺勝文，鈴木卓治：日本古代史料集のCD-ROM化における文字とテキストの処理に関する諸問題：UnicodeとXMLでどこまでできるのか？－青森県史資料編古代1･同補遺全文CD-ROM制作の事例報告，のひとつとして），情報知識学会人文･社会科学系部会主催第21回歴史研究と電算機利用ワークショップ，東京国立博物館平成館（東京都台東区），10月16日
5) ブルガリアのヴァルナで行なわれた国際研究集会「Color and CulturalHeritage 2004 - Color in Restoration and Conservation」に参加し，研究発表[2004.9a]，および国立歴史民俗博物館の展示や研究活動に関する紹介[2004.9b]を行なった。

四 社会連携

1) 館外における各種委員
日本色彩学会理事，日本色彩学会画像色彩研究会幹事，情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウムプログラム委員

Ⅱ 業績目録

2a) 論文
2004.5：「錦絵資料画像の測色値画像データベースの構築」（『日本色彩学会誌』Vol.28，Suppl.（第35回全国大会講演予稿集），pp.152-155），於名古屋大学（名古屋市）
2004.9a：KOBAYASI, Mituo, SUZUKI, Takuzi, YAMAGUCHI, Takeshi： Conservation of Color Information of Historical Materials Using Standard Digital Cameras, Color and Cultural Heritage 2004 - Color in Restoration and Conservation. Varna, Bulgaria, now printing
2004.9b：SUZUKI, Takuzi： A Short Tour in the National Museum of Japanese History, Color and Cultural Heritage 2004 - Color in Restoration and Conservation. Varna, Bulgaria, now printing
2004.11：小林光夫･室屋泰三･鈴木卓治：「美術館における絵画作品のデジタル記録のあり方に関する検討」（『カラーフォーラムJAPAN2004 論文集』pp.55-58），於工学院大学（東京都新宿区）
2004.12a：鈴木卓治･安達文夫･大久保純一･小林光夫：「錦絵資料の測色値画像データベースの構築と色彩分析の試み」（『人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん2004）論文集』IPSJ Symposium Series, Vol.2004，pp.75-82），於立命館大学（京都市）
2004.12b：小林光夫･鈴木卓治･室屋泰三：「美術作品のデジタル画像の記録手法に関する一提案」（『人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん2004）論文集』IPSJ Symposium Series, Vol.2004，pp.83-90），於立

命館大学（京都市）

関沢　まゆみ　SEKIZAWA　Mayumi　助教授

1964年生【学歴】東京女子大学文理学部史学科1986年卒業，筑波大学大学院修士課程地域研究研究科1988年修了【職歴】大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004)【学位】博士（文学），筑波大学，2001年3月【所属学会】日本民俗学会，日本民族学会，比較家族史学会【専門】民俗学【主な研究テーマ】民俗学の総合的研究／ Comprehensive studies in folklore, especially the research on cult groups and rituals, and a folkloric study of the old, view of life and view of death, discussion on the transformation and transmission of folklore

Ⅰ　研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基幹研究「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」（平成16～18年度）（代表　関沢まゆみ）で，年4回の研究会を行い，戦争体験の記録と語りに関する研究を推進した。また戦時中に執筆された第一次資料2点の翻刻と解題を共同研究の成果品として刊行した[2005.3]。
2) 基幹研究「神仏信仰の通史的研究Ⅰ」（平成16～18年度）（代表　三浦正幸），および同「生老死と儀礼に関する通史的研究Ⅰ」（平成16～18年度）（代表　新谷尚紀）で，研究分担者･事務担当者として年4回の研究会を行い，研究を推進した。
3) 文部科学省研究費補助金･基盤研究(B(2))「神社資料の多面性に関する総合的研究－古社の伝存資料と神社機能の分析を中心として－」（代表　新谷尚紀）研究分担者。上記研究に関して，広島県，島根県，京都市の調査対象地域に対する調査研究を推進した（4～8月，10～11月）。
4) 文部科学省研究費補助金･基盤研究(B(2))「民俗信仰と創唱宗教の習合に関する比較民俗学的研究－フランス，ブルターニュ地方の聖人信仰の調査分析を中心として－」（代表　新谷尚紀）研究分担者。上記研究に関して，フランス，ブルターニュ地方およびプロヴァンス地方の祭礼の調査研究を実施した（8月）。
5) 文部科学省研究費補助金･基盤研究(C(2))「高齢化社会における隠居と定年をめぐる民俗学的研究」研究代表者。上記研究に関して，滋賀県，京都市，広島県，東京都，栃木県の調査対象地域に対する調査研究を実施した（12～3月）。
6) 博物館資料調査報告書『戦争体験の記録と語りに関する資料集成』（1･2（2004年3月刊行）に続き，3･4（2005年3月刊行））を刊行した。このうち，既刊の1･2のデータ分析をもとに，2004年12月13～16日に京都国際会議場で行われたJan van Bremen（ライディン大学教授）と原田敬一（仏教大学教授）共同主催のInternational Intensive Workshop "Encounters with the military war dead" において「帰還兵士と戦友･戦没兵士と遺族」（The repatriated soldiers and veterans and the military war dead and bereaved families）の研究発表を行った。
7) 2004.11.27：第49回歴博フォーラム「現代社会と伝統文化－排除と受容のダイナミズムをめぐって－」において，「宮座祭祀と死穢忌避－伝統社会の生活律－」の発表を行った（レジュメ集『現代社会と伝統文化－排除と受容のダイナミズムをめぐって－』pp.28-31）。これは2005年2月に刊行された著書『宮座と墓制の歴史民俗』の重要な論点の一つである宮座祭祀と両墓制の関連性の指摘に関連して清浄な神社祭祀に携わる人物がその不浄な死をどのように処理しているかについて論及した内容であった。
8) 本館企画展示「日本の神々と祭り」（代表　新谷尚紀）事務担当者として，島根，広島，京都の各分科会の運営および年2回の展示プロジェクト委員会を推進した。
9) 本館が2003年度に研究交流協定を結んだ韓国国立民俗博物館との国際研究集会を代表者として推進した。その課題名は「韓国の民俗学･日本の民俗学Ⅰ」（2004.12.18，本館）（2005.3.10，韓国国立民俗博物館）で，後者においては「村落研究と民俗学」という研究発表を行った。

二　教育活動

1)　教育
東京女子大学文理学部非常勤講師（民俗学）
青山学院女子短期大学家政学科非常勤講師（生活文化特論）

四　社会連携

1)　館外における各種委員
栃木県重要文化財保護審議委員

Ⅱ　業績目録

1)　著書：単著
2005.2：『宮座と墓制の歴史民俗』，310頁，吉川弘文館
2a)　論文
2004.4：「行き場を失った枕飯」（国際宗教研究所編『現代宗教』pp.178-197，東京堂出版）
2004.12：「神社祭祀と宮座運営－美保神社の祭礼の分析から－」（文部科学省研究費補助金･基盤研究B(2)研究成果報告書）『神社資料の多面性に関する総合的研究』（代表　新谷尚紀），pp.43-58）
3a)　調査･発掘調査報告書

2005.3:『戦争体験の記録と語りに関する資料調査』3 (817頁), 4 (826頁), 博物館資料調査報告書14, 国立歴史民俗博物館

5) 学会･外部研究会発表要旨

2004.12:「帰還兵士と戦友　戦没兵士と遺族」("Encounters with the military war dead" Jan van Bremen (ライディン大学教授) &原田敬一 (仏教大学教授) 共同主催のInternational Intensive Workshop) 日本語版5頁･英語版7頁

2005.3:「村落研究と民俗学」(『韓国の民俗学･日本の民俗学 I』韓国語版pp.35-49･日本語版pp.87-96)

7) その他

2004.10:「歴史にみる「隠居」と「定年」」(『日経Masters』pp.54-59)

III 研究状況･研究広報

今年度より3年の計画で始められた基幹研究「神仏と生死に関する通史的研究」((1)神仏信仰に関する通史的研究 I, (2)生老死と儀礼に関する通史的研究 I) (代表　新谷尚紀) の事務担当および研究分担者として研究の推進につとめた。また同様に今年度より3年の計画で始められた基幹研究「20世紀に関する総合的研究」((1)20世紀における戦争 I, (2)戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究) (代表　安田常雄) においては, (2)戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究の研究代表者として研究を推進した。また, 平成17年度企画展示「日本の神々と祭り」(代表　新谷尚紀) の事務担当としての役割を果たしながら展示の実現に向けて力を注いでいる。さらに平成15年度に締結された韓国国立民俗博物館との研究交流協定にもとづき, 今年度は「韓国の民俗学･日本の民俗学 I」の課題で国際研究集会を2回開催した。これについては今年度より前任者の安室知 (本館助教授) より担当を引き継ぎ, 韓国国立民俗博物館からは「韓国民俗学の歴史と展望に関する省察」(張長植学芸研究官), 「韓国民俗学における現地調査研究法」(金時徳学芸研究官), 「韓国服飾の研究に関する小考」(崔銀水学芸研究士), 本館からは「戦後日本の民俗学」(新谷尚紀教授), 「村落研究と民俗学」(関沢まゆみ助教授), 「芸能研究の近代」(松尾恒一助教授), のあわせて6本の研究発表とそれらに関する討論を行った。今後, 成果報告書を編集し刊行の予定である。

このような自分自身の研究状況のなかで, 今年度はとくに次の3点について述べておきたい。

第一に, 平成14年度からはじめた博物館資料調査「戦争と神社祭祀をめぐる資料調査」の資料調査報告書『戦争体験の記録と語りに関する資料調査』1･2 (平成15年度), 3･4 (平成16年度) の刊行を完了することができた。この博物館資料調査は戦争体験者の高齢化がすすむ中で聞き取り調査の最後の機会ととらえて企画し, 博物館資料調査委員計51名の協力を得て実施したものであった。主に戦争体験者として夫が戦死した妻の場合と戦友が戦死した元兵士の場合を対象として, 語られるものと書かれるものとの両面に注目して聞き取り調査を行い, 同時に都道府県別に戦争体験記関係文献リストの作成を行った。

第二に, 基幹研究「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」(平成16～18年度) を立ち上げた。これは, 前述の博物館資料調査報告書『戦争体験の記録と語りに関する資料調査』1～4の整理と分析を主たる目的とするものである。戦後60年に及ぶ戦後史のなかで戦争体験に関する情報がそれぞれの時代ごとにどのように記録され, 語られてきたか, その時代推移とともに書かれる記憶と語られる記憶の表出のされ方についての変化について分析を行うものである。初年度の研究事業としては, 4回の研究会を行う一方で基礎資料として翻刻資料集を刊行することができた。

第三に, 本館の共同研究に参加しての個人研究のいくつかの成果のうちから『宮座と墓制の歴史民俗』(吉川弘文館, 310頁) を刊行することができた。本書は, 第1章宮座の基本的分析視角, 第2章宮座の長老衆と年齢秩序, 第3章長老衆と葬墓制, 第4章墓郷･水郷･宮郷をめぐる民俗学的考察, からなり, その主要な論点は, 第一に個別事例研究が重ねられてきた宮座研究を総括的に論じる宮座の類型論を試みた点, 第二にこれまで民俗学においては別々に研究されてきた宮座の問題と両墓制の問題とが死穢忌避観念を基底に共有して互いに関連するものであることを具体的な事例分析から明らかにした点, 第三に現在消滅に向かっている奈良盆地における墓郷, 水郷, 宮郷の結びつきの実態について調査分析を行い, 墓郷, 水郷, 宮郷が重層しながらも独立的に編成, 機能していること, そしてそれらの解体過程の分析を行い伝承維持のための力学関係, などを明らかにした点, である。

本書は書き下ろし論文2本を含み, いずれも1998年に私が国立歴史民俗博物館に職を得てから行ってきた調査研究の成果からなるものであり, 『宮座と老人の民俗』(吉川弘文館, 2000年), 『隠居と定年－老いの民俗学的研究－』(臨川書店, 2003年) につづく第3冊目の研究書である。これからも民俗学の基盤構築のために力を尽くし, さらに基幹研究の運営, 国際交流関係プロジェクトの推進などを通して先端的研究機関たる国立歴史民俗博物館の研究推進の一端を微力ながら担っていきたいと考えている。

千田　嘉博　SENDA　Yoshihiro　助教授

1963年生 [学歴] 奈良大学文学部文化財学科1986年卒業 [職歴] 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004) [学位] 博士 (文学), 大阪大学, 2000年10月 [所属学会] 考古学研究会, 日本考古学協会, 日本史研究会 [専門] 日本考古学 [主な研究テーマ] 日本の中･近世城郭･城下遺跡の研究, 日本の城とヨーロッパの城との比較研究

I 研究･教育活動

一 研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 共同研究「佐倉連隊と地域民衆」(代表 樋口雄彦) で，遺存する連隊兵舎の調査を長崎県大村市などで行い議論に参加した。
2) 文部科学省 特定領域研究(2)中世考古学の総合的研究 計画研究A01-1「中世拠点城郭および都市の分析方法に関する学融合的研究」(代表 千田嘉博) で，「洛中洛外図屏風」を中心にした研究会を4月に国立歴史民俗博物館で開催した。
同経費で千葉大学工学部玉井哲雄氏を団長とした韓国江原道民家の建築史調査に，11月17～19日にかけて参加した。またポルトガルの中世遺跡調査，ドイツの中世考古学状況調査を12月6～18日にかけて実施した。それらの成果は『中世の城･都市･建築－特定領域研究(2)中世考古学の総合的研究 計画研究A01-1 中世拠点城郭および都市の分析方法に関する学融合的研究 中間報告書』にまとめた。
3) 文部科学省 特定領域研究(2)中世考古学の総合的研究 (領域代表 前川要) の総括班メンバーとして特定領域の推進に勤めた。
4) 個人研究テーマ「中世拠点城郭の研究」を進めるため，各地の教育委員会と協力して，中世拠点城郭の基礎調査を進めた。

二 教育活動

1) 教育

高知大学非常勤講師 (人文学部日本史特殊講義，集中講義)

三 博物館活動

5) 歴博振興会関係

歴博講演会講師，「城跡から考える歴史」，2005年2月12日
歴博振興会講師，「東北考古学の旅」，10月29～31日

四 社会連携

1) 館外における各種委員

鹿児島県知覧町史跡知覧城整備委員会委員，鹿児島県志布志町志布志城調査委員会委員，宮崎県高岡町史跡穆佐城整備委員会委員，宮崎県西都市史跡都於郡城整備委員会委員，熊本県宇土市史跡宇土城整備委員会委員，長崎県大村市三城城跡調査委員会委員，長崎県中世城館総合調査準備委員会専門委員，佐賀県中世城館総合調査専門委員，滋賀県多賀町石仏谷調査委員会委員，愛知県小牧市史跡小牧山整備委員会委員，愛知県鳳来町史跡長篠城整備委員会特別委員，静岡県大東町史跡高天神城整備委員会委員，静岡県沼津市史跡長浜城･史跡興国寺城整備委員会委員，長野県長野市史跡松代城跡付新御殿跡整備委員会委員，長野県上田市史跡上田城跡整備委員会委員，石川県金沢城調査専門委員会委員，石川県七尾市史跡七尾城調査委員会委員，富山県埋蔵文化財センター中世城館総合調査委員，青森県市浦村十三湊遺跡調査委員

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「歴史散策 三城城跡･大村氏館」『出前講座』(長崎県大村市教育委員会)，10月9日
「信長･家康と小牧山城」『歴史講座』(愛知県小牧市教育委員会)，10月23日
「秋元城から考える戦国の城」『秋元城講演会』(千葉県君津市教育委員会)，11月20日

II 業績目録

1) 著書

2004.10：編集協力『中世十三湊の世界』，345頁，新人物往来社
2005.3：編著『中世の城･都市･建築－特定領域研究(2)中世考古学の総合的研究 計画研究A01-1 中世拠点城郭および都市の分析方法に関する学融合的研究 中間報告書』(38頁)

2a) 論文

「城郭研究における学融合の可能性」(『中世総合資料学の可能性』(pp.36-55)，新人物往来社，2004年)
Die Archaologie des Mittelalters，STEINHAUS. W. et. ed. "Zeit der Morgenrote，Japans Archaologie und Geschichte bis zu den ersten Kaisern，Handbuch" Publikationen der Reiss-Engelhorn-Museen Band 11，pp.500-505，2004
「城郭都市としての多賀大社」(『多賀大社･石仏谷総合調査報告書』滋賀県多賀町教育委員会，pp.127-128，2005年)
「荒滝山城の構成」(『荒滝山城発掘調査報告書』宇部市教育委員会，pp.35-36，2005年)

5) 学会･外部研究会発表要旨

「近世城郭のなかの松代城」『史跡松代城跡整備完成記念シンポジウム』長野県長野市教育委員会，6月12日
記念講演「戦国時代の山城と平地居館」『戦国時代 横山城跡･下坂氏館跡シンポジウム』滋賀県長浜市教育委員会，8月8日
記念講演「戦国の城･近江の城･清水山城」および討論司会『清水山城館跡国史跡指定記念シンポジウム･高島七頭と清水山城･城下』滋賀県新旭町教育委員会，9月20日
「城郭史から見た大友氏城館」『大友氏の城館』北部九州城郭研究会，10月3日
「日本の中世城館」『史跡湯築城跡シンポジウム』湯築城跡資料館，11月28日
「織豊期城郭としての肥前名護屋城」『自然科学からみた名護屋城の環境と生活』文部科学省特定領域研究(2)中世考古学の総合的研究，計画研究B02-2 自然化学分析による中世の環境変動の解明と農耕変遷の究明，2005年1月29～30日
「中世拠点城郭および都市の分析方法に関する学融合的研究」文部科学省 特定領域研究(2)中世考古学の総合的研究 国際評価委員会，2005年2月5日

「城跡から歴史を研究する」鎌ヶ谷市郷土資料館歴史講演会，2005年2月6日
「研究の成果」文部科学省特定領域研究(2)中世考古学の総合的研究第2回総合会議，2005年2月18日
「発掘調査でわかる中世城館」秋田県埋蔵文化財センター埋蔵文化財研修，2005年2月20日

7) その他

「カルチャーランキング･中世の城」『読売新聞』4月11日朝刊･日曜版
「横山城跡発掘コメント」『朝日新聞』8月19日滋賀版朝刊
「ようこそ･城郭の構造から歴史をたどる－千田嘉博さん」『朝日新聞』8月18日夕刊（中村俊介氏執筆）
「大和郡山城の保存コメント」『産経新聞』11月6日朝刊，社会面

III 研究状況･研究広報

1990年4月1日に名古屋市教育委員会見晴台考古資料館の学芸員から，国立歴史民俗博物館考古研究部に助手として着任して以来，2005年3月31日で15年間という月日が流れた。そしてこの3月末日をもって国立歴史民俗博物館を辞して，奈良大学文学部文化財学科に異動することになった。この間，ご教導を賜った多くの方々に心から御礼申し上げたい。

ここに着任した26才の頃はよく学生さんと間違われた。やはり外観も中身も学生とたいして変わらなかったのである。今では41才になりすっかり中年になってしまった。もし現在のわたくしが内面的に15年前より少しは研究者らしくなっているとしたら，それは歴博というすばらしい研究機関に所属できたおかげだと思う。

研究会で遠くから眺めていた卓越した研究者群に共同研究などを通じて日常的に接し，先端の研究の成立過程に直接触れることができたのはすばらしい経験だった。時代やテーマは異なっても，すぐれた先人の研究のスタイルや意識から学んだことは実に大きかった。

そして1991年から調査をはじめた青森県十三湊遺跡は，中世の北の港湾都市の全貌を解明する端緒となっただけでなく，その後市浦村･青森県教育委員会によって調査が継承され，ついに国指定史跡になるところまで到達した。研究者として幸せなことである。永原慶二先生が歴博20周年の記念講演で十三湊の調査を歴博の特筆すべき研究成果のひとつ，と評価して下さったこともうれしかった。

永原先生といえば，小島道裕さん，高橋一樹さんとともに準備を進めた展覧会「天下統一と城」でも展示プロジェクト委員として懇切なご指導を賜った。この展示も『日本歴史』の2005年1月の特集号で，すぐれた歴史展示のひとつに選ばれた。いずれの仕事も館内･館外の多くの方々のご指導･ご助力があればこそできたことで，改めて感謝申し上げたい。

佐原真先生にはドイツ考古学研究所へ文部省在外研究員として送り出していただいた。この留学によって世界の人類史上の城や防御都市に興味を広げることができた。フンボルト財団の招聘研究者としてドイツに来られた佐原先生と一時ご一緒させていただいて，すばらしい解説のもとで多くの遺跡を歩いて学んだことは幸せな想い出である。

歴博に在職する間に『城館調査ハンドブック』（共著）新人物往来社，『織豊系城郭の形成』東京大学出版会，『戦国の城を歩く』筑摩書房，などを出版することができた。そして2000年には大阪大学から博士（文学）の学位を受けることができた。日本や世界の城を歩いた成果をまとめることができたことは，やはり幸せなことだと思う。

中学生の時に博物館に勤めたいと願ったことも，毎日城跡に行きたいという希望も，歴博ではすべて叶ってしまった。その歴博を去ることは悲しくさびしいけれど，さすがは歴博で学んだひと，といってもらえるように明るく努力していきたい。

高橋 一樹 TAKAHASHI Kazuki 助教授

1967年生〔学歴〕新潟大学教育学部中学校教員養成課程1990年卒業，大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程1997年単位取得退学〔職歴〕大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004)〔学位〕博士（文学），大阪市立大学，2001年〔所属学会〕日本史研究会，歴史学研究会，日本古文書学会，大阪歴史学会，大阪歴史科学協議会〔専門〕日本中世史〔主な研究テーマ〕荘園制の形成と展開，中世文書論

I 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基盤研究「明治地籍図の集成的研究」（代表 青山宏夫）により，明治初期の地籍図と関連史料の調査を滋賀県安曇川町･今津町，広島大学附属図書館，香川県歴史博物館，税務大学校租税史料館などで行った。

2) 個別共同研究「水木コレクションの形成過程とその史的意義」（代表 高木博志）および文部科学省科学研究費補助金･基盤研究(B)(2)「近代大和地方のコレクション収集活動から見た「日本文化」形成過程の研究－水木コレクションの復元をふまえた総合的研究－」（代表 久留島浩）により，奈良市立史料保存館，市立長浜城歴史博物館，章斎文庫（滋賀県米原市）などで資料調査を行った。

3) 館蔵資料調査プロジェクト「田中穣氏旧蔵典籍古文書目録」（代表 井原今朝男）にもとづき，『田中穣氏旧蔵典籍古文書目録〔国文学資料･聖教類編〕』を編集･刊行した。

4) 福武学術文化振興財団助成研究「巨大絵図･地図の現地調査法とディジタル化に関する研究」（代表 久留島浩）および東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター「近世の大規模新田開発絵図に関する基礎研究プロジェクト」（代表 保谷徹）にもとづき，越後国紫雲寺潟および福島潟の干拓関係文書･絵図の調査･ディジタ

ル撮影を継続して行った。
5) 文部科学省科学研究費補助金･基盤研究(A)(2)「歴史的アーカイブズの多国間比較に関する研究」(代表渡辺浩一) にもとづき，韓国国史編纂委員会で開催された国際研究会「近世東アジアにおける組織と文書」に出席して議論に参加す るとともに，両班の伝来史料および両班の邸宅について調査を行った。

三 博物館活動
4) 歴民研修委員，講師
歴史民俗資料館等専門職員研修会「調査研究と資料収集1」資料研究の基礎作業 (文献資料担当) ･講師

四 社会連携
1) 館外における各種委員
上越市史古代史部会調査執筆委員，日本古文書学会･古文書研究編集委員
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「古文書入門」朝日カルチャーセンター千葉，第2･4木曜日

II 業績目録

2a) 論文
「荘園制の変質と公武権力」(『歴史学研究』794，pp.40-49，2004)
2b) 研究ノート
「既知の鎌倉幕府裁許状にあらわれた未知の信濃国御家人」(『古文書研究』58，pp.113-115，2004)
「荘園制と都市･村落」(『日本史の方法』創刊号，pp.104-108，2005)
3b) 自治体史･史料集など
「石井荘の消滅」(『上越市史』通史編自然･原始･古代，pp.536-543，2004)
「中世成立期の越後と国衙」(『上越市史』通史編中世，pp.4-38，2004)
5) 学会･外部研究会発表要旨
2004.5:「荘園制の変質と公武権力」(2004年度歴史学研究会大会中世史部会報告，一橋大学)
2004.12:「荘園制と都市･村落」(国際シンポジウム「中世，多極と分権の時代－日本では？そして西欧では？」，ドイツ･ボン大学)

III 研究状況･研究広報

館蔵資料目録として『田中穣氏旧蔵典籍古文書 [国文学資料･聖教類編] 』の編集を館内外のプロジェクト委員と協力して進め，刊行にこぎつけた。また，館蔵中世古文書データベースのデータ入力および画像付与にともなうインターフェイスの改善を継続して行い，人間文化研究機構の情報共有化を進めるプロジェクトにも参画した。個人研究では，中世荘園制論を中心とする著書の刊行をうけて，鎌倉～南北朝期における荘園制の変質過程についての見通しを学会報告の場で公表し，実証作業も含めて今後の中期的な研究計画を立てることができた。その具体的な作業を進めるとともに，上記の科研費にもとづく共同研究とリンクさせながら，訴訟文書を中核とした中世文書の比較研究にひきつづき取り組みたい。

高橋 敏 TAKAHASHI Satoshi 教授

1940年生 [学歴] 東京教育大学文学部史学科1963年卒業，東京教育大学大学院文学研究科修士課程日本史学専攻1965年修了 [職歴] 総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004) [学位] 博士 (文学) ，筑波大学，1990年 [所属学会] 地方史研究協議会，歴史学会，日本史研究会 [専門] 日本近世･近代史 [主な研究テーマ] 日本民衆教育史，生活文化史，社会史

I 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報
「民衆文化とつくられたヒーローたち」(2004.3.16～6.6)展示プロジェクト委員会代表者
第46回歴博フォーラム「アウトローと江戸の大衆文化」銀座ヤマハホール，4月24日，討論進行
「何故，今アウトローの幕末維新史か」歴博展示図録，2004.3

四 社会連携
1) 館外における各種委員
佐倉市人権啓発推進拠点等の整備に関する検討委員長，沼津市史編集委員
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「清水次郎長と幕末維新」朝日カルチャー (千葉市) ，4月7日
「脇往還･日光例幣使道で生きる人々」東毛歴史史料館，5月22日
「幕末維新のアウトローたち (一) 」千葉市民大学，5月27日
「幕末維新のアウトローたち (二) 」千葉市民大学，6月3日

「幕末維新のアウトローたち（三）」千葉市民大学，6月10日
「大原幽学」千葉市民大学，6月17日
「竹居安五郎･黒駒勝蔵と戊辰戦争」山梨県生涯学習センター，8月27日
「江戸時代とは何か」米沢史学会公開講演，山形県立米沢女子短期大学，11月13日
「天保水滸伝の世界」鎌谷市東部学習センター，1月22日

II 業績目録

1) 著書
『大原幽学と幕末村落社会』，232頁，岩波書店，2005年3月
2b) 研究ノート
「アングラネットワークの作られ方　博徒たちの抗争と結束」（『中央公論』2004年7月号）
7) その他
「明治維新で抹殺された博徒　黒駒勝蔵と水野弥三郎」『赤旗』4月15日
「変革期の民衆のヒーロー（上）忠治･次郎長遠くなりにけり」『聖教新聞』4月29日
「変革期の民衆のヒーロー（下）女侠の系譜」『聖教新聞』5月13日

常光 徹 TSUNEMITSU Toru 助教授

1948年生［学歴］國學院大學経済学部経済学科1973年卒業［職歴］公立中学校教員，国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授(1998)，総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004)［学位］博士（民俗学），國學院大学，2004年11月
［所属学会］日本民俗学会，日本口承文芸学会，説話伝承学会，日本民具学会［専門］民俗学，口承文芸学
［主な研究テーマ］口承文芸の研究／ A study of oral tradition，俗信の民俗学的研究／ A study of folk belief

I 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報
1) 基幹研究「20世紀における戦争 I」（代表　安田常雄）共同研究員
2) 個別共同研究「宗教者の身体と社会」（代表　松尾恒一）で，共同研究員として沖縄県久高島の調査をおこなった
3) 個別共同研究「日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究」（代表　小池淳一）共同研究員
4) 国際日本文化研究センター共同研究「日本人の異界観－その構造と意味」（代表　小松和彦）で，富山県下村の調査をおこなった（12月10～19日）
5) 文科省基盤(B)(2)「中国江南沿海村落の民俗誌的研究」（代表　福田アジオ）にもとづき，中国浙江省象山県石浦鎮東門島（8月5～12日）と温嶺市石塘鎮（3月10～18日）の調査をおこなった
6) 文科省基盤(A)(1)「怪異･妖怪文化資料を素材とした計量民俗学の構築と分析手法の開発に関する研究」（代表　小松和彦）で，共同研究員として妖怪関連の資料収集をおこなった
7) 2001年から進めている怪談･妖怪コレクションのなかから，錦絵と絵巻を新収資料展で展示した
8) 国際研究集会「日韓口承文芸交流」（7月11日）をおこない，成果を『歴博』127号に報告した
9) 國學院大學国文学会で「しぐさの民俗」と題して講演をおこなった（11月20日）

二 教育活動
1) 教育
國學院大學非常勤講師（口承文芸論･伝承文学研究）精華大学非常勤講師･集中講義（9月8～11日）（口承文芸の歴史）
総合研究大学院大学日本歴史専攻助教授併任

三 博物館活動
3) 各種編集委員
『研究報告』編集委員（委員長）

四 社会連携
1) 館外における各種委員
「学校の怪談」『市民講座』海老名市立中央公民館，7月24日
「魔よけと俗信」『市民講座』海老名市立中央公民館，7月31日
「口承文芸のなかの妖怪」野田市中央公民館市民講座，11月17日

II 業績目録

2a) 論文
「後ろ向きの俗信－異界と接触する作法－」（福田アジオ他編『環境･地域･心性－民俗学の可能性－』，pp.353-372，岩田書院，2004年9月）

「『一声』と『二声』『片道』と『往復』の俗信－心意伝承の論理－」(野村純一編『伝承文学研究の方法』, pp.459-470, 岩田書院, 2005年3月)

3a) 調査･発掘調査報告書

「佐藤タミさんの昔語り(2)－秋田県鳥海村上平根－」(『昔話伝説研究』24, pp.105-113, 昔話伝説研究会, 2004年5月)

3c) 辞典項目

小松和彦他編『文化人類学文献事典』「神を助けた話」「昔話覚書」「口承文芸史考」弘文堂, 2004年12月

6) 歴史系総合誌『歴博』, 友の会ニュースなど

「爪弾きの呪力」(『歴博』127, p.9, 国立歴史民俗博物館, 2004年11月)

「国際研究集会･日韓口承文芸交流」(『歴博』127, pp.24-25, 国立歴史民俗博物館, 2004年11月)

7) その他

「(新刊紹介) 奈良市民間説話調査報告書」(『口承文芸研究』28, p.155, 日本口承文芸学会, 2005年3月)

「(新刊紹介) 広島民俗第61号」(『口承文芸研究』28, p.155, 日本口承文芸学会, 2005年3月)

「(紹介) 異界からのサイン」(『日本民話の会通信』178, p.22, 日本民話の会, 2005年3月)

「民俗学者　宮田登」(不思議な世界を考える会編『怪異百物語』5, pp.136-137, ポプラ社, 2005年2月)

III 研究状況･研究広報

この数年間, しぐさに関する民俗について調査･収集し論文等で発表してきたが, 本年度はこれまで蓄積してきた成果を系統的に分類し体系化する作業に着手した。主なテーマは2つ。1つは呪術的な意味をおびたしぐさを中心に, その多様な伝承の実態を明らかにするとともに, しぐさの機能や論理的側面についての考察である。たとえば,「息を『吹く』しぐさと『吸う』しぐさ」に関する伝承を分析すると, 呼気／吸気の息づかいが, それぞれの伝承群の意味や機能の方向性を基本的に規定していることが理解できる。身体部位の対照的なしぐさが意味の上でも対照的な関係を示す例は,「指を『隠す』しぐさ『弾く』しぐさ」などについても指摘できる。2つめは, 身体･行為をめぐる感性と心性の問題である。生理的な現象であるクシャミ, 発話や行為の同時現象といった身体のあり方と深くかかわる事象を取り上げて, そこに表出される感覚や心のあり方 (心性) について論じた。

しぐさや行為は, 伝承を担う主体の存在と深くかかわる事柄だけに, 民俗関係の報告書や論文に登場する機会は少なくないが, ただそのほとんどは, しぐさ自体に焦点をあてたものではないので部分的な記載にとどまっているケースが多い。これからも, 民俗学の立場から, しぐさや行為に関する調査･研究を継続していきたい。

永嶋 正春 NAGASHIMA Masaharu 助教授

1947年生 [学歴] 東京理科大学理学部化学科1971年卒業, 東京芸術大学大学院美術研究科修士課程保存科学専攻1973年修了 [職歴] 総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(1999より), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004) [学位] [所属学会] 日本文化財科学会, 文化財保存修復学会 [専門] 保存科学, 日本文化史 [主な研究テーマ] 非破壊的調査手法による歴史資料の技術史･文化史的研究, 漆並びに赤色顔料関係資料の技術史･文化史的研究

西谷 大 NISHITANI Masaru 助教授

1959年生 [学歴] 熊本大学文学部史学科1984年卒業, 同大学院文学研究科修士課程史学専攻1986年修了, 中華人民共和国天津師範大学普通進修生1987年修了, 中華人民共和国中山大学人類学系高級進修生1989年修了 [職歴] 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004) [学位] 修士 (文学), 熊本大学文学部, 1986年 [所属学会] 中国考古学会, 東南アジア考古学会 [専門] 考古学 [主な研究テーマ] 東アジアの歴史

I 研究･教育活動

一 研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 文部科学省科学研究費補助金･基盤B(2)海外「実践としてのエスノサイエンスと環境利用の持続性－中国における焼畑農耕の現在－」(2003～2006年, 研究代表･篠原徹)

2004年5月18日～6月15日, 中国雲南省紅河州金平県者米において調査

2005年10月15日～11月22日, 中国雲南省紅河州金平県者米において調査

II 業績目録

2a) 論文

「公募型企画展示「ドキュメント災害史1703-2003　地震･噴火･津波, そして復興」の記録－展示の過程と構成－」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第121集, pp.401-421, 国立歴史民俗博物館, 2005年3月)

「市のたつ街－交易からみた多民族の交流－」(『国立歴史民俗博物館研究報告』121集, pp.339-400, 国立歴

史民俗博物館, 2005年3月)
「雲南国境地帯の定期市－その構造と地域社会に与える影響－」(『東京大学東洋文化研究所紀要』147冊, pp.321-336, 東京大学東洋文化研究所, 3月)
「大圏套与小圏套－＊＊着火田展＊的小型＊物狩＊－」Journal of Guangxi University for Nationalities (Philosophy and Social Science Edition 2005, Vol.27, No.1 (広西民族学院学報 (哲学社会科学版)), pp.19-34, 広西民族学院
6) 歴史系総合誌『歴博』, 友の会ニュースなど
「高床倉庫とブタ」(『友の会ニュース』No.117, p.9, 財団法人歴史民俗博物館振興会, 1月)
「フィールドとの邂逅」(『歴博』No.126, pp.26-27, 9月)
「自著紹介　食べ物と自然の秘密」(『歴博』No.126, p.30, 9月)

西本　豊弘　NISHIMOTO　Toyohiro　教授　研究連携センター長

1947年生 [学歴] 早稲田大学教育学部社会科1971年卒業, 北海道大学大学院文学研究科博士課程日本史専攻1981年単位取得退学 [職歴] 総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任(1999), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館教授･研究連携センター長(2004) [学位] [所属学会] 動物考古学研究会, 日本考古学協会, 日本人類学会, 日本文化財科学会 [専門] 動物考古学, 環境考古学 [主な研究テーマ] 縄文･弥生時代の環境考古学

Ⅰ　研究･教育活動

一　研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報
1) 文部省文部科学省科学研究費補助金･学術創成研究費「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」(平成16～20年度) 研究代表者
2) 平成17年度企画展示「水辺と森と縄文人」代表
3) 学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」国際シンポジウム主催, 2004年12月25･26日, 国立歴史民俗博物館
4) 歴博プロムナード展示『炭素14年代測定の研究』展示代表
5) 歴博プロムナード展示『井野長割遺跡について』展示協力

二　教育活動
1) 教育
総合研究大学院大学教授文化科学研究科日本歴史専攻 (併任)

四　社会連携
1) 館外における各種委員
動物考古学研究会･代表
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「遺跡出土のオオカミ遺存体」フォーラム『丹沢周辺のオオカミたち』南足柄市文化会館, 6月6日
「縄文･弥生文化の動物儀礼」『国学院大学21世紀COEプログラム･国際シンポジウム動物 と儀礼－東アジアにおける日本列島－』國學院大學, 11月28日
「古代日本の仏教以前の日本人の宗教観」『佐倉市国際文化大学公開講座』佐倉市 , 9月25日

Ⅱ　業績目録

2a) 論文
「日本の近世以前の飼育動物」(『在来家畜研究会報告』22, pp.1-10, 2005年3月)
2b) 研究ノート
『季刊考古学88号　弥生時代の始まり』雄山閣出版 (編集協力･著) , 8月
3a) 調査･発掘調査報告書
「村松白根遺跡の動物遺体 (2003年度) 」(『村松白根遺跡Ⅰ (下巻) 』pp.567-575, 茨城県教育事業団　茨城県教育財団, 2005年3月)
「河原子古墳群出土の人骨」(『河原子古墳群発掘調査報告書』pp.50-52, 日立市教育委員会, 2004年12月) (浪形早季子と共著)
「新台遺跡出土の貝類について」(『新台遺跡－ひかり工業団地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』pp.178-179, 東総文化財センター, 2002年3月) (小林園子と共著)
「福岡遺跡出土の動物遺体」(『福岡遺跡－ (仮称) 八日市場市介護老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財調査－』pp.181-193, 東総文化財センター, 2003年3月) (小林園子･太田敦子と共著)
5) 学会･外部研究会発表要旨
日本文化財科学会･会誌『考古学と自然科学』編集委員長
『動物考古学』第22号編集
研究発表「AMS14C年代測定による関東地方縄紋時代後期の暦年較正年代」日本考古学協会第70回総会, 千葉大学, 5月23日 (小林謙一･今村峯雄･坂本稔･松崎浩之)

研究発表「縄文時代のオオカミ出土例」動物考古学研究集会，慶応大学，12月18日
ポスターセッション「中世末から江戸初期のイヌについて」動物考古学研究集会，慶応大学，12月18～19日（共同研究　黒須球子･太田敦子･小林園子･浪形早季子）

III　研究状況･研究広報

（1）文部科学省科学研究費補助金･学術創成研究費「弥生農耕の起源と東アジアー炭素年代測定による高精度編年体系の構築ー」（平成16～20年度）研究代表者
2004年度は研究の初年度であり，機材購入と人員採用などの研究体制の整備に努めた。その結果，今年度は500点余りの測定結果を得て，弥生時代の始まりが紀元前10世紀末であるというこれまでの研究結果を追認する成果を得た。そして，年代測定の結果を検討するために，福岡市と奈良県田原本町と岡山市で現地検討会を開いた。また，歴博では12月に9人の中国･韓国の研究者を招いて国際研究集会を実施した。さらに，中国の資料の年代測定を実施するために，北京に2度出張し，中国社会科学院考古研究所に年代測定研究への協力を依頼した。
この研究の広報活動としては2004年8月刊行の『季刊考古学』88号にAMS年代測定特集号を組み，その編集に協力した。また，歴博の研究広報コーナーであるプロムナード展示コーナーで「炭素14年代測定について」展示を行った。さらにニュースレター「弥生農耕の起源と東アジア」1号を刊行した。
（2）動物考古学の研究
今年度は，学術創成研究の実施に努力したため，動物考古学の分野の研究は余りできなかった。資料分析を行ったのは，茨城県東海村村松白根遺跡出土動物遺体と人骨約150体，東京都港区汐留遺跡IV地点出土動物遺体，愛媛県上黒岩遺跡の動物遺体，茨城県日立市河原子古墳の人骨，新潟県黒姫洞窟の動物遺体など約10遺跡に過ぎない。それらの分析結果については，発掘報告書に記載されている。
海外調査では，ロシア連邦沿海州･ザイサノフカ7遺跡の発掘調査（熊本大学文学部･甲元眞之代表の科学研究費による調査）に研究分担者として参加し，現地で動物遺体の分類を行った。

仁藤　敦史　NITO　Atsushi　助教授

1960年生【学歴】早稲田大学第一文学部日本史学専攻1982年卒業，同大学院文学研究科博士後期課程史学専攻1989年満期退学【職歴】早稲田大学第一文学部日本史学専攻助手(1989)，本館歴史研究部古代研究部門助手(1991)，本館歴史研究部古代研究部門助教授(1999)，総合研究大学院大学助教授文化科学研究科(併任：2002)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004)，国立大学法人総合研究大学院大学助教授文化科学研究科(併任：2004)【学位】博士（文学），早稲田大学，1998年11月【所属学会】歴史学研究会，木簡学会，史学会，日本史研究会，条里制･古代都市研究会【専門】日本古代史【主な研究テーマ】都城制成立過程の研究／ Establishment process of Japanese ancient capital cities，古代王権論／ Theoretical study of ancient sovereignty，古代地域社会論／ Ancient local societies

I　研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 共同研究「律令国家転換期の王権と都市」（代表　山中章）の館内事務および文献班の総括を担当した。報告書にむけて「平安初期単行法令目録」および「復元弘仁格史料集」を作成しつつある。個別テーマとしては，「桓武朝の王統意識と氏の再編」について検討を加え，総括の研究会で報告した。この共同研究の成果公開を目的として2007年度の企画展示「長岡京の光と影（仮称）」（代表　仁藤敦史）をエントリーした。
2) 企画展示「東アジア中世海道」（代表　小野正敏）の展示プロメンバーとして韓国･沖縄の調査に参加，宋版三史を中心とする漢籍について展示するとともに[2005]解題「宋版「三史」ー中世に渡来した漢籍ー」を図録「東アジア中世海道」に掲載した。
3) 「新収資料の公開」（代表　仁藤敦史）を担当し，『聆涛閣集古帖』の展示をおこない，その成果の一部は広報誌『歴博』131号に「歴史の証人」として執筆した。
4) 来年度の企画展示「古今･新古今の世界」（代表　吉岡眞之）の準備のため，古今集成立以前の状況について文学の場の変化，都市貴族の成立，和歌と漢詩の観点から8月18日の展プロで報告した。
5) 本年度企画展示「民衆文化とつくられたヒーローたち」（代表　高橋敏）の展プロとして『史記』遊侠伝などの展示をおこなうとともに，解題「『史記』遊侠伝について」を図録に掲載した。
6) 資料としては劣化が危惧される館蔵の水谷本「広開土王碑文拓本」の写真を高精細画像としてデジタル化し，釈文を付与した。デジタル化により釈文の比較検討が飛躍的に容易となり，研究および展示に活用することが可能となった。
7) 「正倉院文書複製事業」として宮内庁正倉院事務所に出張，4月に透過光撮影･原本照合，9月に色校，11月に撮影をおこなった。本年度は，続々修第四秩第八巻から第十九巻までの十二巻を撮影し，前年撮影分である続々修三秩第九巻から四秩第七巻までの九巻を完成させた。
8) 個人研究テーマ【都城制成立過程の研究】では，七世紀末の王子宮についてまとめた[仁藤2004.7]。【古代王権論研究】では，雄略期までのヤマト王権を概観し[仁藤2004.5]，宣命にあらわれた女帝の皇統譜上の位置づけを再検討した[仁藤2004.12]。駿河･伊豆地域を中心とする【古代地域社会論】では自治体史の通史編および「市史研究」執筆により，古代の伊豆･駿河国の概要を整理することができた[仁藤2005.3]。

二 教育活動

1) 教育

総合研究大学院大学助教授文化科学研究科日本歴史専攻（併任）
早稲田大学第一文学部非常勤講師（日本史特別研究）

2) 博物館教育

「先生のための歴博講座」総合展示解説（第一展示室），2004年8月9日

三 博物館活動

2) 歴史系総合誌『歴博』関係

「古代史研究とはなにか」『歴博』127号

3) 各種編集委員

「業務実績報告書」「評価書」編集

四 社会連携

1) 館外における各種委員

沼津市史編集専門部会（原始･古代部会）専門委員，焼津市史編集委員会（古代部会）編集委員

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「藤原仲麻呂と藤氏家伝の成立」髻華の会，2004年6月12日
「継体天皇の系譜と歴史的位置」古代を学ぶ会，2004年7月7日
「卑弥呼の王権－一代限りの「平和」－」『対論：邪馬台国の謎を解く』大東文化大オープンカレッジ，2004年10月1･8日
「古代王権の実体」『日本史研究の到達点：四･五世紀の日本列島を考える』，静岡SBS学苑パルシェ，2004年10月16日
「教科書の資料活用の仕方－最近の研究動向を踏まえて－」『実践講座』（山形市中学校教育研究会）山形市，2004年11月5日
「大化前代（律令制以前）」『再考･日本の歴史』（全5回）朝日カルチャーセンター新宿，2004年10月23，11月13･27日，12月11･25日
「律令国家の成立」『再考･日本の歴史』（全5回）朝日カルチャーセンター新宿，2005年1月8･22日，2月12･26日，3月26日
「皇位継承をめぐる政変－長屋王の変と光明立后－」『新視点･日本の歴史－八世紀前編』朝日カルチャーセンター横浜，2004年12月18日
「聖徳太子の時代」『日本古代史研究の到達点　第五期』朝日カルチャーセンター横浜，2005年1月15日

II 業績目録

2a) 論文

2004.5：「ヤマト王権の成立」（歴史学研究会･日本史研究会『日本史講座』1，pp.101-133，東京大学出版会）
2004.7：「嶋宮と香具山宮」（『国文学』49巻8号，pp.33-39，学燈社）
2004.12：「宣命」（『文字と古代日本』1支配と文字，pp.78-95，吉川弘文館）
2005.3：「益頭郡周辺の古代氏族」（『焼津市史研究』6，pp.1-22 ）

3c) 辞典項目

2005.2：『歴史学事典』王と国家12，「藤原京」「行幸」「桓武天皇」，弘文堂

4) 展示図録

2005.1：「新収資料の公開」リーフレット執筆編集
2005.3：「宋版「三史」－中世に渡来した漢籍－」企画展示「東アジア中世海道」図録，pp.178-181

5) 学会･外部研究会発表要旨

「継体天皇－その系譜と歴史的位置－」王権研究会，専修大学神田校舎，2004年4月10日
講演録「ヤマトタケル伝承と古代の焼津」（『焼津市史研究』5，2004年3月）

6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュースなど

2004.8：「討論」歴博フォーラム『王の墓と奉仕する人びと』山川出版社
研究者紹介「古代史研究とはなにか」歴史系総合誌『歴博』127，2004年11月
「東アジアの視点で，日本歴史を学ぶ」『歴史のしおり』2004年9月号，帝国書院，pp.2-4，2004年9月

III 研究状況･研究広報

(1)7･8世紀を中心とした都城制成立過程の研究，(2)古代王権論研究，および(3)駿河･伊豆地域を中心とする古代地域社会の分析という三つのテーマを個人研究の大きな柱として位置づけている。

とりわけ，昨年度は古代女帝の王統譜上の位置づけを中心に検討を加えた。大后（現大王の実母）または皇祖母（皇統譜上の母）という王族内部における女性尊長としての立場と，キサキ宮経営の実績により，執政能力が群臣に承認されれば，次期大王の指名や一時的な大王代行を経ることにより，女帝の即位は，有力な王族たる大兄･皇弟が若年の場合より優先されたとの結論を得た。すなわち「年齢･資質は性差に優先する」側面を確認することができた。

「日本国憲法」には「皇位は世襲のものであって，国会の議決した皇室典範の定めるところにより，これを継承する」（第二条）とある。そして，皇室典範には「皇位は，皇統に属する男系の男子が，これを継承する」（第一条）と定め，女性天皇の即位を明確に否定している。現在のところ法律上「女性は天皇になれない」ことになっている。

しかしながら，女帝の即位を否定する制度は伝統的なものではなく，現行の皇室典範が1889（明治22）年に発布された旧皇室典範の「大日本国皇位ハ祖宗ノ皇統ニシテ男系ノ男子之ヲ継承ス」（第一条）との規定を踏襲しているように，近代になってからつくられたものである。それどころか，歴史上では伝説的な神功皇后や飯豊皇女を除くならば，古代の推古天皇から近世の後桜町天皇まであわせて八人十代もの女帝が実在した。近代になって女帝は制度上で「廃止」されたのである。

「女帝」の存在を前提とする法の規定としては，すでに古代の養老継嗣令1皇兄弟条の本注に「凡皇兄弟皇子。皆為二親王一。〈女帝子亦同〉」と規定されている。これは，大宝令の注釈書である「古記」にも引用される本注で，すでに八世紀初頭の大宝令段階から「女帝」の規定が存在したことになる。明法家（古代の法律専門家）の解釈によれば，女帝の子および兄弟を親王とすることが明確に認められている。継嗣令という跡継ぎを規定した大宝令文のなかに「女帝」の即位を前提に，女帝の子･兄弟を皇位継承の可能性がある「親王」と規定していることは無視できない。法律上は明らかに女帝の実子を，諸王ではなく，即位が可能な親王･内親王として処遇しており，女系での継承を承認していることになる。この点は，いわゆる「女帝中継ぎ論」では説明できない。通説では，政争の原因であった皇位継承の問題を，天武･草壁･文武･聖武という直系継承の脈絡でとらえ，女帝はそのための「中継ぎ」にすぎないとする。近代において皇位継承を男系の男子に限ることを歴史的に主張しようとすれば，女帝は「中継ぎ」の為の君主であって，それはあくまで皇位継承の正常な状態ではないことを強調する必要があった。女帝即位のすべての事例を幼少なる皇嗣の成長を待つためと強弁し，女帝の即位を認めない政治的な立場から恣意的な歴史解釈がなされているといわざるをえない。明治以来の皇室典範は必ずしも日本の歴史と伝統を正確には反映していないことになる。通説のような父子関係だけに収斂する系譜意識は再検討の必要がある。

従来は嫡系（直系）継承を強調する反面で，女帝の即位は父子継承を実現する「中継ぎ」として軽視されてきた。天皇の即位あるいは譲位の宣命にはしばしば，「ミオヤ」と「ワガコ」という呼びかけ文言が頻出するが，これまでは単なる親愛の情を示すものとしてあまり注目されてこなかった。問題は，直接的な血縁的な関係にない者同士でも，「ミオヤ」と「ワガコ」という母子関係を強調する呼びかけを行っている点である。宣命では父子関係だけでなく母子関係も強調されている。「ミオヤ」という母の存在が重視されており，従来軽視されてきた女帝の皇統譜上の位置付けは再検討の必要がある。元明や元正のような女帝が立太子を経ないで即位できたことも皇統譜上の位置付けに関係すると考えられる。宣命で宣言される皇統譜の構造は直系的な父子関係だけでなく，父･母･子三者の関係を擬制を含めて規定するものであったと想定される。天皇位の継承と血縁関係が系譜意識において交錯しているという，近年の系譜分析で得られた結論とまさに符合する過渡期的なあり方により皇統譜が意識されていたことが明らかとなった。前天皇の意志により父･母･子の関係のなかに新天皇を位置付けること，これが即位を正当化する行為であり，宣命という漢文体詔勅とは異なる機能を持つ媒体により支配層に宣言し，承認されることが重要であったと考えられる。

来年度は，同様な視角から母方において渡来系の百済王氏を始祖と主張する桓武天皇の「双系的な位置」について考えてみたい。

春成　秀樹（秀爾）　HARUNARI　Hideki（Hideji）　教授

1942年生［学歴］岡山大学法文学部史学科日本史専攻1966年卒業，九州大学大学院文学研究科修士課程考古学専攻1966年中途退学［職歴］岡山大学法文学部助手(1966)，同講師(1971)，文化庁文化財保護部文化財調査官(1980)，国立歴史民俗博物館考古研究部助教授(1981)，同教授(1990)，総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004)［学位］博士（文学），九州大学，2003年3月［所属学会］日本考古学協会，考古学研究会，日本第四紀学会［専門］日本考古学［主な研究テーマ］旧石器～古墳時代の祭り･儀礼･社会組織の研究／ Social structure, festival, rite and custom of Palaeolithic to Kofun Period

Ⅰ　研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

［共同研究］

1) 国立歴史民俗博物館個別共同研究「愛媛県上黒岩遺跡の研究」研究代表者
愛媛県上黒岩遺跡･遺物の調査，美川村，7月16～17日。慶應義塾大学，12月17日。美川村，1月10～11日。

2) 国立歴史民俗博物館個別共同研究「神社祭祀の総合的研究」共同研究員

3) 文部科学省学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア」
縄文･弥生時代の年代測定試料の採取ほか，守山市･高槻市埋蔵文化財センター，5月12～13日。島根県埋蔵文化財センター･鹿島町歴史民俗資料館，5月16日。岡山県古代吉備文化財センター･倉敷考古館，5月17～18日。中国社会科学院考古研究所，中国国家博物館，王府井旧石器遺址，北京大学考古系，中国古動物博物館，6月28～30日。田原本町教育委員会･橿原考古学研究所，7月29日。滋賀県埋蔵文化財センター，7月30日。大阪府教育委員会調査事務所･伊丹市岩屋遺跡･伊丹市教育委員会口酒井事務所･茨木市文化財資料館･兵庫県埋蔵文化財収蔵庫･神戸市埋蔵文化財センター，8月17～20日。香川県埋蔵文化財センター，6月25日。東広島市埋蔵文化財センター，9月9日。北海道根室市歴史と自然の資料館，10月20～22日。中国社会科学院考古研究所，北京大学，周口店遺跡，琉璃河遺跡，11月3～5日。春日市奴国資料館･伊都国歴史博物館･福岡市埋蔵文化財センター･島根県埋蔵文化財センター，11月12～15日。田原本町教育委員会･川西市文化財資料館･宮川石器館，12月1～2日。島根県埋蔵文化財センター･松江市教育文化振興事業団･鳥取県埋蔵文化財センター，12月7～8日。名護市大堂原貝塚資料調査室･沖縄県立埋蔵文化財センター･沖縄県立博物館，2月2～4日。神戸市立博物館･明石市立文化博物館･岡山市埋蔵文化財センター･山陽町郷土資料館･

灘崎町歴史民俗資料館，2月18～20日
【個人研究】
1) 手形･足形付き土版の研究
北海道南茅部町埋蔵文化財調査室，函館市博物館，余市町水産博物館，北海道埋蔵文化財センター，5月26～29日
2) ヨーロッパ先史時代資料の調査
ドイツ：Halle Museum，Museum fur Vor-und Fruhgeschichie，Berlin，11月25～27日
3) ポリネシアの抜歯風習および初期鉄器の調査
ハワイ：Bishop Museum，Arizona Memorial Museum，2月8～10日
4) 北西海岸原住民の初期鉄器･銅器および銅板の調査
アメリカ：Portland State University，Portland Art Museum，Seattle Burke Museum
カナダ：University of British Columbia Museum of Anthropology，Royal British Columbia Museum，2月26日～3月6日

二 教育活動
1) 教育
総合研究大学院大学

三 博物館活動
3) 各種編集委員
「直良コレクション目録の作成」代表

四 社会連携
2) 講演
「年代研究の最前線」長野県埋蔵文化財センター講演会，長野県歴史館，4月11日
「弥生時代の始まり－新年代でどこが変わるか－」山陽学園大学2004年度公開講座，岡山県･山陽大学，6月5日
「考古学最前線－弥生時代が500年さかのぼる？－」香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館講演会，香川県文化会館，6月26日
「明石原人その後」兵庫県立考古博物館準備記念講演，播磨町中央公民館，7月31日
「弥生時代の新しい年代観」市川歴史カレッジ公開講演会，千葉県･メディアパーク市川，10月17日
「列島の中の出雲の青銅器文化を探る」荒神谷遺跡銅剣発見20周年記念特別講演会，島根県斐川町･アクティーひかわ，11月23日

II 業績目録

1) 著書
『弥生時代の実年代－炭素14年代をめぐって－』，(253頁) 今村峯雄と共編，学生社，5月
2a) 論文
「近畿･中国の実年代」(『弥生時代の実年代』pp.20-31，学生社，5月)
「炭素14年代と日本考古学」(『弥生時代の実年代』pp.103-113，学生社，5月)
「炭素14年代と鉄器」(『弥生時代の実年代』pp.148-160，学生社，5月)
「弥生時代の実年代－過去･現在･将来－」(『弥生時代の実年代』pp.234-249，学生社，5月)
「弥生時代の年代推定」(『季刊考古学』88，pp.17-22，雄山閣，8月)
「弥生時代の始まり－新年代でどこが変わるか－」吉備人出版，(『日本の文化　岡山の文化』pp.85-110，2月)
「「石の骨」の虚実」(『松本清張研究』6，pp.92-120，北九州市立松本清張記念館，3月)
Die Yayoi Zeit Eine allgemine Einfuhrung，Zeit der Morgenrote，Japans Archaologie und Geschichite bis zu den ersten Kaisern，pp.181-184，Reiss -Engelhorn - Museen. 8月
Das Aufkommen von bauerlichen Festen，Zeit der Morgenrote，pp.235-238，Reiss -Engelhorn- Museen. 8月
3a) 調査･発掘調査報告書
「大和市上野遺跡出土縄紋草創期土器付着物の14C年代」(『大和市史研究』31，pp.1-11，大和市，3月) (小林謙一ほかと共著)
「滋賀県守山市古高･経田遺跡出土土器付着物の14C年代測定」(『古高遺跡･経田遺跡発掘調査概要報告書』pp.45-48，守山市教育委員会，3月) (小林謙一ほかと共著)
「守山市下之郷遺跡出土試料の14C年代測定」(『下之郷遺跡』守山市教育委員会，3月) (小林謙一ほかと共著)
「滋賀県守山市下之郷遺跡出土木材の炭素14年代測定」(『下之郷遺跡』守山市教育委員会，3月) (坂本稔ほかと共著)
「唐古･鍵遺跡･清水風遺跡出土試料の14C年代測定」(『田原本町文化財年報』14，田原本町教育委員会，3月) (小林謙一ほかと共著)
「島根県山持遺跡出土試料の14C年代測定」(『山持遺跡Vol.1』pp.115-126，島根県教育委員会，3月) (小林謙一ほかと共著)
「島根県松江市田和山遺跡の年代」(『松江市田和山遺跡』松江市教育委員会，3月) (小林謙一ほかと共著)
「島根県鹿島町堀部第1遺跡出土炭化米の14C年代測定」(『堀部第1遺跡』pp.167-168，鹿島町教育委員会，3月) (小林謙一ほかと共著)
「東広島市黄幡1号遺跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定」(『黄幡1号遺跡発掘調査報告書』東

広島市教育委員会, 3月)（藤尾慎一郎･坂本稔･小林謙一ほかと共著）
「伊福定国前遺跡出土試料の14Cの年代」(『伊福定国前遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188, pp.230-233, 2月)（小林謙一ほかと共著）

3b) 自治体史

「旧石器時代の精神生活」(『千葉県の歴史』資料編, 考古4（遺跡･遺構･遺物）, pp.174-177, 千葉県, 3月)
「抜歯」(『千葉県の歴史』資料編, 考古4, pp.448-505, 千葉県, 3月)

5) 学会･外部研究会発表要旨

「弥生時代の実年代」日本考古学協会第70回総会研究発表会, 千葉大学, 5.23.
「弥生時代の実年代」『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』pp.73-76, 日本考古学協会, 千葉大学, 5.23.（今村峯雄ほかと共著）
「弥生時代の抜歯と墓地－山口県土井ヶ浜遺跡の分析－」日本情報考古学会第18回大会特別講演, 共立女子大学, 9.19.
「四国･中国･近畿の年代測定」炭素年代測定による弥生時代の検討･福岡研究集会, 11.13.
「縄文から弥生へ」『日本考古学－日本原始古代の変革と連続』シンポジウム, ベルリン日独センター, 11.24.
「中四国･近畿の年代」歴博国際シンポジウム「炭素年代測定による弥生時代の検討」国立歴史民俗博物館, 12.25.

7) その他

「考古学」(『イミダス』2005, 集英社, pp.1162-1169, 1月)
『縄紋時代史Ⅰ』(302頁), 林謙作著, 編集･あとがき, pp.301-302, 雄山閣, 5月
『縄紋時代史Ⅱ』(299頁), 林謙作著, 編集･あとがき, p.299, 雄山閣, 12月
『前方後円墳の研究』(564頁), 甘粕健著, 編集･編集後記, pp.563-564, 同成社, 12月
『戦争の考古学』(319頁), 佐原真著, 編集･編集付記, p.318, 岩波書店, 1月
『美術の考古学』(337頁), 佐原真著, 編集･解説･編集付記, pp.328-336, 岩波書店, 2月
『考古学への招待』(314頁), 佐原真著, 編集･編集付記, pp.312-313, 岩波書店, 3月

III 研究状況

(1) 弥生時代の実年代の研究

学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア」の一環として, 縄文晩期～弥生, 古墳初期の実年代を明らかにするために, 近畿･中国･四国の資料を集め, 測定に供した。いずれも共同研究者との共同作業である。その暫定的な実年代はつぎのとおりである。

縄文晩期：滋賀里III式･黒土B1式＝前14～前11世紀, 滋賀里IV式･前池式＝前11～前9世紀, 船橋式･沢田式（古）＝前9～前7世紀, 長原式･沢田式（新）＝前6～前5世紀, 弥生前期：前7～4世紀, 弥生中期：前4～前1･後1世紀, 後期：後1～3世紀, 古墳前期：3～4世紀

広島県黄幡Ⅰ遺跡で前800年までさかのぼる試料を入手することができ, 問題の弥生前･中期の年代を知るうえで較正曲線の日本版の作成が可能になった。

また, 最古古墳の年代を明らかにするために, 奈良県箸墓, 兵庫県西求女塚, 島根県神原神社古墳などの試料を得て, 作業に着手した。この時期は, INTCAL98を使うと実際の年代よりも約30年古くでる傾向があるので, 日本産の樹木を使って較正曲線の決定版を作成することが必要である。その作業も併行して研究グループで取り組んでいるので, いずれ結果がでることを期待できるだろう。

(2) 初期鉄器の研究

弥生時代の始まりに関して年代をはじめ見直しをおこなった結果, 鉄器も弥生中期に大陸伝来の鋳造鉄斧の破片を研磨して斧, 鑿, ヤリガンナなどに再加工したところから始まることがはっきりしてきた。そこで, 諸外国の状況について調査をおこなった。18世紀のハワイでは, ヨーロッパ船の鉄釘から鑿を, 樽の鉄箍（たが）から斧をつくっている。18世紀のマルケサス諸島やパラウでも, ヨーロッパ船から鉄片を得るために女性を提供するほど熱心であった。19世紀の台湾でも鉄片から皮なめし用の掻器をつくっている。これらはいずれも鉄片を砥石で研磨加工しており, 熱を加える作業を欠いている。石器時代から鉄器時代への移行にさいして, 周辺の鉄器文化の担い手から鉄片を入手して磨製石器を作る技術で鉄器を作ることが一つの型として存在すると考えてよいだろう。

(3) 手形･足形付き土版の研究

北海道の縄文早期末および東北･北海道の縄文後期に子どもの手形または足形を付けた土版が存在する。これまで見つかっている47点を集成･分類し, そのあり方から早期の例はすべて副葬されているけれども装身用と副葬用につくった両者があること, 後期の例はすべて包含層からの出土品で装身用であることを考え, 論文にまとめた。これまで発表してきた縄文･弥生時代の儀礼と呪術に関する論考を書き改めた諸論文とあわせて近刊の著書に収録して公にする予定である。

(4) 銅板の研究

アメリカ北西海岸原住民の銅板 Ceremonial Coppers は, ポトラッチのなかで至上の価値をもつ盾状の銅製品であって, ポトラッチの歴史的性格を探るうえできわめて重要な位置を占めている。銅板については, 日本ではマルセル･モースの『贈与論』やクロード･レヴィ－ストロースの『仮面の道』などの訳書で知ることができる。しかし,『文化人類学事典』(1987年) に, その項目がないように日本の学界では一般的な存在ではなく, その研究も皆無である。

海外の研究は100年以上の歴史をもっているけれど, これまでの研究では約400点のこっているかと予想される銅板関係の資料を集成･分類し, その様式的な変遷を明らかにすることなく, フランツ･ボアズなどの調査報告にもとづいて考察を進めていた。銅板そのものの研究は, キャロル･ジョプリングの業績（1989年）が代表的なものであるが, 銅板は伝世品であるために, 編年など考古学的な資料操作を彼女もおこなっていない。しかし, ジョプリングやウェイマンほか（1992年）による銅板の金属学的な分析結果は, かつて考えられていたようなコパ

ー川の自然銅を材料にして製作した銅板は存在せず，ヨーロッパ人との接触後にヨーロッパの帆船の船体を外装している銅の板を入手し加工したことを証明し，その出現は18世紀末が上限であることを明らかにしている。
私は「銅鐸と社会」(2002年) において，銅鐸を理解するための比較資料として銅板についてふれたことがあった。そこで，2年間の予定で資料を集成，エスニック･グループごとに編年しその特徴を明らかにするとともに文献を援用して実年代を与える作業に取り組むことにした。本年度はアメリカのBurke Museum (シアトル)，カナダのUBC Museum of Anthropology (ヴァンクーヴァー)，Royal British Columbia Museum (ヴィクトリア) の資料を実見し，実測図の作成，写真撮影をおこなった。それらに各種の公刊物の写真などを総合して，様式変遷のおおよそはつかんだものの，まだ資料的に欠落した時期が少なくないので，これからの作業でその個所をうめることにした。なお，レヴィーストロースは銅板の祖型をスワイフウェ仮面に求めているけれども，両者の形状はかけ離れているので，別の説を提出したいと考えている。

樋口 雄彦 HIGUCHI Takehiko 助教授

1961年生 [学歴] 静岡大学人文学部人文学科1984年卒業 [職歴] 沼津市明治史料館学芸員(1984)，同主任学芸員(1997)，国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授(2001)，総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(2003)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004) [学位] [所属学会] 明治維新史学会，洋学史学会，全国歴史資料保存利用機関連絡協議会，静岡県近代史研究会，静岡県地域史研究会 [専門] 日本近代史 [主な研究テーマ] 明治期の社会･文化と旧幕臣の動向／ Former Bakufu retainers

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 共同研究
[個別共同研究「佐倉連隊と地域民衆」] 研究代表者
[基盤研究「20世紀に関する総合的研究」(代表 安田常雄)] 共同研究員
2) 科学研究費
[基盤(B)(2)「平田国学の再検討－篤胤･銕胤･延胤･盛胤文書の史料学的研究－ (代表 宮地正人)」] 研究分担
3) 個人研究
旗本平野勝禮家文書，大原幽学没後門人･旧幕臣伊藤隼関係文書，沼津兵学校教授平岡芋作関係文書，沼津兵学校資業生千種顕信関係文書，同野沢房迪関係文書などの整理･撮影･解読を行った。また，個人研究の成果発表として，「静岡藩の御貸人」(洋学史学会例会，順天堂大学，4月11日)，「沼津兵学校と沼津版」(日本出版学会歴史部会例会，日本エディタースクール，6月25日) を行った。
4) 展示
[特別企画「明治維新と平田国学」展示プロジェクト委員 (進行管理責任者)]
展示を開設し，[2005.9]を展示図録に執筆した。また，平田神社 (平田篤胤子孫) からの資料購入の手続きを担当した。

二 教育活動

1) 教育
総合研究大学院大学日本歴史専攻助教授併任

三 博物館活動

3) 各種編集委員
『国立歴史民俗博物館研究年報』編集委員

四 社会連携

1) 館外における各種委員
沼津市史編集専門委員 (近現代部会)
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「幕末維新期の房総と駿河･伊豆」佐倉市民カレッジ，佐倉市立中央公民館，10月28日
元国士館大学教授四方一＊氏との対談「西周の人と業績」，第2回代戯館まつり記念講演会，沼津信用金庫本店4階ホール，3月26日

Ⅱ 業績目録

2a) 論文
2005.3:「旧幕府陸軍の解体と静岡藩沼津兵学校の成立」(『国立歴史民俗博物館研究報告』121，pp.199-223，国立歴史民俗博物館，3月)
2005.3:「立田彰信の『日記摘録』」(『沼津市博物館紀要』29，pp.1-25，沼津市歴史民俗資料館･沼津市明治史料館)
2b) 研究ノート

「静岡藩←→佐倉藩の御貸人･留学生－維新期の軍事･教育と人材交流」(安田常雄編『歴史研究の最前線 新しい近現代史研究へ』pp.41-47, 総研大日本歴史研究専攻･国立歴史民俗博物館, 9月)

3b) 自治体史･史料集など

「金谷の米騒動」,「大井川鉄道と茶業試験場」,「『金谷町誌稿』『金谷町誌』と『竹下村誌稿』」,「金谷町･五和村の青年団･少年団」,「昭和恐慌と金谷の茶業」,「昭和の戦争と金谷町･五和村」,『図説金谷町史』, pp.78-83, 金谷町役場, 1月

「第一章第九節　文化の民主的再出発」,「第二章第十節　花開く市民文化」,「第三章第九節　文化的要求の高まりと多様化」, (『沼津市史　史料編　現代』, 沼津市, 3月)

「海軍のエンジニア権田正三郎」(『沼津市明治史料館通信』78, pp.2-3, 沼津市明治史料館, 7月)

「沼津兵学校にあった伊能図」(『静岡県近代史研究会会報』312, pp.2-4, 静岡県近代史研究会, 9月)

「沼津兵学校関係人物の写真判定」(『沼津市明治史料館通信』79, p.3, 沼津市明治史料館, 10月)

「淘宮術と沼津兵学校の人脈」(『沼津市明治史料館通信』80, p.3, 沼津市明治史料館, 1月)

4) 展示図録

2005.9:「平田篤胤の遺品」(『明治維新と平田国学』本館特別企画図録, pp.12-15)

III 研究状況･研究広報

来年度刊行予定の本館個別共同研究「近代日本の兵士に関する諸問題の研究」, 同「佐倉連隊と地域民衆」の研究報告のため原稿を執筆した。同じく平成17年度刊行本館研究報告通常号の原稿を執筆した。個人研究として, 旗本平野勝禮家文書, 大原幽学没後門人･旧幕臣伊藤隼関係文書, 沼津兵学校教授平岡芋作関係文書, 沼津兵学校資業生千種顕信関係文書, 同野沢房迪関係文書などの整理･撮影･解読を行った。

日高　薫　HIDAKA　Kaori　助教授

1961年生 [学歴] 東京大学文学部第二類美術史学専修課程1985年卒業, 東京大学大学院人文科学研究科修士課程美術史学専攻1987年修了, 同博士課程美術史学専攻1990年単位取得退学 [職歴] 東京大学文学部美術史研究室助手(1990), 共立女子大学国際文化学部日本文化研究研究助手(1992), 国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手(1994), 国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授(2002), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004) [学位] 修士 (文学), 東京大学, 1987年 [所属学会] 美術史学会, 漆工史学会 [専門] 漆工芸史 [主な研究テーマ] 蒔絵を中心とする漆工芸史／ History of Japanese lacquerwork

I　研究･教育活動

一　研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 日本学術振興会科学研究費補助金･基盤研究(B)「南蛮屏風に関する総合的研究」の研究代表者, 三菱財団学術研究助成「南蛮美術に関する基礎的研究－南蛮屏風を中心として－」の研究代表者として, 南蛮屏風に関する以下の調査研究をおこなった。

サントリー美術館本の調査, 4月23日

在アメリカ作品の調査 (ピーボディ･エセックス博物館･ボストン美術館･デイトン美術館･クリーブランド美術館), 6月13～19日

金沢･本泉寺本調査, 6月25日

室生寺本調査, 7月18日

北方文化博物館本, 富山･佐藤記念美術館本調査, 7月22～23日

西蓮寺本調査 (名古屋市博物館), 8月4日

福井･大安寺本調査, 8月5日

神奈川県立歴史博物館本調査, 8月19日

東京国立博物館本･小林家本調査 (東京国立博物館), 8月20日

松岡美術館本調査, 8月27日

京都個人蔵本調査 (2件), 8月31日

京都個人蔵本調査, 10月9日

大阪青山歴史文学博物館本調査, 10月10日

天理大学附属図書館本調査, 11月19日

大阪市立美術館本調査, 12月17日

この研究の成果の一部は, 科学研究費報告書として3月に刊行したが, 調査の詳細, 研究の全貌は, 近々『南蛮屏風総目録 (仮題)』として公刊する予定である。

2) 本館基盤研究「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」(代表 久留島浩) の共同研究員として以下の調査研究をおこなった。

沖縄調査, 研究会 (浦添美術館), 12月11～12日

江戸後期の輸出漆器に関する調査 (パリ国立図書館), 2月8～17日

パリ国立図書館の調査結果を歴博研究報告に発表する予定である。

3) 紀州徳川家伝来楽器コレクションDBを作成し, 公開した。

4) 企画展示「海をわたった華花」の展示プロジェクト委員 (進行管理担当) として, 企画立案, 展示準備, 図録

執筆，演示等にたずさわった。第47回歴博フォーラム「海をわたった華花2004　人と植物の日本史」（2004年8月7日･国立歴史民俗博物館講堂）にパネリストとして参加した。
5) 特別企画「新収蔵品の公開」展示プロジェクト委員
6) 特別企画「古今新古今の世界（仮称）」展示プロジェクト委員
7) 企画展示「歴史のなかの鉄炮伝来」展示プロジェクト委員
8) 総合展示リニューアル第3室展示プロジェクト委員
9) 文部科学省科学研究費補助金･特別研究促進費「科学研究費補助金制度におけるプログラムオフィサー制度の構築に向けた調査･研究」（代表　蓮尾昌裕）の研究分担者として，PO制度･競争的研究資金に関わるセミナー等に参加した。
10) 日本学術振興会科学研究費補助金･基盤研究(B)「近世漆工芸基礎資料の研究－高台寺蒔絵を中心に－」（代表　小松大秀）研究分担者
11) 大学院生の指導をかねて，山本春正研究に関する以下の資料調査を行った。
名古屋市博物館調査，8月11日
関ヶ原･個人宅調査，9月4日
東京国立博物館調査，9月16日
静嘉堂文庫美術館調査，10月29日
東京･個人宅調査，11月141日

二　教育活動

1) 教育

国立歴史民俗博物館特別共同利用研究員受け入れにともなう修士論文執筆の指導（山本春正研究）
青山学院大学非常勤講師（芸術文化論）
学習院大学特別非常勤講師（修士論文指導･審査）

三　博物館活動

1) 歴博探検･くらしの植物苑

第79回くらしの植物苑観察会講師「菊と文様」，10月23日，於くらしの植物苑

2) 歴史系総合誌『歴博』関係

歴史系総合誌『歴博』編集委員長

4) 歴民研修委員，講師

平成16年度歴史民俗資料館等専門職員研修会講師，「調査研究と資料収集 －調査･収集･整理の方法－『美術工芸』紀州徳川家伝来楽器コレクションの調査研究（資料図録の作成）」，12月3日

四　社会連携

1) 館外における各種委員

文部科学省研究振興局学術調査官（併任）（8月より）
漆工史学会幹事

II　業績目録

2a) 論文

2004.6：「出島出入り商人の図案帳－幕末明治期の輸出漆器－」（『マキエ』No.24，pp.4-5，ポーラ文化研究所）

4) 展示図録

2004.7：「モモとウメ」「菊」（本館企画展示図録『海をわたった華花』pp.70，75･76，87-91，国立歴史民俗博物館）

6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュースなど

「歴史の証人　牡丹唐草文蒔絵雛道具」（歴史系総合誌『歴博』No.128，pp.2-3，国立歴史民俗博物館，1月）
「自著紹介『国立歴史民俗博物館資料図録　紀州徳川家楽器コレクション』」（歴史系総合誌『歴博』128号，p.29，国立歴史民俗博物館，1月）
「れきはく井戸端会議」（歴史系総合誌『歴博』No.129，国立歴史民俗博物館，p.31，1月）

7) その他

「草木の意匠　海をわたってきた植物（枝垂柳･牡丹･てっせん･朝顔･瓜･葡萄･菊･芭蕉･蓮）」（『華道』第66巻第4～12号，日本華道社，4～12月）
「自然風物のモダンデザイン（福良雀･雪華･波兎）」（『華道』第67巻第1～3号，日本華道社，1～3月）
「鑑賞席　海をわたった華花」（共著／辻誠一郎）（『文部科学時報』No.1540，p.82，文部科学省，7月）
「桃山ダイナミズム　大胆で明快なデザインへの転換」（（インタビュー）『和楽』2005年3月号，小学館，pp.132-133，3月）

III　研究状況･研究広報

以下にあげる3つが，現在の主たる研究課題である。
(1)　紀州徳川家伝来楽器コレクションの研究
歴博が所蔵する当該コレクションにかかわる研究は，昨年度，資料図録を刊行したことにより，当面の目的を達することができたため，本年度はこの成果を歴博DBとして公開するための作業を行った。さらに次年度は，特別企画として展示公開する予定である。
図録作成のための調査研究を進めるにつれて，腰を据えて取り組むべき課題がいくつかわき上がってきた。

楽器の材質･製作技法･銘記に関する科学的調査，コレクションに含まれる楽譜類の専門的な調査，付属文書から読み説くことのできる江戸時代後期の文化情報に関する研究などである。これらについては，将来，共同研究を立ち上げる予定である。

(2) 南蛮屏風に関する研究

科研費と三菱財団助成金の外部資金により2001年から着手した本研究は，本年度でいずれも研究を終了し，多くの成果を得ることができた。成果の公開は，出版助成金を獲得し，2006年に大型図録として刊行したいと考えている。来年度以降は，そのための執筆･編集作業をすすめる必要がある。

(3) 輸出漆器に関する研究

個人研究としての輸出漆器に関する研究は，継続しておこなっている。本年度は，主として館蔵肖像図蒔絵プラケットの原画に関する研究，イギリス･バーリーハウス所蔵の漆器に関する研究などをおこなった。これらの成果は，来年度以降，論文として発表するとともに，館蔵資料の収集･公開に役立てたい。また，洋風画，南蛮屏風と継続しておこなってきた南蛮美術研究の次なる段階として，南蛮漆器など工芸品を対象とした共同研究に着手すべく，科研費を申請中である。

平川 南 HIRAKAWA Minami 教授 機構理事

1943年生 [学歴] 山梨大学学芸学部社会科学科1965年卒業 [職歴] 大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事(2004) [学位] 博士 (文学) , 東京大学, 1990年 [所属学会] 木簡学会, 日本歴史学会, 歴史学研究会 [専門] 日本古代史 [主な研究テーマ] 古代地方社会の研究－出土文字資料研究を通して－

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 科学研究費 基盤研究(B)(2)「呪術･呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」(代表 小池淳一) 研究分担「古代における呪法と呪符

2) 新潟県立歴史博物館総合研究「日本古代『辺境』の様相」共同研究員

3) 新潟県立歴史博物館共同研究「出土文字資料から見た古代地方行政の研究」共同研究員

4) 神奈川地域史研究会･盤古堂付属考古学研究所主催シンポジウム「古代の祈り 人面墨書土器から見た東国の祭祀」基調講演「人面墨書土器と海の道」2004年5月16日，藤沢市民会館 第一展示集会ホール

5) 平成16年度古事記学会大会公開講演「ヤマトタケル“東征”の道－近年の考古学的成果から－」2004年6月12日，梅花女子大学澤山記念館

6) 上代文学会秋季大会シンポジウム「古代文学にとって東国とは何か」講演「古代東国史の実像」2004年10月23日，二松学舎大学九段キャンパス

7) 第二回風土記研究会講演「古代の里と村－『風土記』記載の村との関連－」2004年11月28日，学習院女子大学互敬会館

8) 立教大学東アジア地域環境問題研究所主催国際シンポジウム「歴史的コンテクストのなかにおける古代史料の『中心性』と『周縁性』」報告「古代日本地方社会と文字」2004年12月10･11日，立教大学太刀川記念館

9) 早稲田大学朝鮮文化研究所主催21世紀COEプログラム関連シンポジウム「韓国出土木簡の世界 II」2005年1月22日，早稲田大学文学部

10) 茨城県考古学協会シンポジウム「古代地方官衙周辺における集落の様相－常陸国河内郡を中心として－」報告「古代の文字から見た郡家と集落」2005年2月12･13日，茨城県立歴史館講堂

11) 21世紀COEプログラム (早稲田大学朝鮮文化研究所) 研究課題「楽浪地域文化の研究」共同研究員
上記研究課題に伴う韓国内出土木簡調査，2005年3月13～17日，国立扶余博物館，国立慶州文化財研究所，国立中央博物館

二 教育活動

1) 教育

総合研究大学院大学院生指導 (博士論文主査)

三 博物館活動

4) 歴民研修委員，講師

歴民研修講師

四 社会連携

1) 館外における各種委員

長野県立歴史館資料選定委員，福島県立博物館収集展示委員会委員，山梨県立博物館特別顧問，八千代市郷土博物館協議会委員，史跡徳丹城跡調査指導委員会委員，多賀城跡調査指導委員会委員，史跡胆沢城跡整備指導委員会委員，石川県津幡町加茂遺跡発掘調査委員会委員

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

千葉市民文化大学講座日本史学科「発掘された文字から古代社会を探る」(全4回) , 千葉市文化センター，5月26日，6月2･9･16日
第1回：7世紀後半の税制と地名表記－都に貢進された各地の付札の語るもの (奈良県石神遺跡)
第2回：「太寶元年辛丑」と記す木簡－糸島半島の製鉄･港湾の拠点 (福岡県元岡遺跡)
第3回：土地の売買を木に記す－出雲郡北部の重要拠点 (島根県青木遺跡)

第4回:墨書土器「鴨寺」・「深見駅」と古代の村－＊示札発見の加茂遺跡とその周辺（石川県加茂遺跡と北中条遺跡）
山梨県生涯学習推進センター主催，生涯学習推進セミナー講演「文字文化から見た古代中国･朝鮮･日本の関係」2004年7月2日，県民文化ホール会議室
市制施行80周年･合併40周年記念第10回市内遺跡発掘調査成果展記念講演会講演「古代の役所と文字資料」郡山市教育委員会，2004年8月1日，郡山市民文化センター
平成16年度氷上郡文化財審議委員研修会講演「木簡からみた古代の地域社会と行政システム－氷上郡を中心として－」氷上郡教育委員会，2004年8月22日，かいばら生涯学習の森
中野区あけぼの会講演「古代東北地方の軍団」2004年11月25日，中野区郷土資料館
中野区古代を学ぶ会「防人と鎮兵－古代東国兵士の姿－」2004年11月25日，中野区勤労福祉会館
学校法人渋谷教育学園渋谷中学高等学校進路講演「歴史学と自然」2004年11月29日，渋谷中高等学校講堂
佐倉地名研究会講演「よみがえる佐倉地方の地名－発掘された墨書土器から－」2004年12月18日，佐倉市立中央公民館
ちはら台学歴史講座特別講演「発掘された古代の暦と人々の生活」2005年1月15日，ちはら台コミュニティセンター

II 業績目録

1) 著書

平川南･沖森卓也･栄原永遠男･山中章編『文字と古代日本1 支配と文字』吉川弘文館，2004年
平川南･沖森卓也･栄原永遠男･山中章編『文字と古代日本2 文字による交流』吉川弘文館，2005年
平川南編『古代日本文字の来た道－古代中国･朝鮮から列島へ－』大修館書店，2005年

2a) 論文

「古代日本の文字世界」（菊池徹夫編『文字の考古学II』pp.73-118，同成社，2004年）
「古代地方社会と文字」（『美夫君志』69，pp.19-41，美夫君志会，2004年）
「総説 文字による支配」（平川南･沖森卓也･栄原永遠男･山中章編『文字と古代日本1 支配と文字』pp.1-7，吉川弘文館，2004年）
「古代越後国の磐船郡と沼垂郡」（小林昌二編『古代の越後と佐渡－環日本海歴史民俗学叢書12』pp.107-128，高志書院，2005年）
「総説 伝達･記録方法と外交･軍事」（平川南･沖森卓也･栄原永遠男･山中章編『文字と古代日本2 文字による交流』pp.1-5，吉川弘文館，2005年）
「木と紙」（平川南･沖森卓也･栄原永遠男･山中章編『文字と古代日本2 文字による交流』pp.70-107，吉川弘文館，2005年）
「古代日本社会における『情報』伝達」（学芸総合誌『環－歴史･環境･文明』20，pp.195-197，藤原書店，2005年）

2b) 研究ノート

「今，古代日本の文字文化を問い直す」（『本郷』55，pp.5-7，吉川弘文館，2005年）

3a) 調査･発掘調査報告書

「袖ヶ浦市上大城遺跡出土の墨書土器」（『袖ヶ浦椎の森工業団地内埋蔵文化財調査報告書（第2分冊）上大城遺跡II』pp.424-426，（財）君津郡市文化財センター，2005年）

III 研究状況･研究広報

中期計画の個人研究テーマとして掲げた「古代出土文字資料研究」の総括的な研究“古代日本と文字文化”について，『文字と古代日本』全5巻（吉川弘文館）のうち，私の責任編集の第1，2巻を刊行した。また，企画展『古代日本文字のある風景』の際に開催した歴博フォーラムを新たに加筆し，『古代日本文字の来た道－古代中国･朝鮮から列島へ－』（大修館書店）として刊行した。

もう一つの研究テーマ「韓国木簡研究」については，百済扶余の陵山里寺跡出土木簡および新羅慶州の月城垓字出土木簡を全点実見し，あらためて6世紀から7世紀前半にかけて，古代朝鮮の文書行政の実態を解明した。日本においては現段階でこの時期の木簡は未発見ではあるが，古代日本における初期の文書行政について一定の見通しを得ることができた。

さらにこれらの日本と韓国の出土文字資料調査研究から，新たな研究テーマとして，「古代東国論」と「古代朝鮮と日本における道の祭祀」を見出すことができたのは大きな収穫といえる。

廣瀬 和雄 HIROSE Kazuo 教授

1947年生 [学歴] 同志社大学商学部1970年卒業 [職歴] 大阪府教育委員会文化財保護課技師(1975)，大阪府立弥生文化博物館学芸課長(1991)，奈良女子大学教授文学部(1997)，奈良女子大学教授大学院人間文化研究科(1999)，国立歴史民俗博物館教授研究部(2004)，共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004.10より) [学位] 博士（文学），大阪大学，2004年 [所属学会] 考古学研究会，日本考古学協会 [専門] 日本考古学 [主な研究テーマ] 古墳時代政治構造の研究／ A Study of Political Structure in the Kofun Period.

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 文部科学省･科学研究費補助金 学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア」（代表 西本豊弘）の研究分担者として，国際研究集会を実施し，司会をつとめた（12月）。福岡（11月），奈良（12月），岡山（2月）などで研究集会を開催したほか，館内で研究会（5月，10月に3回，12月，1月）を実施した。また，試料採取をおこなった（2月，3月）。
2) 文部科学省･科学研究費補助金 特定領域研究（分担研究）「中世遺跡の保存と活用に関する基礎的研究」の研究代表者として，各種遺跡の現状や史跡の整備状況，あるいは博物館や資料館のありかた，埋蔵文化財行政の現状と問題点などの調査研究を実施した（6月，8月，11月，2月，3月）。また，文化財行政研究委員会を開催し（7月，9月，12月），「埋蔵文化財行政の理念」と題して研究発表をおこなった[2004.7]。
3) 奈良女子大学21世紀COEプログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」の「古代都市の前史」分担研究者として，研究会に参加した（9月，3月）。
4) 播磨考古学研究集会実行委員会が開催した『古代集落からみた播磨』の基調講演「古代集落研究の地平」と，討論司会を担当した（2月，兵庫県姫路市）。
5) 福岡町教育委員会が主催した，ふくおか歴史文化フオーラム『黄泉国再見－西山古墳街道－』で「『前方後円墳国家』を読む」と題したシンポジウムをおこなった（9月，富山県福岡町）。
6) 島根県古代文化研究センターが主催した神在月古代文化シンポジウム『検証･荒神谷遺跡－これまでの20年･こらからの20年－』で，「歴史のストックを活かした街づくり」と題した基調講演をおこない，討論司会を担当した[2004.10]（島根県松江市）。
7) 2004年歴史街道ウオーク＆トーク『古代王権の残影』で，「巨大前方後円墳の環大和政権配置」と題した講演をおこない，討論司会を担当した（10月，大阪府美原町）。
8) 考古学研究会の座談会「文化財問題を考える」のパネラーをつとめた（9月，岡山市）。
9) 古代和泉郡研究会で「和泉郡の古代寺院」と題した研究発表をおこなった[2004.12]（大阪市立大学）。
10) 奈良文化財研究所の専門研修で講師を担当した（12月，奈良文化財研究所）。

二 教育活動

1) 教育
奈良女子大学大学院人間文化研究科併任教授（10～3月）

四 社会連携

1) 館外における各種委員
文化審議会専門委員（文化財分科会），中世城館遺跡･近世大名家墓所等保存検討委員会委員，島根県教育庁古代文化センター･歴史民俗博物館･古代文化研究センター開設準備委員会委員，田和山遺跡整備検討委員会委員長，国史跡千早城跡･楠木城跡･赤坂城跡整備計画策定委員会委員，阪南市文化財保護審議会委員，東九州自動車道調査指導委員会委員，能勢町文化財保護審議会委員，加悦町史編纂事業監修･編纂委員会副委員長，和泉市史編纂委員会専門委員，大阪府立富田林高校運営協議会委員，国史跡･土塔整備委員会委員，泉南市文化財専門委員会委員
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「弥生都市 唐古･鍵の実像」，唐古･鍵セミナー，奈良県田原本町，6月26日
「弥生時代の都市」，朝日カルチャーセンター，奈良市，7月18日
「前方後円墳国家の成立」，朝日カルチャーセンター，奈良市，8月29日
「古墳時代の土器製塩」，茨木市文化資料館郷土史講座，大阪府茨木市，9月4日
「装飾古墳論」，古代を偲ぶ会，大阪市，11月20日
「前方後円墳国家論」，古代史セミナー，横浜市，11月26日
「古墳時代の他界観」，茨城県教育財団平成16年度埋蔵文化財講演会，茨城県常陸大宮市，1月29日
「前方後円墳とは何か」，古代史教室，大阪府羽曳野市，2月12日
「古代人の死後の世界」，大津市埋蔵文化財センター講演会，滋賀県大津市，2月26日
「前方後円墳とはなにか」，宇治市発掘調査報告会，京都府宇治市，3月12日
『考古学から探る邪馬台国』朝日カルチャーセンター，新宿（1月から3月の計5回）
3) マスコミ
2004年1月26日 文化放送のラジオ番組出演
その他，各新聞社からの取材や依頼に応じ，遺跡発掘調査のコメントを適宜おこなった。

Ⅱ 業績目録

1) 著書
2004.5：共著 廣瀬和雄･岸本道昭･宇垣＊雅･大久保徹也･中井正幸･藤沢敦『古墳時代の政治構造』336頁，青木書店
2004.12：編著 『畿内の巨大古墳とその時代』120頁，雄山閣出版
2005.1：編著 『前方後円墳とちりめん街道』240頁，昭和堂
2a) 論文
2004.5a：「弥生･古墳時代の集落と地域社会」（『日本史講座第1巻 東アジアにおける国家の形成』，pp.241-265，東京大学出版会，2004）
2004.5b：「序論」（『古墳時代の政治構造』，pp.1-14，青木書店，2004）
2004.5c：「畿内5 大古墳群の特質」（『古墳時代の政治構造』，pp.15-35，青木書店，2004）

2004.5d：「大和政権の変質－古墳時代中期の政治構造への試論」（『古墳時代の政治構造』，pp.249-273，青木書店，2004）
2004.8：「中世後期の村落－畿内とその周辺を中心として－」（『伊勢国司北畠氏の研究』，pp.166-187，吉川弘文館，2004）
2004.12a：「序論」（『畿内の巨大古墳とその時代』，pp.10-15，雄山閣，2004）
2004.12b：「畿内5　大古墳群の諸相」（『畿内の巨大古墳とその時代』，pp.16-26，雄山閣，2004）
2004.12c：「巨石墳と横口式石槨」（『畿内の巨大古墳とその時代』，pp.48-56，雄山閣，2004）

2b) 研究ノート

2004.4：「弥生都市をめぐって」（『環　Vol.17』，pp.146-147，藤原書店，2004）
2005.1：「転換期の考古学研究」（『日本歴史地名体系　歴史地名通信』49，pp.10-18，平凡社，2005）

3a) 調査･発掘調査報告書

2005.3：「総括」（『入谷西A20号墳発掘調査報告書－A11･12号墳試掘調査－』pp.46-48，奈良女子大学大学院人間文化研究科文化史論講座，2005）

3b) 自治体史･史料集など

2005.1：「鼎談」（『前方後円墳とちりめん街道』，pp.3-70，昭和堂，2005）
2005.1：「大型前方後円墳の語るもの」（『前方後円墳とちりめん街道』，pp.77-114，昭和堂，2005）

5) 学会･外部研究会発表要旨

2004.9：「『前方後円墳国家』を読む」（『黄泉国再見－西山古墳街道－』pp.2-9，福岡町教育委員会，2004）
2004.10：「歴史のストックを活かした街づくり」（『検証･荒神谷遺跡－これまでの20年･こらからの20年－』，pp.1-3，『しまねの古代文化』第12号，pp.69-110，島根県古代文化研究センター，2004）
2004.10：「巨大前方後円墳の環大和政権配置」（『古代王権の残影』，pp.12-20）
2005.2：「古代集落研究の地平」（『古代集落からみた播磨』，pp.1-12，播磨考古学研究集会実行委員会，2005）

6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュースなど

2004.7：「古墳時代の他界はどこか」（『歴博』pp.14-18，2004）

7) その他

2004.9：『緊急対談　丹後最古の王墓「日吉ヶ丘墳墓」出現の謎に迫る』（pp.1-71，加悦町･加悦町教育委員会）
「『全県歴史博物館』を」山陰中央新報，2004.10.4

III 研究状況･研究広報

全国各地の11名の古墳時代研究者で3年間，実施してきた共同研究の成果を『古墳時代の政治構造』（青木書店）として出版した。そのなかの序論でも触れたが，最近の考古学研究が「違い」の抽出とその意味づけに重点を置きすぎていて，「同じ」の側面が等閑に付されていることに危惧をおぼえている。それと関連するのであろうが，地域性や多様性ばかりを強調しすぎると，どうして人間はまとまって社会を形成するのかが見えにくくなる。つまり，異質性と同質性を統一した視座で論究していかないと，「もの」と「もの」の関係性は見えてこない。したがって，「統合」といった視座にもとづいた研究を，しばらくは深めていきたい。

いま，京都府の加悦町史の編纂をすすめているが，研究者のためだけの自治体史にならないよう，いくつかの事象をトピックスふうにとりあげて，全体の＜導入編＞ともなる『前方後円墳とちりめん街道』を作成した。町の歴史に興味関心をもっていただけるような構成にして，町当局から安価で町民に頒布してもらったが，そのなかで新しい自治体史をめざして，近代史と近世史の研究者と鼎談するなどして，一般の販売ルートにものせられるようにした。

また，畿内の古墳時代に焦点をあてた特集を組みたいとの要請で，『畿内の巨大古墳とその時代』を編集した。律令国家の時代に畿内とよばれた政治的まとまりは，地域的ひろがりの広狭はともかく，大筋では古墳時代にすでにできあがっていた。しかし，その実体についてまとまったものはほとんどなかったので，8名の古墳時代研究者に依頼して一書を編んだ。これによって，畿内の古墳時代の実像に大きく接近することができたと思っている。中央－地方の政治構造の確立が古墳時代の一つの特性であるが，どのようにしてそうした関係が成立したのか，何によって中央が中央たり得たのか，といったことについての研究を進めていこうと考えている。

古代国家といえば律令国家と同義で，古墳時代はその形成過程だ，とのとらえかたが一般化している。そうではなく，3世紀中ごろから7世紀初めごろの前方後円墳が築造されつづけた時代を，前方後円墳国家とみなす立場で，その実像を明らかにしていくことが，ここ数年の研究課題の一つである。そうした観点から，畿内5大古墳群や近江野洲地域の古墳群，あるいは紀伊岩橋千塚古墳群などの事例研究をつづけ，論文発表してきたが，これからは東国の首長墓の分析をとおしてテーマに迫っていきたい。ことに首長同士の政治的まとまりとしての地方政権，ついで地方政権相互のつながり，そして地方政権と中央政権のありかた，それらの時代ごとの変遷などをつうじて前方後円墳国家の特質を究明することが，しばらくの研究戦略である。

そうした研究にとって，異なる研究分野との協業は欠かすことができないが，大学共同利用機関としての国立歴史民俗博物館の役割は重要である。ことに，細分化された研究の現状をふまえ，歴史学（考古学）の有効性を高めていくための方途を模索しなければならないが，その一翼を担うべく基幹研究「古代における生産と権力とイデオロギー」（仮題）と，基盤研究「縄文･弥生集落遺跡の集成的研究」（仮題）の準備をすすめ，平成17年度から実施していく予定である。

いっぽう，考古学と不即不離の関係をもって進行してきた埋蔵文化財行政も，大きな転換期を迎えている。右肩上りであった「記録保存」のための発掘調査にかげりの見えてきたいま，膨大な量になった遺跡の情報と遺物，さらには保存された史跡の数々をどのように活用していくかが問われている。いいかえれば，歴史のストックを活かした街づくりに向けて，大地に遺された労働の痕跡としての遺跡と，それに故事来歴を付加する考古学研究，それらがあいまってこそ豊かな人間環境が形成される，といった観点からの考古学研究をすすめていきたい。

藤尾 慎一郎 FUJIO Shin'ichiro 助教授

1959年生〔学歴〕広島大学文学部考古学専攻1981年卒業，九州大学大学院文学研究科修士課程1984年修了，九州大学大学院文学研究科博士課程後期1986年単位取得退学〔職歴〕九州大学文学部助手(1986)，国立歴史民俗博物館考古研究部助手(1988)，同助教授(1999)，総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(2003)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004)〔学位〕博士（文学），広島大学，2002年10月〔所属学会〕考古学研究会，日本考古学協会，九州考古学会，East Asian Archaeology〔専門〕先史考古学〔主な研究テーマ〕先史時代の農業への転換／ Transition to Agriculture in prehistory，鉄生産の歴史／ The History of Iron Production

Ⅰ 研究·教育活動

一 研究·調査，成果公開方法としての報告·展示·国際シンポ·広報

1) 文部科学省学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア」（代表 西本豊弘）において，以下の調査をおこない，その成果を発表，公開した
〔調査〕
長崎県壱岐市原の辻遺跡弥生土器付着炭化物の採取，8月8～12日，壱岐
熊本県熊本市八の坪遺跡弥生土器付着炭化物の採取，8月21～27日，島原，熊本，筑後，福岡
東広島市黄幡1遺跡出土弥生土器付着炭化物，木製品の採取，9月9～10日，東広島
鹿児島県内出土縄文·弥生土器付着炭化物の採取，10月12～14日，鹿児島県国分
中国西周時代木槨の採取，11月3～5日，北京
「弥生農耕の起源と東アジア」福岡現地研究会，11月12～14日，福岡
沖縄県出土貝塚時代土器付着炭化物の採取，11月19～20日，那覇
奈良県田原本町唐古·鍵遺跡の年代測定，12月1日，奈良県田原本町
沖縄県大堂原貝塚，前原貝塚，阿良貝塚，トウバル遺跡，具志原貝塚，アンチの上貝塚出土遺物の調査，2月2～4日，名護，那覇
「弥生農耕の起源と東アジア」岡山現地研究会，2月19日，岡山
〔論文〕[藤尾ほか2005.3a]，[藤尾2004.11a]
〔学会報告〕[藤尾ほか2004.5]，[Fujio & Sakamoto 2004.6]，[藤尾2004.9]
〔国際シンポ〕[藤尾2004.12c]
〔研究集会〕[藤尾2004.9a]，[藤尾2004.11b]と[藤尾2005.2]
〔市民向け出版物〕[藤尾2004.5a]，[藤尾2004.5b]，[藤尾2004.8]，[藤尾2004.11a]，[藤尾2004.11c]
〔報告書〕[藤尾ほか2005.1]，[藤尾ほか3a]，[藤尾ほか3b]，[藤尾ほか3c]
〔展示·公開〕れきはくプロムナード（10月）。現在，2005年夏を目指して「縄文 vs 弥生」展を準備中。
2) 基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」（代表 今村峯雄）で，以下の調査をおこなった。
〔調査〕
大分·佐賀·福岡県内出土弥生農耕開始期の年代測定，2005年3月16～21日，大分，佐賀，福岡
石川県内出土弥生農耕開始期の年代測定，2005年3月24～27日，小松，金沢
3) 基盤研究「歴史展示における「異文化」表象の基礎的研究」（代表 久留島浩）で，近世の絵図に描かれた那覇を実際に踏査した。2004年12月11～12日。
4) 個別共同研究「前近代の東アジアにおける人·モノ·技術の交流とシステム」（代表 小野正敏）で，近世の絵図に描かれた那覇を実際に踏査した。2004年7月24日，那覇。
5) 基盤B(2)「東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究」（代表 齋藤努）で，以下の調査をおこなった。
慶尚南道古墳時代青銅器遺物の鉛同位体比に関する調査，2004年5月31日～6月5日，釜山，金海，大邱
岡山県内の古墳時代青銅器遺物の同位体比に関する調査，2004年12月4～5日，岡山市
6) 基盤B(2)「生涯学習時代における博物館教育·教育員養成および歴史展示に関する総合的研究」（代表 小島道裕）の成果を，[藤尾2004.12b]で発表した。
7) 国際日本文化研究センター共同研究「歴史的空間情報の解析·解釈法の研究」（代表 宇野隆夫）の成果を，[藤尾2005.2]で発表した。
8) 個人研究のテーマである鉄生産研究の成果を，[藤尾2004.6a]，[藤尾2004.9b]で発表した。
9) 個人研究のテーマである農耕開始期研究の成果を，[藤尾2004.4]，[藤尾2004.7b]，[Fujio2005.2]で学会報告した。
10) 2005年夏，国立科学博物館で開館予定の特別展示「縄文 vs 弥生」（歴博·科博·読売新聞社共同主催）のための調査をおこなった。
鳥取県青谷上寺地遺跡出土遺物の調査，11月25～26日，鳥取県埋蔵文化財センター，鳥取市
高知県田村遺跡，居徳遺跡出土遺物の調査，12月8～9日，高知県立埋蔵文化財センター，南国市，高知

二 教育活動

1) 教育
広島大学非常勤講師（弥生変革期の考古学），筑波大学非常勤講師（弥生変革期の考古学），総合研究大学院大学日本歴史専攻助教授併任

三 博物館活動

3) 各種編集委員

研究年報編集委員会編集長

四 社会連携

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「古墳時代の始まりをめぐる諸問題」朝日カルチャーセンター新宿，4月12･25日，5月8日
「弥生開始期の諸問題」歴博講演会，9月12日，国立歴史民俗博物館
「縄文論争－生業からみた縄文から弥生－」シルクロードの会，9月27日
「縄文論争」朝日カルチャーセンター新宿，8月21日
「日本人の起源」佐倉市根来公民館講座，10月2･23日，11月6日
「世界史の中で縄文をとらえ直す」国際縄文学会，10月16日
「弥生開始期の在来人と相互交流」東アジアの古代文化を考える会，1月22日
「AMS法の実際と弥生年代論」朝日カルチャーセンター横浜，1月27日

II 業績目録

2a) 論文

藤尾ほか2005.3a：「弥生時代の開始年代」（『総研大文化科学研究』1，総合研究大学院大学，東京（今村峯雄･西本豊弘と共著）印刷中）

2b) 研究ノート

2004.5a：「韓国･九州･四国の実年代」（春成･今村編『弥生時代の実年代－炭素14年代をめぐって－』，pp.6-19，学生社）
2004.5b：「弥生時代と鉄」（『ふぇらむ』9-6，pp.30-34，（社）日本鉄鋼協会）
2004.8：「新･弥生年代の試み」（『季刊考古学』88，pp.23-28，雄山閣出版）
2004.11a：「AMS－炭素14年代測定法が明らかにした日本の鉄の歴史」（『鉄と鋼』，pp.11-15，（社）日本鉄鋼協会）
2004.12a：「国立歴史民俗博物館の展示手法と理念」（『Museum Kyushu』76，pp.3-9，博物館等建設推進九州会議）
2004.12b：「ドイツの戦争展示－「国防軍の犯罪」展の経緯と背景－」（『歴史展示のメッセージ』pp.19-33，UM BOOKS）

3a) 調査･発掘調査報告書

藤尾ほか2005.1：『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』（平井昭司･天辰正義･穴澤義功と共編著）222頁，「鉄の歴史－その技術と文化－」フォーラム事務局
藤尾ほか2005.3a：「玉名市玉名条里跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定」（小林謙一･坂本稔と共著）（投稿済み）
藤尾ほか2005.3b：「壱岐市原の辻遺跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定」（小林謙一･今村峯雄･坂本稔･尾嵜大真と共著）（『壱岐原の辻遺跡総集編Ⅰ』長崎県文化財発掘調査報告書第30集，pp.297-308）
藤尾ほか2005.3c：「東広島市黄幡1号遺跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定」（小林謙一･坂本稔と共著）（投稿済み）

3c) 辞典項目

『歴史学辞典』13（辞典項目）「稲作」「農耕の始まり」，弘文堂（投稿済み）

5) 学会･外部研究会発表要旨

藤尾2004.4：「日本列島における農耕の始まり」『文化の多様性と21世紀の考古学』考古学研究会50周年記念国際シンポジウム予稿集，pp.62-73，2004年4月17日，岡山大学
藤尾ほか2004.5：「弥生時代の開始年代」『第70回日本考古学協会総会発表要旨予稿集』，pp.73-76，千葉大学，5月（春成秀爾･今村峯雄･坂本稔･小林謙一と連名）
藤尾2004.6a：「鉄の歴史－その技術と文化－」フォーラム「鉄関連遺物の分析評価」研究group･「前近代製鉄実見」研究group･第3回予稿集pp.44-55，2004年6月12日，弘済会館（四谷）
Fujio & Sakamoto2004.6：The Beginning of the Yayoi Period according to AMS-14C dating method. SEAA2004，19th Jun，Dijon Korea.
藤尾2004.7b：「縄文から弥生における稲作農耕の成立過程論－異文化受容の視点から－」日本学術会議シンポジウム『農業機械･施設･利用技術の『人類技術史』への文脈化と接合　予稿集pp.1-11，日本学術会議農業機械学連絡委員会，2004年7月9日，日本学術会議大会議室
藤尾2004.9a：「AMS－炭素14年代測定法が明らかにした日本の鉄の歴史」（社）日本鉄鋼協会学会･評価･分析･解析部会記念講演，2004年9月30日，秋田大学
藤尾2004.11b：「九州の炭素14年代測定」学術創成「弥生農耕の起源と東アジア」福岡研究集会，2004年11月13日，福岡市埋蔵文化財センター
藤尾2004.12c：「韓国･九州の年代測定」『国立歴史民俗博物館国際研究集会2004(3)』pp.9-21，2004年12月25日，国立歴史民俗博物館
藤尾2005.2：「GISにもとづく佐賀平野における縄文～弥生時代の遺跡分布」国際日本文化研究センター国際シンポジウム『世界の歴史空間を読む－GISを用いた文化･文明研究－』2月7日，京都
Fujio2005.2：The Beginning of the Agriculture in Japanese Islands. Garrard Lecture，10th，Feb. University of Cambridge，U.K.

6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュースなど

「黒井峯･西組遺跡」歴博友の会ニュースNo.116，p.6，11月

「弥生人の衣服」歴博友の会ニュースNo.117，p.6，3月
藤尾2004.9b：「鉄と出会った日本列島の人々」歴史系総合誌『歴博』126号，pp.6-9，9月
藤尾2004.11c：「炭素14年代にもとづく弥生時代の較正年代」学術創成ニュースレター1号，11月

III 研究状況･研究広報

昨年度までおこなってきた，縄文･弥生時代の高精度年代体系の構築に関する研究も，2004年度からは文部科学省･学術創成研究費「弥生農耕の起源と東アジア」（代表 西本豊弘）に更新し，5年間の計画で再スタートを切った。今年度もこの研究を重点的におこなった。その結果，次の2点のことがあらたにわかり，1点が課題として次年度に残された。

(1)弥生中期の較正年代

九州の弥生中期の較正年代の構築が目標の一つであった。これを達成するため，長崎県壱岐市原の辻遺跡出土土器の調査をおこない，炭素14年代測定をおこなった。

その結果，中期前半＝須玖Ⅰ式は前300～前200cal BC，中期後半＝須玖Ⅱ式は前200～前40cal BCの範囲内にそれぞれが収まることがわかった。この意味するところについて説明する。

考古学的に弥生時代の実年代を知る場合，実年代がわかっている考古遺物を使うことになるが，残念ながら弥生時代に実年代を知ることができる資料は，西暦57年に後漢の光武帝が，当時九州北部にあったと考えられている奴国の王に下賜したとされる金印ぐらいである。

考古学者は金印を弥生後期に比定しているので，金印から知りうる弥生中期の年代は，西暦57年より古いということだけである。そこで先学たちは，前漢で作られた鏡を利用することで中期以前の実年代を知ろうとした。

いわゆる前漢鏡は，九州北部の須玖式とよんでいる甕棺（高さが1mぐらいあり，棺専用品として作られた素焼きの土器）から出土することがわかっている。この鏡は中国で前1世紀中ごろ以前に作られたことがわかっているので，須玖式の下限が前1世紀中ごろより古くなることはない。もし古ければ前漢鏡を須玖式の甕棺に副葬することはできないからである。

ここに九州の弥生中期土器の1点が決まることになる。ここからいくつかの仮定にもとづいて前期や早期の年代を考えていくことになる。その一つが，すべての土器型式の存続幅は一定であるという仮定である。

私たちはまず開始年代について，500年さかのぼることを昨年指摘した。これは前期･早期の年代を導き出した先の仮定が間違っている可能性を意味する。

今年示した中期の較正年代は，前漢鏡が副葬される須玖式甕棺と一部併行する日常土器の須玖Ⅱ式が，前200～前40cal BCのなかにおさまることを意味する。これは須玖Ⅱ式の後半段階に前漢鏡がもたらされたことと，須玖Ⅱ式自体は鏡が副葬される100年ぐらい前から始まっていた可能性を示唆している。考古学的な推定実年代と較正年代の一致は，今年の研究で特筆すべきことの一つである。

(2)ヒエ･アワの存在を確認弥生土器の内面に付着した煮焦げのなかに，ヒエ･アワ起源のものがある可能性を確認した。

内面に付着した炭化物のδ13C値（炭素12と炭素13の比率）を測ると，－11～－13‰（パーミル）になるもののあることがわかってきた。早･前期無文土器の内面，中国･近畿の弥生中期土器の内面にみられるこれらの炭化物は，C4植物起源であることが明らかにされている。

C4植物とは，ヒエ･アワなどの雑穀類を指し，ドングリやコメなどのC3植物とは区別されている。1920年代に縄文農耕論が盛んになって以降，その作物として取り上げられることの多かったアワだが，未だ縄文時代からの発見例はなく，弥生時代になっても前期以降に，しかもわずかしかみられない。想定されるわりには実体が不明な栽培植物でもあった。

それが今回，炭化物というかたちではあるが見つかったのである。コメばかりで描かれることが多い弥生農業の実態を探る上で，今後，解明が望まれる分野の創成といえよう。

(3)縄文晩期の認定法

今後，問題になっていくと考えられるのが晩期の認定である。考古学ではこれまで，東北地方の大洞式と併行する時代を晩期と考えてきた。しかし大洞式が数をもって出土するのは近畿までで，九州ではわずかに浅鉢などの精製土器が伴う程度である。ある九州の土器群にこれらの大洞式が伴った場合，この土器群は大洞式より古くなることはないので，この土器群以降を晩期と認定してきた。

ここに較正年代が加わるとどうなるのか。大洞式でもっとも古いB1 式の較正年代は，1250cal BCといわれているが，これまで晩期初頭といわれている九州の土器型式には，これより古いものがあることを，私たちは確認している。この扱いをどうするかである。1250cal BCより下限が古い土器型式は，完全に大洞式以前に位置づけられるので，縄文後期ということになるが，下限が新しい土器型式は議論が必要である。

この問題を考える上で参考になるのは弥生前期の認定である。遠賀川系土器が分布する近畿では，九州北部より約200年遅れで始まることを確認している。遠賀川系土器が分布しない東北北部では，水田が出現する前400 年ごろを前期末と考えているから，九州北部との差は約400年となる。つまり指標となる土器が分布しないところでは，特徴的な文化要素をもって弥生文化の始まりを決めていることになる。

縄文研究はいまだ土器型式でしか時期区分を行っていない。今後は文化の実態としても晩期をどう認定するのか，考えていくべきであろう。

松尾 恒一 MATSUO Kouichi 助教授

1963年生 [学歴] 國學院大學文学部日本文学科1985年卒業，國學院大學大学院文学研究科博士後期課程1995年修了 [職歴] 國學院大學文学部助教授(1999)，國學院大學日本文化研究所助教授(兼担1999)，国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授(2002)，総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(2004)，大学共同

利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004)〔学位〕博士（文学），國學院大學，1995年〔所属学会〕芸能史研究会，民俗芸能学会，日本民俗学会，口承文芸学会，説話･伝承学会，儀礼文化学会〔専門〕儀礼･芸能史，民俗宗教〔主な研究テーマ〕民間宗教者の神霊観と祭儀の研究，職能者の祭儀と呪術，南都寺社の儀礼研究

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 共同研究「宗教者の身体と社会」（代表 松尾恒一），及び科研「呪術･呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」（代表 小池淳一）の一環として行った高知県の民間宗教の民俗調査･文献資料調査に基づく成果を反映させて，博物館展示解説映像，アップで見る展示室「神仏･精霊の姿とかたち」の韓国語版･英語版の制作を行った。
2) 韓国国立民俗博物館との相互交流の一環としての，韓国国立博物館における共同研究会において「芸能の近代」を発表した[2005.3]。
3) 韓国国立民俗博物館との相互交流の一環としての，韓国国立博物館における共同研究会において，松尾が制作担当した博物館展示解説映像，アップで見る展示室「神仏･精霊の姿とかたち」韓国語版の公開上映を行った。
4) 共同研究「宗教者の身体と社会」（代表 松尾恒一），及び科研「呪術･呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」（代表 小池淳一）の一環として行った奄美大島の建築儀礼の調査･文献資料調査に基づく成果を，木曜会（2004.6.14，慶應義塾大學）において発表した。
5) 共同研究「宗教者の身体と社会」（代表 松尾恒一），及び科研「呪術･呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」（代表 小池淳一）の一環として行った高知県の民間宗教の民俗調査･文献資料調査に基づく成果を，第7回「東洋思想と心理療法」研究会（2005.3.19，駒澤大学）における特別講演で発表した。
6) 2002年度の民俗研究映像「物部の民俗といざなぎ流御祈祷」（代表 松尾恒一）の一部を，第7回「東洋思想と心理療法」研究会（2005.3.19，駒澤大学）における特別講演で上演した。
7) 共同研究「宗教者の身体と社会」（代表 松尾恒一），及び個人研究「南都寺社の儀礼研究」の調査･研究の成果を，花園神社（東京新宿）の「祈りのかたち」特別講演[2004.4]において発表した。
8) 科研「呪術･呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」（代表 小池淳一）の一環として行った愛知県東栄町の民俗調査の成果を，花園神社（東京新宿）の「祈りのかたち」特別講演[2005.1]において発表した。
9) 共同研究「宗教者の身体と社会」（代表 松尾恒一），及び科研「呪術･呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」（代表 小池淳一）の一環として行った高知県の民間宗教の民俗調査･文献資料調査に基づく成果を，第19回国際宗教学宗教史会議世界大会（2005.3.28，高輪プリンスホテル）で発表した。
10) 2002年度の民俗研究映像「物部の民俗といざなぎ流御祈祷」（代表 松尾恒一）の一部を，第19回国際宗教学宗教史会議世界大会（2005.3.28，高輪プリンスホテル）で上演した。
11) 共同研究「宗教者の身体と社会」（代表 松尾恒一），及び科研「呪術･呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」（代表 小池淳一）の一環として行った高知県の民間宗教の民俗調査･文献資料調査に基づく成果を，『儀礼文化』34～36号(2004.4～2005.3)に発表した。
12) 共同研究「宗教者の身体と社会」（代表 松尾恒一），及び科研「呪術･呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」（代表 小池淳一）の一環として行った高知県の民間宗教の民俗調査･文献資料調査に基づく成果を，『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集(2005.3)に発表した。
13) 個人研究「南都寺社の儀礼研究」の成果としての論考を，院政期文化論集4『宗教と表象』[2004.10]に発表した。
14) 個人研究「南都寺社の儀礼研究」の成果としての論考を，『薬師寺』142号[2004.12]に発表した。
15) 個人研究「芸能史，民俗宗教」の成果としての論考を，『日本民俗学』239号[2004.8]に発表した。

二 教育活動

1) 教育

神田外語大学非常勤講師（日本文化論），國學院大學非常勤講師（儀礼文化論，伝承文学演習）

三 博物館活動

展示解説映像，アップで見る展示室「神仏精霊の姿とかたち」英語版，及び，韓国語版の制作

四 社会連携

1) 館外における各種委員

千曲市武水別神社大頭祭調査委員，渋谷区無形文化財調査会調査委員

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「大和古寺の儀礼と文化」，花園神社（東京新宿）「祈りのかたち」特別講演(2004.4)
「印と“鬼は外”の起源－古代寺院の正月行事－」，浅草寺仏教文化講座，新宿明治安田生命ホール（東京新宿），(2005.11.26)
「奥三河の花祭り」，花園神社（東京新宿）「祈りのかたち」特別講演(2005.1)
「高知県山間部の神霊観念と民間呪術－いざなぎ流祈祷－」，第7回「東洋思想と心理療法」研究会(2005.3.19，駒澤大学)

Ⅱ 業績目録

2a) 論文

2004.4:「資料報告，小松豊孝太夫記　いざなぎ流御祈祷資料（四）病人祈祷法（一）」（『儀礼文化』34号，pp.85-96）
2004.8:「芸能－二十一世紀に「民俗芸能」研究は可能か？－」（『日本民俗学』239号，pp.136-161）
2004.10a:「院政期法会論 院御願寺修正会をめぐって」（院政期文化研究会編，院政期文化論集4『宗教と表象』，pp.7-35，森話社）
2004.10b:「資料報告，（五）病人祈祷法（二）小松豊孝太夫記　いざなぎ流御祈祷資料」（『儀礼文化』35号，pp.89-96）
2004.12:「薬師寺慈恩会－神仏習合の作法と支える人々－」（『薬師寺』142号，pp.38-44）
2005.3a:「芸能研究の近代」（韓国国立民俗博物館『日本の民俗学･韓国の民俗学 I』，pp.97-110（日本語），pp.51-68（韓国語訳））
2005.3b:「資料紹介，小松豊孝太夫記　いざなぎ流御祈祷資料『日月祭，託宣作法』」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第121集，pp.225-255）
2005.3c:「資料報告，小松豊孝太夫記　いざなぎ流御祈祷資料（六）病人祈祷法（三）」（『儀礼文化』36号，pp.87-97）

2c) 書評

2004:「書評，林淳･小池淳一編『陰陽道の講義』」（『宗教史研究』）

3a) 調査･発掘調査報告書

2004.3a:『渋谷代々木囃子調査報告』（渋谷区教育委員会の諮問報告書，花部英雄･小野寺節子･内藤浩誉と共著）
2004.3b:『渋谷餅搗き歌調査報告』（渋谷区教育委員会の諮問報告書，花部英雄･小野寺節子･内藤浩誉と共著）

3c) 辞典項目

『神道史大辞典』（辞典項目）「神事芸能」「来訪神」「まれびと」「諸手船神事」，カラーグラビア「祭（賀茂祭／春日若宮御祭り／祇園祭／日吉山王祭／厳島管絃祭）」，吉川弘文館，2004.6

5) 学会･外部研究会発表要旨

2005.3:「折口信夫の芸能論－継承と可能性」（平成14～16年度科学研究費補助金研究成果報告書『日本近代と折口民俗学形成過程の研究』pp.95-104，代表　小川直之，國學院大學文学部発行）

7) その他

「南都寺院の儀礼と文化」（『神道時事問題研究会』）

III 研究状況･研究広報

『日本民俗学』における近年の研究動向の一項として，民俗芸能･芸能史を中心とする近年の研究について私の立場より整理･分析したが，現代にとって“民俗”とは何か，“民俗研究”に何が求められているか考えさせられるとともに，自身の研究の方法を再確認する大きな機会となった。

国際交流として7月にシンポジウム「日韓口承文芸の比較研究」に参加し，12月･3月に韓国国立民俗博物館との相互交流を行った。3月の韓国国立博物館においては「芸能研究の近代」を発表し，日本近代における国家の芸能政策から芸能が研究の対象として立ち上がってくる歴史について考察した。その際，韓国の研究者より，昭和期前後に日本の国家の芸能政策と照応するような動向が韓国においても認められるとのコメントを受け，国際的な討議の意義を実感するとともに，近代における国家･行政やマスメディアの形成と文化との関係について東アジア全域における動向をも視野に収めて捉えなおすことの必要性を感じた。

また，韓国ソウル大学にて，洪潤植氏（韓国東国大学名誉教授），尹光鳳氏（広島大学教授）とともに，古代～中世における日韓それぞれの仏教儀礼と芸能との関係について討議を行ったが（3月），これまでの日本における仏教儀礼と芸能に関する自身の研究を，東アジア的な視点より研究を深めるべきことを痛感させられた。

昨年度制作した博物館展示資料の解説映像「神仏･精霊の姿とかたち」の英訳版･韓国語版の制作を本年度行った。英訳･韓国語訳については，私も協力したが，異なる文化体系に置き換えて日本の神霊観念を説明することの難しさを実感した。

韓国語版については，韓国国立民俗博物館の共同研究において上映することができたが，概ね好意的な評価･感想を得ることができ，映像･音声－文字に置き換えることが困難な情報－によって伝えることの意義を実感した。

私が代表となる館内共同研究「宗教者の身体と社会」，及び小池淳一代表の科研「呪術･呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」において，高知県の民間宗教の民俗調査･文献資料調査を継続的に行ってきた。今後の研究の土台ともなる基礎資料の翻刻紹介等を順次行っているが，神霊観念が反映された造形として興味深い祭具“御幣”の展示等による，研究者，及び一般に向けての成果の公開をも考えている。

宮田　公佳　MIYATA　Kimiyoshi　助手

1966年生［学歴］千葉大学工学部画像工学科1990年卒業，千葉大学大学院工学研究科修士課程画像工学専攻1992年修了，千葉大学大学院自然科学研究科博士後期課程情報システム科学専攻2000年修了［職歴］三菱電機株式会社･生活システム研究所･情報技術総合研究所(1992)，国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手(2001)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手(2004)［学位］博士（工学），千葉大学，2000年3月［所属学会］日本写真学会，日本光学会，画像電子学会，The Society for Imaging Science and Technology［専門］画像工学，情報工学［主な研究テーマ］博物館資料のディジタルイメージング手法及びその応用に関する研究

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基盤研究「歴史資料の材質･製作技法と生産地に関する調査研究」（代表　宇田川武久）で，画像工学的手法に基づいた鉄炮の自動分類手法の基礎研究及び，鉄炮の有する色彩情報と形状情報とに基づいた鉄炮流派毎の特徴抽出と，その特徴に基づいた流派同定に関する基礎検討を行い，基盤研究発表会において2件の報告を行った（2005年2月開催）。また関連研究機関であるフィンランドヨエンスー大学に赴き，情報収集および本研究テーマに関する意見交換と文化財の色彩情報測定手法に関する基礎実験を行った。この成果は，2005年6月にヨエンスー大学において開催される国際学会において発表する予定である。

2) 基盤研究「民俗研究映像の資料論的研究」（代表　内田順子）で，民俗映像などの映像資料のディジタルアーカイブ構築について検討し，さらに米国において開催された国際学会IS&T/SPIE Electronic Imaging Conference において技術動向調査と関連研究の調査を行った。この成果は同研究会（2005年2月開催）において報告した。

3) 文科省基盤研究(A)(1)課題番号14209008「第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究」（代表　黒田日出男）に研究協力者として参画し，画像技術に基づいた屏風資料の提示方法および表示画像の熟覧に基づいて入力された情報活用方法に関する検討に加わった。

4) 個人研究テーマ「古文書ディジタルイメージング技術の構築」で，ディジタルカメラを用いた文書や絵図等の歴史資料の現地調査手法を検討し，新潟県紫雲寺潟開発に関する近世文書･絵図調査に適用した。また，巨大絵図分割撮影装置の設計と試作を行い，実際に新潟県新発田市立図書館蔵の絵図に対して調査を行い，その有効性を確認した。これらの成果を，日本写真学会画像保存セミナーにおける講演[2004.10]，東京大学史料編纂所画像解析センター通信[2004.4]によって報告した。

5) 個人研究テーマ「文化財解析のための画像計測に関する基礎研究」で，汎用的なディジタルカメラによって撮影された画像から，文化財の固有の色彩情報である分光反射率を高精度で推定するための手法を検討した。この成果として，連名著者の一人としてとして国際会議において報告した[2004.4：Laamanen]，[2004.10：Pekka Stigell]。Hannu Laamanenによる報告は，発表学会において最優秀ポスター発表賞を受賞した。また Pekka Stigell による報告では，発表学会の若手研究者に送られる最優秀発表賞を受賞した。

6) 個人研究テーマ「歴史情報の可視化技術に関する基礎研究」で，展示室において展示されているジオラマ（復元模型）と，その制作の典拠となった屏風資料とを関連づけながら，ジオラマに登場する人物の解説や，利用者の能動的な情報獲得を推進するための情報提供方法を検討した。この検討結果に基づいて，館内外関係者の多大なる協力を得て，ジオラマ解説コンテンツとして第2展示室において2005年4月から公開を開始する予定である。

二 教育活動

1) 教育

フィンランドヨエンスー大学コンピュータ科学学部修士課程学生修士論文指導教員(Supervisor)(Alexey Andriyashin, Compression of Digital Archive Image, University of Joensuu, Finland, Department of Computer Science, Master's Thesis, 2004)

2) 博物館教育

情報機器を用いた教育コンテンツ「ジオラマ解説　京都の町並みと人々」の開発に技術担当として参画。主担当者である小島道裕助教授，研究支援推進員石橋志津氏らと共同で電子コンテンツの開発を行った。

三 博物館活動

2) 歴史系総合誌『歴博』関係

研究者紹介執筆[2004.7]

4) 歴民研修委員，講師

2004年度歴民研修講師。ディジタル画像の基礎から博物館活動における応用事例までを講義。

四 社会連携

1) 館外における各種委員

日本写真学会 サマーセミナー実行委員

The Society for Imaging Science and Technology, Archiving Conference, Program Chair - Asia

Ⅱ 業績目録

2b) 研究ノート

2004.4：宮田公佳･久留島浩「巨大絵図分割撮影装置の試作」（『東京大学史料編纂所画像解析センター通信』第25号，pp.9-18）

2004.12：宮田公佳「画像再現･視覚」（『画像電子学会』Vol.33，No.6，pp.948-950）

5) 学会･外部研究会発表要旨

2004.5：Kimiyoshi MIYATA, Issues and Expectations for Digital Archives in Museums of History：A View from a Japanese Museum, Proc. IS&T Archiving Conference, pp.108-111, San Antonio, USA, 2004

2004.10：宮田公佳，博物館におけるディジタルイメージング技術の応用について，日本写真学会画像保存セミナー要旨集，pp.8-13，東京，2004

2004.4：Hannu Laamanen, Timo Jaaskelainen, Markku Hauta-Kasari, Jussi Parkkinen, Kimiyoshi Miyata, Imaging Spectrograph Based Spectral Imaging System, CGIV（IS&T's Second European Conference on Color in Graphics, Imaging, and Vision, Aachen, Germany, pp.427-430, 2004

2004.10：Pekka Stigell, Kimiyoshi Miyata, Markku Hauta-Kasari, Wiener Estimation Method In Estimation Of Spectral Reflectance From RGB Images, Proc. of the 7th Int. Conf. on Pattern Recognition and Image Analysis：New Information Technologies, Vol.2, pp.398-401, St. Petersburg, Russia, 2004

6) 歴史系総合誌『歴博』, 友の会ニュースなど

2004.7：「研究者紹介－博物館に働く画像屋の自己紹介」(歴史系総合誌『歴博』125号, pp.25-26)

7) その他

日本写真学会サマーセミナー実行委員

The Society for Imaging Science and Technology, Archiving Conference, Program Chair - Asia

III 研究状況･研究広報

主に現地史料調査での利用を想定した古文書ディジタルイメージングシステムの構築では, 種々の検討を重ねた結果, 運用形態としてひとつのまとまりをみせるようになった。基本的には従来から用いられている撮影システムを利用し, ディジタルシステムとなっても可能な限り従来システムとの互換性や操作性の共通化を実現できるように配慮したシステムとなっている。今後, 歴史研究者ら自らの手によって実際の運用を重ねることで, 改良すべき課題が見いだされることを期待している。

歴史像を可視化するための一つの手法として, ディジタルコンテンツの利用を検討している。例えば, 展示室にて実際に展示されているジオラマ(復元模型)を解説するためのコンテンツを, 単なる解説コンテンツにとどめず, 多様な歴史情報を結びつけるためのリンケージとして, あるいは歴史資料と博物館利用者とを結びつけるインターフェースとして位置づける等により, 歴史像の多様性の表現や利用者のニーズに応じた情報提供の方法を検討している。既に展示室で稼働している三内丸山遺跡復元模型の解説コンテンツに続き, 本年度では京都の町並みの復元模型の解説コンテンツの制作に技術担当として参画した。本コンテンツでは, 復元模型作成において典拠となった洛中洛外図屏風との対応関係をコンテンツ利用者に画像情報として提供したり, 利用者自らの興味と操作によって, 自らが能動的に知識を獲得できるように機能及びデザインに工夫を凝らしている。情報伝達手段として文字あるいは文書は非常に重要であるが, 絵画資料や画像情報に基づいたビジュアルコミュニケーションもまた重要であり, さらにはそれらをどのように連携させるかが最重要であると考えている。今回制作したディジタルコンテンツは, それを具現化するためのヒントを与える物としても意義深く, 展示室での運用を通して有効性を検証したい。また本コンテンツの制作にはホームページ等で利用されているものと同じ仕組みを用いているが, 作成したページ数は総計で780ページを越えている。このような規模のコンテンツでは, どのページにリンクを設定し, またどのようにグループ化するかなど, 情報の構造化にも十分な配慮が必要となり, 工学的にも研究対象となり得ると考えている。本コンテンツの作成にあたり, 全体構想, 写真撮影, ページデザイン, データ管理, 英語対応など, 管理部, 研究部, 研究支援推進員, 補助業務など多くの方々の協力を頂いたことで, 完成に至ったことも記しておきたい。

村木 二郎 MURAKI Jiro 助手

1971年生〔学歴〕京都大学文学部史学科考古学専攻1995年卒業, 京都大学大学院文学研究科修士課程1997年修了, 京都大学大学院文学研究科博士後期課程1999年中退〔職歴〕大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部考古研究系助手(2004より)〔学位〕〔所属学会〕史学研究会, 鋳鏡研究会, 墓標研究会, 日本考古学協会〔専門〕日本考古学〔主な研究テーマ〕日本社会の宗教的動向／ History of Japanese religions

I 研究･教育活動

一 研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 文科省基盤(A)(2)「前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義」(代表 小野正敏)で, 韓国･沖縄･石見･五島･奄美･対馬･博多･堺で調査をおこない, その成果を企画展「東アジア中世海道」(代表 小野正敏)で公開した。

2) 個別共同研究「律令国家転換期の王権と都市」(代表 山中章)で, 三重県斎宮で調査をおこなった。また共同研究会で関連する報告をおこなった。

3) 文科省若手(B)「経塚･墓地･寺社が形成する宗教空間の考古学的研究」(代表 村木二郎)で, 山形県仏向寺墓地の調査をおこなった。調査は継続中である。

4) 企画展示「東アジア中世海道」事務代表

二 教育活動

1) 教育

武蔵大学非常勤講師(考古学)

三 博物館活動

3) 各種編集委員

『研究報告』編集委員

4) 歴民研修委員, 講師

歴民研修講師

四　社会連携
2) 館外講演
「東日本の経塚の地域性」企画展記念講演会，山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館，11月14日

II　業績目録

2a) 論文
「経塚の拡散と浸透」(『中世の系譜』pp.43-64，高志書院，2004年)
「中世の出土文字資料－経塚の可能性－」(『出土文字資料の新展開』，吉川弘文館，2005年)
4) 展示図録
『東アジア中世海道』展示図録全体編集 (小野正敏共編)，執筆
5) 学会･外部研究会発表要旨
「経塚研究の現状と課題」福島県経塚検討会，福島県文化財センター白河館，4月17日

III　研究状況･研究広報

まさに展示の一年であった。企画展「東アジア中世海道」は，科研，共同研究とからめて進めてきた。事務代表を務めていることもあり，どっぷりと浸かりきっている。年度前半は展示に則した資料調査を韓国や国内の島々，貿易関連都市でおこなった。各パートを担当する展プロメンバーとの長い調査のおかげで，最新の研究成果を存分に勉強することができた。後半は実際の展示に関する資料借用交渉，展示業者との折衝等であっという間に過ぎてしまった。大きな企画展示を担当すると1年間，全く何もできないとは聞いていたが，それを実感した。ただ，研究の公開としての展示内容だけではなく，展示自体のノウハウをある程度身につけることができたという手ごたえを得た。

安田　常雄 YASUDA　Tsuneo 教授

1946年生 [学歴] 東京大学経済学部経済学科1970年卒業，東京大学大学院経済学研究科博士課程1977年単位取得退学 [職歴] 米国西ワシントン大学研究員(1978～79)，鹿児島大学法文学部助教授(1980～1986)，電気通信大学教授(1986～2003)，国立歴史民俗博物館歴史研究部教授(2003)，総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任(2003)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004) [学位] 博士 (経済学)，東京大学，1982年 [所属学会] 歴史学研究会，社会思想史学会，同時代史学会 [専門] 日本近現代思想史 [主な研究テーマ] 戦後日本の思想文化史／ History of Thought and Culture in Post-war Japan，戦争と大衆文化／ War and Popular Culture

I　研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報
1) 基幹研究「20世紀における戦争 I」(代表　安田常雄) で，館内において3回の研究会を実施し，取りまとめ役として参加した。
2) 個別共同研究「佐倉連隊と地域民衆」(代表　樋口雄彦) で，県内地域の史料調査と館内における研究会に参加した。
3) 個別共同研究「日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究」(代表　小池淳一) で，館内における研究会に参加した。

二　教育活動
1) 教育
中央大学法学部非常勤講師 (社会思想史)

三　博物館活動
1) 歴博探検･くらしの植物苑
「暮らしのなかの戦争」歴博講演会，歴博講堂，6月12日
「絵や写真でみる昭和の歴史」歴博探検，11月13日，ガイダンス･ルーム，報告者
2) 歴史系総合誌『歴博』関係
「一枚のビラからの構想力」『歴博』128号，執筆

四　社会連携
1) 館外における各種委員
千葉県史専門委員 (近現代史)
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「戦中･戦後経験を生きる」，世田谷市民大学，9～12月
「『主体』のゆらぎと歴史意識」，歴史教育者協議会講演，学習院大学高等科，10月23日
「戦後60年を考える」，千葉県史講演会，千葉県文書館，2月26日

II 業績目録

1) 著書
2004.9:『歴史研究の最前線』Vol.3 (新しい近現代史研究へ), pp.1-104, 総研大日本歴史研究専攻･国立歴史民俗博物館
2a) 論文
「民衆史研究の現在－『帝国』との接点で」(安田常雄編『歴史研究の最前線』Vol.3 (新しい近現代史研究へ), pp.48-85, 総研大･日本歴史研究専攻･国立歴史民俗博物館, 9月)
「戦争とメディア･序論－思想史的視角から」(東京歴史科学研究会編『人民の歴史学』第161号, pp.1-12, 10月)
「『新しい歴史教科書』再考」(歴史学研究会編『歴史教科書をめぐる日韓対話－日韓歴史教育シンポジウム』, pp.53-65, 大月書店, 11月)
「異種混交の世界はいかに可能か」(同時代史学会編『占領とデモクラシーの同時代史』, pp.181-190, 日本経済評論社, 12月)
「現代史研究と戦争展示」(国立歴史民俗博物館編『歴史展示のメッセージ』, pp.69-90, アム･プロモーション, 12月)
2b) 研究ノート
「変貌する世界との応答はいかに可能か－新しい『日本史講座』の＜実験＞に寄せて」(『UP』, pp.20-24, 東京大学出版会, 6月)
2c) 書評
『千葉県の歴史　資料編　近現代8 (社会･教育･文化2)』(『千葉県史研究』第12号, pp.61-66 千葉県, 2004年3月)
3c) 辞典項目
『日本アナキズム運動人名事典』(事典項目)「池田種生」「井出好男」「伊東三郎」「奥谷松治」「大塚金之助」「風見章」「唐沢憲一」「木内四郎」「木内宗蔵」「小岩井浄」「小林袈裟美」「小山敬吾」「小山四三」「桜井覚」「佐藤光政」「渋谷定輔」「渋谷黎子」「鈴木茂利美」「瀬川知一良」「瀬川久雄」「関和男」「瀬下貞夫」「高橋修一」「滝沢村之助」「竹内國衛」「竹内新」「竹内精司」「田中惣五郎」「塚田隆雄」「内藤国雄」「中田美穂」「中村登」「野口伝兵衛」「羽毛田正直」「林広吉」「柳沢 」「若林忠一」, ぱる出版, 4月
6) 歴史系総合誌『歴博』, 友の会ニュースなど
「一枚のビラからの構想力」(『歴博』第128号, pp.19-23, 1月)
7) その他
インタビュー'55 Years of Change', "THE DAILY YOMIURI", January 1, 2005

III 研究状況･研究広報

今年度については, 館内では歴博講演会, 歴博探検を担当し, 研究成果を一般の方や子どもたちにもわかりやすいように伝えるべく努めた。また総研大の講演会では,「民衆史研究の現在」と題して, 近年大きな話題をよんでいる, ネグリ＝ハートの『帝国』という本の提起する問題との接点で, あらためて「民衆史」を考える基本的視点を問題提起し, 大学院生の関心を喚起すべく努めた。
また館外では, 東京歴史科学研究会大会において「戦争とメディア･序論」を発表した。これは同研究会の機関誌『人民の歴史学』(2004年10月刊) に掲載された。ここでは, 近年ようやく盛んになりつつある, 十五年戦争期のメディア, 特に流行歌･漫才･マンガ･映画を取り上げ, 第一にそれぞれのメディア特性を析出し, 第二にその特質のもとに, 具体的な作品などを通して, 戦争がどのように描かれ, それが何を意味していたかを分析した。第三に戦時期メディア分析で重要だと思われる＜同調と抵抗＞の問題に関しては, 作品の担い手の思想史的分析, 作品内容の多義性を前提にした慎重な分析が必要なこと, そしてこれは実証的にむずかしいのだが, それを受容する人々の社会意識にまで視点を下ろして分析する必要があることなどを問題提起した。
これは「序論」とされているように, 具体的分析は今後の課題であるが, 戦時期メディアを考える基本的視点をかなり包括的に提出できたものと考える。本館の基幹研究「20世紀の戦争 I」(代表　安田常雄) では「戦争と文化」を担当し, 共同研究を進めているが, その研究推進のための基礎視点としても十分活用できるものと思われる。

安室　知　YASUMURO　Satoru　助教授

1959年生 [学歴] 筑波大学第一学群人文学類1983年卒業, 筑波大学大学院修士課程環境科学研究科1985年修了 [職歴] 長野市立博物館学芸員(1985), 横須賀市自然･人文博物館学芸員(1988), 熊本大学文学部助教授(1998), 国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授(2002), 総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(2002), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004) [学位] 修士 (学術), 筑波大学, 1985年 [所属学会] 日本民俗学会, 日本民具学会, 日本文化人類学会, 農耕文化研究振興会 [専門] 民俗学 (環境論, 生業論), 物質文化論 [主な研究テーマ] 人と自然の関係性に関する民俗文化研究／Folklore research on the relation between people and nature

I 研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基幹研究「環境利用システムの多様性と生活世界」（代表　安室知）について，研究報告書をまとめた。
2) 基盤研究「民俗研究映像の資料論的研究」（代表　内田順子）に共同研究員として参加した。
3) 基盤研究「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」（代表　久留島浩）に共同研究員として参加した。
4) 個別共同研究「宮座と社会」（代表　八木透）に共同研究員として参加し，研究発表（「滋賀県栗東市大橋ドジョウ祭りの概要」04.5.29）をおこなった。
5) 個別共同研究「東アジアにける多様な自然利用」（代表　西谷大）に共同研究員として参加した。
6) 企画展示「海をわたった華花」展示プロジェクト委員として調査研究をおこない，企画展制作に当たった。
7) 総合展示リニューアル展示プロジェクト（第3室）委員として調査研究をおこなった。
8) 総合展示リニューアル展示プロジェクト（第4室）委員として調査研究をおこなった。
9) 国立民族学博物館の機関研究「発酵食品･製品と感覚受容」に研究分担者として参加した。
10) 国立民族学博物館の研究フォーラム「発酵食品･製品と感覚受容」に参加し，研究発表をおこなった。
11) 総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「共生概念の再構築：極東孤島における歴史アプローチ」に共同研究員として参加した。
12) 滋賀県立琵琶湖博物館総合研究「東アジアの中の琵琶湖，その成立と人間生態系に関する総合研究」に共同研究員として参加し，調査研究をおこなった。
13) 科学研究費補助金特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築」の「資源と生態史－空間領域と共有」班（代表　秋道智弥）に参加し，コメンテイターをつとめた。兵庫県城崎町。（2月22～24日）。
14) 同「自然資源の認知と加工」班（代表　松井健）に，ゲストスピーカーとして参加し，研究発表をおこなった。石川県加賀市（片野鴨池観察館）。（12月3～4日）。
15) 鴨池総合研究会「ラムサール10」に参加し，調査研究をおこなった。石川県加賀市，（12月5日）。
16) 生き物文化誌学会，第2回学術大会にて研究発表をおこなった。滋賀県（琵琶湖博物館），（5月15～16日）。
17) 日本民俗学会「民俗の文化資源化に関する特別委員会」委員として，調査研究と報告をおこなった。
18) 日本民俗学会年会に参加する。兵庫県（園田学園大学），10月2～3日。
19) 日本博物館学会に参加する。神奈川県（横須賀市自然･人文博物館），10日24日。
20) 科学研究費補助金･基盤C(2)「日本歴史における水田環境の存在意義に関する民俗学的研究」（研究代表者）
21) 科学研究費補助金･基盤C(1)「環境保全NPO活動の知識創造モデルの作製と知識創造試算表による評価に関する研究」（研究分担者）

二　教育活動

1) 教育

東京大学，非常勤講師「日本文化論」（前･後期）
神奈川大学，非常勤講師「民俗学」（前･後期）
成城大学，非常勤講師「総合講座」（5月6日）

三　博物館活動

1) 歴博探検･くらしの植物苑

歴博と房総のむら連携事業プロジェクト，12月7日，歴博･房総のむら
くらしの植物苑観察会「正月の植物－マツ－」，12月25日，くらしの植物苑
民俗文化財映像「久井稲生神社の御当」取材，10月16～18日，広島県久井町

四　社会連携

1) 館外における各種委員

文化庁「お雑煮100選」選定委員会委員，山口県史編纂専門委員（民俗部会），上越市史専門委員（民俗編）長野市誌専門委員（民俗編），横須賀市史編纂委員（民俗編）

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「水田にみる水の輪－人と魚と稲－」，ダイナミックかめおか丹波学トーク講演，ガレリアかめおか（亀岡市），5月9日

II　業績目録

1) 著書

2005.2：『水田漁撈の研究－稲作と漁撈の複合生業論－』（480頁），慶友社，単著
2005.3：『環境利用システムの多様性と生活世界－国立歴史民俗博物館研究報告123集－』（476頁），国立歴史民俗博物館，編著

2a) 論文

2004.9：「自然をとらえる」（『上越市史－通史編－7民俗』，pp.16-52，上越市）
2004.12：「自然となりわい」（『上越市史研究』10号，pp.18-30，上越市史編纂委員会）
2005.3a：「共同研究の経過と課題－基幹研究『環境利用システムの多様性と生活世界』－」（『国立歴史民俗博物館研究報告』123集，pp.1-10）
2005.3b：「水田漁撈と現代社会」（『国立歴史民俗博物館研究報告』123集，pp.49-83）

4) 展示図録

2004.7:『海をわたった華花』分担執筆（項目）「イモの民俗」「民俗資料を調べる」, pp.69･100, 国立歴史民俗博物館

5) 学会･外部研究会発表要旨

2004.5:「コイの成長段階名とドメスティケーション」（『生き物文化誌学会第2回学術大会研究発表要旨集, p.15, 滋賀県立琵琶湖博物館）

2005.3:「水田漁撈と魚類の保存加工技術－ナレズシと焼き干しの比較から－」（『研究フォーラム「発酵食品･製品と感覚受容」発表要旨集』, pp.22-23, 国立民族学博物館）

6) 歴史系総合誌『歴博』, 友の会ニュースなど

2005.1:「民俗学者にとってフィールドは仕事か」（『歴博』128号, pp.26-27, 国立歴史民俗博物館）

III 研究状況･研究広報

『水田漁撈』を提唱することで, 水田稲作地における生計維持システムのあり方ついてひとつの考えを提示した。

従来, 民俗学では「生業」研究とは「生業技術」研究のことであった。生業は, 狩猟･農耕･漁撈などに分類され, 個々の要素はさらに, 農耕でいえば畑作･稲作などに分けられる。そのため, 生業研究は生業技術のより精緻な分析を目指し, 生業を細分化して研究する方向性を強く持っていた。複合生業論では, 人（または家）を中心にその生計維持システムのあり方を明らかにする。従来は別個に論じられてきた生業技術を, 人が生きていく上でいかに複合させていたかを明らかにする。そうした視点に立つと, かつて日本人の生計は各種の生業技術の選択的複合の上に成り立つものであったことが理解される。それは, 稲作により生業が単一化したかに見える水田稲作地においても同様である。

稲作地における基本的な生計維持システムとして水田漁撈が位置づけられる。水田漁撈を論じるとき, その舞台となるのが水田用水系である。従来, 内水面漁撈の場は, 湖沼と河川に分類されてきたが, 第3の水界として水田用水系は重要である。水田用水系とは, 水田･溜池･用水路といった稲作のために作られた人工的水界を指し, その特徴は稲作活動により一年をサイクルとして水流･水量･水温などの水環境が多様に変化することにある。

水田漁撈とは, 水田用水系を舞台にして, 稲作の諸活動によって引き起こされる水流･水温･水量などの水環境の変化を巧みに利用しておこなう漁撈法である。漁の対象は, 水田に高度に適応した生活様式を持つドジョウやフナなどの水田魚類である。水田漁撈は, 漁獲原理の上で, 受動的で小規模な漁撈技術を多用する水田用水期（4～9月）と能動的で比較的大規模な漁撈がおこなわれる水田乾燥期（10～3月）の2期に分けられる。水田漁撈の民俗的･歴史的な意義として, 以下の4点を指摘することができる。

(1) 自給的生計活動（動物性タンパク質獲得技術）としての重要性
(2) 金銭収入源としての重要性
(3) 水田漁撈が生み出す社会統合
(4) 水田漁撈の娯楽性

こうした水田漁撈は, 生計維持の視点に立ってみると, 日本の生業史（とくに稲作展開史）に与えた影響は大きなものがあったと考えられる。昭和初期までの日本における稲作史についていえば, その基本は拡大展開にあった。昭和初期には, 水田率が90パーセントを超えるような極端に稲作に特化した地域が各地に形成された。そうしたとき, 日本人をして稲作の拡大へと向かわせた原動力のひとつに水田漁撈があったと考える。

水制御に代表される稲作の技術水準が上がり, その結果として稲作への特化が進んでいくと, 必然的に稲作活動は時間･空間･労力のすべての面で人々の生活を規定する割合を高め, 稲作労働への集中化を生み出すことになる。稲作に適した条件を備えたところでは, 自然環境は稲作により改変され, ことに水界は水田用水系へと整備されていく。また, 稲作活動とは別におこなわれていた漁撈活動は労力的･時間的にその余裕が失われていく。つまり生業全体に占める稲作の重要性が他生業に比べて突出して大きくなった結果として, 稲作活動に忙しくて他の生業活動はおこなうことができなくなってしまう。

そうしたとき, 稲作民が生計を維持するためにとった戦略が, 稲作による他生業の内部化（稲作論理化）である。稲作への内部化は, 漁撈であれば水田漁撈や水田養魚といったかたちでおこなわれる。つまり水田を稲作の場として選択したことが, 稲作に漁撈などの他生業を内部化する潜在力を与えたといってよい。そうした水田の潜在力があるからこそ, 日本において稲作が文化的･経済的に大きな影響力を持つほどに特化できたと考えられる。

水田漁撈に代表される稲作による他生業内部化の知恵は, 商品経済･貨幣経済の進展といった歴史の大きな流れの中にあっても, 比較的遅くまで日本の稲作農家が食料の自給性を維持することができた要因として指摘できる。また, 稲作に内部化された他生業の存在は, 自給性を維持しながら稲作に特化するという, いわば矛盾した生計維持のあり方を可能ならしめた最大の要因であるといえる。

そして, 水田と漁撈との関係は決して日本にとどまらず水田稲作圏すべてにかかわる問題である。また, 歴史的に見てもこの問題はかなり遡って考えてみなくてはならない。おそらくは, 日本における稲作の受容の時期にまで遡って考察してみる必要があると考えている。それには民俗学のみならず, 考古学や文献史学, また生態学など自然科学との協業による学際的な研究の必要性があろう。

山田 慎也 YAMADA Shin'ya 助手

1968年生［学歴］慶應義塾大学法学部法律学科1992年卒業, 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程1994年修了, 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程1997年単位取得満期退学［職歴］国立民族学博物館講師（文部省中核的研究機関研究員, 1997）, 国立歴史民俗博物館民俗研究部助手(1998), オックスフォー

ド大学ニッサンインスティテュート及びセントアントニーズコレッジ客員研究員(2002), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手(2004) 〔学位〕博士（社会学）, 慶応義塾大学, 2000年10月
〔所属学会〕日本民俗学会, 日本民族学会, 日本宗教学会, 宗教と社会学会, 日本生活学会, 葬送文化学会
〔専門〕民俗学 〔主な研究テーマ〕葬制と死生観／ Funeral ritual and cultural concept of death, 現代社会と民俗／ Modern society and folk culture, 死生学／ Death and life studies

I 研究･教育活動

一 研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」の研究の一環として, 民俗研究映像資料制作担当代表となり,「現代の葬送儀礼」全4部を製作した。しかもこの成果については, 国立民族学博博物館「会社文化と宗教文化の経営人類学的研究」（代表 中牧弘允）, 若手研究(B)(2)「国民国家形成と遺影の成立に関する民俗学的研究」（代表 山田慎也）の成果, および長年研究してきた「近代化と死の研究 I」「死者表象に関する研究」における成果におうところが大きい
2) 民俗文化財映像16年度制作委員副委員長として「若狭の六斎念仏：上中町瓜生･三宅」の制作担当となった。
3) 若手研究(B)(2)「国民国家形成と遺影の成立に関する民俗学的研究」と,「葬儀の意味するもの」[山田2004.6]を発表した。
4) 共同研究「日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究」, 基盤研究(B)(2)「呪術･呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」（代表 小池淳一）の成果として,「死者の幸福を祈る」[山田2005.3]をシンポジウムで発表した。
5) 「葬送儀礼資料」「死絵」の整理を継続しているが, その成果の一部として,「明誉真月大姉葬儀写真帖」『歴博』125号で発表し, 今年度の「新収資料の公開」において死絵を展示した。
6) 基盤研究(A)(1)「死者と追悼をめぐる意識変化－葬送と墓についての総合的研究」（代表 鈴木岩弓）の成果として, 国際宗教学宗教史研究会議19回世界大会シンポジウムにおいて, "From the folklorism to the globalism of funeral rituals：The development of the new services in the funeral industry and the cultural concept of death" を発表し, その内容をさらに充実して,『日本における死者と追悼の歴史と現代』に掲載した。

二 教育活動

1) 教育
國學院大學「日本民俗学」
千葉工業大学「文化人類学 I」「文化人類学 II」「文化人類学III」「文化人類学IV」
駿台トラベル&ホテル専門学校フーネラル･ビジネスコース「葬儀概論」

三 博物館活動

2) 歴史系総合誌『歴博』関係
編集委員,『歴博』125号編集担当
3) 各種編集委員
『研究年報』編集委員
4) 歴民研修委員, 講師
歴史民俗資料館等専門職員研修会委員会委員

四 社会連携

1) 館外における各種委員
日本民俗学会理事, 評議員葬送文化学会理事

II 業績目録

2a) 論文
2004.6：「葬儀の意味するもの」（『仏教再生への道すじ』pp.78-93, 勉誠出版）
2005.3："From the Folklorism to the Globalism of Funeral Rituals : The Development of the New Services in the Funeral Industory and the Cultural concept of Death"（『日本における死者と追悼の歴史と現代』国際宗教学宗教史研究会議19回世界大会シンポジウム, pp.26-40）
2b) 研究ノート
2004.12：「死の意味を見つめる場」『SQUARE』136号, pp.10-13
2005.3：「死者とともに暮らす生活－上久堅の民俗調査から」（『伊那民俗』60号, pp.3-5）
2d) 映像
16年度民俗研究映像資料
「現代の葬送儀礼」全4部
「地域社会の変容と葬祭業－長野県飯田市下伊那地方」45分
「都市近郊における斎場での葬儀－飯田市佐々木家」45分
「村落における公共施設での葬儀－下條村宮嶋家」45分
「葬儀用品問屋と情報」45分
16年度民俗文化財映像
「若狭の六斎念仏：上中町瓜生･三宅」16mm

5) 学会･外部研究会発表要旨
2005.3:「死者の幸福を祈る」『幸福のフィールドワーク』, 関西学院大学COEシンポジウム
2005.3: "From the folklorism to the globalism of funeral rituals: The development of the new services in the funeral industry and the cultural concept of death" World Congress of the International Association for The History of Religion pp.312, Tokyo
6) 歴史系総合誌『歴博』, 友の会ニュースなど
「「死者の記憶」の多様性と歴史的展開」(『歴博』125号, p.1, 7月)
「明誉真月大姉葬儀写真帖」(『歴博』125号, pp.2-5)
7) その他
「葬送と過程としての死」『信州日報』2005年2月23日

III 研究状況･研究広報

今年は研究映像に多くの時間を割かれた年であり, 他の仕事を思うようにできない年でもあった。すでに2003年度より撮影のための調査と依頼を行ったが, 地域が長野県, 福井県, 愛知県, 栃木県, 山梨県と広範囲にわたっただけでなく, 内容が現行の葬儀だけに思うように撮影に着手できず, 2005年にはいってもぎりぎりまで撮影を行っていた。しかし, 長年の研究の成果とそこで知り合ってきた人々のご協力により, いままで論文として記述に限界を感じていた, 人々の行為や表情などの非言語的な部分について, 映像として掌握することができ, 研究の方向性の新たな可能性を感じた。今回の撮影では, まだ使用していない素材もたくさんあるため, また別の新たな視点から今後再編集を行って公開していきたい。それにしても撮影に協力していただいた方々, とくに葬儀についてはご遺族の方々のご協力には本当にありがたく, 感謝の意を改めて表したい。
また今回の撮影を通して, 改めて葬儀の現代化にいたるさまざまな研究課題を見いだしていく過程でもあった。人々が葬儀を実際に行っていく中で, 専門業者や製造業者の影響は大きいものであり, 高度消費社会における情報と民俗の問題は, 今まであまり調査が進んでいない分野であることを再認識した。今後こうした視点からの研究を継続していくつもりである。

山本 光正 YAMAMOTO Mitsumasa 助教授

1944年生 [学歴] 法政大学文学部史学科1967年卒業, 法政大学大学院人文科学研究科修士課程日本史学専攻1970年修了 [職歴] 神奈川県史編集室嘱託(1976), 千葉県庁主事(1974), 文化庁文化財保護部管理課国立歴史民俗博物館 (仮称) 設立準備室文部技官(1980), 国立歴史民俗博物館歴史研究部助手(1981), 同助教授(1982), 総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(1999), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助教授(2004) [学位] [所属学会] 交通史研究会, 地方史研究協議会, 日本風俗史学会, 法政大学史学会 [専門] 日本近世史 [主な研究テーマ] 近世･近代の交通及び旅行史／ Study of Japan traffic and travel in from 18 to 19 Cen, 幕末近代農民生活史／ The history of life of a farmer in the late Tokugawa-Meiji period

I 研究･教育活動

二 教育活動
1) 教育
法政大学非常勤講師 (文化史), 法政大学大学院非常勤講師 (日本の道／日本の旅)

四 社会連携
1) 館外における各種委員
東京都葛飾区文化財保護審議会会長, 葛飾区郷土と天文の博物館運営協議会委員, 千葉県天津小湊町文化財保護審議会委員, 千葉県伝統工芸産業振興協議会委員, 交通史研究会委員, 法政大学史学会評議員
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「21世紀の街道」コメンテーター, 交通史研究会大会, 5月9日
「千葉市の街道」千葉市民カレッジ, 6月1･15日
「近世の街道と脇街道」長浜城歴史博物館, 10月31日
「江戸時代の食事」千葉県調停委員会大会講演, 11月17日
「成田街道」佐倉市民大学, 12月14日
「江戸の暮とお正月」団体名, 1月9日

II 業績目録

1) 著書
『江戸見物と東京観光』臨川書店, 220頁, 2月
3c) 辞典項目
『江戸を知る辞典』(辞典項目)「五街道」「脇往還」「行徳船」「木更津船」「四宿」「江戸の景観」東京堂, 4月
6) 歴史系総合誌『歴博』, 友の会ニュースなど
「成田への道と旅」(『地図中心』388号, pp.12-14, 1月)

「酉歳の話」(『羽衣会だより』62, pp.19-20, 1月)
「千葉の古道と歴史」(『カルチャー千葉』46, pp.12-13, 2月)

III 研究状況･研究広報

東海道及び当館の所在する千葉県内を中心とした旧街道調査を行っている。その目的とするところは, 街道沿いに残る石像物や建造物等々の非文献史料を歴史史料化することと, 生涯教育の素材にすることである。ここでは調査の成果の一端を紹介する。

寺社参詣を中心とした庶民の旅は, 近世に入って盛んになるが, 近世のいつ頃からかは必ずしも明らかにされていない。私自身は近世もかなり早い時期から行われるようになったと考えている。その最大の理由は慶安元(1648)年2月, 幕府が伊勢参宮や大山参詣者達が馬背に絹･紬･毛氈等の贅沢な敷物を敷くことを禁じる法令が出たことである。この禁令は旅が盛んになり, しかもその風俗が華美になったことを示している。さらに同3年には伊勢神宮への群参 (御蔭参) が発生しているが, 御蔭参は社会的に伊勢参宮が盛んになったからこそ発生したものとみてよいのであろう。

江戸市民にとってもっとも手軽な旅の一つが大山参詣である。大山への参詣路は幾つかあるが, 東海道を経由した場合, 戸塚宿手前の柏尾 (横浜市戸塚区柏尾) から東海道と分岐する柏尾通大山道と藤沢宿を出て四谷 (藤沢市城南) で分岐する田村通大山道がよく知られている。両分岐点共に現在も道標等石造物があり, 東海道歴史散歩の人達の目安, 見学対象になっている。

2ヵ所の分岐点の内, 柏尾に寛文10(1670)年の橋供養を兼ねた大山道標, 延宝8(1680)年の庚申塔, 正徳3(1713)年 (小堂の中にあるため銘文未見) の上部に不動明王を置いた大山道標, 享保12(1727)年の大山道標, 明治5(1872)年の大山道標及び元治2(1865)年に千葉県松戸の講中が建てた常夜燈がある。

四谷の分岐点には万治4(1661)年の道標があったことで知られるが現存しない。現存すれば現在のところ東海道最古の近世道標ということになる。銘文によると万治4年正月に建てた道標が破壊等により処分されたようで天保6(1835)年正月再建とある。現存する天保の道標も関東大震災により破損しL字鋼で補修されているが, いつ崩れるが分からぬ状態である。

もう1基は常夜燈の棹の部分のみが残り, そこに万治4年, 大山道の銘文が刻まれている。しかしこれも後年再建したものが破損し棹部だけ残ったものとみられる。さらに大山道入り口に石造の大鳥居が建っている。銘文によると, 万治4年, 建立。天保11年再建, 昭和34年復元とある。現存鳥居は天保期のものを修理復元したものか, 昭和に新しく復元したのかは不明であるが, 万治4年に道標･常夜燈･鳥居が建てられたことは事実としてよいだろう。

このほか延宝4年に, 江戸横山町の講中が建てた大山道標がある。この道標も柏尾の正徳期の道標と同様上部に不動明王が配されている。

関東の石造道標は一般に寛文･延宝頃より建立されるようになるがその数はまだ少なく, 広く普及をみるのは1700年代後半頃とみられるが, 大山道分岐点には柏尾の場合, 寛文･正徳･享保期の道標が, 四谷の場合現存しないが万治の道標2基と鳥居, 延宝の道標が建てられていることからみて, 1600年代中期以降大山参詣が広い層に行われていたことを示すものとしてよいだろう。

道標の大きさをみると, たとえば柏尾の寛文道標が高さ1m50cm程, 正徳期のものが1m80cm程, 四谷の延宝の道標が1m80cm程と大きなもので, 道標を設置した講中の財力をも推し量ることができる。まだ調査後の詳細な検討を行っていないが, 石造物建立者の分析をすることにより, 新たな事実も分かってくるだろう。

なお柏尾の正徳, 四谷の延宝の大山道標は上部に不動明王が刻まれているが, 成田道の道標にも不動明王が刻まれたものを多くみかける。推測ではあるが, 成田道の不動明王道標は大山道の不動明王道標の影響があったのではないかと考えている。

吉岡 眞之 YOSHIOKA Masayuki 教授 副館長

1944年生〔学歴〕東京大学文学部国史学科1970年卒業，東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻修士課程1972年修了〔職歴〕総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任(1999)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授(2004)〔学位〕博士（文学），東京大学，1995年11月〔所属学会〕木簡学会，日本歴史学会，日本史研究会，大阪歴史学会，続日本紀研究会，考古学研究会，延喜式研究会〔専門〕日本古代史〔主な研究テーマ〕古代文献学研究

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基盤研究「高松宮家伝来禁裏本の基礎研究」（代表 吉岡眞之）による財団法人陽明文庫所蔵近衛家資料の調査(2004.11)

2) 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(1)「九条家本延喜式の総合的研究」による金沢市立図書館所蔵旧前田家資料の調査(2004.8～9)

3) 個人研究「日本古典籍の研究」のため財団法人前田育徳会尊経閣文庫所蔵資料の調査(2004.7～9)

二 教育活動

1) 教育

総合研究大学院大学日本歴史研究専攻（歴史資料学Ⅰ）
総合研究大学院大学日本歴史研究専攻･大学院説明会講演（「文献資料と出土文字資料」）
國學院大學大学院非常勤講師（「日本史研究Ⅱ」）
国士舘大学大学院非常勤講師（「史学特別研究1」「史学特論3」）

三 博物館活動

5) 歴博振興会関係

歴史民俗博物館振興会評議員

四 社会連携

1) 館外における各種委員

日本歴史学会理事，文部科学省教科用図書検定調査審議会臨時委員，文化庁文化審議会文化財分科会第一専門調査会専門委員，藤枝市史編さん特別調査委

Ⅱ 業績目録

2a) 論文

2005.1a：「尊経閣文庫所蔵『交替式』解説」（尊経閣善本影印集成35『交替式 法曹類林』pp.1-10，八木書店）
2005.1b：「尊経閣文庫所蔵『法曹類林』解説」（尊経閣善本影印集成35『交替式 法曹類林』pp.1-11，八木書店）
2005.3：「文献資料と出土文字資料」（『歴史研究の最前線Vol.4 出土文字資料の新展開』pp.6-35，吉川弘文館，再校中）

Ⅲ 研究状況･研究広報

この十数年，日本の古典籍の基礎的研究を主要研究テーマとしてきたが，その過程で古典籍の研究は，個別資料の研究に加えて，それが伝来した経緯，とりわけ個別資料が含まれる典籍群の成立と伝来の経緯を明確にすることが，個別資料研究にとっても不可欠であることが明らかになった。本館基盤共同研究「高松宮家伝来禁裏本の基礎研究」はそのような認識にもとづいて着手したものである。「高松宮家伝来禁裏本」は東山御文庫本（禁裏本）から分離した資料を多く含み，それらは禁裏本の一部として位置付けられる。禁裏本の主体は近世の書写本ではあるが，良質な写本を底本として書写されているものが多く，これと関連を有する資料群が，それぞれ固有の成立の契機と伝来の経緯を持ちながら，宮家･公家･武家･寺社等にも伝来している。日本の古典籍研究は，個別資料の研究を行う際にも，このような広がりを視野に納めておくことが重要であると考える。

また個別資料研究に関しては，いうまでもなく重要な古写本の史料学的研究が大きな意義を持っている。特に研究が精密化している古代史研究においては，テキスト批判が厳密になされるようになっており，重要な古写本を広く利用に供するための手段として影印本の公刊が広く求められている。本館としても，館蔵資料の公開･活用の一環として考慮すべき課題であろうが，現段階ではこれに組織的に取り組む準備はなされていない。当面は，与えられた機会に個別的に取り組むこととしたい。

それとともに，従来，ともすれば軽視されがちであった近世の書写本の持つ意義についても評価し研究する必要がある。それは上述の禁裏本の意義を考えれば明らかである。また以前に刊行された「国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書」に収めた『続日本紀』（高松宮本），『令集解』『延喜式』（ともに田中本）はいずれも近世の書写本であるが，その資料的価値については学界の認めるところとなっている。これも館蔵資料の公開･活用の観点から，館の事業として位置付け，継続すべき課題であろう。

吉村 郊子 YOSHIMURA Satoko 助手

1968年生 [学歴] 奈良女子大学理学部生物学科1992年卒業，京都大学大学院人間･環境学研究科修士課程人間･環境学専攻1994年修了，ナミビア大学学際研究センター社会科学部門共同研究員(1995～1998)，京都大学大学院人間･環境学研究科博士後期課程人間･環境学専攻2000年研究指導認定（単位取得）退学 [職歴] 国立歴史民俗博物館歴史研究部助手(2000)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助手(2004) [学位] 修士（人間･環境学），京都大学，1994年3月 [所属学会] 日本アフリカ学会，日本文化人類学会，生態人類学会，進化人類学分科会 [専門] 生態人類学･文化人類学 [主な研究テーマ] 人と環境の関わり，人と人との関わりに関する人類学的研究

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 個別共同研究「明治期地籍図の集成的研究」（代表　青山宏夫）において，明治期地籍図の原本調査･データ収集をおこない，全体研究会にて関連資料を含めた比較･検討をおこなった。
[調査]
税務大学校租税史料館における地籍図調査，7月30日，埼玉県和光市
広島大学付属図書館における地籍図調査，9月27日，広島県東広島市
大津市歴史博物館における地籍図調査，2月4日，滋賀県大津市
[研究会]
「明治期地籍図の集成的研究」全体研究会，2月27日，千葉県佐倉市
2) 東京外国語大学アジア･アフリカ言語文化研究所「土地･自然資源をめぐる認識･実践･表象過程」プロジェクト研究会（代表　河合香吏）において，共同研究員として研究会に参加，討論をおこない，その成果の一部を論文[2004.4]として発表した。
[研究会]
「土地･自然資源をめぐる認識･実践･表象過程」プロジェクト研究会，5月22日，東京都府中市
「同」プロジェクト研究会，7月3日，東京都府中市
[論文] [吉村2004.4]
3) 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究『資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築』（代表　内堀基光）において，研究協力者として以下の研究会に出席し，報告･討論をおこなった。
「文化資源の生成と利用」（代表　山下晋司）研究会，2005年2月，広島市
[研究会報告] [吉村2005.2]
4) 科学研究費補助金基盤B（海外学術）「実践としてのエスノサイエンスと環境利用の持続性－中国における焼畑農耕の現在－」（代表　篠原徹）において，研究分担者として以下の調査をおこなった。
[調査]
ハニ族の環境利用と生業，世帯経済と市場に関する現地調査，2005年3月，中国雲南省元陽県
5) 秋山郷の民家土蔵において，史料群の現状記録調査をおこなった。また，歴史学･民俗学･地理学･人類学等の諸分野における資料の収集･記録の方法について，討論をおこなった。
[調査]
長野県秋山郷における土蔵史料群の現状記録調査，7月31日，8月1日，長野県

二 教育活動

1) 教育
早稲田大学教育学部非常勤講師（文化人類学）

三 博物館活動

2) 歴史系総合誌『歴博』関係
編集委員，『歴博』126号，128号編集担当

II 業績目録

2a) 論文
2004.4：「土地と人をつなぐもの－ナミビアの牧畜民ヒンバにとっての墓－」（田中二郎他編『遊動民（ノマッド）－アフリカの原野に生きる－』pp.439-464，昭和堂，2004年）
5) 学会･外部研究会発表要旨
2005.2：「牧畜民ヒンバと土地をめぐる話－ナミビア植民地統治の歴史と墓－」（科学研究費補助金特定領域研究『資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築』（代表　内堀基光）2「文化資源の生成と利用」研究会（代表　山下晋司），広島大学）
6) 歴史系総合誌『歴博』，友の会ニュースなど
2005.1：「出会いの場としてのフィールド－その可能性－（特集：人･モノに出会う場－フィールドワーク再考－）」（『歴博』128号，p.1）
2005.1：「人が『語る』ということ」（『歴博』128号，pp.20-21）

III 研究状況･研究広報

日本やアフリカ南部（ナミビア等），中国において，人と環境のかかわり，およびそこにみられる人と人のかかわりに関心をもって調査，研究をすすめている。研究活動の柱のひとつは，おもに個人でおこなう現地調査とそ

こで得た一次資料にもとづく分析から，上述のテーマについて考察をすすめることにある（下記(1) および(2)）。
（1） ナミビアおよび南アフリカにおける現地調査の成果をもとに，牧畜民ヒンバとヘレロの土地利用の実態と変遷を，ナミビアの植民地統治の歴史に沿って分析･考察し，その成果を研究会で報告，一部を論文として発表した。
（2） また，中国雲南省においては，昨年度に引きつづき，ハニ族の村で現地調査をおこない，市場経済化の過程における斜面地利用－棚田におけるイネ･ダイズ等の栽培や畦･森林における採集植物の利用，食事，世帯の収入･支出の実態と市場（ローカル･マーケット）の関係およびその変遷について，資料収集をすすめた。
もうひとつの柱は，個人による研究成果をもとに，調査･資料収集の方法論について，人類学の枠組みをこえて隣接諸分野（歴史学･民俗学･地理学等）とともに議論をすすめて，資料の整理･公開のプロ セスや共有･解釈にかかわる問題を検討･模索するものである（下記(3)および(4)）。
（3） 長野県秋山郷において，歴史学や地理学，人類学，考古学を専門とする他の研究者とともに民家土蔵の近世･近代史料群について現状記録調査をおこなった。その際，「フィールドワーク」をキーワードとして，各分野における現地調査の方法論や資料の整理･公開･共有方法について議論をおこなった。その成果の一部は，『歴博』128号の特集「人･モノに出会う場－フィールドワーク再考」の企画･原稿等に反映されている。
（4） 大学の講義（科目「文化人類学」）においては，映像等の二次的な資料の分析を取りあげて，その制作や解釈の過程で生じうる問題点について議論をおこなった。

客員教員

荒川 章二 ARAKAWA Shoji 客員教授（静岡大学情報学部教授）

1952年生〔学歴〕早稲田大学第一文学部1976年卒業，一橋大学大学院社会学研究科専攻博士課程1982年中退〔職歴〕大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部客員教授併任(2004)〔学位〕〔所属学会〕歴史学研究会，日本史研究会，歴史科学協議会，社会政策学会〔専門〕日本近現代史〔主な研究テーマ〕近現代日本軍事史／ Military studies in the Japanese modern history，社会史／ Social history

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基幹研究「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」
〔広島･旭川調査〕広島，旭川などの調査を行ない，その成果を「『戦争体験の記録と語りに関する資料調査』から見えるもの」として同共同研究会で研究発表し[2004.9.25]，「戦争･軍隊史研究とオーラルヒストリー」と題し『季刊戦争責任研究』第45号[2004.9]に発表した。
〔静岡県内フィールド調査〕静岡県内のフィールドワークを行ない，その成果を同共同研究会で報告し，その活動から発掘された資料『皇国乃礎』に解題を付して翻刻した[2005.3]。
2) 基幹研究「20世紀における戦争」で青森，弘前調査を実施した。
3) 科学研究費補助金基礎研究C(2)「戦争日本の軍事基地と地域社会」で沖縄への資料調査を実施した。

二 教育活動

1) 教育
静岡大学情報学部にて，学部（卒業研究指導，セミナー，地域社会史，国際社会と日本，歴史資料論ほか），大学院指導（近代日本メディア史）

四 社会連携

1) 館外における各種委員
沼津市史編さん委員･近現代部会副部会長，竜洋町史専門委員長，伊豆長岡町史編纂委員（近現代部会責任者），沼津市明治史料館協議会委員，静岡県近代史研究会会長，放送大学客員教授，法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
放送大学静岡学習センター面接授業：「太平洋戦争への道」8月10～11日
放送大学静岡学習センター面接授業：「第2次世界大戦への政治過程」11月20～ 21日
第5回静岡大学･浙江大学国際交流学術シンポジウム：「日本の近代における秩序観」12月18日
静岡県近代史研究会例会：「戦後地方政治史－沼津市を事例に」1月22日
浜名湖クラブ文化講演会：「凧揚から凧揚祭へ－浜松祭の戦前史」1月21日

Ⅱ 業績目録

2a) 論文
2004.5:「昭和恐慌期の静岡県」(『清見潟』第13号, pp.1-21, 清水郷土研究会)
2004.9:「開戦100年　日露戦争再考」(『論座』, pp.182-189, 朝日新聞社)
2004.9:「戦争･軍隊史研究とオーラルヒストリー(『季刊戦争責任研究』, pp.2-9, 日本戦争責任資料センター)
3a) 調査･発掘調査報告書
2005.3:「静岡県」『戦争体験の記録と語りに関する資料調査3･4』国立歴史民俗博物館
3b) 自治体史･史料集など
2005.3:『沼津市史　資料編現代』973頁, 沼津市 (分担編集, 解説)
2005.3:『伊豆長岡町史　近代編』720頁, 伊豆長岡町 (監修, および分担執筆)
2005.2:『竜洋町史　民俗編』648頁, 竜洋町 (監修)
2005.3:『翻刻資料集1』国立歴史民俗博物館, (『皇国乃礎』の編集, 解題)
5) 学会･外部研究会発表要旨
2005.1:「戦後地方政治史－沼津市を事例に」(『静岡県近代史研究会会報』pp.1-2)

稲　雄次　INE　Yuji　客員教授 (秋田経済法科大学法学部教授)

1950年生 [学歴] 日本大学大学院法学研究科博士課程1979年満期退学 [職歴] 共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部客員教授併任(2004) [学位] [所属学会] 日本民俗学会, 日本文化人類学会, 日本選挙学会, 秋田県歴史研究者研究団体協議会 [専門] 民俗学, 日本政治思想史 [主な研究テーマ] 政治人類学

I　研究･教育活動

一　研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報
1) 個別共同研究「宮座と社会:その歴史と構造」(代表　八木透) 共同研究員
2) 文部科学省科学研究費補助金･基盤研究(A)(1)「現代宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」(代表　上野和男) 研究分担者

四　社会連携
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「稲と藁の民俗」仙台市歴史民俗資料館特別展藁の民俗講演会, 11月20日, 仙台市榴ヶ岡市民センター
「日本法史学」秋田県高大連携事業 (秋田県学術国際政策課), 10月15･22･29日, 11月5･12日, 秋田県生涯学習センター分館ジョイナス

II　業績目録

1) 著書
『ナマハゲ新版』単著 (182+2頁) 秋田文化出版, 3
2a) 論文
「象潟の交差儀礼」(『秋田民俗』30号, pp.54-58, 秋田県民俗学会, 6月)
「八重山諸島のアカマタ･クロマタ再考」(『北方風土』49号, pp.69-74, 北方風土社, 1月)
「能代の民俗その4」(『秋田論叢』21号, pp.1-48, 秋田経済法科大学法学部, 3月)
2c) 書評
「伊藤正『維新史資料西郷隆盛と秋田戊辰戦争』」(『秋田法学』44号, pp.157-162, 秋田経済法科大学法学部, 2月)

III　研究状況･研究広報

一昨年より全国の来訪神儀礼行事を再調査しています。本年は『ナマハゲ新版』を上梓しました。続いて, 普及版のブックレットを執筆します。わかりやすい民俗学を考えて解説します。村落社会が民俗行事をひとつの手段として, それを政治的な統合に利用したのか。民俗学での未開拓分野にメスを入れることを考えています。

岩下　哲典　IWASHITA　Tetsunori　客員助教授 (明海大学経済学部助教授)

1962年生 [学歴] 青山学院大学文学部史学科1985年卒, 青山学院大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程1994年単位取得満期退学 [職歴] 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部客員助教授併任(2004) [学位] 博士 (歴史学), 青山学院大学, 2001年 [所属学会] 洋学史研究会, 洋学史学会, 日蘭学会, 明治維新史学会, 日本海事史学会, 日本18世紀学会, 日本医史学会, 地方史研究協議会, 儀礼文化学会, 近現代史研究会, 横須賀開国史研究会 [専門] 日本近世･近代史 [主な研究テーマ] 幕末維新史／Study on the last days of the Tokugawa Shogunate and the Meiji Restoration, 画像情報史／Study on

image documents of the Edo period, 対外関係史／ Study on the history of Japan's international contacts, 洋学受容史／ Study on Western learning in the Edo period

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 日本学術振興会科学研究費補助金 (研究成果公開促進費･データベース)「詳細書誌目録付き錦絵画像データベース」の研究分担者として, 館内にて館蔵錦絵の調査･研究を行った。その成果の一部を印刷博印刷博物館の展示図録『開国150年記念展「西洋が伝えた日本／日本が描いた異国」に掲載の「『日本が描いた異国』を知る手掛かり」と題する論文に取り込んだ。また, 同展に監修として関わった。

2) 錦絵が制作された幕末･維新期の社会状況を調査･研究するために, 長野県上伊那郡辰野町小野の倉沢秀夫家を訪問し, 同家文書を調査した。予備調査11月15日, 本調査12月26日, 2月12日。

二 教育活動

1) 教育

明海大学大学院 (日本文化特論) , 経済学部 (日本の歴史, 歴史から見た現代の社会, ゼミナールⅠ･Ⅱ) , 外国語学部 (日本文化講義Ⅰ･Ⅱ)
聖徳大学兼任講師 (江戸幕府政治家の社会Ⅱ)
東京女子大学兼任講師 (日本史特殊講義B, 2年次日本史演習III)
早稲田大学兼任講師 (日本史学演習ⅡC)

四 社会連携

1) 館外における各種委員

浦安市文化財審議会委員, 新修名古屋市史執筆調査員, 徳川林政史研究所研究協力員, 洋学史研究会副会長, 横須賀開国史研究会客員研

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「『新選組』を読む」『歴史の会月例会』(浦安市読書会協議会歴史の会) 4月15日, 5月12日, 6月9日, 7月7日, 8月25日, 9月8日, 10月13日, 11月10日, 12月8日
「江戸庶民のコミュニケーション」『歴史教養企画』(浦安市舞浜二丁目老人クラブ) 4月21日
「阿部正弘とペリー来航予告情報」『記念講演会』(広島県立歴史博物館) 4月23日
「浦安にあるオランダ」『洋学史研究会月例会』(洋学史研究会) 5月8日
「日米和親条約締結の舞台裏」『特別講座』(朝日カルチャーセンター立川) 6月12日
「江戸庶民の風刺精神」『歴史教養企画』(浦安市舞浜二丁目老人クラブ) 6月16日
「幕末維新のはじまり」『図書館公開講座』(浦安市読書会協議会) 6月19日
「長州浪人吉田松陰, 浦賀へ奔る」『開国150年記念講座』(横浜市歴史博物館) 6月30日
「攘夷の高まりと幕府崩壊」『図書館公開講座』(浦安市読書会協議会) 7月24日
「江戸の海外情報ネットワーク」『夏期講座』(早稲田大学エクステンションセンター) 7月26日, 8月2日, 8月16日, 8月23日, 8月30日, 9月6日
「江戸開府, 徳川家康の深謀遠慮」『教養講座』(葛飾老人クラブ若葉会) 8月2日
「海外情報はなぜ庶民に漏れたか」『歴史教養企画』(浦安市舞浜二丁目老人クラブ) 8月16日
「幕府瓦解, 徳川慶喜の起死回生の一手」『教養講座』(葛飾老人クラブ若葉会) 8月26日
「江戸期日本人の異国認識」『第一回講演会』(印刷博物館) 9月25日
「江戸のナポレオン伝説」『高校出張講座』(千葉県立佐倉西高校) 10月4日
「北からの脅威」『歴史教養企画』(浦安市舞浜二丁目老人クラブ) 10月20日
「ペリーと日本の開国」『幕末･明治の群像－世界の中の日本へ』(朝日カルチャーセンター横浜) 10月21日
「情報の流れ 今, むかし」『世田谷区北沢区民講座』(世田谷区北沢総合支所地域振興課) 11月11日
「ナポレオン情報と幕末の志士たち」『2004年公開講座』専修大学大学院社会知性開発センター･歴史学研究センター , 11月13日 (当日の録音をもとに活字化した同名の文章が『専修大学歴史学研究センター年報』第二号に掲載された)
「アヘン戦争からペリー来航へ」『歴史教養企画』(浦安市舞浜二丁目老人クラブ) 12月15日
「『図説 源義経』を読む」『歴史の会例会』(浦安市読書会協議会歴史の会) 2005年1月12日, 2月9日, 3月9日
「香港いま昔」『歴史教養企画』(浦安市舞浜二丁目老人クラブ) 2月23日

3) マスコミ

「家康のパフォーマンス／薬は権力の象徴でもあった／大名や家臣らに下賜して人心掌握」インタビュー『週刊朝日』増刊号109巻17号, 4月
「その時歴史が動いた／大江戸発至急便 黒船あらわる」インタビュー, NHK総合, 6月

Ⅱ 業績目録

2a) 論文

2004.12:「ペリー初来日の初期五日間の交渉における浦賀奉行所の対応と能力について」(『自然と文化』16号, pp.81-88, 明海大学)
2005.3:「日米和親条約の締結前後における領事駐在権をめぐって」(『応用言語学研究』7号, pp.77-86, 明海大学大学院応用言語学研究科)

3a) 調査･発掘調査報告書

2005.3:「ナポレオン情報と幕末の志士たち」(『専修大学歴史学研究センター年報』第2号, pp.96-108, 専修大

学歴史学研究センター)
2005.3:「ペリーの白旗書簡と浦賀奉行所における白旗認識をめぐる史料について」(『神奈川県立歴史博物館総合研究－総合研究，開国と異文化の交流』pp.15-26，神奈川県立歴史博物館)

3c) 辞典項目

『歴史読本』7月号「吉田松陰」「松本良順」「木戸孝允」「大鳥圭介」「福沢諭吉」「松平容保」「榎本武揚」「徳川慶喜」「上野彦馬」「渋沢栄一」「伊藤博文」「木戸松子」「陸奥宗光」，新人物王来社，2004

4) 展示図録

2004.9:「『日本が描いた異国』を知る手掛かり」(『開国150年記念展「西洋が伝えた日本／日本が描いた異国」図録』pp.76-85，印刷博物館 (同展の監修も行った))

6) 歴史系総合誌「歴博」，友の会ニュース

2004.4:「吉田松陰が目撃した幕末動乱の幕開け　ペリー来航」(『幕末大全』上巻，pp.42-47，学習研究社)
2004.4:「浦賀奉行所の五日間　初交渉でみせた臨機応変の対応力」(『幕末大全』上巻，pp.52-55，学習研究社)
2004.4:「予告された黒船来航　無策に終わった幕府役人の危機管理」(『幕末大全』上巻，pp.56-60，学習研究社)
2004.4:「横浜開港と遊郭事情」(『幕末大全』上巻，pp.66-70，学習研究社)

III 研究状況･研究広報

歴博においては，館蔵錦絵の調査において調書の作成に携わった。図中の詞書きの分量がデータ採取の補助業務従事者を悩ませる大きな要因であったが，主としてその翻字作業を助けるとともに，幕末期の風刺画を中心に画題の解読等をおこなった。資料点数は多かったが，約700点のデータ採取をおこなうことができた。

佐藤　真　SATO　Makoto　客員教授 (京都造形芸術大学芸術学部教授)

1957年生 [学歴] 東京大学文学部哲学科1982年卒業 [職歴] 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部客員教授併任(2004) [学位] [所属学会] [専門] ドキュメンタリー映画の製作と研究 [主な研究テーマ] 映画における記憶と痕跡について／ Memory, Trace and Cinema

I 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) エドワード･サイードの記憶と痕跡についての映画『OUT OF PLACE』の制作のため，8月に本格的 なロケ隊を組んで中東諸国で撮影をおこなった。その後，イスラエル (9月末，12月)，ニューヨーク (10月)，シリア･レバノン (1月) 各地で撮影をおこない，3月に編集を完了した。
2) 基盤共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」(代表　内田順子) に参加し，『SELF AND OTHERS』(2000年)，『阿賀の記憶』(2004年)について，「声」「記憶」「オーラルヒストリー」をテーマに研究報告をおこなった。
3) 京都造形芸術大学において「パレスチナ･イスラエルのボーダーを越えて」と題するドキュメンタリー 映画の特集上映会を企画･運営しイスラエルから9本，パレスチナから9本の映画の他エジプト，イ ランなど中東諸国の映画作品を上映し，鵜飼哲，臼杵陽，足立正生の各氏と対談をおこなった (3月25～27日)

二 教育活動

1) 教育

特定非営利活動法人映画美学校ドキュメンタリーコース主任講師

四 社会連携

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

韓国ソウルにおける日本のドキュメンタリー映画の特集上映会に招待され日本のドキュメンタリー映画史について講演し，観客との質疑応答に答えた (11月27日，イルジュアートハウス･アートキューブにて)。
ドキュメンタリー映画監督の土本典昭の国際交流基金での特集上映「土本典昭フィルモグラフィー展」の鼎談で土本典昭と韓国の映画監督キム･ドンオンと対談した (7月18日，国際交流基金フォーラムにて)。
録音技師久保田幸雄の特集上映「映画を聴く　Vol.2　録音技師･久保田幸雄」で久保田氏と映画監督の黒木和雄と鼎談に参加 (10月24日，川崎市市民ミュージアムにて)。
「第20回国民文化祭･ふくい2005　映像文化フェスティバル」のプログラムのひとつとして若い学生と市民向けの映像ワークショップを依頼され，作品作りの指導と制作をおこなった (12月4～5日，福井市寮町勝縁寺にて)。
リアル･アラブ映画祭における「アラブの若手映画作家について」の対談で，シリア人のジャーナリスト，ナジーブ･エルカシュ氏と対談 (3月18日，アテネ･フランセ文化センターにて)。
香港国際映画祭に「阿賀の記憶」が招待上映され，上映後のディスカッションで観客と映画人と交流を図った (3月28日，Cine-Art House にて)。

II 業績目録

7) その他

(1)映像作品
『中東レポート：アラブの人々から見た自衛隊イラク派兵』43分（カラー･シグロ作品）
『OUT OF PLACE』131分（カラー･シグロ作品）
(2)対談
2005.1：「対談：鵜飼哲＋佐藤真　ジャック･デリダとエドワード･サイードの痕跡」（『季刊インターコミュニケーション』pp.14-32，NTT出版株式会社）
(3)新聞署名原稿
2004.4：「サイードの足跡を訪ねて」『京都新聞』2004年4月6日（夕刊）
2004.6：「アラブの人々から見た自衛隊イラク派兵」『京都新聞』2004年6月7日（夕刊）
2004.8：「テレビのない暮らし」『京都新聞』2004年8月25日（夕刊）
2004.10：「ゴラン高原の夕陽」『京都新聞』2004年10月26日（夕刊）
2004.12：「ソウルで見る日本のドキュメンタリー」『京都新聞』2004年12月24日（夕刊）
2005.2：「イスラエル･パレスチナのボーダーを越えて」『京都新聞』2005年2月28日（夕刊）

III　研究状況･研究広報

昨年1年間はエドワード･サイードの記憶と痕跡を巡る旅に忙殺された。結局中東諸国に3回，イスラエルに2回，ニューヨークに2回ロケと調査に訪れた。インタビューをおこなった知識人は33人におよび，映画ではその大半を割愛せざる得ないため，現在翻訳家の中野真紀子さんとサイードを巡る「声の痕跡」を刊行できないか，検討中である。

杉井　健　SUGII　Takeshi　客員助教授（熊本大学文学部助教授）

1965年生［学歴］大阪大学文学部史学科1989年卒業，大阪大学大学院文学研究科史学専攻修士課程1992年修了，大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士課程1994年中途退学［職歴］大阪大学文学部助手(1994)，熊本大学文学部助教授(1998)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部客員助教授併任(2004)［学位］修士（文学），大阪大学，1992年［所属学会］考古学研究会，日本考古学協会，日本考古学会，日本史研究会，九州前方後円墳研究会，熊本古墳研究会［専門］日本考古学［主な研究テーマ］原始･古代生活様式研究／ Study of Life-style pre-histories and ancient times，古墳時代政治史･社会構造研究／ Study of the polity and social structure of Kofun period

I　研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 個別共同研究「マロ塚古墳出土品を中心とした古墳時代中期武器武具の研究」（代表　杉山晋作）で，本館所蔵マロ塚古墳出土品の実測調査，東日本出土武器武具の資料調査，九州出土武器武具の資料調査，マロ塚古墳および周辺所在古墳の実地調査を行った。
2) 日本学術振興会基盤研究A2「琉球列島における農耕社会形成過程の解明に向けた実証的研究－5～7世紀を中心に」（代表　木下尚子）で，鹿児島県大島郡笠利町マツノト遺跡の発掘調査，兼久式土器に関する資料調査を行った。
3) 個人研究テーマ「原始･古代生活様式研究」で，九州および山陰で土製支脚･移動式竈･造り付け竈についての資料調査を行った。
4) 個人研究テーマ「古墳時代政治史･社会構造研究」で，熊本県上天草市千崎古墳群の発掘調査および長砂連古墳石障の実測調査を行い，その成果を[杉井監修2005.3b]で公表した。
5) 個人研究テーマ「古墳時代政治史･社会構造研究」で，小経営についての検討を開始し，その成果の一部を[杉井2005.3c]で公表した。

四　社会連携

1)　館外における各種委員
熊本県竜北町大野窟古墳範囲内容確認調査会議委員，熊本県山鹿市弁慶ヶ穴古墳保存整備検討委員会委員，熊本県合志町豊岡宮本横穴群検討委員会委員，熊本県天水町経塚･大塚古墳群保存整備検討委員会委員，熊本県上天草市史編纂委員会委員，九州国立博物館常設展示専門プロジェクトチームの検討会議委員

II　業績目録

1)　著書
杉井編2004.10：『熊本古墳研究』第2号（124頁），熊本古墳研究会
杉井編2005.3a：『九前研通信』第15号（8頁），九州前方後円墳研究会
杉井監修2005.3b：『上天草市史大矢野町編資料集』1（本文64頁･図版10頁），熊本県上天草市
2a)　論文
2005.3c：「古墳時代集落研究序論－黒井峯遺跡の分析から－」（『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』，pp.755-788，大阪大学考古学友の会･大阪大学大学院文学研究科考古学研究室）
3a)　調査･発掘調査報告書

2005.3d：第1部千崎古墳群第2次·第3次調査報告のうち「調査経過」(pp.8-12)，「1号墳」(p.18)，「2号墳」(p.18)，「3号墳」(p.18)，「4号墳」(p.19)，「7号墳」(p.19)，「11号墳」(pp.20-22)，「12号墳」(p.22)，「14号墳」(pp.22-23)，「18号墳」(p.24)，「19号墳」(p.25)，「20号墳」(pp.25-26，島津屋寛と共著)，「22号墳」(pp.26-28，島津屋寛と共著)，「23号墳」(p.28)，「24号墳」(p.28)，「古墳の現状」(pp.30-31，中村友昭と共著)，「調査の経過」(p.31，中村友昭と共著)，第2部長砂連古墳石障実測調査報告のうち「位置と環境」(p.41，平野直己と共著)，「調査経過」(p.42)，「古墳発見時の状況と現状」(p.43)(『上天草市史大矢野町編資料集』1，熊本県上天草市)

4) 展示図録

2004.7："Der Yukino-yama-Grabhugel-eine reiche Bestattung eines lokalen Oberhauptes der Fruhkofun-Zeit"，Zeit der Morgenrote (Japans Archaologie und Geschichte bis zu den ersten Kaisern) Handbuch，pp.304-311，Reiss-Engelhorn-Museen.

III 研究状況·研究広報

古墳時代において民衆レベルの要素と首長レベルの要素がどのように関係し，どのように影響を及ぼし合っているのか。私の近年の問題関心はここにある。

民衆レベルの要素としては，従来から土器や住居などを中心とした生活様式について分析しているが，今はとくに土製支脚と移動式竈の動向に注目して分析を継続中である。また，前方後円墳分布の周縁域である九州地方南部地域以南および東北地方北部地域以北の生活様式についての調査も継続して行っている。

これまでの私の中心的なテーマは上述のようなことであったが，最近は古墳そのものの分析に研究の比重を幾分移しつつある。それが首長レベルの要素の検討につながっているのだが，今取り組んでいるのは，熊本県地域をフィールドとして，前方後円墳などの首長墓と箱式石棺などの在地墓制の関係を明らかにするという研究課題である。首長墓では熊本県植木町高熊古墳（前方後円墳）およびその周辺の古墳を，在地墓制では天草地域の箱式石棺墓や地下式板石積石室墓，あるいは熊本県地域の石障系横穴式石室墳を対象としてフィールド調査を行っている。2004年度は，これまで本格的な考古学調査がなされていなかった上天草市千崎古墳群および長砂連古墳の調査を行い，それらに関する基礎資料を公表した。

熊本県地域の古墳に関する基礎資料は，残念ながら十分にそろっているとは言い難い。とくに問題なのは，かつて発掘調査が行われているにもかかわらず，正式報告書が刊行されていない古墳が大変多い点である。資料を公表し，それを共有化するというもっとも基本となる作業が立ち遅れているのである。そういう問題意識のもとに始めたのが，本館の個別共同研究「マロ塚古墳出土品を中心とした古墳時代中期武器武具の研究」（代表　杉山晋作）である。マロ塚古墳からはきわめて残存状態のよい武器·武具類が検出されているから，その報告書を作成することはそうした遺物の構造研究に大きく寄与することはもちろんである。また，熊本県地域における首長墓の動向を探るためにも，それは欠くことのできない仕事である。しかし，そうしたことのみではなく，マロ塚古墳の調査·研究活動をきっかけとして，未報告の資料を整理し報告·研究するという気運が熊本県で高まって欲しい。そうした願いをもちながらこの共同研究を進めている。

田中　正弘　TANAKA　Msahiro　客員教授（國學院大學栃木短期大学日本史学科教授）

1945年生［学歴］國學院大學文学部史学科1968年卒業，國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程1974年単位取得満期退学［職歴］大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部客員教授併任(2004)［学位］博士（歴史学），國學院大學，1996年［所属学会］国際東方学者会議，栃木史学会，国史学会，日本史研究会，日本歴史学会，軍事史学会［専門］日本近代史，近代日中関係史［主な研究テーマ］幕末維新史，近代日中関係をめぐる社会的外交史

I 研究·教育活動

一 研究·調査，成果公開方法としての報告·展示·国際シンポ·広報

1) 平成15年度基盤研究(C)(2)「外務省記録にみる近代日中関係と匪賊に関する総合的研究」（代表　田中正弘）。

平成15年度に引き続き，外務省外交史料館において明治·大正期の外務省記録中の「満洲馬賊」に関係する史料の調査を続行した。「支那馬賊関係」の記録のみならず，「帝国ノ対支外交政策」や「支那内政関係雑件」，「関東都督府」「馬賊被害事件」「満鉄」などの関連分野に跨る諸記録も少なくなく，量的にも膨大であるので，未だ調査は途中である。しかし，その中から関連の重要史料を抽出して，いくつか紙焼きコピー史料を収集した。その中でも特に日露戦争時，袁世凱の軍事顧問として側近にあった坂西利八郎の馬賊関係を含む報告は興味深いが，本格的分析はこれからである。

そして本年は併せて山口県立文書館に出張して，同館の所蔵する「田中義一関係文書」を調査し，張作霖のみならず彼宛の孫文その他中国要人の書翰や田中外交に対する本邦政治家の書翰，彼自身の意見書，調書写などを日露戦争以前に遡って調査し，重要な史料はデジタルカメラで撮影，収集した。なお，「満洲馬賊関係史料のデータベース」作成は明治末年近くまで進めることができた。

四 社会連携

1) 館外における各種委員

國學院大學栃木短期大学日本史学科長，國學院大學栃木学園参考館長，財団法人並河靖之七宝記念館評議員，国史学会評議員など

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
公民館大学講座，演題「新選組とその時代」（栃木県上三川町），7月10日
出張講演，演題「万延元年の遣米使節と村垣範正」（朝日カルチャーセンター･横浜の講座「幕末･明治の群像」の内），7月15日
演題「土方歳三の手紙を読む」（國學院大學栃木短期大学日本史学科，高校生のためのサマースクール），8月7日
出張講演，演題「戊辰戦争と死の商人－スネル兄弟の軌跡－」（國學院大學栃木短期大学，日本史学科内外講座，宇都宮二荒山神社会館において），9月18日

II 業績目録

2a) 論文
「近代日本における『馬賊』観の成立」（『栃木史学』第19号，國學院大學栃木短期大学史学会，pp.37-66，2005年3月）

III 研究状況･研究広報

昨年に引き続き，「木戸家文書」中の「来原良蔵関係文書」の資料目録に着手。来原良蔵は，吉田松陰の盟友で，木戸孝允の実妹和田ハル（春子･治子）を娶っている。来原に宛てた吉田松陰･前原一誠･周布政之助･兼重重蔵･山田亦介･杉梅太郎･村田蔵六･桂小五郎らの書翰を一通ごとに件名を付けて整理し，同様に来原の日記及び藩政や海防に関する書類を整理して新たに件名を付け直し，資料目録を作成することができた。その後来原良蔵の長男で木戸家の三代目を継ぐ，来原彦太郎（後の木戸孝正）関係文書の整理を進めている。ちなみに来原良蔵は文久二（一八六二）年八月二十九日，江戸の桜田藩邸で切腹した。彼の死後，長男彦太郎とその弟正二郎の二人の幼い子息が残された。木戸孝允は次男正二郎を木戸家の養子したが，孝允没後の明治十七年留学先の欧州より帰国途中，正二郎は病没した。こうして来原良蔵の長男彦太郎が思いもよらず木戸家の後継者となっていく。彼が木戸侯爵家を継承して，孝允の一字を貰い孝正と改名するわけである。一般に初代木戸孝允は維新の元勲として，また孝正の長男木戸幸一は「内大臣」ないし「木戸内府」として，歴史的に余りにも著名な人物だが，そのわりに木戸正二郎と木戸孝正はよく知られていない。この兄弟は明治三年には海外留学生として英国と米国に派遣された。その関係史料は明治初期海外留学生の実態がいかなるものであったのかと云う方面の研究からも重要であり，兄弟の母ハルとの往復書簡，岩倉使節で欧米視察中の孝允から幼い兄弟に宛てた書簡は特に興味深い。
後に木戸孝正は東宮侍従長として大正天皇の皇太子時代側近として仕えている。華族世界での木戸孝正の役割，さらに長州閥の人脈と交流の具体相を伝える関係文書や日記は殊更重要と考えられる。ただし「木戸孝正の関係資料」を全体的にみると，日記･書簡･書類などの資料の分類に多少問題があり，人物ごとに分類したにも拘わらず，そのようになっておらず，木戸孝允の手帳や木戸正二郎の書翰が「木戸孝正」のものとして分類されていたりして，従来の資料目録には混乱もみられるので，改めて一点一通ごとに点検して，件名を付け直し，分類をきちんと調節しながら，判然とした資料目録を作成すべく進めているところである。

辻 誠一郎 TSUJI Sei-ichiro 客員教授（東京大学大学院新領域創成科学研究科教授）

1952年生［学歴］日本大学文理学部応用地学科1975年卒業［職歴］国立歴史民俗博物館歴史研究部教授(2003)，総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任(2004)，東京大学大学院新領域創成科学研究科教授(2004)，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部客員教授併任(2004)［学位］博士（理学），大阪市立大学，1985年3月［所属学会］日本第四紀学会，日本植生史学会，日本植物学会，日本生態学会，日本植物分類学会，日本地質学会，IOP国際古植物学協会，酒史学会［専門］古生態学，古環境学，植物学，地球科学，景観歴史学［主な研究テーマ］人類時代の生態系史／ Anthropogene ecosystem history，環境文化史／ History of environment and culture

I 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 個別共同研究「海をわたった華花」（2001･2002年度，代表）および企画展示プロジェクト「海をわたった華花」（2003･2004年度，代表）の調査･研究の成果を企画展示「海をわたった華花－ヒョウタンからアサガオまで」（期間：7月13日～9月12日）で公開し，展示図録を刊行した。また，調査･研究の成果と展示内容を『千葉日報』に14回にわたって連載し[辻2004.8]，その他の新聞･広報誌などでも公開した。これと関連して企画展示開催期間中の7月29日～8月1日「国際シンポジウム：アジアの植物多様性」を国立歴史民俗博物館･国際植物分類学会･日本植物分類学会･種生物学会･日本藻類学会が共催し，第1日目の7月29日に共同研究･展示プロジェクトの調査･研究の成果を公開シンポジウム「海をわたった華花」において公開した。また，共同研究と企画展示の成果と展望を公開することを目的に，8月7日，第47回歴博フォーラム「海をわたった華花2004－人と植物の日本史」を開催した。第247回歴博講演会でも講演した[辻7.19]。
2) 生態系生態学および景観生態学の方法を考古学･歴史学に導入し，生態系史研究および景観歴史学の新領域の構築を押し進めた。この成果は，ドイツのベルリンで開催された「シンポジウム日本考古学－日本原始古代の変革と連続」[辻2004.11]とドイツ語の刊行物[Tsuji2004]で公開した。事例研究として，長崎県原の辻遺

跡での成果を[辻ほか2005.3]，総説として縄文時代の生態系史[辻2004.10]を，空間社会構造解析の基礎研究として長野県軽井沢の埋没林[Noshiro et al. 2004]を報告した。
3) 植物文化史，動物文化史，人と動植物とのかかわり史研究の領域開拓を目的として「環境文化史研究談話会」を設立し，第1回で基調報告[辻2005.1]を行った。

二 教育活動

2) 博物館教育

理科歴博講座「国立歴史民俗博物館から学ぶ」，8.5，くらしの植物苑および本館企画展示室
平成16年度「先生のための歴博講座－教室から歴博へ－」，8.10，企画展示「海をわたった華花」解説

三 博物館活動

1) 歴博探検･くらしの植物苑

くらしの植物苑体験教室の2004年度年間プログラムを作成。「葉っぱ」のふしぎ（5.22，くらしの植物苑）講師，「デンプン」のふしぎ（9.25，くらしの植物苑）司会，「アブラ」のふしぎ（1.22，くらしの植物苑）司会，「花」のふしぎ（3.26，くらしの植物苑）司会，体験教室の前月第4土曜日にボランティア養成の研修を行った。
くらしの植物苑観察会の2004年度年間スケジュール（第73～84回）を作成，このうち8回において司会･ギャラリートーク･報告を行った。第73回（4.29，くらしの植物苑）司会，第75回（6.26，くらしの植物苑）報告「夏至と半夏生」，第76回（7.24，講堂）司会，第77回（8.28，講堂）司会，第78回（9.25，くらしの植物苑）司会，第79回（10.23，くらしの植物苑）司会，第82回（1.22，くらしの植物苑）司会，第84回（3.26，くらしの植物苑）司会
第247回歴博講演会，7.10，講堂，講演「海をわたった華花－日本文化を咲かせた植物たち」

四 社会連携

1) 館外における各種委員

日本学術会議古生物研究連絡委員会委員，日本植生史学会会長（2003～2005年度），酒史学会理事（2004～2006年度），日本第四紀学会評議員（2003～2004年度）･高精度14C年代測定研究委員会委員，国際植物分類学会(IAPT)シンポジウム2004準備委員会委員，総合地球環境学研究所共同研究員（共生概念の再構築），青森県教育委員会三内丸山遺跡発掘調査委員会委員，青森県三内丸山魅力づくり会議アドバイザー，福島市宮畑遺跡整備指導委員会委員，相模原市田名向原遺跡研究会委員･環境部会長，塩尻市史跡平出遺跡整備委員会委員，鳥取県教育委員会青谷上寺地遺跡発掘調査委員会委員，山口県史編さん執筆委員，長崎県原の辻遺跡保存整備委員会委員･環境復元検討部会長，沖縄県北谷町伊礼原C遺跡保全整備基本構想検討委員会委員

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

2004.5：「旧石器時代から弥生時代の自然環境」『かながわ考古学同好会例会』（かながわ考古学同好会）
2004.4：「海をわたった華花」『麻の会例会』（麻の会）
2004.10：「日本の緑と環境史」『第3回屋上･壁面･特殊緑化技術コンクール表彰式』（財団法人都市緑化技術開発機構）
2004.10：「縄文時代と環境」『全国大気汚染防止連絡協議会第50回全国大会』（全国大気汚染防止連絡協議会）
2004.11：「縄文時代の植物－人と植物とのかかわり」『縄文大学』（飛ノ台史跡公園博物館）
2005.1：「日本における植生史，植物遺体研究史と特徴」『第1回環境文化史研究談話会』（環境文化史研究談話会）
2005.2：「低湿地遺跡からみた環境変化」『平成16年度埋蔵文化財専門技術講習会「低湿地遺跡調査課程」』（財団法人千葉県文化財センター）
2005.2：「年代測定が引き起こした歴史年代観の変化」『髻華の会例会』（髻華の会）
2005.2：「海をわたった華花をめぐって～ヒョウタンからアサガオまで～」『東京縄文塾』（三内丸山縄文発信の会）
2005.2：「第四紀環境変動と植物地理･系統進化」『第22回バイオーム研究会』（東京大学バイオームWG）

II 業績目録

2a) 論文

Die Pfanzenwelt der japanischen Inselkette vom Pleistozan zum Holozan. Zeit der Morgenrote-Japans Archaologie und Geschichte bis zu den ersten Kaisern-Handbuch, pp.47-51, Reiss-Engelhorn-Museen, Manncheim, Edition Minerva Hermann Farnung, Wolfratschausen, 200
Latest Pleistocene forests buried by Asama tephra in the Minami-Karuizawa basin, central Japan. Japanese Journal of Historical Botany, Vol.13, pp.13-23, Japanese Association of Historical Botany, 2004 (with S. Noshiro and M. Suzuki)

3a) 調査･発掘調査報告書

2005.3：「植物遺体群からみた原の辻遺跡の植生と人間･植物関係史」（『原の辻遺跡調査報告書（総集編）』pp.226-241，長崎県教育委員会（辻圭子･鈴木茂と共著））
2005.3：「板倉町ニュータウン調整池における地層断面の古環境調査」（『波動』Vol.9，pp.131-143，板倉町教育委員会（後藤香奈子･辻圭子と共著））

3b) 自治体史･史料集など

2004.3：「花粉分析」「植物珪酸体分析」（『千葉県の歴史資料編考古4（遺跡･遺構･遺物）』pp.1068-1071，pp.1072-1075，千葉県）

4) 展示図録

2004.7編著:『海をわたった華花－ヒョウタンからアサガオまで－』104頁, 国立歴史民俗博物館
5) 学会･外部研究会発表要旨
2004.7:「海をわたった華花と日本の植生史」(『国際シンポジウム:アジアの植物多様性公開シンポジウム要旨集』pp.1-9, 国立歴史民俗博物館)
2004.7:Plants and flowers that crossed the sea to Japan and vegetation history in Japan. (Program and Abstracts:International Symposium 2004 Asian Plant Diversity and Systematics, Open Symposium:Plants and Flowers That Crossed the Sea, p.5, National Museum of Japanese History)
2004.10:「縄文時代の生態系史:人－環境系はどこまで読み解けるか」(『縄文社会をめぐるシンポジウム－景観と遺跡』pp.5-11, 縄紋社会研究会, 早稲田大学)
2004.10:「日本における先史時代の酒造－課題と展望」(『酒史学会第3回研究発表会』pp.1-5, 東京農業大学)
2004.11:「三内丸山遺跡の生態系－縄文的生態系と縄文文化の特質」(『国際シンポジウム日本考古学－日本原始古代の変革と連続』Dok.7, pp.1-11, ドイツ･ベルリン日独センター)
2004.11:「宮城県山王遺跡から出土した種実遺体群」(『日本植生史学会第19回大会講演要旨集』pp.39-40, 中央大学)
2004.12:『講義記録集1－考古編年と暦年代について』(28頁), 御所野縄文博物館 (岡村道雄と共著)
6) 歴史系総合誌『歴博』, 友の会ニュースなど
2004.5:「植物苑の体験教室」(『歴博』124号, p.30)
2004.7:「第47回歴博フォーラム「海をわたった華花2004－人と植物の日本史」(『歴博』125号, pp.24-25)
2004.7:「企画展示「海をわたった華花」」(『国立歴史民俗博物館友の会ニュース』pp.1-2)
2004.11:「れきはく井戸端会議」(『歴博』127号, p.31)
7) その他
2004.4:「遺跡の年代ものさしを変える～新しい時代の縄文観～前編」(『縄文ファイル』102号, pp.2-7)
2004.5:「遺跡の年代ものさしを変える～新しい時代の縄文観～後編」(『縄文ファイル』103号, pp.2-7)
2004.7:「海をわたった華花－ヒョウタンからアサガオまで」(『文部科学時報』1540号, p.82, 日高薫と共著)
2004.7:「2004年度国立歴史民俗博物館企画展示「海をわたった華花」」(『植生史研究』12巻, pp.90-93)
2004.8:「海をわたった華花－ヒョウタンからアサガオまで　No.1～14」(『千葉日報』8月5, 7, 10, 11, 12, 14, 16, 17, 18, 19, 21, 23, 25, 28日号)
2004.8:「海をわたった華花 (上･下)」(『聖教新聞』8月12, 19日号)
2004.10:「火山噴火と地球環境」(『保険展望』607号, p.21)
2004.10:「企画展示「海をわたった華花 (はなばな)」」(『博物館研究』39巻10号, pp.16-17, 日本博物館協会)
2005.1:「三内丸山43生態系の復元に挑む」(『東奥日報』1月8日号)
2005.3:「板倉の風土と環境のうつりかわり－縄文海進から現代まで」(『波動』Vol.9, pp.111-129)
2005.3:「柏キャンパスの環境に期待」(『創成』5号, p.16)

III 研究状況･研究広報

2004年度は東京大学での本務と歴博での客員教授の二重生活を送った。とくに年度の前半は企画展示「海をわたった華花－ヒョウタンからアサガオまで」および国際植物分類学会の国際シンポジウムなどの関連事業の準備に多くが費やされた。初めての試みといってもよい過去1万年間の植物文化史の展示は, 今後の歴史学, 考古学, 環境文化史における新しい研究と公開の可能性を見いだせたとはいえ, もともと柔軟性と可塑性をもたない歴博では発展的なプロジェクトにはつながりにくいことを痛感させた。
設置されて10年になるくらしの植物苑は, 歴博の研究･調査活動と研究成果の公開の場にはなりにくいことを改めて痛感した。付属施設としての歴史公園あるいはいこいの場として華々しさを全面に出した運営が適しているかも知れない。城址公園を取り込んだ歴史公園構想をもつなど視野を拡大すれば, 何らかの成果公開の場としての活用もありうる。

並木　美砂子　NAMIKI　Misako　客員助教授 (千葉市都市局公園緑地部動物公園管理課主査)

1957年生 [学歴] 東京農工大学農学部環境保護学科1979年卒業, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科発達科学専攻博士課程2002年修了 [職歴] 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部助客員教授併任(2004) [学位] 博士 (学術), お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, 2003年 [所属学会] 日本保育学会, 全日本博物館学会 [専門] 博物館教育 [主な研究テーマ] 来館者研究･コミュニケーション論

I 研究･教育活動

一 研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報
1) 個人研究テーマ「来館者調査」の一環として, 自然史系博物館と歴史系博物館の展示利用調査比較のための来館者調査を行い, その成果を「自然史系博物館における来館者調査:千葉県立中央博物館の企画展示」[2005.3]として調査報告書を発行した。

二 教育活動
1) 教育
フェリス女学院大学非常勤講師 (国際学部:21世紀の科学技術と社会)

日本大学非常勤講師（文理学部：教育学特別講義II）
2) 博物館教育
国立歴史民俗博物館主催の公開研究会「観客から博物館を見る－研究をどう見せるか－」での発表(2004.12.4)「『展示意図の伝わり具合測定』と『来館者を理解すること』のはざまに見えること：自然史博物館の企画展を例に」

II 業績目録

2a) 論文
「子ども動物園の歴史と未来」（『子ども博物館楽校2』，pp.45-61，子ども博物館研究会発行，2004）
3a) 調査･発掘調査報告書
『歴史系博物館と自然史系博物館の来館者調査比較 その1 自然史系博物館における来館者調査報告：千葉県立中央博物館の企画展示を例として』発行機関，2005.3.（竹内有理と共著）
「『展示意図の伝わり具合測定』と『来館者を理解すること』のはざまに見えること：自然史博物館の企画展を例に」（歴博共同研究･総研大学長プロジェクト合同公開研究会予稿集『観客から博物館を見る－研究をどう見せるか－』pp.21-28，国立歴史民俗博物館･総合研究大学院大学，2004）

III 研究状況･研究広報

歴史研究部の久留島教授･小島助教授･研究推進委員の竹内らとともに，内外の博物館教育に関する最近の論文や基本的な教育心理学関連の著作などの輪読を中心とした「Museum Learning Theory 研究会」を開催し，現在も継続中である。
【使用テキスト一覧】
Falk J. H. and Dierking L. D. 2000. *Learning from Museums.* Alta Mira Press. Walnut Creek USA.
Hooper- Greenhill E. 1999. *The Educational Role of the Museum* 2nd ed. Smithonian Press. Washington D.C.
Roberts L. C. 1997. *From Knowledge to Narrative : Educators and the changing museum.* Routledge. New York.
Hein G. E. 1998. *Learning in the Museum.* Routledge. New York.
H.ガードナー，2001，『MI：個性を生かす多重知能の理論』松村（訳），新曜社
J.S.ブルーナー，1998，『可能世界の心理』田中一彦（訳），みすず書房

橋本 哲夫 HASHIMOTO Tetsuo 客員教授（新潟大学理学部教授）

1941年生【学歴】金沢大学院修士課程修了1966年【職歴】大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部客員教授併任(2004)【学位】博士（理学），九州大学，1974年3月【所属学会】日本化学会，日本原子力学会，日本分析化学会，分析化学新潟地区部会（平成16年度副会長，17年度会長），日本放射化学会，日本文化財学会，日本地球化学会，日本温泉科学会，ESR 応用計測研究会，フィショントラック研究会，ルミネッセンス研究会【専門】放射化学，文化財年代学【主な研究テーマ】放射線誘起ルミネッセンス現象の基礎と応用／ Basic and applied studies on radiation-induced luminescence from minerals，天然放射性核種の挙動／ Environmental behavior of natural radionuclides

I 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 科学研究補助金 基盤研究B(2)「固体物性評価のためのルミネッセンス4次元観測システムの構築と利用」で実験研究を行い，2004年7月にはカナダ･ノバスコシア･ハリファックス（ダルハウジー大学）での第3回ニューワールド･ルミネッセンス年代測定ワークショップに院生とポスドク生を合わせた4名で参加し，全部で4編を口頭発表した。
2) 科学研究補助金 基盤研究B(2)「固体物性評価のためのルミネッセンス4次元観測システムの構築と利用」の3年目に当たり，研究報告冊子を印刷した。納めた学術論文･報道記事など，全体で346頁の大部となり，退官2年前のまとめにふさわしい内容とすることが出来た。
3) パルス時間間隔解析法で微量なウラン･トリウム分別同時定量を行った研究成果を，2003年6月ウイーンのIAEA（国際原子力機構）の環境･生物の放射性物質分析法の国際会議で口頭発表したところ，60数編の発表論文から20編がAnal. Bioanal. Chem.，誌に掲載され，私どもの論文が厳密な審査をパスしその一編に選ばれた

II 業績目録

1) 著書
橋本哲夫2005：『科学で探る歴史－発光（ルミネッセンス）現象から歴史が見えてくる』新潟大学ブックレット，新潟日報事業社，72頁
2a) 論文
T. Hashimoto, T. Yawata and M. Takano, 2003: Preferential use of red-thermoluminescence (RTL) -dating for

quartz extracts from archaeologically burnt pottery -comparison of RTL and BTL (blue-TL) measurements using single-aliquot regenerative-dose (SAR) method. *Ancient TL,* 21, 85-91.
A. Takeuchi, H. Nagahama, T.Hashimoto, 2004: Surface electrofication of rocks and charge trapping centers, *Physics and Chemistry of the Earth,* 29, 359-366.
八幡崇･橋本哲夫2004:「ルミネッセンス研究への標準放射線線源として小型X線発生装置とAl吸収板の利用」, *Radioisotopes,* 53, 207-212.
T. Yawata, T. Hashimoto, 2004: Identification of the volcanic quartz origins from dune sand using a single grain RTL-measurement. *Quart. Sci. Rev.*, 23, 1183-1186.
T. Hashimoto, Yukihisa Sanada and Yasuhiro Uezu, 2004: Simultaneous determination of radionuclides belonging to three natural decay series using Time Interval Analysis (TIA). *Anal. Bioanal. Chem.*,379, 227-233.
J. Muto, H. Nagahama, T. Hashimoto, 2004: Microinfrared reflection spectroscopic mappings, application to the detection of hydrogen-related species in natural quartz. *Journal of Microscopy,* 216, 222-228.
橋本哲夫2004:「歴史をはかる」(はかってなんぼ社会編『丸善』(依頼原稿) pp.1-10)
橋本哲夫2004:「放射線誘起ルミネッセンスの基礎と考古学等への応用」(『放射線と産業』101, pp.32-37)
J. Muto, H. Nagahama, T. Hashimoto, 2005: Hydrogen distributions in dynamically recrystallized quartz grains, Cathode luminescence and micro-infrared spectroscopic mappings. *Geological Society of London,* 245, 397-407.
Toshiyuki Kitazawa, Takahiro Nakagawa, T. Hashimoto, Masaaki Tateishi, Stratigraphy and optically stimulated luminescence (OSL) -dating of terrace sequence along the Dong Nai River, southern Vietnum. *Journal of Asian Earth Science,* in press.
Y. Ganzawa, H. Furukawa, T. Hashimoto, S. Sanzelle, D. Miallier, and Th. Pilleyre, 2005: Single grains dating of volcanic quartz from pyroclastic flows using Red TL. *Radiation Measurements,* 39, 479-487.
T. Hashimoto, T. Yawata, M. Takano, 2005: Comparison of naturally accumulated radiation-doses between RTL, BTL, OSL, and IRSL using white minerals from archaeological burnt materials and usefulness of RTL-dating from quartz extracts Geochemical J., 39, 201-212.

5) 学会･外部研究会発表要旨

〔特別講演〕
「科学と歴史のすきまを埋める」新潟東ロータリクラブ例会特別講演, ホテル新潟, 2003年5月8日
「自然界での放射壊変系列の非平衡生起の原因について」核燃料サイクル機構, 安全管理西棟2階第2会議室, 5月28日
「天然鉱物類からの放射線誘起ルミネッセンス現象とその利用」Radioluminography (RLG)研究会特別講演, 東京, 10月17日
"Retrospective luminescence dosimetry using mineral extracts from atomic bomb suffered samples." T. Hashimoto, Sachiko Nomura, International Symposium on Radioecology and Environmental Dosimetry, Institute For Environmental Sciences, October 22-24, 2003, Rokkasho, Aomori, Japan.
「鉱物やセラミックス類からのルミネッセンス現象を用いた放射線線量測定」核燃料サイクル機構, 2004年1月20日
「歴史をはかる－鉱物からの発光現象(ルミネッセンス)を用いた考古遺物研究－」大学院自然科学研究科広報委員会主催の「公開学術講演会」, 1月22日
「歴史を光で探る」新潟大学大学院自然科学研究科公開セミナー －研究の最前線を語る(解説する)－, 新潟大学駅南キャンパス～クリック, 2月7日
"Recent development of luminescence measurement system. Specialist Meeting on Luminescence Dating 2004" Niigata University, 20-22, Feb.
「ルミネッセンス年代測定法の考古資料への応用」国立歴史民俗博物館, 2月29日
「自然放射能と放射線について」神戸薬科大学RI安全教育訓練(再教育), 3月18日
「放射線現象から先史時代を探る」九州･沖縄地区小中高教員研修用原子力体験セミナ(特別講演) 長崎市ブッリックホール, 8月22日
「自然科学から歴史を探る」大学等講義体験授業, 五泉高校, 12月8日
「熱ルミの測定結果について」平成16年度基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」研究会, 国立歴史民俗博物館, 2005年2月14日
〔国際学会〕
T.Hashimoto, H. Fujita, Y. Tajika, T. Yamaguchi, Effects of Al-OH and other impurities on thermoluminescence property of natural quartz slice (Oral presentation). The Third New World Luminescence Dating Workshop, Halifax, Nova Scotia, Canada, 4-7 July, 2004.
H. Fujita, N. Shimizu, T. Hashimoto, Radioluminescence from some natural quartz samples.(Oral presentation). The Third New World Luminescence Dating Workshop, Halifax, Nova Scotia, Canada, 4-7 July, 2004.
T. Yawata, T. Hashimoto, The relationship between RTL and α -β phase inversion-break temperatures.(Oral presentation). The Third New World Luminescence Dating Workshop, Halifax, Nova Scotia, Canada, 4-7 July, 2004.
A. Takeuchi, T. Hashimoto, H. Nagahama. TL property of quartz grain surface.(Oral presentation). The Third New World Luminescence Dating Workshop, Halifax, Nova Scotia, Canada, 4-7 July, 2004.
T.Hashimoto, Y. Nakata, T. Yawata. Naturally accumulated radiation doses and dating of archeologically burnt materials using luminescence from white minerals (Oral presentation). 6th International Conference on High Levels of Natural Radiation and Radon Areas, September 6-10, 2004, Osaka, Japan.
Recent development of luminescence measurement system. T. Hashimoto. Special Meeting on Luminescence Dating 2004, 21st February 2004, in Graduate of Science and Technology, Niigata University.
Changes of red-IRSL (R-IRSL) property from feldspar accompanied with different thermal treatments. N.

Mitamura. Special Meeting on Luminescence Dating 2004, 22nd February 2004, in Graduate of Science and Technology, Niigata University.
Development of the single-grain method using red-thermoluminescence (RTL) measurement. Takashi Yawata. Special Meeting on Luminescence Dating 2004, 22nd February 2004, I Graduate of Science and Technology, Niigata University.
Effects of some impurities on radiation-induced luminescence in natural quartz. T. Yamaguchi. Special Meeting on Luminescence Dating 2004, 22nd February 2004, in Graduate of Science and Technology, Niigata University.
【国内学会･研究会発表（一般）】
「放射線誘起ルミネッセンス現象を用いた石英粒子表面状態の観測」八幡崇･橋本哲夫，2004年原子力学会春の年会，岡山大学津島キャンパスF17，3月30日
「熱処理条件の違いによる長石からの長波長赤色熱ルミネッセンス(far-red TL) の特性変化」三田村直樹･橋本哲夫，2004年原子力学会春の年会，岡山大学津島キャンパスF18，3月30日
「ルミネッセンス自動測定システムを用いた蓄積環境放射線線量の測定」橋本哲夫･八幡崇･藤田博喜･中川貴博，2004年原子力学会春の年会，岡山大学津島キャンパスF19，3月30日
「長石からのFar-red TLを用いた年代測定への適用の可能性」三田村直樹･橋本哲夫，第21回ESR応用計測研究会，大阪大学，27 June. 2004
「人工石英でのルミネッセンス特性とAlおよび水酸基関連不純物との関係」田近靖博･橋本哲夫，第21回ESR応用計測研究会，大阪大学，27 June. 2004
「天然石英のTL現象における捕捉電子の平均寿命の評価」清水伸浩･橋本哲夫，第21回ESR応用計測研究会，大阪大学，27 June. 2004
「人工石英を用いたルミネッセンス特性とAlおよびOH関連不純物の関係」田近靖博･橋本哲夫，第41回理工学における同位元素･放射線研究発表会，日本青年館，1p-III-1，東京，7～9 July.
「天然石英粒子からのRTL現象における熱力学的パラメーターの導出」清水伸浩･橋本哲夫，第41回理工学における同位元素･放射線研究発表会，1p-III-2，日本青年館，東京，7～9 July.
「長石の熱処理条件による遠赤色域熱ルミネッセンス(Far-red TL) の特性変化と年代測定への適用の可能性」三田村直樹･橋本哲夫，第41回理工学における同位元素･放射線研究発表会，7～9 July，1p-III-3，日本青年館，東京
「瓦片（奈良時代）から抽出した石英･長石粒子の放射線誘起ルミネッセンスによる年代評価」中田裕子･橋本哲夫，第41回理工学における同位元素･放射線研究発表会，7～9 July，1p-III-4，日本青年館，東京
「被爆瓦片中に含まれる石英･長石粒子からのルミネッセンス測定による被曝線量の比較」野村幸子･橋本哲夫，第41回理工学における同位元素･放射線研究発表会，1p-III-5，日本青年館，東京，7～9 July.
「単一粒子測定に向けた自動ルミネッセンス測定装置の構築と感度向上」八幡崇･（橋本哲夫），研究奨励賞受賞，日本原子力学会関東甲越支部若手研究発表会，電力中央研究所（狛江），10月18日
「柏崎刈羽地域の放射性核種分布調査」坂上央存･丸田文之･藤巻広司･殿内重政･橋本哲夫，第48回放射化学討論会，2p30，山上会館，東京大学，27～29 Oct.
「天然石英を使った光励起ルミネッセンス現象の基礎研究とその利用における問題点」八幡崇･橋本哲夫，第48回放射化学討論会，2p39，山上会館，東京大学，27～29 Oct.
「長石からの熱ルミネッセンス現象の熱処理条件による特性変化」三田村直樹･橋本哲夫，第48回放射化学討論会，2p40，山上会館，東京大学，27～29 Oct.
「被爆瓦片（広島･長崎）中の石英･長石粒子を用いたルミネッセンス測定による被曝線量の比較評価」野村幸子･橋本哲夫，第48回放射化学討論会，2p41，山上会館，東京大学，2～29 Oct.
「新薬師寺瓦中の石英･長石粒子を用いたルミネッセンス年代測定」中田祐子･伊庭毅･橋本哲夫，第48回放射化学討論会，2p42，山上会館，東京大学，27～29 Oct.
「時間間隔解析法を用いたラドンフリー空気モニタの開発」眞田幸尚･野原尚史･橋本哲夫，第48回放射化学討論会，2p43，山上会館，東京大学，27～29 Oct.
「人工石英の成長領域からの放射線誘起ルミネッセンス特性と不純物の関係」田近靖博･米澤良治･橋本哲夫，第48回放射化学討論会，3A01，山上会館，東京大学，27～29 Oct.
「天然石英からのラジオルミネッセンス(RL)現象と熱ルミネッセンス(TL)現象について」清水伸浩･竹内友之･橋本哲夫，第48回放射化学討論会，3A02，山上会館，東京大学，27～29 Oct.
「天然石英からのルミネッセンス特性」藤田博喜･橋本哲夫，第48回放射化学討論会，3A03，山上会館，東京大学，27～29 Oct.
「自動化ルミネッセンス測定装置等とルミネッセンス研究の現状」橋本哲夫，2004年度ルミネッセンス年代測定学研究会，函館市勤労者総合福祉センタ（サン･リフレ函館），19～20，Nov.
「OSL測定条件の再検討」八幡崇･（橋本哲夫），2004年度ルミネッセンス年代測定学研究会，函館市勤労者総合福祉センタ（サン･リフレ函館），19～20，Nov.7

7) その他

1a) 研究
“固体物性評価のためのルミネッセンス4次元観測システムの構築と利用”の研究課題で科学研究補助金基盤研究(B)（16年度240万円）を受ける。
“地中サンプルによる環境放射線測定法の研究(phase 2) ”の課題で（株）東京電力から受託研究費（16年度400万円）を受ける。

III 研究状況･研究広報

ルミネッセンス研究を1980年代始めに手がけてから25年程になり，その間指導者が無い状態から，ルミネッセ

ンス年代測定国際会議の候補場所として立候補できるまでのルミネッセンス研究室にすることができました。実は，2002年（平成14年）6月にアメリカ･リノ市（ネバダ大学）で開催された第10回LED（ルミネッセンス･電子スピン共鳴に基づく年代測定）国際会議の総会で，次回開催地としてそろそろ日本でとの噂が出ていたので，日本人研究者の協力も取り付けて新潟市が立候補したのです。投票の結果45票が新潟市に集まりましたが，90票余り得たケルン市（独）－北京市連合に破れてしまいました。ケルンで2005年，北京で2008年に開催したいとの合意が連合側で出来ていたのが敗因でしたが，私共新潟大学でもLED 国際会議を開催する実力が認められたことは確認できました。

私自身この研究を始めたきっかけは，ミュンヘン工科大学放射化学研究所（ガルヒンクに有ります）へ招聘していただいたキム教授（放射性物質の環境中でのマイグレーション研究の代表者として知られていますが，昨年現役を退きました）からの言葉をいつも胸に抱いていたからです。放射化学研究所の客員研究員として1年間滞在したおりに，キム教授は帰国後誰も手がけていない研究を始めるよう常々おっしゃっておりました。新潟大学へ赴任してから数年間考えた末，御忠告に従って天然鉱物からの放射線誘起ルミネッセンス研究に取りかかったのです。

あれから20数年が過ぎ，やっとルミネッセンス研究に花が咲いてきたようです。先日も函館でのデンマークのリソ原子力研究所のMurray博士の講演で，私共のルミネッセンス研究への賛辞が寄せられました。

2003年度に日本原子力学会から学術業績賞を受賞したことがここ数年間で一番嬉しかったことなのです。日本原子力学会誌に論文を一報以上掲載していることが応募の条件で，2002年にショートノートでルミネッセンス自動測定システムの開発についての論文をただ一報発表しているだけなので，一抹の不安がありました。しかしながら，東海大学の横地 明教授が快く推薦を引き受けて下さり，選考委員会の慧眼と推薦内容が一致したため，業績賞としてはトップで受賞できました。他の学会からは3度も厳しい判定が下されていましたので，1度で受賞を認めてくれた原子力学会には感謝感激しました。

更に，原子力学会の関東甲越支部主催の若手研究者発表会で，2004年に野村幸子さんと，2005年に八幡崇君が私共の研究室から2年連続で奨励賞を受賞する栄誉を受けました。

また，この4年間で40編以上の学術論文（全体で250編以上になりました）の発表と8編の総説･解説･著書類を刊行するとともに，110件に近い学会での口頭発表や40件以上の国際学会での発表を含む多大な研究成果を上げることが出来ました。加えて，ルミネッセンスの基礎と考古学への応用を簡単に解説した小冊子が新潟大学ブックレットとして本年5月に上梓されることになっています。このように，ルミネッセンス畑に満開の花がこの期間に咲かせることが出来たのです。

これらの受賞や数多くの研究成果は，20数年にも及ぶ放射線誘起ルミネッセンス研究の継続の結果として，国内外で最高水準のルミネッセンス関連の研究環境を整備できたためと考えています。微弱光ルミネッセンススペクトルのオンライン分光器，137Cs標準γ線照射設備（学内共同利用），紫外･可視分光器，顕微FT赤外線スペクトル測定システム一式等を揃えることができ，集大成として基礎研究も可能な新型ルミネッセンス自動測定システムを構築できたことが，先端ルミネッセンス研究を進展させるとともに幾つかの成果の花を咲かせ得たと考えています。

このルミネッセンス自動システム開発は地元の企業の新規事業の拡大になればとの思いで，特許申請をお願いした科学振興事業団に新技術開発プロジェクトを申し込んでいただきました。申請後たちまち採用とのことで幸先良いと喜んでおりました。しかしながら，地域産業の技術力は私が思った水準ではなく，プロジェクト用の一台のシステムをやっと完成させた直後，企業側から1.5億円の実用化プロジェクトへ進みたいと申し出てきました。私としては折角製作した一台の測定システムを1年間使用してみて改良箇所などを知ってから，次のステップに入るべきであると主張しました。折からの不況も重なり資金的な余裕も無くなったのかも知れませんが，2～3月経過した頃ルミネッセンスシステムの開発から手を引きたいと申し出てきたのです。そんな経過もあり，今回の新たな3CCDを用いるシステム構築は新潟地域の企業のみでは対応できないと判断し，ソフト部分が重要なので（株）ゼットコスモスの伊藤成樹社長を主とし，メカの部分は東京で個人営業されている光学企業の杉木 仁さんと一部（株）日本放射線エンジニアリングにお願いすることにしました。このシステムの製作は，（株）東京電力からの受託研究である小型ルミネッセンス自動測定器開発と同時に進めました。

画像データのCDは容量の大きなパソコンに移してデータ処理します。100画素程度をCRT上で指定し1グループとして処理して，RTL･BTLグローカーブを描いたりROIをかけることにより，それぞれの積算カウントを求めることが出来ます。従来は試料をRTL･BTLと二回に分けて測定したものを一回のビデオ撮影データをもとに，異なった粒子間も測定できるのがこのシステムの特徴です。今後，この先端的なルミネッセンス測定器を用いて，波長による検出感度の補正や検出放射線線量（現在のところ，石英で2kGy以上，長石で1kGy以上です）など基礎データを得る予定です。学生や院生の献身的な貢献のお陰で，今や世界のルミネッセンス研究者から注目された成果を出しつつあります。

保谷　徹　HOYA　Toru　客員助教授（東京大学史料編纂所助教授）

1956年生［学歴］東京大学大学院人文科学研究科修士課程1986年修了，同博士課程1987年中退［職歴］東京大学史料編纂所助手(1987)，同助教授(1997)，共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部客員助教授併任(2004)［学位］修士（文学），東京大学，1986年［所属学会］史学会，歴史学研究会，歴史科学協議会［専門］日本近世史［主な研究テーマ］幕末維新期の軍事･外交史（幕末維新史）／ Military and diplomatic history at the end of the Tokugawa period，画像史料の研究／ Study on the visual sources

Ⅰ 研究･教育活動

一　研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 東京大学史料編纂所近世史料部門維新史料室における史料集編纂事業の一環として，『大日本古文書』幕末外国関係文書之五〇（2005年3月刊行，562頁）を編纂･出版した。同室における幕末維新期史料調査として，金沢出張調査（1月）をおこなった。また，前年度調査（熊本市）の報告を「東京大学史料編纂所報」に掲載した。
2) 文部省科学研究費補助金基盤研究A(2)「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」（代表　保谷徹）および特別推進研究(COE)(2)「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究（JMPプロジェクト）」（代表　石上英一），研究企画プロジェクト経費「日本史史料が結ぶ東アジア日本学研究交流推進プロジェクト」（代表　保谷徹）などにより，東京大学史料編纂所における前近代東アジアにおける日本関係史料収集事業を主宰した（WG委員長：内容省略，史料編纂所報を参照されたい）。
　上記プロジェクトによって今年度保谷個人が直接おこなった調査，報告等は以下の通り（詳細は省略）。
　ロシア史料調査（国立海軍文書館･科学アカデミー東洋学研究所･国立歴史文書館･科学アカデミー文書館＝サンクトペテルブルグ市，6月）／韓国史料調査（国史編纂委員会＝果川市，9月）／フランス史料調査（コレージュ･ド･フランス＝パリ市，11月）
　東アジア科研研究会で3回の報告／「在外日本関係史料調査の成果と課題」（JMP研究総括集会，2月）／ロシア国立歴史文書館長･同海軍文書館長･サンクトペテルブルグ大学教授らを招聘し，『日露関係史料をめぐる国際研究集会』（史料編纂所･日本学士院共催，外務省認定「日露修好150周年記念事業」）を主宰し，活動報告をおこなった。
3) 東京大学史料編纂所画像史料解析センター兼任助教授として，同センタープロジェクト経費で古写真研究プロジェクト（代表　保谷徹）を主宰した。今年度は，(1)鍋島報效会徵古館所蔵鍋島家古写真コレクションの調査とデジタル撮影，(2)明治大正期発行の伝記中肖像画像のデジタル化，(3)田安徳川家所蔵古写真コレクションの調査，(4)フランス第2次軍事顧問団員クレットマン旧蔵古写真の調査とデジタル撮影等に取組み，佐賀出張（10月）およびパリ出張（11月）をおこなった。また，日本学士院の支援を得て，日蘭古写真研究会（10月20日，史料編纂所）を主宰した。これらの成果はデジタルデータ等のかたちで史料編纂所に収められ，公開可能なものは順次DBに格納してインターネット公開される。また，「東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信」にこの成果を発表した。
4) 同センタープロジェクト経費で幕末画像史料プロジェクト（代表　保谷徹）に従事した。今年度は，(1)英国文書館(NA)：英国公記録局(PRO)所蔵の日本関係の図面類（1850～70年代）の収集，(2)在外日本関係史料マイクロフィルム中の画像史料の抽出と書誌データ作成，(3)「長崎輸入見本切本帳（幕末分）」デジタルデータ等の書誌作成などをおこない，この成果は「東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信」に発表した。
5) 東京大学とフランス高等研究院主催の「第2回日仏コローク」（10月）の実行委員をつとめるとともに，幕末維新期のフランス軍事顧問団に関する研究発表「フランス軍事顧問団と日本」をおこなった。

二　教育活動

1) 教育

東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学･文学部日本史学非常勤講師

三　博物館活動

3) 各種編集委員

「歴史のなかの鉄炮伝来」展示委員
『研究報告』編集委員会委員

四　社会連携

1) 館外における各種委員

西東京市文化財保護審議会委員，江川文庫調査団員（静岡県，団長：宮地正人国立歴史民俗博物館長），史学会編集委員

2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業

「新撰組とその時代」軽井沢，6月
「大関増裕と幕府の軍制改革」栃木県立博物館，宇都宮市，10月
「史料からみる幕末史」西東京市立明保中学校，11月
「幕末の田無と下田半兵衛」西東京市公民館，2月

II　業績目録

2a) 論文

「1864年英国工兵隊の日本報告(6)」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』25，pp.10-12，4月）
「1864年英国工兵隊の日本報告(7)」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』26，pp.19-21，7月）
「幕末の軍事改革と大関増裕」（『大関増裕』栃木県立博物館，pp.3-6，10月）
「幕末外国方－老中書翰から外交をみる－」（『歴史をよむ』pp.156-157，東京大学出版会，11月）
「批判と反省　オールコックは対馬占領を言わなかったか－1861年ポサドニック号事件における英国の対応について－」（『歴史学研究』796号，pp.23-28，12月）
「1873年英国軍艦アイアンデューク号士官集合写真」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』28号，pp.2-4，1月）

3a) 調査･発掘調査報告書

特別推進研究(COE)(2)『前近代日本史料の構造と情報資源化の研究(JMPプロジェクト)』（代表　石上英一）研

究報告書（3月）：分担執筆
3b) 自治体史･史料集など
『大日本古文書』幕末外国関係文書之五〇（562頁，2005年3月刊行）

III 研究状況･研究広報

本館の客員教員として，主に展示準備のための銃砲研究に従事している。欧米の文書館および軍事博物館等の調査経験をふまえ，幕末期の洋式銃砲を中心に研究調査をすすめているが，実際のモノにあたって調べることの大切さと楽しさを実感している。

三浦 正幸 MIURA Masayuki 客員教授（広島大学大学院文学研究科教授）

1954年生［学歴］東京大学工学部建築学科1977年卒業，東京大学大学院工学系研究科建築学専門課程修士課程1979年修了，東京大学大学院工学系研究科建築学専門課程博士課程1980年中途退学［職歴］共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部客員教授併任(2004)［学位］博士（工学），東京大学，1986年［所属学会］日本建築学会，建築史学会，日本遺跡学会，広島史学研究会，中国四国歴史学地理学協会［専門］日本建築史，城郭史，神社建築史，文化財学［主な研究テーマ］近世城郭の歴史と構造／ History and formation of castles in Japan from the late 16th century，神社建築の起源と発展／ Origin and development of shrine buildings，古建築の年代判定／ Method of estimation on the age of traditional architecture，古建築の調査･修理･復元／ Research, repair and restoration of traditional architecture

I 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報
1) 基幹研究「神仏信仰に関する通史的研究」（研究代表者）で，研究会を主催し，仁治再建厳島神社社殿に関する研究成果の発表を行うとともに，建築史関係の先行研究を網羅する文献目録と研究史の作成を行った。
2) 受託研究「尾道市常称寺の建造物に関する文化財学的調査研究」（研究代表者）で，当該の本堂･観音堂･山門などを調査した。成果報告書は17年度に尾道市から出版予定。
3) 受託研究「宇和島城本丸･二の丸復元研究」（研究代表者）で，当該の城郭建築（櫓･城門）の復元史料収集ならびに復元図作成を行った。成果は17年度に宇和島市より公表の予定。
4) これまでの城郭研究に関する成果として，一般向けの啓蒙書『城のつくり方図典』[2005.3]を出版した。
5) 国史跡吉川元春館跡台所復元工事において，当該建物の復元設計を行い，2005年3月に復元竣工した。

二 教育活動
1) 教育
広島大学大学院文学研究科大学院生指導（本務）として，博士課程後期4名，前期6名の研究指導を行い，そのうち課程博士1名，修士3名の学位論文の審査（主査）をした。
広島女学院大学非常勤講師（住居史学）

三 博物館活動
歴博展示プロジェクト委員

四 社会連携
1) 館外における各種委員
愛媛県文化財保護審議会委員，広島市文化財審議会委員，尾道市文化財保護委員会委員，下関市文化財保護審議会委員，東広島市文化財保護委員会委員，竹原市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員，史跡宇和島城保存整備検討委員会委員，史跡松山城跡整備検討委員会委員，史跡河後森城跡調査整備検討委員会委員，史跡津和野城跡整備検討委員会委員，史跡鎌刃城跡調査整備委員会委員，史跡吉川元春館跡整備委員会委員，史跡安芸国分寺跡調査整備委員会委員，史跡京極氏城館跡整備検討委員会委員，安芸高田市吉田民俗資料館運営委員ほか
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「中世山城の建物と河後森城」『第11回全国山城サミット記念講演』（松野町教育委員会）2004年10月10日
「鎌刃城の建物を復元する」『鎌刃城跡国史跡答申記念講演会』（米原町教育委員会）2005年1月23日
「厳島神社の建築と平清盛」『世界遺産登録8 周年記念文化講演会』（ひろしま女性NPOセンター未来）2004年12月4日

II 業績目録

1) 著書
2005.3：『城のつくり方図典』，小学館，2005.3，単著（255頁）
2a) 論文
2005.3：「仁治再造の厳島神社玉殿の復元」（『内海文化研究紀要』第33号，pp.47-68，広島大学大学院文学研究科内海文化研究施設，2005.3，山田岳晴と共著）

5) 学会･外部研究会発表要旨
2004.9:「宝治度出雲大社本殿の復元考察」(『史學研究』p.88, 広島大学)
2004.12:「層塔型天守の構造に関する考察」(『中国四国歴史学地理学協会研究大会報告集』(印刷中), 安田女子大学)
7) その他
2004:「城のできるまで」(連載)(『名城をゆく』全50号, 各p.32, 小学館)
2004:『よみがえる日本の名城』1～13号, 監修･分担執筆, 学習研究社

III 研究状況･研究広報

(1) 15年度に研究調査した岡山県重要文化財大國家住宅は, その成果報告書『旧大國家住宅調査研究報告書』によって国重要文化財の指定を受けた。また, 正法寺観音堂･興願寺三重塔･興隆寺三重塔は, 愛媛県の重要文化財の指定を受けた。
(2) 尾道市からの受託研究により, 常称寺建造物の文化財指定のための調査を実施し, その本堂は14世紀末の建立であって, 西郷寺と並んで現存最古の時宗本堂であることが明らかとなった。

山中 章 YAMANAKA Akira 客員教授(三重大学人文学部教授)

1948年生 [学歴] 広島大学文学部史学科考古学専攻1974年卒業 [職歴] 共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部客員教授(2004) [学位] 博士(文学), 広島大学, 1997年2月 [所属学会] 考古学研究会, 木簡学会, 条里制･古代都市研究会, 延喜式研究会 [専門] 日本考古学 [主な研究テーマ] 日本古代都市史研究／ Study of ancient history in Japanese Urban, 日本古代出土文字資料の研究／ Study of ancient letters in Japan, 原始･古代塩業史の研究／ Study of ancient salt history in Japan

I 研究･教育活動

一 研究･調査, 成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 本館個別共同研究「律令国家転換期の王権と都市」(研究代表者):太宰府市教育委員会, 三重県立斎宮歴史博物館他で3回の共同研究会を開催し, 主に地方における当該期の転換期に関する検討をおこない, その成果を[山中2004.12]に報告した。また, 共同研究最終の総括としてシンポジウムを開催しその成果を[山中2005.1]として報告した。
2) 文部科学省科学研究費基盤研究(B)(2)「聖武天皇伊勢行幸地の総合的研究」(研究代表者):四日市市所在の久留倍遺跡の発掘調査を通してテーマの深化を図り, その成果を[山中2005.3]として報告した。また, 聖武天皇の伊勢行幸についての研究を進めその成果を[山中2004.8]に報告した。
3) 三重大学人文学部伊勢湾文化資料研究センター(センター長) プロジェクト「古代中世伊勢国の総合的研究」(代表者):四日市市久留倍遺跡の調査･研究･保護･活用を目的に2回のシンポジウムを開催し, その成果を[山中2004.9]に報告した。久居市所在上野遺跡の調査･研究を進めその成果を[山中2004.5b]にまとめた。
4) ヴェトナム社会主義共和国タンロン宮殿跡の調査研究:ヴェトナム社会主義共和国からの招聘で標記遺跡の調査･研究を行い, その成果を[山中2004.6]に報告した。
5) 文部科学省科学研究費基盤研究(A)「東アジア諸国における都城および都城制に関する比較史的総合研究」(研究代表者 橋本義則･山口大学):東アジアを調査し, その成果の一部を[山中2004.6]に基づき報告した。
6) 文部科学省特定領域研究「学融合を目指した新領域創造 中世考古学の総合的研究」(研究代表者 前川要･中央大学)「中世遺跡の保存と活用に関する基礎的研究」(研究代表者 広瀬和雄･奈良女子大学):遺跡保護活用の世界的実情例の確認のためヴェトナム社会主義共和国にて開催されたUNESCO主催「タンロン宮殿の保護と活用」に出席し, [山中2004.8]として報告した。
7) 個人研究として古代宮都の研究を進めその成果を[山中2004.5a][山中2005.2]にまとめ, 報告した。また, 古代文字の研究を進め, その成果を[山中2004.12][山中2005.3]として編集した。

二 教育活動

1) 教育
中部大学非常勤講師(考古学A･B)
鈴鹿国際大学非常勤講師(考古学 I ･ II)
放送大学非常勤講師(考古学概論)

四 社会連携

1) 館外における各種委員
松阪市教育委員会宝塚古墳調査･整備指導委員会委員, 四日市市教育委員会久留倍遺跡調査指導委員会委員, 三重県美杉村北畠館跡指導委員会委員, 福岡県太宰府史跡指導委員会委員, 亀山市史編纂委員
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
出前授業－1:三重県立川越高等学校「木簡解読」12月15日
出前授業－2:大阪府立大手前高等学校「東アジアの文化財保護」12月22日
「長岡京発掘五〇年記念フォーラム」11月23日(長岡京市教育委員会)

「桓武天皇の野望と失意」(京都市生涯学習センターゴールデンエイジアカデミー講演, 3月11日)

II 業績目録

1) 著書
平川南･沖森卓也･栄原永遠男･山中章編『文字と古代日本1』吉川弘文館, 360頁, 12月
平川南･沖森卓也･栄原永遠男･山中章編『文字と古代日本2』吉川弘文館, 372頁, 3月
2a) 論文
「続古代王権の首都像」(八賀晋先生古稀記念論文集刊行会編『かにかくに』, pp.457-467, 5月)
「伊勢国一志郡の形成過程」(藤田達生編『伊勢国司北畠氏の研究』吉川弘文館, pp.145-165, 5月)
「ヴェトナムバーデン皇城遺跡」(『考古学研究』51-2, pp.125-129, 6月)
3a) 調査･発掘調査報告書
三重大学考古学研究室編『鬼が塩屋遺跡Ⅰ』三重大学考古学研究室調査･研究報告書第5集, 3月31日
3c) 辞典項目
『日本古代道路事典』(「長岡京」八木書店, 5月)
5) 学会･外部研究会発表要旨
「聖武天皇伊勢行幸と頓宮」(『第3回考古学研究会東海例会』8月8･9日, 三重大学)
「日本の古代宮都の保存と活用」(UNESCO主催『タンロン宮殿の保護と活用のためのシンポジウム』2004年8月10～13日)
「久留倍遺跡と古代伊勢国」(『第1回久留倍遺跡シンポジウム』9月19日, 四日市市総合会館)
「桓武朝における伊勢支配の歴史的背景－布施内親王･朝原内親王伝領所領をめぐって－」(共同研究『律令国家転換期の王権と都市』報告, 12月12日, 斎宮歴史博物館)
「地方の転換点」(共同研究『シンポジウム「律令国家転換期の王権と都市」』報告, 1月29･30日, 国立歴史民俗博物館)
「日本古代首都の建設と条里型地割」(関東条里制研究会『シンポジウム「関東条里研究の現段階－日本古代土地制度研究の意義－」』, 2月12日)
「三重大学人文学部考古学研究室久留倍遺跡第1次発掘調査現地説明会資料」(3月20日, 三重大)
7) その他
伊勢新聞「時を旅する」(合計12回)
京都新聞「長岡京発掘50年」

III 研究状況･研究広報

三重県四日市市大矢知所在の久留倍遺跡は, 朝明郡衙, 朝明郡正倉が複合して遺存する奈良時代の代表的な地方官衙遺跡である。さらに両遺構の間に建設された大規模な建物群については研究が進行中であるが, 仮説として「聖武天皇伊勢行幸時の朝明頓宮跡」を提示し, その追究を進めている。既述の通り当該研究者は個人研究テーマとして古代王権と地方との関係について分析を進めており, 同遺跡はその格好の材料といえる。

そこで, 同遺跡の調査･研究を進めると共に, 遺跡の保存に関し, 地元市民が作る「久留倍遺跡を考える会」と連携して同遺跡の保存と活用のための活動を行った。特に同会と共同して主催した2回にわたるシンポジウムでは総計500余人の参加者を得, 遺跡の市民への理解に大いに役立てることができた。また, 同会と進めた遺跡の保存署名は地元市民を中心に8000名を超え, 同遺跡の史跡指定に向け大きな役割を果たすことができた。

今日の高等教育機関の使命として, 研究成果の還元がうたわれている。本研究活動はそのような要請に対応するものである。

研究機関
研究員

酒井 茂幸 SAKAI Shigeyuki 研究機関研究員

(基盤研究「『高松宮家伝来禁裏本』の基礎研究」／研究部 吉岡眞之)

1973年生 [学歴] 早稲田大学第一文学部文学科日本文学専攻1995年卒業, 早稲田大学大学院文学研究科博士課程2003年修了 [職歴] 国立歴史民俗博物館非常勤研究員(2003), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究機関研究員(2004) [学位] 博士 (文学), 早稲田大学, 2003年2月 [所属学会] 和歌文学会, 中世文学会, 日本近世文学会, 和漢比較文学会, 早稲田大学国文学会 [専門] 日本中近世文学, 日本文献学 [主な研究テーマ] 和歌史料の文献学的研究／ Philological study of *waka* materials, 禁裏文庫に

おける歌書収蔵史の目録学的研究／ Catalogical study on the "history of *waka* book collection" in the court library

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 基盤研究「『高松宮家伝来禁裏本（以下，「高松宮本」と略称）』の基礎研究」（代表 吉岡眞之）における研究成果を[和歌文学会5月例会2004.5]において研究発表し，[『国立歴史民俗博物館研究報告』2005.3]に掲載した。
2) 高松宮本の個別資料の伝来に関わる調査を，国文学研究資料館史料館，及び長野市の真田宝物館において行い，その成果を[『研究と資料』2004.6]に掲載した。
3) 2002年以降，執筆に着手していた，和歌文学大系『草庵集』の校注を[久保田淳監修『草庵集･兼好法師集･慶運集･浄弁集』2004.7]として刊行した。

Ⅱ 業績目録

1) 著書
2004.7：和歌文学大系65『草庵集･兼好法師集･浄弁集･慶運集』久保田淳監修，齋藤彰･小林大輔と共著，（496頁＜この内『草庵集』の校注や解説を主に担当。それらの執筆部分の枚数は398頁＞），明治書院
2a) 論文
2004.6：「真田宝物館蔵『草庵集』をめぐって」（『研究と資料』pp.11-17，研究と資料の会）
2004.9：「国立歴史民俗博物館蔵田中穣氏旧蔵『広幢集』－書誌と翻刻－」（『古典遺産』pp.92-112，古典遺産の会）
2004.12：「真田宝物館蔵『歌仙門葉一人一首』について－紹介と翻刻－」（『研究と資料』pp.13-17，研究と資料の会）
2005.3：「国立歴史民俗博物館蔵田中本『台月和歌集』（山科言継自筆）－解題と翻刻－」（武井和人･相原宏美･伊藤慎吾と共著，『埼玉大学紀要 教養学部』pp.1-42，埼玉大学教養学部）
2005.3：「霊元院仙洞における歌書の書写活動について（『国立歴史民俗博物館研究報告』，国立歴史民俗博物館）
5) 学会･外部研究会発表要旨
2004.12：「霊元院仙洞における歌書の書写と『新類題和歌集』編纂」（『和歌文学研究』，「例会発表要旨」p.6，和歌文学会）

Ⅲ 研究状況･研究広報

基盤研究「『高松宮家伝来禁裏本』の基礎研究」の意図･目的は，館蔵の高松宮本が，従来，個別の資史料に関して文献学的に研究されてきたのに対し，史料全体を「蔵書群」として捉え，書誌データーを蓄積するとともに，近世の公家の記録や禁裏･仙洞の古目録類を読解し，群としての蔵書の伝来の経緯を明らかにすることにある。

和歌文学を専攻する稿者は，昨年度，新出資料と目される高松宮本『歌書目録』を発掘し，同資料が『新類題和歌集』編纂のための点検帳簿であることを『光栄卿記』の記載との照合から突き止めていた。本年度は，高松宮本のみならず，宮内庁書陵部蔵御所本を含む現存の禁裏本との同定作業を行い，全ての原本に当たることを目指した。その結果，奥書･識語類を有さない家集について，古歌書目録類の記載の援用と原本の書誌的事項の確認により，ほぼ年号単位で書写年代を割り出す手法を考案した。また，『光栄卿記』等の近世の公家日記に見出される，院や伺候衆による和歌関連史料の書写事蹟を網羅的に摘出･整理し，現存諸本との関係を追究した上で，霊元院の歌書の書写活動や職仁親王への遺物拝領（いわゆる「形見分け」）などの実態を解明し，禁裏本歌書の蔵書史を叙述した。なお，今後，高松宮本及び宮内庁書陵部蔵御所本の歌書の翻刻等の書誌解題における「近世前期」「近世中期」といった曖昧な書写年代の記載は，全て再考される必要があろう。

成果公開の場や方法も，口頭報告･論文ともに適切であり，任期の最終年度に当たる本年度，本館が，共同研究の作業分担として要求していた研究成果は完璧に出し得た。

竹内 有理 TAKEUCHI Yuri 研究機関研究員

（基盤研究「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」／研究部 久留島浩）

1969年生［学歴］法政大学文学部史学科1991年卒業，レスター大学大学院博物館研究科修士課程1992年修了［職歴］文化環境研究所特別研究員(1996)，国立歴史民俗博物館研究支援推進員(2000)，国立歴史民俗博物館非常勤研究員(2002)，共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部研究機関研究員(2004)［学位］修士（文学），レスター大学，1993年5月［所属学会］全日本博物館学会，日本ミュージアム･マネージメント学会，文化経済学会，国際博物館会議(ICOM)，Museums Association(UK)，Visitor Studies Association(USA)［専門］博物館学［主な研究テーマ］博物館管理運営／ Museum management，来館者研究／ Visitor studies，博物館教育／ Museum education

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 本館基盤研究「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」(代表 久留島浩) 研究機関研究員
2) 歴博共同研究･総研大学長プロジェクト合同公開研究会「観客から博物館を見る－研究をどう見せるか－」報告「利用者の視点から歴博を評価する」
3) 大阪人権博物館共同研究「博物館教育」共同研究員

二 教育活動

1) 教育
甲南大学非常勤講師 (博物館学)
千葉大学非常勤講師 (博物館情報･経営論)

三 博物館活動

4) 歴民研修委員，講師
歴史民俗資料館等専門職員研修会講師 (コース別演習「博物館教育と観客調査」)

四 社会連携

1) 館外における各種委員
日本ミュージアム･マネージメント学会 (将来構想検討委員，制度問題研究部会幹事，特別事業実行委員)

Ⅱ 業績目録

2a) 論文
「デジタルメディアの可能性－文化資源を守る，残す，使うために－」(『文化環境研究所ジャーナル』，5月号，5月)
「アメリカの来館者研究の動向－VSAの年次大会に参加して－」(『文化環境研究所ジャーナル』，9月号，9月)
「教育，コミュニケーション，解釈－博物館における批判的教育学にむけて－」(『文環研レポート』第22号，pp.1-8，文化環境研究所，11月)
「国立歴史民俗博物館における教育活動－学校利用を中心に－」(『大阪人権博物館紀要』第8号)
「イギリスにおける文化遺産のデジタル化と利活用－専門知から共有知へ－」(『Cultivate』No.24，pp.32-39，文化環境研究所，2月)
「諸外国における文化遺産のデジタルアーカイブについての調査研究」(総務省委託調査，2004.3)

原山 浩介 HARAYAMA Kosuke 研究機関研究員

(基幹研究「20世紀に関する総合的研究」／研究部 安田常雄)

1972年生 [学歴] 横浜市立大学商学部経済学科社会経済コース (社会学専攻) 1997年卒業，京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻博士課程2004年修了 [職歴] 龍谷大学非常勤講師(2002)，佛教大学非常勤講師(2002)，近畿大学非常勤講師(2004)，共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部研究機関研究員(2004) [学位] 博士 (農学)，京都大学，2004年3月 [所属学会] 同時代史学会，日本村落研究学会，日本農業経済学会，地域農林経済学会 [専門] 現代社会史(Contemporary Social History)，消費社会論(Study of Consumer Society)，地域社会論(Studies on Region and Community) [主な研究テーマ] 戦後日本の消費社会の形成と変遷に関する研究／ Research on formations and changes of the Japanese consumer society in the postwar period，戦後闇市における庶民生活と占領政策･経済統制の連関に関する研究／ Research on black markets in 1940's: Especially focusing on conflicts between people's daily life and economical controls under the occupation policy of GHQ/SCAP，高度経済成長期の健康政策の農村生活への諸影響に関する研究／ Research on influences of health policies on rural areas in the rapid economic growth period

Ⅰ 研究･教育活動

一 研究･調査，成果公開方法としての報告･展示･国際シンポ･広報

1) 個人研究「戦後日本の消費社会の形成と変遷に関する研究」で，2003年度から2004年度にかけておこなった調査の成果を，論文にした[原山2004.11]。
2) 基幹研究「20世紀に関する総合的研究」で，戦中から戦後にかけての民衆生活のありようを，生活物資の闇取引の動態を通じて明らかにするべく，大阪における闇市･闇取引に関する資料収集･分析を行った。また同時に，戦中･戦後を通じて，闇取引を黙認してきた日本政府と，物価統制･物資統制の厳格化を求ようとするGHQ/SCAPの占領政策が，不協和音を伴いながら人々の生活を規定した，その実態を国会図書館憲政資料室所蔵のプランゲ文庫の資料から明らかにした。

二 教育活動

1) 教育
佛教大学非常勤講師（「生命の科学･生命論」「情報機器の操作」「情報検索演習」）
龍谷大学非常勤講師（「経済英語」「フレッシュマンゼミ」）
近畿大学非常勤講師（「生命と倫理」）

四 社会連携
2) 館外講演･カルチャーセンター･出前授業
「農と消費社会」『市民講座「環境塾」』（特定非営利法人市民環境研究所，京都，6月22日）

II 業績目録

2a) 論文
2004.11：「高度経済成長期における消費者団体の展開－資本の側からの消費者の組織化過程－」（『日本農業経済学会論文集』,pp.200-207，日本農業経済学会）

III 研究状況･研究広報

本年度は，大阪の戦後闇市に関する調査の準備過程として，闇市の展開を一方において規定した，占領軍および日本政府の経済統制政策，その下での闇市をめぐる大阪府の行政施策に関するとりまとめを行った。占領軍は早い段階で，戦後経済統制の実施を企図し，日本政府はこれにひきずられる形で経済統制を行っていくことになる。これに対し，大阪の行政は，闇市の取り締まりに対して躊躇し，その組織化･合法化を目論みつつも，最終的には闇市の閉鎖へと向かっていくことになる。

この過程については，本館基幹研究「20世紀における戦争Ⅰ」の第3回研究会(2005.2)において報告した。

この準備過程を経て，2005年3月には，闇市の実態に関する聞き取り調査を開始した。

戦中から横行していた生活物資の闇取引は，敗戦を迎えることで活発化･顕在化していくことになる。生活物資の闇取引，すなわち配給外／公定価格外での取引は，隣近所，同族，あるいは民族的な，縦横無尽に張り巡らされた人々の関係を通じて為されていた。ここで取引された物は，日常の食物，あるいは石けんのような日用品であり，その取引のありようは，戦後の情景として想起される盛り場としての闇市とは異なる，深いところで日常生活に根ざしたものであった。

集約的な「闇市」は，そうした日常の闇取引と一定の連続性を持ちつつも，異質な空間として存在していた。そこは，盛り場としての意味を持ち，また戦時体制が終焉を迎えたことの解放感が表現される場所でもあった。闇市にはありとあらゆるものが揃い，日用品でも，足袋や衣類のような，近隣のネットワークを通じて行われる闇取引では手に入りにくいものも販売されていた。

敗戦直後の経済統制の破綻と，そのなかでの闇取引の横行をみるとき，とかく市場として現出していた「闇市」に目を奪われがちになる。私自身のこれまでの戦後闇市に対する眼差しもまた，そうであった。しかるに，現在進めつつある調査の中で，捉え返すべき問題として浮上しているのは，「闇市」というものの背後にある，日常に埋め込まれた闇取引の存在の把握であり，またそれと「闇市」との異質性と連続性の析出である。つまり，「盛り場」や「復興の象徴」として，具体的な場所として立ち現れた「闇市」と，決して日常的にそこに足を運ぶわけではない人々において日常化していた闇取引を，ひとつの時代状況の中でつながりをもって捉え返すことが，ひとまずの課題であると考えている。

ホーム 戻る

National Museum of Japanese History, All rights reserved.
http://www.rekihaku.ac.jp